ドライブしませんか？

たまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドライブしませんか？

【Ｎコード】
Ｎ９１７２Ｆ

【作者名】
たまご

【あらすじ】
自動車学校の指導員と生徒の年の差ラブストーリー。双方視点で描いています。

―1―

いつもと同じ、退屈な同じ道のり。

唯一の救いは毎時間違う生徒との会話で…

俺の名前は内村新一、歳は２８。
古野ドライビングスクールに勤め始めてはや６年が経過しようとしている。

今日の担当の生徒は香西薫。
２段階の２時限目らしい。

ということは…

「まだまだ下手な感じかな」

時間になり車に行くと、若い女性がちょこんと座っている。
寒いのだろうか。

「こんにちはー、お願いします。」

彼女は笑顔で教習原簿と仮免許証を差し出して来た。

「宜しくお願いします」

緊張しているのか、指示に対して「はい」と言うか頷くだけで、車内には沈黙が流れる。

ただでさえ同じ事の繰り返しの仕事でキツイのに、沈黙が流れたらたまったもんじゃない。

ネタを探していると、丁度目の前に止まっている車のナンバープレートの両端にピンクのハイビスカスのシールが貼ってあった。

「あ、花が咲いてる。ホラあれ。」

指先を彼女が見つめ、ホントだー、と言った。

「俺絶対あんなの出来ない！恥ずかしいもん！」

その言葉に彼女が笑った。

「剥いでも跡残りますしね」

結構可愛い顔で笑うもんだな、と思った。

今まで可愛い生徒は何人も見て来たが、違った可愛さがある。

媚びてないというか、気取ってないというか。

車はまだ教習所に近いところにある。

授業は始まったばかりだ。

―2―

技能予約の指導員を見てがっくりきた。
嫌な人に当たったもんだ…。

私、香西薫は古野ドライビングスクールに通い始めて3ヶ月経つ18歳。

呆然と教習カードに印刷された名前を見る。

『1／7　7時限　内村新一』

一段階で当たったことのある指導員。

あの時間はイケメンが苦手な私にとって苦痛でならなかった…。

ただでさえ運転を始めたばっかりで下手にも程があるのに、指導員がかっこよかったらなおさら恥ずかしい。

しかも若干手間取ったら「こらこら」って言って横からハンドル修

正して、あとは進路指示を出すだけ。

そう、あとは何も喋らない。
退屈そうに横に座って、仕方なく教えてる感じ。
嫌な人ではないんだろうけど、何かいたたまれない。

最悪だ。
今まで担当指導員を見るたびにホッとしてたのに、遂に来てしまった。しかも路上に慣れてない、また下手な状態で。

きっと向こうは生徒が多すぎて私の事なんて覚えてないだろうから、笑顔で挨拶を済ませた。

でも私が『この人苦手です』オーラを出しているせいか会話はない。

すると彼はすっと前方の車を指差した。

「あ、花が咲いてる。ホラあれ。」

小さなピンクのハイビスカスのシール。
たまに見る光景だ。

「俺絶対あんなの出来ない！恥ずかしいもん！」

彼の主張に思わず笑ってしまった。

「剥いでも跡残りますしね」

車内の雰囲気が明るくなった気がする。

彼、意外と喋ってくれるんだ。

教習車内の時計は開始１０分を指していた。

―3―

「へー、香西さんって三國大の一年なんだ」

彼女は前を向いたままはい、と答えた。

少し慣れて来てはいるが、まだふらついてて何より遅い。

「ほらほら、もっとアクセル踏んで」

彼女はふるふると首を横に振って慌てた。

「無理です無理です！」

大人しい子だと思っていた。

「いた」って言うくらいだからどんな子か想像がつくだろう。

天然なんだろうか、反応が面白い。

左折後にアクセルを踏んだらそれが急発進みたいな形になり、思わず「おぉ！」とびっくりする。

今みたいに「アクセル踏んで」と言うと半泣きに近い状態になる。
バスや駐車してある車など障害物があると教えれば「もーっ」と言って脱力する。

なかなかこんな生徒いない。
教習が次第に楽しくなって来た。

「香西さんはどっちから来てるの?正門?通用門?」

「あー…地下鉄なので正門です。」

おや?と思う。

三國大の周辺に住んでないのだろうか。

「ちょっと待って。どこ住んでんの?」

再び見向きもしないで答えた。

「下山です」

…

「は？」

一秒間があいての俺の返事はこれだった。

確かに下山は直線的に言えば遠くはない。

しかし地下鉄経由なら時間の無駄にも程があるくらい遠回りになる。

彼女は言われ慣れてるのだろうか、苦笑してもう一度言った。

「だから、下山です」

俺は思わず笑った。

「自転車で来いよ」

「自転車持ってないです」

この子はどれだけ笑わせたら気が済むのか。

「買えよ！」

彼女はうー…、と唸り、初めて自分から話し始めた。

「買ったところで無理ですよ、私方向オンチですもん」

おいおい。
さらに追い撃ちをかけるような返事。どう考えたって下山から三國大まで迷う要素は一つもない。
何とか笑いを堪えて話しかけた。

「あのさ、下山から三國大までは直進、左折、直進なんだから迷わないって」

彼女は少し口を尖らせている。
「みんなそう言うんですよ。どうやったら迷うんだよ！みたいな…自分でもわかんないんですよ、何で迷うか。でも迷うんです。」

知り合いに方向オンチがいるが、まさか方向オンチの子に教えるなんて思ってもみなかった。
しかも反応が面白いっていう。
やばい、面白過ぎる…

「経路設計どうすんの？」

赤信号で少しだけ余裕があったのか、ちらっとこちらを見てまた唸った。

―4―

ハイビスカスのシールの話をした後はしばらく沈黙が続いた。

やっぱりこの人はもともと喋る方じゃないんだ。

「次の信号交差点を左に」

「はい」

私は所内の時から立ち上がりが悪いと言われていた。免許を取ろうというのにハンドル操作が苦手で…。

交通も混雑してたから左折後に軽くアクセルを踏んだ。

のに車は意外な速さで進んで。

「おぉ！」

「『おぉ！』って…」

笑われた。かなり恥ずかしい。

猫かぶるつもりはこれっぽっちもないけど、だからといって素の出し過ぎは恥ずかしいにも程がある。

三國大在籍という理由だけで大学周辺を運転する羽目になった。
かなりの初心者があんなに人通りの多い道を行くには危険過ぎる。

「あの、何かハードル高くないですか？」

「んー…ていうかウチ周辺はどこも難しい道ばっかりだからね。」

一理ある。どこ通っても心臓に悪い。

正門前を通り過ぎた辺りで助手席から視線を感じた。

「香西さんって三國大の一年なんだ」

隣を見る余裕なんてない。

「香西さんはどっちから来てるの？正門？通用門？」

「あー…地下鉄なので正門です。」

「ちょっと待って。どこ住んでんの？」

「下山です」

「…は？」

来ると思った。

先生にも、友達にも、先輩にも、何でこっちじゃなくて下山なのか言われる。しかも自転車で来れば良いものを地下鉄で、とか。

予想通りの反応がちょっとおかしかった。

スルーされるどころか食いついて来て、今までになかったノリで話が進んでいく。

「だから、下山です」

「自転車で来いよ」

「自転車持ってないです」

「買えよ！」

彼が笑っている。そこまでおかしいか。

私にとっては周囲と全く同じ反応をする彼の方がおかしい。

「買ったところで無理ですよ、私方向オンチですもん」

彼は軽く咳ばらいをした。呆れられたんだろうか…いや、明らかに笑っている。小ばかにされた気分だ。

「あのさ、下山から三國大までは直進、左折、直進なんだから迷わないって」

今度は一つ上の姉と全く同じ事を言って来た。

「みんなそう言うんですよ。どうやったら迷うんだよ！みたいな…自分でもわかんないんですよ、何で迷うか。でも迷うんです。」

仕方ないじゃないか、方向オンチになりたくてなったわけじゃない。

確か最後の方に経路設計があったな…気が重い。

―5―

あんなに楽しい５０分は久しぶりと言っても過言じゃないだろう。

結局彼女はスピードを出せないまま終わった。

あの後キャンセル待ちで1時間乗ったらしいけど、あの日の終了間際「失敗した…」と呟いていた。

『そんなに俺の指導恐かった?』

『そういう訳じゃないですけど、ただでさえ下手なのに今日は更に調子悪いみたいで…』

思い出しただけでも笑える。

そして今日の一時限目が香西薫、４回目の教習だ。

まー、前よりは上手くなっているだろう。

車に行くと彼女が後部座席でわたわたしている。

「おはようございます。運転席どうぞ」

「あっ、はい」

俺が乗った後に運転席に座った。何やら頭をさすっている。

「香西さん元気!?」

「え、まぁ」

彼女はそう言って教習原簿と仮免許証を渡す。

「さっき、」

彼女が口を開いた。彼女から話してくれるようになって自然な会話が続く。

「仮免許証忘れたと思って焦っちゃって」

その光景が想像できて思わず笑う。

「あった!と思ったら頭打っちゃって」

俺はきっと朝一発目から笑い死にするだろう。車が発進してないのにこれなんだから。

「喜びのあまり?」

「いや、普通に…出ようとしたら」

ツワモノだ。控え目とか可愛く見せようとか、そんな女の子はたくさん見て来た。もちろん面白い子もたくさんいたけど、彼女は笑わせようとしてるのかと思うくらい面白い。

「香西さん前の時間より上手くなってるね。スピード出てるし」

ホントですかー？と嬉しそうに言う。

「どこ住んでるんだっけ？」

「下山です」

「ああ、お姉ちゃんと住んでるんだっけ。自転車で来たの？」

何だろう、つい意地悪を言いたくなる。

「地下鉄です」

「自転車買った？」

「昨日の今日で準備できる訳無いでしょう！」

「次の信号交差点を左に」

「はい」

…何て切り替えが早いんだ…。

と次の瞬間、ハンドル操作を手間取ってかなりふらついた。

「おおっと！」

慌ててハンドルを持つ彼女の手を持つ。

細くて長くて、そして冷たかった。

「すみません…」

「謝らなくて良いよ、悪いことしたんじゃないし」

とっさとはいえ、生徒の手を掴んだことはほとんどない。

何故だかドキッとした。

それをごまかすかのように話題を戻す。

「それにしてもホントに下山から三國大まで迷う要素ないって」

「皆おんなじ事言うんですよ。

でもねぇ、そう言われたってわからないものはわからないんです。

地元でも迷うのに」

ちょっと待て。

「地元で迷うとかどんだけなんだよ！」

「…よく言われます…」

手のかかる子の方が可愛いか？
笑いの絶えない車内でそう思う。

―6―

あの後別の指導員と路上運転をしたけど、初めてさっきの指導員が良かったな、と思った。

会話がなくても助手席から私の様子を見て話し掛けてくれるし、何よりも楽しかったから。

あの日から私は彼を指名することにした。

おかしな話…あんなに一段階の時は嫌な指導員だったのに。

印刷された教習カードには『1／9　1時限　内村新一』と書いてある。

何だろう、何か緊張する。

後部座席に荷物を置いて仮免許証を探す。

…ない…。

いや、鞄から抜いてないからあるはず。

焦って鞄の中をあさっていると仮免許証が手帳の間から出て来た。

助かったー、と思ったのもつかの間、屈んでいた体を起こして車外に出ようとすると、後頭部を強打してしまった。

「いったー…」

すると背後から彼の声が聞こえて来た。

「おはようございます。運転席どうぞ」

強打シーンを見られたのだろうか。少し焦る。

「あっ、はい」

彼が先に助手席に座り、スタンバイを始めた。私は頭をさすりながら運転席に座る。

「香西さん元気!?」

何故か朝からテンションが高い。彼、早起きに慣れてそうだしね…。

「え、まぁ」

笑われるだろうか、いや、笑われるに違いない。
でも何故か、彼相手なら構わないと思った。

「さっき、仮免許証忘れたと思って焦っちゃって」

彼はおぉ、と言って笑った。

「あった！と思ったら頭打っちゃって」

彼は私が思ったとおり爆笑した。

「喜びのあまり？」

「いや、普通に…出ようとしたら」

馬鹿な子だ、とか思われるんだろう。自分でもそう思うくらいだし。

路上に出て5分くらい経った時だった。

「香西さん前の時間より上手くなってるね。スピード出てるし」

ちょっと嬉しい。そこは素直に喜んでおこう。

「どこ住んでるんだっけ？」

生徒も多いだろうし、2日前の会話なんて覚えてないんだろうな、と思う。

「下山です」

「ああ、お姉ちゃんと住んでるんだっけ。
自転車で来たの？」

覚えてるんじゃん。自転車ネタはわざとか。

「地下鉄です」

「自転車買った？」

「昨日の今日で準備できる訳無いでしょう！」

また助手席で笑っている。わざとだ。間違いない。

左折指示に従って左折するもハンドルを戻すのに手間取ってしまい、
直後にふらついてしまった。

「おおっと！」

彼が横から私の手を握った。

大きくて力強くて、そして温かかった。

「すみません…」

「謝らなくて良いよ、悪いことしたんじゃないし」

ドキドキする。一段階の時は、横からハンドル操作されても手を握られたことはなかった。

少し続いた沈黙を彼が破った。

「それにしてもホントに下山から三國大まで迷う要素ないって」

何で…皆同じ事を言うんだ。自嘲気味に笑うしかない。

「皆おんなじ事言うんですよ。
でもねぇ、そう言われたってわからないものはわからないんです。
地元でも迷うのに」

しまった、墓穴を掘った…
彼は横で驚いたと同時に笑った。

「地元で迷うとかどんだけなんだよ！」

私だって何で迷うのか聞きたいくらいなのに。

―7―

「ホラあれ、香西さんの大好きな障害物」
「もー…」
「もーって…」

本日二回目。バスとか駐停車してある車が嫌いみたいだ。
まあ実際毎日車に乗る俺でも気を使う車線変更を素人がするわけだ。
嫌いになって当然。

「香西さんてまだ１８!?若っ!羨ましいなぁ」
「そう…ですか?でも再来週くらい誕生日ですよ」
「それでもまだ１０代だろ!?良いなぁ…」
「今いくつなんですか?」
「もうすぐ３０。かつがつ２０代って感じ」

へー、と彼女が言った。

俺は今年２９で彼女は今年１９。ちょうど１０歳の差がある。

「大学生が社会的に一番楽な地位だもんな。金ないけど」

「そうですね…
でも私春休みしなきゃいけないことたくさんあるんですよ」

「え、何何？」

「…勉強…」

小さな声で言った。
勤勉だなー、と感心する。

「真面目だなぁ。そんな大学生珍しいんじゃない？」

「いや、したくないんですけど、しないと抜けていくって…」

「それにしても…」

一々説明するのが面倒だったんだろうか、彼女が割って入った。

「私専攻でフランス語やってるんです。だから単語とかちゃんとやってないとフランス語離れするって」

驚きだ。違う世界を見た気分になる。

「え、じゃあさじゃあさ、『私は古野ドライビングスクールで運転免許を取得中です』って言って！」

運転席に沈黙が流れた。

しばらく俺が理解できない音が出て来て、彼女が「えーっと…」と言って考え出した。

「あれ、専攻なんだよね？」

一年生に聞く分には難しいのか？そうだとしてもまだちょっかいを出したくなる。

「じゃあ『私は今運転免許を取得中です』って言って？」

「えっとえっと…免許を持ってます、っていうのは『ジェ　ペルミ』って言うんですけど…」

ちんぷんかんぷんだ。何語？あぁ、フランス語喋らせたんだっけ。

「じゃあ『私は今古野に住んでます』は？」

「『ジャビット　ア　フルノ　マントナン』」

「へー…全然違うんだ…ジャビット？」

彼女が説明を足してくれるけど、全くもってわからない。

とりあえず彼女が俺より賢いことだけわかった。

―8―

内村さんは意地悪だ。指導：いじり＝３：７って言っても過言じゃないと思う。
楽しいからまだ良いけど…。

彼が教習原簿を見て声を上げた。

「香西さんてまだ１８!?若っ!羨ましいなぁ」

「そう…ですか?でも再来週くらい誕生日ですよ」

さりげなくアピールしてみた。もしかしたら棚からぼたもちみたいな事があるかもしれない。９９．９９％ないけど。

「それでもまだ１０代だろ!?良いなぁ…」

「今いくつなんですか?」

「もうすぐ３０。かつがつ２０代って感じ」

あー…思った通りというか、見た目よりも年上だったんだっていうか。
とりあえず想定内の年齢ではあった。

ってことは…１０歳くらい差があるのかな？

「大学生が社会的に一番楽な地位だもんな。金ないけど」

「そうですね…」

あんまりそんな気はしなかった。学生として、社会人として、両方求められてるからなかなかキツイ感じがする。

「でも私春休みしなきゃいけないことたくさんあるんですよ」

「え、何何？」

「…勉強…」

小さな声で言ってみた。ガリ勉と思われただろうか。

「真面目だなぁ。そんな大学生珍しいんじゃない？」

やっぱりだ。些細な抵抗はしてみる。

「いや、したくないんですけど、しないと抜けていくって…」

「それにしても…」

あーもう。フランス語を聞かれたらたまったもんじゃないから伏せてたけど、何しろ説明が面倒臭い。

「私専攻でフランス語やってるんです。だから単語とかちゃんとやってないとフランス語離れするって」

「え、じゃあさじゃあさ、『私は古野ドライビングスクールで運転免許を取得中です』って言って！」

ほらきた。焦る。

「え…と、＞＞Ｊ' ａｉ…＜＜いや、＞＞Ｊ' ｅｎ…＜＜んん？えーっと…」

彼が笑いながら話しかけて来た。

「あれ、専攻なんだよね？
じゃあ『私は今運転免許を取得中です』って言って？」

一年生とはいえ、喋れないのを見られるのは恥ずかしい。
全くわからなくないことをアピールする。

「えっとえっと…免許を持ってます、っていうのは＞＞Ｊ' ａｉｐｅｒｍｉｓ．＜＜って言うんですけど…」

「じゃあ『私は今古野に住んでます』は？」

間髪入れずに聞いてくる。ドSだ…。
ただでさえテンパってるのに…ヤバイ、単語が出てこない。

「＞＞Ｊ･ｈａｂｉｔｅ　ａ　Ｆｕｒｕｎｏ　ｍａｉｎｔｅｎａｎｔ．＜＜」

「へー…全然違うんだ…ジャビット？」

よし。
ちょっと賢ぶってみる。

「『住む』っていうのがｈａｂｉｔｅｒっていう動詞なんですけど、『私』のｊｅに対してｈａｂｉｔｅって活用するんです」

彼がかなり感心してくれている。

これは確か四月に習ったやつ。
恥ずかしながら真面目に勉強してて良かったと思ったのは初めてだった。

―9―

今日の教習も終わりに差し掛かっている。

「セリーヌ・ディオン知ってる？
確かフランス語は喋れるけど英語が喋れなくて、それで…」

赤信号で止まっている車内で会話を続ける。
でも彼女に余裕なんてなくて、彼女は前を向いたまま口を開けた。

「あれ、カナダの人でしたっけ？
カナダの公用語って確かフランス語と英語ですよ」

カナダってフランス語圏なんだ…
１０歳下の女の子に打ち負かされた気分だ。
ちょっと知識をひけらかしてみる。

「ベルギーもフランス語と何かが公用語だったよな」

「ドイツ語でしょう？」

ダメだ、現役生には敵わない。

彼女は信号を見つめたまま笑顔で話した。

「私来年の三月、ベルギーとフランスに留学するんですよ」

すごい、レベルが違う。

「まじで！何買って来てくれるの？」

「…え？」

「え？」

勿論買って来てくれるなんて微塵も思ってない。

何より彼女の教習期限は今年の九月。再入校でもしない限りその時期に顔を合わせることなんてまずない。

でも何故だろう、心のどこかに期待がある。

彼女は少しだけ顔をこちらに向けた。

「…え？」

「え？」

埒があかなくなるので、軽く笑って話題を戻す。

「フランスって言ったらプジョーだな。知ってる？フランスの車のメーカー」

彼女はへぇ、と言って微笑んだ。温かみのある笑顔。

「そういやさ、ダヴィンチってフランス人？」

彼女の眉間に少しシワが寄った。

「え？そうでしたっけ？
イタリア人だった気が…」

「あれ、フランスに住んでなかったっけ？
それにしてもあの人凄いよな。画家で…」

「医者で、建築家で、彫刻家…？だったかな」

「天才だよなー…もはや変態だな」

何故か彼女が挙動不審になった。別にダヴィンチが聞いてる訳じゃないのに。

ああ、車が動き出したからだ。

「そんな事言っちゃダメですよ！」

「変態だよね」

「か、変わった人と言いましょうよ、そこは」

「ま…でも芸術家って変わり者が多いよね。感性が違うからかな？絵が上手い人って描き方が違うもんな」

再び赤信号で止まっていると、彼女が左手の人差し指でスッと直線を描いた。

「まず軸から捉えますもんね」

間違いない、彼女は美術経験者だ。

「香西さんめっちゃ絵上手そう！そんな感じがするよ。わかる」

照れ笑いをしてそうですか？という。

面白さとのギャップにある可愛らしさ。

…何かズルい。

―10―

前回より話が盛り上がったからか、あっという間に時計が終了15分前を指していた。

彼がおもむろに口を開ける。

「セリーヌ・ディオン知ってる？
確かフランス語は喋れるけど英語が喋れなくて、それで…」

高校の時に英語の授業に出て来た。

「あれ、カナダの人でしたっけ？
カナダの公用語って確かフランス語と英語ですよ」

え、そうなの？と横で驚いている。その辺知ってようよ…。

「ベルギーもフランス語と何かが公用語だったよな」

「ドイツ語でしょう？」

一呼吸置いて話を続ける。

「私来年の三月、ベルギーとフランスに留学するんですよ」

「まじで！何買って来てくれるの？」

…

「え？」

家族に？部員に？

いやいや、彼に、だ。ちらっと横を見ると嬉しそうに前方を見つめている。

何を考えてるんだろう。

まず来年の三月にはもういないし、そりゃ連絡先を知れば可能なんだけど…とかそんなんじゃなくて！

ワインか？チーズか？マカロンか？

脳が消化不良を起こしている。

「…え？」

「え？」

暗黙の了解と言わんばかりに笑顔だけを向ける。

何が欲しいか聞くのか？連絡先を聞くのか？

違う違う！

訳がわからなくなって来た所で彼がフランスの自動車メーカーについて語り出した。心なしか楽しそう。

ホントに車が好きなんだな、この人。何だか微笑ましい。

話は不思議な方向へ向かっていった。

「そういやさ、ダヴィンチってフランス人？」

「え？そうでしたっけ？
イタリア人だった気が…」

自信は全くない。

「あれ、フランスに住んでなかったっけ？
それにしてもあの人凄いよな。画家で…」

「医者で、建築家で、彫刻家…？だったかな」

「天才だよなー…もはや変態だな」

アクセルを踏んだ瞬間にそんな発言を…。
しかもあんなすごい人を変態呼ばわりしてる人、初めて見たよ。

「そんな事言っちゃダメですよ！」

「変態だよね」

「か、変わった人と言いましょうよ、そこは」

「ま…でも芸術家って変わり者が多いよね。感性が違うからかな？絵が上手い人って描き方が違うもんな」

あぁ、アレか。

中学校の部活でしてたデッサンを思い出す。

「まず軸から捉えますもんね」

すると彼がこっちを向いて話し始めた。

「香西さんめっちゃ絵上手そう！そんな感じがするよ。わかる」

「そうですか？」

喜んではみたけど、このくだりで絵が上手そうって…正直複雑。

「俺絵心なくてさ、アンパンマン描いたらまわりに『じゃがいも』って言われちゃってさ！

酉年の年賀状とか頑張って鶴描いたのに、みんなから手抜きとか言われて…」

彼が笑いを堪えながら話す。
私も堪らず笑ってしまった。

「じゃあ今度、じゃがいもみたいなアンパンマン見せてください」

―11―

有り難い休みだ。

毎週ウチは月曜が休校。火曜は俺が休暇を取って週休二日となっている。

有り難い休みのはずだ。

でもすごく落ち着かない。

間違いない、アレのせいだ。

日曜の帰り、事務の女性に呼ばれた。

『内村さん火曜休暇でしたよね？』

『ええ、はい。どうしました？』

『内村さんに指名予約が入ってたんです。』

パソコンの画面には『7時限　香西薫』と書いてあった。

今日彼女は俺が教えるものだと思って教習所へ行くんだろう。

せっかく指名してもらっているのにこんな形になるなんて…申し訳ない。

それよりも引っ掛かるのは、別の指導員が彼女に教えて、そして彼女が俺の知らないうちに上手くなるだろうということ。

この前のキャンセル待ちの時みたいに…

ちょっと待て。俺は今何を思った？

あの子は俺だけの生徒じゃない。

大体今まで指名予約されてもこんな事思ったこともないし、指導してあげられなくても申し訳なさしか感じたこともない。

…嫉妬してるのか？年甲斐もなく。

せっかくの休暇だというのに、ゆっくりする予定を返上して何故か下山に来てしまった。

「…ホラ、迷う道なんてないじゃんか…」

俺はふっと笑って車を走らせる。

惹かれているのだろう、１０歳下の女性に。

彼氏はいるのか、好きな人はいるのか、好きなタイプはどんな人か、何が好きか、そんな事何も知らない。

だから１０歳も離れたオヤジなんて毛嫌いするかもしれない。

でもどうしようもない。

彼女の笑い声と笑顔が頭から離れないんだ。

通算して１００分しか一緒にいない。でも確実にあの時間はその何十倍も濃いものだ。

一目惚れではない。でも出会って二日でこんな事思うなんておかしいか？

…一つ断っておくが、俺はロリコンじゃないから。

―12―

携帯で教習案内を見たときにがっくりきた。

『コウザイ　カオル
2段階
1／13　7時限　日田康介』

私は他の誰でもない、内村さんを指名した。なのに何で？他の人が先に指名したんだろうか。
でも予約案内には『指名可』って書いてあったし…

「…行きたくない…」

何故か彼には偶数回しか担当してもらえない。じゃあ次の7回目はまた別の指導員？

「もうちょっと右寄りで走りましょうか。
あともう少しアクセルを踏んで」

「…はい」

これ以外の会話なんて存在しないかのように時間は流れる。
確かにこの人は彼より技術指導をしてくれる。
でも…全然楽しくない。

彼は今何をしてるの？
別の生徒とあんな感じで談笑してるの？
あの接し方は私だけじゃないの？

はっとする。

「ブレーキ踏むの早くないですか？」

隣の指導員は少し笑っている。
私は今、愛想笑いしか出来ない。

「そう、ですね」

私は今何て思った？

彼は指導員だから他の生徒にも勿論教えてるし、初めて私に話しかけて来たように他の生徒に話しかけるのは当たり前の事。

どうして？
今日この時間は彼の事で頭がいっぱいだ。
気にならないなんて言ったらそれは嘘になる。

でも現実を見なきゃいけない。
彼は私と生徒として接してるし、まず釣り合わない。
それにあのルックスと年齢的に、結婚してなかったとしても彼女くらいいるでしょ…。

でも知りたい、彼の事、もっと。

―13―

雪が降るすごく寒い日だった。

今日の5時限は香西薫の担当。

まず今日は昨日担当出来なかった事を謝ろう。

あまりの寒さに配車まで走っていくと、彼女が運転席で待っていた。

車のエンジンがかかっている…助かった。

「さすが香西さんだね！気を利かせてエンジンかけとくなんて。さすが香西さん！

うあー、寒！」

そういって暖かな車内に入る。横で彼女が笑った。

「雪降ってますしね」

「あ、そうだ…昨日はゴメンね？」

彼女が一瞬はて、という顔をして、思い出したのか首を横に振った。

「それにしても気を利かせて暖房入れとくなんてさすが香西さん！」

彼女は両手を胸の前で振った。
「私じゃないですよ、最初からエンジンかかってました」
前の指導員が気を使ってかけっぱなしにしてくれたのだろう。
「あ、ホントに？
まあいいや、準備が出来たら発車してください」
昨日運転してただけあって、明らかにうまくなって来ている。
嬉しいやら寂しいやら…微妙な心境だ。
だけど彼女本人はというと硬直した感じだ。笑わないようにしながら横目で彼女を見る。
「香西さんさ、運転中固くなってるよね」
「…え？そうですか…？」
そこで会話が終了してしまった。結構な時間沈黙が続く。
昨日指導出来なかったのがそんなにマズかっただろうか。
それとも俺は嫌われてしまったんだろうか。
焦燥心に駆られた。
だからかどうかは自分でもわからないが、俺だけしか出来ないだろ

う話し掛け方をする。

「香西さん、方向オンチの香西さん」

彼女は苦笑して何ですか、と言う。

「超方向オンチの香西さん、地元で迷う香西さん」

「だから、好きで迷ってるんじゃないですって！」

彼女は顔を赤くして怒ってるやら笑ってるやら不思議な表情をした。
俺はもちろん笑いが止まらない。

「ったく、地元で迷うとかマジどんだけなんだよ」

「…しょうがないじゃないですか。
土地勘も方向感覚もないし、地図だって読めないし」

「検定試験どうすんの？」

彼女はう…、といって黙った。小動物をいじめてる気分だ。

「まー、カーナビ搭載の車を買わなきゃだね。
俺の友達にカーナビ付いてても迷う人いるけど」

彼女が黙る。間違いない、将来彼女は俺の友達みたいになる。

「香西さんもカーナビ付いてても意味ないかな」

「な、いよりはマシです…」

笑う。ないよりはマシって事は迷うって事だ。

「絶対カーナビの付いた車買えよ？」

「はぁ…はい」

「よし、じゃあ今日は検定コース走ります」

彼女は明らかに固まっている。返事がない。

「大丈夫だって！俺が付いてるし、ちゃんと横から指示出すからさ」

「…はい」

彼女の顔が綻んだ。嬉しさ半分恥ずかしさ半分。
紛らわすかのように軽く一呼吸した。

「じゃあコースの説明するよ」

地図を広げて説明をする。
地図も読めない、地元ですら迷う香西さんの事だ。理解したなんて思ってない。

「わかった？」

「う…はい、多分…」

「ホントかよ！」

二人で笑った。

嫌われてはなかったと明確になり、少し安心した。

―14―

雪が降っている。
私が外に出たときに限っていつも雪が降る…雪に嫌われてるんだろうか。

今日こそ担当が内村さんで少し…いや、正直かなりホッとした。

配車まで行くと、何故か車のエンジンがかかっている。
乗って良いのか迷いつつ乗車すると彼が走って来た。

「さすが香西さんだね！気を利かせてエンジンかけとくなんて。さすが香西さん！
うあー、寒！」

確信犯か、この人は。教習所の指示じゃないのか。

「雪降ってますしね」

とりあえず会話を続けると、彼がこっちを向いて話しかけて来た。

「あ、そうだ…昨日はゴメンね？」

知ってたんだ、私が指名してた事…。何だか恥ずかしくて目が合わせられない。

「いえ、そんな…」

「それにしても気を利かせて暖房入れとくなんてさすが香西さん！」

だから、

「私じゃないですよ、最初からエンジンかかってました」

「あ、ホントに？」

あれ、違ったのかな…？

「まあいいや、準備が出来たら発車してください」

昨日乗ったばかりなのに綺麗に走れない。

「昨日乗ったんだよね？」とか死んでも言われたくない。恥ずかしいじゃないか、伸びない姿を見られるのは。

すると横から視線を感じた。

「香西さんさ、運転中固くなってるよね」

「…え？そうですか…？」

考えた事なかった。そんなに硬直してたんだろうか。

何故だか落胆する。

するとしばらく沈黙が続いた。
話をしたい、彼とたくさん。
でも私に話しかける余裕なんてなくて。

「香西さん、方向オンチの香西さん」

彼は急に話しかけて来た。内容に苦笑するしかない。

「何ですか？」

「超方向オンチの香西さん、地元で迷う香西さん」

「だから、好きで迷ってるんじゃないですって！」

ネタにされてる、明らかに。でも覚えてくれてた事が何だか嬉しい。
彼は横で笑っている。

「ったく、地元で迷うとかマジどんだけなんだよ」

「…しょうがないじゃないですか。
土地勘も方向感覚もないし、地図だって読めないし」

「検定試験どうすんの？」

「う…」

経路設計なんて出来ない。私はどれだけ彼にお世話になるんだろう…。

「まー、カーナビ搭載の車を買わなきゃだね。俺の友達にカーナビ付いてても迷う人いるけど」

絶対そうだ。私は『５００m先を右方向です』とか言われても、どこが５００m先かなんてわからない。

「香西さんもカーナビ付いてても意味ないかな」

「な、いよりはマシです…」

バレた。

「絶対カーナビの付いた車買えよ?」

「はぁ…はい」

「よし、じゃあ今日は検定コース走ります」

遂に来た、私にとっては拷問に近い。無事に教習所に帰れるだろうか…。

彼は私の様子に気付き、優しく笑った。

「大丈夫だって！俺が付いてるし、ちゃんと横から指示出すからさ」

「…はい」

嬉しい。仕方なく言ってくれたとしても、私にはかなり心強い味方だ。

「じゃあコースの説明するよ」

地図を見てもどこの話してるのかさっぱりわからない。

彼が覗き込むように尋ねる。

「わかった？」

「う…はい、多分…」

「ホントかよ！」

とりあえず笑う。

でも実際笑ってられない。短時間でない頭をフルで使って道を覚えなきゃ…。

―15―

検定コースを難無く進んでいく。

「香西さん、道覚えた？」

「っ！私そこまで馬鹿じゃないですよ！」

思いっきり笑う。ここは三國大周辺だ。

「あ、さすがに？」

「一応先輩の家近いですし」

その先輩は男？女？

聞こうとして、やめた。

「それにしてもさ、今お姉ちゃんと二人暮しって言ったっけ？
それ親助かるよねー」

「まぁ家にはお金ないですからね」

「共同生活どう？」

「どうもこうも…」

聞こう、さりげなく。
そう、あくまでもさりげなく。

「二人とも彼氏出来たら大変なんじゃないの？」

よし。

すると意外な返事が帰って来た。

「そう！この前お姉ちゃんに彼氏さんが来るから帰ってこないでって言われて」

「え！？香西さんどうしたの！？」

「行く宛てもなくさまよって…結局学科の子に頼み込んで泊まらせてもらえることになったから良かったものの」

何かすごくホッとした。
つまり、香西さんに彼氏はいない。

「他の家に泊まらなくても良かったのに。
俺だったら平気で帰るよ。『おー、ここは俺の生活場でもあるんだよ！』ってね」

「…お姉ちゃんには言ったんですけどね、宛てないんだから、って。そしたら『あんた友達いないの？』とか言われちゃって…」

彼女が苦笑いする。なんて天真爛漫なお姉さんなんだ。

「そうじゃねーよ、ってやつだね。俺も姉貴いるけどさ、またこれが俺を振り回すんだ。良いように使われてるっていうか」

「わかります、それ」

苦労してるんだよ、お互い…

「…二人暮しって事はさ、自炊とかしてんの？」

「そりゃあもちろん。生きていけないですから」

いかにも何でも簡単にこなしそうな彼女だ。料理はきっと上手いに違いない。

「すげー！俺大学の時自炊とかあんまりしてなかったよ…今もだけど」

何気なくフリーな事を示してみる。
…３０近くでフリーってどう思われるんだろう。ちょっと不安になる。

「でもちょっと前…こっちに来る前は何も出来なかったんですよ」

何か意外な感じ。何でも出来そうなのに。

「じゃあ掃除とか洗濯とかは？」

「専ら私が。お姉ちゃんしてくれないんですもん。」

…何か心配だ。

「良いように使われてない…？
それ多分香西さんの性格なんだろうね。放っておけないんだろ？」

「よくそう言われます。あんまり自覚はないですけど…おばあちゃん達には『良いお嫁さんになるよ』って言われます」

わかる、わかるよ。

「だって香西さんだったら何でも安心して任せられるもん」

―16―

「香西さん、道覚えた？」

少しカチンと来る。三國大周辺は飲み会とかでよく来るからさすがにわかる。

「っ！私そこまで馬鹿じゃないですよ！」

「あ、さすがに？」

彼がいたずらっぽく笑う。

「それにしてもさ、今お姉ちゃんと二人暮しって言ったっけ？それ親助かるよねー」

「まぁ家にはお金ないですからね」

前に何度か家の事を話したことがある。

家にお金がないこと、だから東京の有名私大に通えなかったこと、国立に落ちたこと、大反対されてた私大に頼み込んで通わせてもらってること。

だから文句は言えない。

むしろ「ない」と言われている割には良い生活をさせて貰ってるか

ら文句なんてない。

ただ…

「共同生活どう?」

「どうもこうも…」

これぱかりは文句がある。

お姉ちゃんは確かに料理は上手い。けど片付けは後回しで結局しないし、掃除洗濯は毎回私がやってる（気まぐれで半年に一回することもある）。

しかも厄介なのが私がいない時に帰って来て着替え、服は洗濯機に放置して彼氏の家に行くのだ。

「二人とも彼氏出来たら大変なんじゃないの?」

そう、これだ。これなんだよ…。

「この前お姉ちゃんに彼氏さんが来るから帰ってこないでって言われて」

「え!?香西さんどうしたの!?」

「行く宛てもなくさまよって…結局学科の子に頼み込んで泊まらせてもらえることになったから良かったものの」

あの時はホントに切実な悩みだった。

あの子には今でも申し訳なく思う…ごめんね…。

「他の家に泊まらなくても良かったのに。
俺だったら平気で帰るよ。『おー、ここは俺の生活場でもあるんだよ！』ってね」

「…お姉ちゃんには言ったんですけどね、宛てないんだから、って。
そしたら『あんた友達いないの？』とか言われちゃって…」

彼が笑っている。
あの時は笑い事じゃなかったけど、今思い返してみたら何ともおかしな話だ。

「そうじゃねーよ、ってやつだね。
俺も姉貴いるけどさ、またこれが俺を振り回すんだ。良いように使われてるっていうか」

前に聞いたことのある、お姉さんの話。
年子で、二人とも別だけど私大に通って親に迷惑かけてしまったって言ってた。

…それにしてもお姉ちゃんってみんなこうなの…？

「…二人暮しって事はさ、自炊とかしてんの？」

彼が急に話を振って来た。

「そりゃあもちろん。生きていけないですから」

「すげー！俺大学の時自炊とかあんまりしてなかったよ…今もだけど」

『今も』？それはどういう事を意図して言ったの？

運転が疎かになりそうだったから、考えるのをやめた。

「でもちょっと前…こっちに来る前は何も出来なかったんですよ」

「そりゃ実家生は普通やらないよね。
じゃあ掃除とか洗濯とかは？」

「専ら私が。お姉ちゃんしてくれないんですもん。」

ため息が出て来そうだ…。

「良いように使われてない…？
それ多分香西さんの性格なんだろうね。放っておけないんだろ？」

「よくそう言われます。あんまり自覚はないですけど…」

世話焼きなんだろうか？いっつも言われる。

だからかな…

「おばあちゃん達には『良いお嫁さんになるよ』って言われます」

アピールしてしまうんだ。私ちゃんと家事こなせるんだよ、って。

「それわかる。だって香西さんだったら何でも安心して任せられるもん」

その一言がなんだか嬉しかった。

私おかしくなって来てるかもしれない…。

―17―

「こんにちは、運転席どうぞ」

「はーい」

あれから一週間くらい経とうとしている。

彼女とはしばらく会えてない。

たくさん話したい、聞きたいことは山のようにあるのに。

『今月中には免許取れるね』

『あ、でも私しばらく来ません』

『はぁ!?何でよ!』

『何でもなにも…テストですもん。テスト明けには部活も始まりますし』

テスト、ね。

今日の生徒だってテスト期間真っ只中らしいのに。

「良いの?勉強しなくて」

「だって家にいたって勉強しないですもん」

「俺も学生の時そんな感じだった。家じゃ勉強しないけど、かとい

ってわざわざ学校に行ってまで勉強する気にならないんだよね」

「ですよねー」

楽しいよ。楽しいけど…

物足りない。アレに勝る刺激がない。

「はい、原簿返します。
お疲れさまでした、忘れ物無いようにね」

「はーい！」

違う、何か違う。

作らない可愛さとか、狙ってるのかと聞きたくなる面白さとか、別に求めてる訳じゃないけど…

何かにつけて彼女と比較してしまう。

この子は彼女より教養がないとか、この子は彼女より地理を理解してるとか。

そして、生徒への指導中ですら考える。
彼女は今どこにいて何をしているのか、と。

彼女はアルコールか？そして俺はアル中か？

自嘲するように笑い、下山方面行きのスクールバスに目をやる。

勿論そこに彼女の姿はない。

彼女が誰よりも近く、誰よりも遠い存在に感じた。

―18―

あれからどれくらい経ったんだろう…一週間も経ってないはず。
しばらく教習所に行っていない。

大して時間は経ってないくせに、一日一日がすごく長く、今までにないほど次の技能教習が遥か未来のことのように感じる。

『今月中には免許取れるね』
『あ、でも私しばらく来ません』
『はぁ!?何でよ!』
『何でもなにも…テストですもん。テスト明けには部活も始まりますし』

私が悪いんじゃないんだもん、と何度も言い聞かせるように思う。
何度もテスト中だって合間を縫って行っては授業を受けようと思った。

何故行かないかって、内村さんで予約が取れないからだ。

キャンセル待ちに乗る気にもならない。

説明なんて要らないでしょう?指導員が違うから。

どれだけ時間がかかっても良い、彼以外に指導してもらいたくはない。

とんだわがままだな、と軽く笑う。

テスト期間中とはいえ、時間を見つけて学科の授業を受けに来ている。

彼に会えるかもしれないという淡い期待を持って…。

ダメだ、学科の授業が頭に入らない。

彼は今何をしてるの？

誰の車に乗ってどんな話をしてるの？

同じ敷地内にいることは曲げようのない事実なのに。

なのに、逢えないのはどうして？

帰りのスクールバスの中から教習車の方に目をやる。

それでも彼の姿は見当たらない。

私、どうしよう。いよいよおかしくなって来ている。

名前しか知らない彼に恋い焦がれているようだ。

―19―

今日は久しぶりに香西さんの指導に当たる。
自然と頬が緩んでしまう…我慢我慢。

何から話そうか…テストの手応えか、試験中なのに何で教習所に来てたのか、風邪を引いてるのか、昨日の話か…

やっぱり昨日の話だ。

話は昨日の夜に遡る。

昨日、たまたま7時台の下山方面のスクールバスの運転手になった。
あくまでも「たまたま」だ。
勿論彼女は『試験が終わるまで来ない』と言ってたから期待はしてなかった。

眼鏡をかけ、ジャンバーを着て、手袋をはめる。
…いかにも「バスのおじちゃん」だ。

冷えないように閉めていたバスの扉を開けて、生徒の到着地を尋ねる。

『お疲れさまです、どちらまで…』

一瞬俺の目を疑った。

香西さんが座っている。

『お、ぉ…久しぶり』

彼女も携帯を持ったまま絶句している。

『…どこまで行くの？』

『下山…パレスまで…』

お互い何だかぎこちなかった。

こんな事を言うのも何だが、あの時彼女の他に二人生徒が乗っていたけど、あの二人がいなければ教習車以外での初めての二人っきりだったのに…。

もしそうだったら今までブランクがあった分、たくさんたくさん話をしていたのに。

いや、良いんだ。昨日はこの目でちゃんと彼女が帰るのを見届けたし、今日だって彼女の担当だ。

それより気になるのは、昨日の帰りのバスで彼女が咳込んでいたことだ。

最近寒いし、大丈夫だろうか…。

とにかく今日、今から彼女の元へ行く。

どういう展開になるか、すごく楽しみだ。

―20―

昨日携帯で教習案内を見たときはどれだけ安堵した事か…。
今日の担当は指名していた通り、内村さんだ。
何だか昨日の夜から考えただけでも笑みがこぼれてしまう。

何を隠そう、昨日偶然にも会ったからだ。
しかも意外な形で。

昨日は6時から、セット教習以外では最後の学科授業を受けた。
まだ試験期間中で、しかも翌日は必修のフランス語だから来る前も勉強、帰ってもまた勉強。
正直疲労感が隠せない。

携帯にメールの着信がある。…部員からか。
携帯をいじっていると、添乗員らしき人がドアに手をかけた。

今日は若い人みたいだなー…。

次の瞬間、目に入って来た光景に絶句した。

『お疲れさまです、どちらまで…』

彼だ。疑いようもなく、彼なんだ。

彼もまたびっくりしていた。

『おぉ…久しぶり…。
…どこまで行くの？』

『下山…パレスまで…』

正直あの後のバスの中では何故彼が運転してるのか、嬉しいやら疑問が拭い去れないやらで大変といえば大変だった。

少し残念だったのは、私の他に二人生徒さんが乗っていたこと。

逆に嬉しかったのは、目的地に着いたときにわざわざ運転席から身を乗り出すように後ろを振り返り、挨拶してくれたこと。

何を言われるだろう。
住んでるところか、何で昨日私がいたのか、彼がドライバーになってた理由…。

何にせよ言いたいことがある。

昨日の帰り、バス路線を無視したでしょう、と。

確かに家からの最寄りのバス停は下山パレスだ。
でも昨日は何故か家に一番近い通りの真横を経由して到着した。普段通ることなんて絶対ないのに。

あそこを通ったときどれだけバスを停めたかった事か…。

決めた。今日はいつもいじられてる分言い返してやろう。

―21―

…寒い。異常に寒いとしか言いようがない。
せっかく担当になったのに、こんなに大雪じゃ教習中止になるかもしれない。

あまりの寒さに身を小さくしながら配車へ向かう。
いつものように彼女が運転席に座っている。

「こんにちは、発車していいよ」

「はぁ…お願いします」

彼女が横でいそいそと準備をしている。今だ。

「昨日ウチから下山までの行き方覚えた?」

「…いや…」

「何でよ! わざわざ香西さんのために下山までの最短ルート通ったんだよ」

「…寝てました」

彼女が苦笑している。

「何でよ！せっかく香西さんが道覚えれるようにってしてたのに」

彼女が笑いながら反撃をして来た。

「やっぱりそうだったんですね。違う道通ったでしょう？
さすがに道違うのわかりましたもん」

さすがにって…俺の親切心は皆無か。

「駐輪場の横通ったでしょう？
あそこを左に曲がれば家の近くだったんです」

「あ、そうなの？」

大体の検討がつく。

「だから『そこで停めてー！』って言いたかったんです」

彼女以外にも生徒がいたからそれは無理な話だった。可哀相なことをした気分だ。

しばらく二人とも無言で車を進めていく。
いつも会話の始まりは俺の不思議な呼びかけだ。

「お姉ちゃんにこき使われてる香西さん」

彼女が笑ったあと軽く咳ばらいをしてはい、と言った。
俺はその反応に笑うしかない。

「『超』方向オンチの香西さん」

「だから、好きで迷ってるんじゃないんですって！」

「あ、好きで迷ってるんじゃないんだ」

彼女は笑ったような拗ねたような、また不思議な感じだ。

「それにしてもさ、可哀相に…こき使われてるんでしょ？」

「う…いや、料理はしてくれますけど…」

『けど』

「掃除とかは香西さんがするんだろ？」

「…まあ」

彼女があの後の苦労話を語る。大変そうだ。

「そんでもって弟からも使われるんでしょ？」

「…実家に帰ったら…」

性格良すぎるんだよ、香西さん。
いかにも面倒見が良いんだもん…もっと自分に時間を使ってほしいくらいだ。

「しっかし…雪酷いな…」

その言葉に彼女が黙る。
反応に困ってるんだろうか…

とにかく、この雪のせいで教習が中止になるような事だけは避けたい。

もっとも危険を感じた場合は中止にするのがお互いのためだが。

―22―

大雪の原因は私だって言いたいのかってくらい雪が降る。

寒さのあまりエンジンをかけようか迷ったけど、何か色々と面倒だったからやめた。

すると彼がいつものように助手席に乗って来た。

「こんにちは、発車していいよ」

早過ぎないか？もう発車かい。

あえてそれは口にはしない。

「はぁ…お願いします」

昨日の話をいつ切り出そうか考えながら準備しているうちに、彼が話しかけて来た。

「昨日ウチから下山までの行き方覚えた？」

昨日の帰りのバスの中、実はあまりの心地よさに寝てしまったのだ。

「…いや…」

「何でよ！わざわざ香西さんのために下山までの最短ルート通ったんだよ」

「…寝てました」

彼が笑っている。

「何でよ！せっかく香西さんが道覚えれるようにってしてたのに」

わざわざ…？最終バスでもなかったのに、あんなにルート変更して良かったの…？

「やっぱりそうだったんですね。違う道通ったでしょう？さすがに道違うのわかりましたもん…駐輪場の横通ったでしょう？あそこを左に曲がれば家の近くだったんです」

「あ、そうなの？」

「だから『そこで停めてー！』って言いたかったんです」

彼がまた笑った。

「バスが香西さんだけだったら停めてあげれたけど…他の生徒乗ってたしね」

わざわざそんな事までしてくれるんだ。

嬉しいな…。

しばらく無言だった。
今日は大雪だからいつもより前が見にくくて、いつも以上に話し掛ける余裕なんてない。
彼が教習原簿を広げてから話し掛けて来た。
「お姉ちゃんにこき使われてる香西さん」
しょうもない事をよく覚えてらっしゃる…。
私は苦笑するしかない。
「はい」
彼がはいって…、と笑ったあとまた話し掛けて来た。
「超方向オンチの香西さん」
「だから、好きで迷ってるんじゃないんですって！」
「あ、好きで迷ってるんじゃないんだ」
当たり前じゃないか。好きで迷ってる人がいたら見てみたいもんだ。
すると彼は軽く息を吐いて笑いを堪えた。
「それにしてもさ、可哀相に…こき使われてるんでしょ？」
一応持ち上げとこう。ここに通うようになるかもしれないし。

「う…いや、料理はしてくれますけど…」

「掃除とかは香西さんがするんだろ？」

「…まあ」

彼が外を見ながらため息をついた。

「しっかし…雪酷いな…」

やっぱりか…どこに行ってもそう言われる。

…たまたまだ。たまたま私が出たときに限って雪が降るだけ。

「小さい頃からそうなんですけど…」

うん、と言って彼が耳を傾ける。

「私が家を出たときに限って雪が降るんです。

だから周りには『家から出るな！』って言われて…」

彼が大爆笑する。

「マジで！？

そーいや正月雪降ったな…」

「私が家から出たら降り始めたんです」

「そっかー…じゃあ今日こんなに降ってんのは香西さんのせいか」

何だろう、そう言われるのがあんまり好きじゃないのに、彼に言われたらそうでもないみたい。

でも雪道は怖いし、前が見えないから雪は降らないのが一番だ。

―23―

ゆきんこ香西さんだ。
外に出れば雪が降る。生まれた日は大雪だったとか…。
言われてみれば今まで見て来た女性の中で一番雪景色が似合う気がする。

凝視してるのがばれないように横目で見る。
外見上は実年齢以上に落ち着きがあって、凛という言葉が似合う。
でも…

「香西さんこの道覚えてる?」

彼女が首を横に傾ける。

「は、い…いや、う…ん…」

このギャップが可愛い。

「近所で迷う香西さんだもんね」

「…何で迷うのか聞きたいくらいですよ」

「まあでもそこが香西さんの良いとこだよ」

大雪の日に生まれた、という話を聞いたとき、最近誕生日を迎えたことを知った。
恥ずかしい話、会話してる最中「おめでとう」を言いそびれた…お姉ちゃんからは小さなケーキ一個だけだったらしいのに。
プレゼントは貰ってないらしい。まあ俺も大学時代はそうだった。
ここは下手にプレゼントして関係が微妙になってはいけない。我慢しよう。

「香西さんってさ、見た目は落ち着いてるよね」
ちらっと彼女が視線をこちらに向ける。
「見た目はってどういう意味ですか…」
「いやいや、何て言うか落ち着いてるよね。雰囲気的に二十代…」
褒めたつもりだったが、彼女の気分を害したようだ。
「…それ、失礼じゃないですか…？」
彼女は苦笑いしながら答えた。
「や、そんなつもりじゃ！

…ただ最近まで高校生だったんだなって」

信じられない。

隣にいる大人びた女性は、つい去年まで女子高生だった。

そんな事考えると俺は犯罪者になった気分だ。

恋をしてはいけない気がして来た。

―24―

「私が生まれた日も大雪だったらしいですよ」

何かもうどうでも良くなって来た。むしろ「ゆきんこ」ってイメージの方が可愛いのかも。

…なんてバカな事を考える。

「え、誕生日何月？」

「一月です。つい最近誕生日で」

「…ホントだ！」

彼が教習原簿を見て声を上げた。

『何か下さい』と言おうかな、と思ったけど、彼が話を続けたのでやめた。

「お姉ちゃんからは？」

「小さいケーキを一個」

彼が笑った。

「それだけ？もっと貰っても良いくらいの働きなのにね」

「そうですね」

するとおもむろに自分の大学時代の事を話し始めた。

「まー、でも俺が大学の時もほとんど祝われなかったもんね。彼女がいた時はケーキ作って貰ったくらい」

心なしか「いた時『は』」って強調された気がする。

…いや、気のせいだ。

彼は話を続ける。

「仲良い奴は百均のパーティーグッズとかだったね。しょうもない物だったよ」

二人で笑う。大学生ってこんなもんなんですよね。

検定コースを走行中、交差点に差し掛かった頃横から視線を感じた。

「香西さんってさ、見た目は落ち着いてるよね」

横目ですら彼を見ることが出来ない。何だか恥ずかしい。

「『見た目は』ってどういう意味ですか…」

「いやいや、何て言うか落ち着いてるよね。雰囲気的に二十代…」

落ち着いてるとはよく言われるけど…何ソレ。
内村さんは日に日にＳっ気が出てきてる気がする。

「…それ、失礼じゃないですか…？」

「や、そんなつもりじゃ！
…ただ最近まで高校生だったんだなって」

そう言われてみればそうだ。
私は去年まで制服を着て高校に通ってたんだ。

時間ってあっという間に過ぎるんだなぁと思う。

きっとこの時間だって…。

―25―

何とか中止にならず一時間が終了した。
でも相変わらず雪がひどい。

「今日スクールバス出るかな…」

え？という顔をこちらに向ける。所内を走ってるせいかいつもより余裕があるみたいだ。

「スクールバス出なかったらどうやって帰るの？」

「地下鉄…で」

あんな近距離を時間かけてか。
思わず笑ってしまう。

「歩いて帰ったら良い」

「む、無理無理！帰り着く前に凍死しますって！」

これだけ笑えば十分暖まるか。

「あ、明日あんまり雪ひどかったら教習中止になるからね。規準は市営バス。止まったらウチも休校だから」

「わかりました」

所定の位置に駐車しながら話を続ける。

「次もどうせ俺でしょ？
この項目復習にしとこう」

彼女が黙って頷く。

前に復習について話したことがある。
復習項目がついたら落ち込む生徒がいるらしいが、彼女もその一人らしい。
なんでも『私出来ないんだなぁ…』って思うそうだ。

ついフッと笑ってしまう。

「復習がつくと落ち込む香西さん」

俺の呼びかけに横に首を振って答える。

「そこまでないですって！」

「でもこの辺へこんだんだろ？」

一段階の時の技能のページを指す。
2、3回同じ項目が復習になっていた。しかも数項目。

彼女がためらいがちに頷いた。
何なんだ、この生き物は。可愛いのに面白い。

最後の最後までいじらずにはいられない。

「明日何限？」

「えっと…2限です」

「そしたら明日朝から大雪だな。香西さん来るんだもん」

「た、たまたまなんですって！
私は関係ないですよ！」

「明日来る時何か嫌な予感がするんだろうな…」

「ひどい…」

嘘に決まってるじゃないか。楽しみで仕方ないんだから。

軽く笑って仮免許証を返す。

「お疲れさまでした、忘れ物ないようにね。
じゃあまた明日。気をつけて帰ってね」

―26―

明らかに積雪しそうな雪だ。
…というより、もう植木や屋根には雪が積もってるけど。

「今日スクールバス出るかな…」

彼が心配そうに言った。

「え？」

こんなに生徒がいるのに教習だけやってバスは出ないとかありえるの？
というよりこんな寒い中を駅まで歩いて、まして時間をかけて帰りたくない。

「スクールバス出なかったらどうやって帰るの？」

「地下鉄…で」

それ以外の手段なんて存在しない。

「歩いて帰ったら良い」

意地悪な彼は笑いながら無理な事を言ってくる。私が方向オンチなの知ってるくせに…。
家に帰り着けない自信たっぷりだ。

「あ、明日あんまり雪ひどかったら教習中止になるからね。規準は市営バス。止まったらウチも休校だから」

「わかりました」

彼が横からハンドル操作をしながら駐車する。

「次もどうせ俺でしょ？」

その自信がどこから来るのか聞きたかった。
駐車処置をしながらとりあえず答える。

「はい」

「この項目復習にしとこう」

この人…。

最近いじってくる内容はもっぱら方向オンチ、加速不良、姉弟関係、そしてこの復習項目。

毎時間授業の終わりに『あんまり復習つけると香西さん落ち込むもんなー』と言う。

そして今日もまるで狙ったかのように…

「復習がつくと落ち込む香西さん」

確かにあんまりあると気にはなるけど、初心者で習いに来てるんだから、一発でクリアなんて私には無理な話だってわかってる。

だから…

「そこまでないですって！」

「でもこの辺へこんだんだろ？」

一段階の時の技能のページを指された。

「う…はい…」

彼が爆笑する。

何がそんなに面白いのか正直疑問だ。

彼は教習原簿に印鑑を押しながら話し掛けてきた。

「明日何限？」

「えっと…2限です」

「そしたら明日朝から大雪だな。香西さん来るんだもん」

「た、たまたまなんですって！

私は関係ないですよ！」

「明日来る時何か嫌な予感がするんだろうな…」

何なんだ、嫌な予感って…

「『あぁ、香西さん今日学校に来るんだ…』みたいなさ」

ここまで言われりゃ汚名返上しなきゃ。

雪女呼ばわりだけはごめんだ。

―27―

相変わらず雪が降っている。
ただ昨日とは違ってひどい雪じゃないし、積もってる訳でもないから今日は無事に教習がある。

つまり、香西さんの担当になる。

ちらつく雪を見ながら笑みを浮かべる。今頃彼女がウチに向かっているんだろう。

すると不思議に思ったのか、後輩の池田結衣が話しかけて来た。

「内村さん…どうしたんですか…
いきなり笑い出すなんて気持ち悪いですよ」

「笑ってないし」

「何か最近生き生きしてるっていうか若々しくなって来てるっていうか…何かあったんですか?」

何もない。何もないけど心を見透かされたかのようにドキッとした。

「別に何も」

「もしや年下の彼女が出来たとか」

変な汗をかいて来た。
池田ちゃんは彼女の事を知るはずもないし、知ってたところで俺達が付き合ってるわけでもない。

わざとらしく咳ばらいをする。

「池田ちゃんは人の心配する前に彼氏作んなきゃ」

池田ちゃんは端から見れば可愛いが、もともと体育会系で実に女らしくない。そのおかげで俺の周りで車に興味を持っている女性は彼女くらい。
だからかはわからないが、一向に彼氏が出来ない。

指導員室から出る俺に並んで反抗する。

「余計なお世話！
２８でフリーよりは十分マシです」

…人の事言えたもんじゃないなぁと実感した。

外を出るとさっきより雪がひどくなった。

配車に向かうと香西さんが寒そうにしながら運転席で俺を待っていた。

…ゆきんこめ。

軽く笑った後一息つき、助手席のドアを開けて乗り込む。

「おはようございます、よろしくお願いします」

彼女が笑顔を向けて来た。

「よろしくお願いします」

―28―

「それでさ、内村さんがね、」

「…内村さんて誰？」

一つ上のお姉ちゃんに言われた。

「あ…れ、話した事なかったっけ？
教習所の指導員のさ」

「あー、はいはい！あんたが指名してる人ね」

「そうそう。それでさ…」

どんな事があったのか、何を言われたのかとかとにかく色々話していた。

「薫さぁ、その人いくつ？」

晩ご飯に準備していたポタージュをすすりながら答える。

「んー…この前『かつがつ２０代』って言ってたから３０近いんじゃない？」

「ふーん…で、あんたはその１０くらい上の人にホレたんだ」

ポタージュを吐き出しそうになる。我慢したせいで気管支に入ってしまった。

「…っ！何でそうなるの！」

お姉ちゃんはパソコン作業を続けたままだ。

「だって最近話題が自動車学校…ていうかその『内村さん』？だもん。
薫ってわかりやすいよね…まあ人の事言えないんだろうけど」

まだ好きだって認めた訳じゃ…！
げほげほとむせているので反論は出来ない。

自分では無自覚だ…そんなに彼の事話してたっけ。

スクールバスに揺られながらぼんやりと考える。
今日の担当も彼だから、お姉ちゃんにまたついつい話してしまうんだろうか。
「今日も『方向オンチの香西さん』とか言われてさー」とか言ってしまうのかな…。

ダメだ、変に考えてしまう。意識したらまともに運転できないじゃんか！

運転席に座って頭を冷やそうとしても無理だ。

初めてと言って良いほど助手席を直視した。

今日も彼がここに座るんだ…地図を見るときなんか結構な至近距離なる。

助手席のドアが開いてはっとする。私ってば何を考えているんだろう。

「おはようございます、よろしくお願いします」

彼が笑顔で挨拶をして来た。ほんのりタバコのニオイがする。

ヤバイ、直視できない…。

「よろしくお願いします」

―29―

彼女に好意を抱いてるからだ。
何かにつけて彼女の気を引こうとする。

「もー、香西ちゃん！」

シートベルトを着けながら俺の呼びかけに笑顔で答える。

「はい」

「寒いよ香西さん！」

「寒いですね」

暖房がきくまで結構時間がかかる。二人で寒いと連呼しながら発車指示を出した。

教習所を出てすぐにきょろきょろする彼女を横目で見た。
小動物みたいで何か可愛い…が、やっぱりちょっかいを出したくなる。

「まー、もうここまでの道くらい覚えたでしょ」

「う、はい…」

やっぱりだ。ド方向オンチの彼女がもう道を覚えたなんて思ってない。
さすがだ、と思いつつ笑う。

「マジどんだけなんだよ！ありえないでしょ！」

彼女が小さくむぅ、と唸った。

「だから、」

「好きで迷ってるんじゃないんだよね」
「好きで迷ってるんじゃないんですよ」

彼女の答えなんて知ってる。毎時間このやり取りをしてるんだから。
わざとハモらせたせいか、彼女がいつも以上に反論してくる。

「方向オンチってマジで辛いんですよ！」

「おーおー、むくれちゃった」

その姿さえも愛しく思う。
…ダメだ、もう末期だ。

「じゃあ香西さんが結婚しました。旦那さんが運転してます。」

そこに俺の姿を重ねる。今彼女が運転する車の助手席にいるせいか、
その姿が容易に想像出来た。

「『今どこ!?』って言われたら地図をくるくるくる…」

彼女から渡された検定コースが印刷してある地図をくるくると回す。
彼女は笑いながら数回首を縦に振った。

「私に地図渡さない方が良いですよ」

「頼まれたら何でもやる香西さん」

「…え?」

彼女が反応するのに数秒かかった。
『頼まれたら何でもやる』…そこに語弊があっただろうか。

「人から頼まれたらノーと言えない香西さん」

「はい」

今度はすぐに返事が返って来た。苦笑している。

「友達にはもっと自分のために時間使ってって言われます」

…確かにね。俺もそう思う。
彼女は困っている人を放っておけない性格で、しかも彼氏や旦那さんが出来たら間違いなく自分の時間を割いてでも尽くすのだろう。

「そういう人の周りには人が集まるよ」

「…そうですか？」

笑顔の返事にはにかみながら答えてくれた。

さっきの不思議な呼びかけから5分と経ってないのに、またちょっかいを出したくなる。

だって間違いなく…

「絶対さ、香西さんいじられキャラでしょ」

彼女の顔に明らかに疑問感が出ている。

「え、そんな感じですか？」

「うん。絶対いじられキャラでしょ」

俺以外からもちょっかい出されてるに違いない。

…何だか妬けて来た。

「んー…でも同い年だとそうでもないですけど、年上の人からはよくいじられます」

「あ、そうなの？」

意外だ。万人からいじられてそうなのに…。

まあでも彼女は年上ウケが良さそうだからそうなんだろう。

…例えば俺みたいにさ。

―30―

「もー、香西ちゃん！」

『香西ちゃん』

間違いなく私と彼の距離が日に日に近くなって来ている。

…気がする。自惚れて違ったら悲しいから断定はしないけど。

「はい」

「寒いよ香西さん！」

「寒いですね」

エンジンをかけたばかりでかなり寒い。でも彼も私も笑顔だから心は温かい。

教習所を出て安全確認をする。見通しが悪く、しかも道幅が狭いから細心の注意を払わなきゃいけない。

すると彼が教習原簿を手に取って話し掛けて来た。

「まー、もうここまでの道くらい覚えたでしょ」

…正直に言おう、覚えてない。
スクールバスでは寝てるか携帯をいじってるかのどっちかが多い。
最近はきちんと外を眺めて道を覚えようと努力はしているけどなかなか…。

彼が笑っている。

「マジどんだけなんだよ！ありえないでしょ！」

「だから、」

「好きで迷ってるんじゃないんだよね」
「好きで迷ってるんじゃないんですよ」

ハモった。知ってるんじゃん、私の答え。
わざと意地悪を言ってくる彼に強く主張した。

「方向オンチってマジで辛いんですよ！」

「おーおー、むくれちゃった」

彼が笑いながら喋る。
むくれてなんかない。わかって欲しかっただけ、この辛さを。

「じゃあ香西さんが結婚しました。旦那さんが運転してます。」

何でいきなりその設定？
けど彼の言われたとおりに想像する。そこは落ち着いた車内で、運

転席にいるのは他の誰でもない、彼だ。

「『今どこ！？』って言われたら地図をくるくるくる…」

渡した地図を彼がくるくる回す。全くその通りだと思う。未来の旦那さまにはたくさんたくさん迷惑をかけるだろう。

「私に地図渡さない方が良いですよ」

「…る香西さん」

「…え？」

全然聞いてなかった。今何を言われたんだろう。

彼の呼びかけはいつも不意打ちなので油断しちゃいけないのに…不覚。

「人から頼まれたらノーと言えない香西さん」

ああ、そういう事ね…おかしくて笑ってしまう。

『ノー』と言わないこともないけど、良いのか悪いのか、９割引き受けてしまうのが私の性格だ。

「友達にはもっと自分のために時間使ってって言われます」

『せっかく周りに良い人いっぱいいるのに…自分のために時間使って恋しなきゃ』とか言われた、なんて口が裂けても言わないでおこう。

「でもそういう人の周りには人が集まるよ」

彼の思いがけない言葉が何だか嬉しい。ついつい気が緩んでしまうんだ。

「絶対さ、香西さんいじられキャラでしょ」

突然こんな事を言って来た。心辺りは…先輩か先生しかいない。

「絶対いじられキャラでしょ」

その『絶対』基準が全くわからない。そんなにいじられっぽいだろうか。

「同い年だとそうでもないですけど、年上の人からはよくいじられます」

「あ、そうなの？」

そんなに意外なんだろうか。彼が横でへー、とかふーん、を連発した。

―31―

探せ、探すんだ話題を。

頑張っても老朽化しつつある脳はありきたりな話題しか思い付かない。

「バイトって何してるんだっけ」

彼女がんー…と言って数秒沈黙が流れた後、ためらいがちに答えた。

「まぁ…色々と」

「そんなにやってんの？何に使うのさ？」

「そりゃ留学費ですよ」

「あ、フランスの？」

そういえば来年の三月に行くって言ってたな、と思い出す。

「全額なんて出してもらえないし、かと言って全額準備するのは無理だから…自分で稼げるだけ稼いで、足りない分を出してもらいます。

でも出来るだけ親に出してもらう額はゼロに近いようにしたいです」

なんて偉い子なんだ。こんなに親思いで健気な子は見たことがない。

「でもさ、俺の娘がそんな感じだったら絶対出してあげる…全額は無理だけど。
努力もしないで金だけ要求されたらそりゃ絶対出さないけどね」

きっと彼女の両親もそう思っているんだろう。頑張っている姿を見ているからこそ、全額は無理でも出してあげたいと思っているに違いない。

感心する内容から一転、鈍行車で検定コースを走る彼女をいじらずにはいられなくなって来た。

「香西さんさ、注意するとこはちゃんと注意して、きちんと目配りして安全確認できてるけど、香西さんの運転を一言で表すと…『遅い』！
何でそんなに幹線車道遅いんだよ!?出せよ!」

笑っている俺とは対称的に、彼女が縮こまっていく。

決定、彼女は小動物。
賢くて凛としてて、でも道がわからない面白くて…可愛い奴。

「そう、ずっと聞きたかったんだけどさ」

遂に話題を核心に持って来た。告白をする時みたいに心拍数が上がる。

「香西さんって俺指名してるよね？」

「はい」

「すごい嬉しいんだけどさ、指名してもらえるっていうのは」

言葉が濁ってくる。自分を奮い立たせるかのように真っすぐと前を見つめた。

「でもさ、そもそも何で俺なの？」

正直返事が怖かったが、彼女は少し顔を右に傾けて答えた。

「何で…んー、何て言うか今までで一番合ってたんですよね」

「へぇ」

「今まで当たったことのある指導員の中で一番やりやすかったっていうか」

「初回あれだけぼろくそ言ったのに？『遅い！』とか」

「ん、でもやっぱり一番やりやすかったです」

告白の返事がＯＫな時みたいに嬉しかった。
もっとも『指導員として』ではなく『一人の男として』合ってるのであればこの上ない幸せだが。

―32―

「バイトって何してるんだっけ」

何と答えようか迷う。飲食店の調理スタッフと、歌のインストラクターと、イベントコンパニオン…あー、説明が面倒臭い。

「まぁ…色々と」

「そんなにやってんの？何に使うのさ？」

「そりゃ留学費ですよ」

「あ、フランスの？」

「全額なんて出してもらえないし、かと言って全額準備するのは無理だから…自分で稼げるだけ稼いで、足りない分を出してもらいます。
でも出来るだけ親に出してもらう額はゼロに近いようにしたいです」

この春休みにまずいくら稼げるんだろう。この一年で軽く５０万は稼がないと…。

「でもさ、俺の娘がそんな感じだったら絶対出してあげる…全額は無理だけど。
努力もしないで金だけ要求されたらそりゃ絶対出さないけどね」

感心してくれてるのに何か引っ掛かる。
…娘いるのか…？いやいや、例え話だ。私が娘だから。

「香西さんさ」

彼の呼びかけに目線だけ横に向ける。

「注意するとこはちゃんと注意して、きちんと目配りして安全確認できてるけど、香西さんの運転を一言で表すと…『遅い』！何でそんなに幹線車道遅いんだよ!?出せよ！」

横で彼が笑っている。

笑い事じゃないし。どれだけスピード出すの怖がってることか。

「うぅ…」

横で珍しく彼がそわそわし始めた。

「そう、ずっと聞きたかったんだけどさ」

…

え？

何を言われるんだろう。『香西さんて何人?』『いつからそんな変人なの?』
被害妄想しか出来ない。

「香西さんって俺指名してるよね?」

「はい」

そっちか。
でも何か緊張して来た。今までのおちゃらけた感じとは違う、落ち着いたトーンで彼が問いかけてくる。

「すごい嬉しいんだけどさ、指名してもらえるっていうのは…でもさ、そもそも何で俺なの?」

何で?

焦って理由を探す。楽しいから?落ち着くから?指導が上手いから?
理由なんてない。あるとすれば『内村さん以外は嫌だったから』だ。

そんな事を言えるはずもなく、適当な事を言う。変に黙ってても変に思われるだけだ。

「…何て言うか、今までで一番合ってたんですよね」

「へぇ」

「今まで当たったことのある指導員の中で一番やりやすかったっていうか」

あながち嘘でもない。確かに一番私に合ってるし、一番やりやすい。その理由がもとを辿れば『彼に惹かれている』から。

…それは胸の内に秘めておく。

「初回あれだけぼろくそ言ったのに？『遅い！』とか」

彼がふっと笑った。

「ん、でもやっぱり一番やりやすかったです」

きっと初めて会ったときから彼しかいないと思ったんだろう。

…いや、二回目か。

―33―

徐々に教習所が見えて来た。つまり今日の教習も終わりに差し掛かって来た。

「香西さんの地元に国立大あったよね？」

話題は彼女が国公立大学受験者だったというところから来た。もっとも軸は『地元国公立大学』ではなく、『地元の国公立大学がどこにあるか知っているか』だったが。

「確か…隣の区でした…多分」

絶対知らないな、コイツ。
我慢していたがついつい笑ってしまう。

「…香西さんの言葉信用ならないね」

「むぅ…」

「確か日産の工場とかあったよね…小学生の時工場見学とかしたもん」

へー、そうなんですかー、と彼女が言う。演技か？と聞きたくなるくらい地理に疎い。

「あれは感動したよ。あの部品がここで作られてるのか！とか」

「ほー…」

「ほー…って興味ないだろ！」

笑いながらの主張に首をぶんぶんと横に振る。

「そ、そんな事ないですよ！」

「女の子っていっつもそう！車とか乗れれば良いって感じよね」

車に求めるのは可愛さと乗りやすさ。早さとか性能なんてどうでも良いとか言う人もいる。
それが理解できない。

「車とかピンク色の買うとかね」

すると間髪入れずに彼女が答えた。

「や、私ピンク無理です」

「あ、そうなの？」

何か…意外だ。フェミニンな感じがするのに。

「何て言うかこう…」

「女の子女の子したのが無理なんだ」

彼女が静かに頷く。

「俺の知り合いにも男っぽい奴いるけどさ、でもそういう女の子の

方が好かれるんだよね」

例えば池田ちゃんとか、と思うが変なイメージを与えてはいけないのでそれは言わない。

「へー…でも私色々あって携帯ピンクなんですけど、あと一ヶ月我慢すればやっと開放されるんですよ」

その笑い声で謎が解けた。何故俺が彼女に惹かれているのか。

「…あのさ、いっつも思ってたんだけど、香西さんって俺の高校の時の副担任に似てるんだよね。顔とか声とかイントネーションとか」

若くてさばさばして、でも可愛らしさがある先生だった。生徒からは人気で、俺の憧れの先生でもあった。

彼女がびっくりしている。

「あ、そうなんですか？」

「何でだろ、同じ系統の顔だからか全部同じに見えるんだよね」

「同じ系統って…」

「いやいやホントに
音楽の先生だったけどすごい似てる」

「…そんなに？」

そう。

別に彼女と先生を重ねてる訳じゃないが、何だろう、あの時の気持ちを思い出す。

―34―

教習所に近づくにつれてまた雪がちらついて来た。さっきまでは雪止んでたのにな、と思う。

「香西さんの地元に国立大あったよね？」

市内にあることは確かだけど、何区にあるかは定かではない。

「確か…隣の区でした…多分」

彼が横で肩を震わせていた。

「…香西さんの言葉信用ならないね」

そこまでか、と思う。確かに地元でもわからない場所なんてたくさんあるけども。

「確か日産の工場とかあったよね…小学生の時工場見学とかしたもん。

あれは感動したよ。あの部品がここで作られてるのか！とか」

知らなかった。日産の工場なんてあったんだ。

彼は私よりも地元を知っている。

「ほー…」

「ほー…って興味ないだろ！」

興味がないこともない、と言えば嘘かもしれない。でも私は相槌を打っただけなのに。

「そ、そんな事ないですよ！」

「女の子っていっつもそう！車とか乗れれば良いって感じよね。車に求めるのは可愛さと乗りやすさでさ、早さとか性能なんてどうでも良いとか言う人もいるからね…。車とかピンク色の買うとかね」

「や、私ピンク無理です」

無理無理。ただでさえ可愛くないのに、ピンクの車なんて気持ち悪さを倍増させるだけ。

そう思ってたけど、彼の反応は意外だった。

「あ、そうなの？」

「何て言うかこう…」

「女の子女の子したのが無理なんだ」

似合わないもん、と心の中でつぶやく。携帯なんて見せれたもんじゃない。

「俺の知り合いにも男っぽい奴いるけどさ」

『にも』って…文脈判断すれば遠回しに男っぽい奴って言われたよ

うなもんだろうか。少し傷つく。

「でもそういう女の子の方が好かれるんだよね」

だからこんなフォロー正直嬉しくない。

「へー…でも私色々あって携帯ピンクなんですけど、あと一ヶ月我慢すればやっと開放されるんですよ」

とりあえずこの先ピンクの物を持たないでおこうと誓った。

ただ何かさっきの言葉が気に入らなかったので反論しようとした。

その時だった。

「…あのさ、いっつも思ってたんだけど」

またか。今度は何だろう…今日の教習はいつにも増して心臓に悪い。

「香西さんって俺の高校の時の副担任に似てるんだよね。顔とか声とかイントネーションとか」

今度はそっちか。

ただずっと彼がマジで似てる、と連呼するのでびっくりする。

…あ、でも大学の友達にも地元でそっくりな友達いるよ！って言われたこともあったな。

「そうなんですか？」

「何でだろ、同じ系統の顔だからか全部同じに見えるんだよね」

「同じ系統って…」

何だその表現。思わず笑ってしまう。

「いやいやホントに
音楽の先生だったけどすごい似てる」

「…そんなに？」

どんな先生なんだろう。
少なくとも女の先生であることを期待したい。

―35―

ちらつく程度だった雪がまたひどくなって来た。
原因は明白。俺の横にゆきんこがいるからだ。

「教習所に近づいて来たらまた雪が…。
香西さんが乗ってるからだし！」

いじる内容が増えると会話率が増えるので、心なしか嬉しい。

「たまたまです！たまたま！」

彼女が慌てて否定すると軽くため息をついた。

「…もう、昨日大変だったんですよ」

彼女の言葉に黙って耳を傾ける。

「お姉ちゃんが鍋したいって言ったから具材買って、傘がなかったから雪にまみれて帰ってたら、知らない人から『重そうだね、傘ないみたいだし家まで送ってあげるよ』って言われて」

「で、もちろん？」

「逃げました」

「え、怪しい人だったの！？
爽やかに『どうぞー』とかじゃなくて！？」

ナンパか？
まあ今の話を聞いていると、爽やかに言って来たとしても許せない。
彼女が無事に俺の隣にいてくれてかなりほっとした。

「とんでもないとんでもない！ダッシュで帰りました」

「はー…そりゃ危なかったね」

家まで送ってあげることが出来たら良いのにな、と思う。

駐車措置を終わらせた時、時計は既に終了時刻を過ぎていた。
だが俺は次回の指示を出しつつも、ギリギリまで彼女と会話を続ける。

「次はセット教習で学科も一緒にあるから。
指導員は選べないから注意してね」

セット教習の次も指導員を選べない技能教習。つまりまた暫く彼女に会えなくなる。

寂しい？

聞こうとするが「そんな訳無いじゃないですか」とか言われたら撃沈するので言わないでおこう。

―36―

教習所周辺を二周くらい走る。今日は昨日と違って時間的に余裕があるらしい。

彼が外を眺めながら喋る。

「教習所に近づいて来たらまた雪が…。香西さんが乗ってるからだし！」

「たまたまです！たまたま！」

やっぱりネタにされてる。でも何か嬉しいと思ってしまう私はMなのか、そうなのか。

自己完結する私をよそに彼は笑っている。

「…もう、昨日大変だったんですよ」

ため息をついて話を始める。

「お姉ちゃんが鍋したいって言ったから具材買って、傘がなかったから雪にまみれて帰ってたら、知らない人から『重そうだね、傘ないみたいだし家まで送ってあげるよ』って言われて」

「で、もちろん？」

「逃げました」

当たり前じゃないか。このご時世、何があるかわからない。本当に親切心からだったとしても疑ってかからないといけないんだ。

「え、怪しい人だったの！？
爽やかに『どうぞー』とかじゃなくて！？」

「とんでもないとんでもない！ダッシュで帰りました」

今回のは明らかに何かを目的としていた。前、地元で下心丸出しの男にナンパされた時と同じように。
前回も今回も逃げて正解だったと思う。

「はー…そりゃ危なかったね」

私は黙って2回ほど頷いた。

いつも駐車は彼がしてくれる。横からすっと手を出して、人差し指でくるくるとハンドル操作をする…いつも凄いなー、と見とれてしまう。

「香西さんは地元の市立大に志望校変えなかったの？」

「はい。妥協したくなかったし…センターが終わって自己採点したら、私はそこA判定だったんですけど、一番仲良い子が市立大第一志望で、でもD判定で凄く落ち込んでて…そんな事出来ませんでした」

「市立大A判定って…ホント頭良いんだなー…」

彼が感心しながら印を教習原簿に押す。

「次はセット教習で学科も一緒にあるから。
指導員は選べないから注意してね」

それでか、彼で予約が取れなかったのは。もっと早めに知っていればさっさと終わらせてすぐに彼の指導に戻っていたのに。

寂しい。

また暫く会えなくなる。来月の頭までは個人的な用事が詰まってるから合間を縫う事すら出来ない。

でも早く卒業するのも嫌だ。
良いのか悪いのか、次に会える日をぼちぼち待つしかない。

―37―

また一週間以上会えていない。

普通の学校と違って良いのは先生と生徒の恋愛がご法度ではないところ（中には推奨している教習所もあるらしい）。

逆に悪いところは生徒が来る日がまちまちというところ。

だから二日連続で会える日もあれば、こうやってかなり日が開くことがある。

今頃彼女は何をしてるんだろう。そんな事を考えながらタバコをふかす。

すると教習を終わらせて帰って来た池田ちゃんがおもむろに俺の隣に座った。

「さっきの時間は休憩だったんですか？」

「うん、まあね。車乗りたかったけどさ」

そうですか、と言って彼女が笑い、ちょっと間を置いたあと口を開いた。

「…内村さん、香西薫って知ってますよね？」

ドキッとした。何で彼女の名前を知ってるんだろうか。
変な噂が流れてるのか？香西さんが俺から離れてしまうのか？

ぐるぐるする。

「お…おぉ、知ってるよ。俺を指名してくれてる子」

開き直った感がある。どうにでもなれ。
ただ言えることは一つ、俺達はデキてない。

俺の脳内とは逆に、彼女が楽しそうに話を始めた。

「今日その子の担当だったんですよ。原簿見たら印鑑が半分以上内村さんだったから」

何だ、そういうことか。安堵する。

「秘蔵っ子なの。面白い子だったでしょ」

彼女が目を丸くした。

「え？そんなことなかったですよ？
大人しくて落ち着いてて冴えてて」

「そうだね…でもそれは真の姿じゃないんだよ。
彼女面白い上に超方向オンチでさ」

池田ちゃんの眉間に少しシワが寄った。

「…え？香西さんの話ですよね？
あの子難無く道進むし、検定コースもバッチリで、内村さん指名の生徒にしては上手いなぁ、って思ったんですよ」

「おい、どういう事だよ！」

とりあえずツッコミを入れてはみたが…どういう事だ？
本当に彼女の話だろうか。

そっか、池田ちゃんの上手いレベルはかなり低いんだ。
そう自己完結してみた。

彼女の運転が上手くなるのは実に嬉しいことだが、俺の頭の中では「彼女が上手くなる＝俺から離れていく」。まだまだ技能レベルが低いと思いたい。

次にあの子に会えるのはいつだろう…。
いつも身につけている白いロングマフラーを思い浮かべながらそんな事を考えた。

―38―

今日の担当は女の人だ。
応急救護で当たったことがあるから知ってるけど、美人で明るい若い人。教員ナンバー順から推測すると、多分彼より年下だろう。

いつもと違う車でハンドル操作に手間取ってしまう…重い。

「重いでしょう?この車男性には力があるって人気なんですけど、女性にはハンドルが重くてきついんですよ」

「そうですねー…」

高級車には絶対に乗らない。決めた。

彼とは違い、指導内容からほんの少しだけ派生した話しかしない。だから指示以外は会話なんて存在しなかったと言っても過言じゃなかった。

「この道覚えてます?検定コース2なんですけど」

ぶっちゃけてみると、覚えてない。でもここでそんな事言うと彼の先輩としてのメンツが丸潰れだろうか。
余計な事を考えて嘘八百を言う。

「はい」

このやりとりがその後何度続いた事か…この嘘がバレないかびくびくしたもんだ。

そしてふと考えた。彼女は彼とどんな会話をしてるんだろう。

嫉妬か？バカバカしい。彼の恋人でもないのに…。

教習を終わらせた後、ふと配車待ちのベンチの方へ目をやった。そこにあるのは、たばこを吸っている彼らしき後ろ姿。

息が詰まりそうだった。

話し掛けたい。そばに行って、袖を引っ張って、軽く挨拶もして、そして話をしたい。

でも勇気が出なくて、ただただ彼の後ろ姿を眺めた。

近くて遠くにいる彼。手をのばしても届かないかもしれない…。

私の次の技能予約は、あと８日後。

―39―

約２０日ぶりだ。よく数えてたなと思う。
今日から駐車措置の指導だから、しばらく所内での指導になる。
久しぶりに彼女に会えると胸を踊らせながら配車へ向かった。

…彼女がいない。
配車を間違えたか？キャンセルされたか？

あれこれ考えていると背後から慌ただしい足音が聞こえて来た。
振り返らずともわかる、彼女だ。
彼女に笑顔を向ける。

「おー、来たね！運転席どうぞ」

息を切らしながら笑顔で答えてくれた。

「はい！」

前の教習からも一週間くらい経っているらしく、立ち上がりが悪い。
こんなので大丈夫か？と思いつつ指示を出す。

「今日は駐車措置の練習ね」

「…はい」

おや？

「元気ないね？」

彼女が小さくむぅ、と言った。

「まともなバックした事ないから自信ないんです」

「復習項目にしようか」

俺の言葉に開き直ったかのように笑った。

「お願いします」

所内での指導とはいえ、話したくなるのはやっぱり『方向オンチ』だ。
話の軸がほぼそれだと言っても過言ではない。

「方向オンチの香西さん」

彼女がまたか、という顔をした。

「もうウチまでの道覚えた？」

「…まだです」

「三國大までは？」

返事がない。思わず笑ってしまった。

「マジどんだけなんだよ…簡単だってば」

彼女が再びむぅ、といった後口を開けた。

「そんなに言うなら今度ドライブに連れて行ってくださいよ」

…え？

これは願ってもないチャンスだ。

この言葉は他の誰でもなく、俺に向けられたものだ。

答えなんて決まってるじゃないか。

「良いよ。どこに行きたい？」

彼女は少しびっくりした後、あたかも当然のように答えた。

「検定コースと、家から教習所までと、家から三國大…」

何と実用的なコースなんだ。ムードのかけらもない。

最初だし良いか、と軽くため息をついて笑った。

「了解」

―40―

そろそろ教習が始まる。荷物を持って移動しようとしていた時だった。

「あっ、薫ー！」

ふと顔を上げると、同じ部活の女の子だった。

「美樹ちゃん！」

「今日路上？」

「や、今日は駐車の練習だから所内かな」

「そっかー…あ！ヤバ！あと2分で始まるし！」

「え！？」

慌てて振り返って時計を見る。館内には「教習の方は急いで準備をしてください」とのアナウンスが流れていた。

「じゃあ行ってきます！」

走って配車に行くと、彼がすでに車の前で待っていた。

全速力で走る。
彼は私だと気付いたのか、笑顔でこちらに振り返った。
「おー、来たね！運転席どうぞ」
息が上がる。運動不足にも程かあると痛感した。
「今日は駐車措置の練習ね」
「…はい」
わかってます、わかってますとも。
私は脱輪の切り返し以外にバックをした事がない。要は駐車なんて出来ないということ。だからこそ練習するんだけど…。
彼がこっちを見ながら話しかけて来た。
「元気ないね？」
「むぅ…まともなバックした事ないから自信ないんです」
彼が笑っている。
「復習項目にしようか」

この人…。

ただ、この2時限後にある高速教習は多分指導員を選べない。高速が終わってしまえば教習も終盤に差し掛かってしまう。

少しでも一緒にいる時間を長めに取りたいなら、ここで復習にするしかないか、なんで馬鹿な事を考える。

「お願いします」

「方向オンチの香西さん」

来ましたおなじみの話題。いつもこうやって話が始まる。

「もうウチまでの道覚えた?」

「…まだです」

「三國大までは?」

家から三國大まで直で言ったことがない。

つまり覚えるはずがない。

「マジどんだけなんだよ…簡単だってば」

彼が爆笑している。

「むぅ…そんなに言うなら今度ドライブに連れて行ってくださいよ」

「良いよ。どこに行きたい？」

…え？

私が冗談で言ったのを知って、冗談で返したのか？

脳内が少しパニック状態になる。

「検定コースと、家から教習所までと、家から三國大…」

笑われた。仕方ないじゃないか、他に思い付かなかったんだから…。

彼が咳ばらいをして答えた。

「了解」

返事は意外なものだった。

―41―

さっきから気になっているのが、彼女の人差し指に巻かれた包帯。
何をしたんだろうか。

「…その手どうしたの？」

「あぁ、火傷したんです。絆創膏が剥がれそうだったから念のために包帯巻いただけなんで、大した事ないですよ」

「料理してたの？」

「はい。お菓子作ってて…」

すっかり忘れていた。明日はバレンタインだ。
へえ、と言ったと同時に疑問が生じる。
あげる相手でもいるのだろうか…？

それはおいおい聞くとして、

「何くれるの？」

「…え？」

「いやいや、いつも丁寧に指導してる俺に何くれるの？」

彼女が苦笑する。

「作ったのはチーズケーキなんですけど…食べれますか？」

もちろんですとも。たとえ嫌いなものだったとしても食べてみせる。

「マジで！くれるの？」

「え？あげるなんて一言も…」

焦らす気か、この俺を。

じゃあ今聞くしかない。例のアレを。

「何、あげる相手でもいるの？」

車をバックさせながら彼女が喋る。

「いる訳ないじゃないですか。お姉ちゃんと二人で食べるんです」

つまり実家生の彼氏がいなければ、好きな人もいない。

「じゃあ何でくれないのさ」

彼女は後ろの方を見つめている。

「だって明日来ないですもん。次もしばらく後だし」

そういうことね。じゃあ貰える可能性はある。

「それだったら次来る時持って来てよ」

彼女は何も言わず笑顔で頷いた。

―42―

昨日の夜にバレンタイン用のチーズケーキを焼いた。炊飯器で簡単、と油断して作業をしていて、見事に釜で火傷してしまった。

水ぶくれのカバーのために絆創膏をしていたけど、複数枚貼ってて剥がれそうだったので、上から包帯を巻いている。

大袈裟だっただろうか、彼が心配そうに尋ねて来た。

「…その手どうしたの？」

「あぁ、火傷したんです。絆創膏が剥がれそうだったから念のために包帯巻いただけなんで、大した事ないですよ」

「料理してたの？」

「はい。お菓子作ってて…」

「へえ、何くれるの？」

…え？

パニック状態の脳がパンクしそうになる。

「いやいや、いつも丁寧に指導してる俺に何くれるの？」

「作ったのはチーズケーキなんですけど…食べれますか？」

「マジで！くれるの？」

「え？あげるなんて一言も…」

確かに彼に渡せたらな、と思いながら作りはした。でも明日はバイトだし、次に彼に会えるのはあと5日後だ。渡せるはずもない。

彼が私と一緒に後方を確認しながら話しかけて来た。

「何、あげる相手でもいるの？」

『内村さんです』

そう言えたらどれだけ楽だろう。

「いる訳ないじゃないですか。お姉ちゃんと二人で食べるんです」

「じゃあ何でくれないのさ」

彼が拗ねた子供のように言う。本気で言ってるの？それ…。

訳がわからなくなりそうだから、高校の先生達のノリと一緒か、と受け流すことにした。

「だって明日来ないですもん。次もしばらく後だし」

「それだったら次来る時持って来てよ」

わからない、彼が何を意図しているのか。
私には駆け引きなんて向いてないのに。

―43―

延々と続く駐車作業に終わりが見えて来た。

あくまでもそれは時間的な事であって、技術的な事ではない。辛うじて駐車できるレベルで終わった。

もとの位置に俺が駐車して話を続ける。

「じゃあコレ復習で」

彼女がこくこくと頷く。

もう小動物にしか見えない辺り、脳内がおかしな事になっている。

「復習になると落ち込む香西さん」

彼女がまた反論して来た。

「そこまで落ち込んでないじゃないですか」

「でもこの辺へこんだんだよね」

この前と同じところを指す。毎回彼女はここで何も言わなくなってしまう。

可愛い奴だ。

笑いながらさっきの話に戻る。

「ドライブの事なんだけど…」

「…ホントに行くんですか？」

彼女が少しびっくりしている。彼女が発した言葉はやっぱり冗談だったんだろう。でもここで押しとかないと、もうチャンスはないと直感した。

「折角だし行かない？何回も通ったら道覚えるだろうし。…嫌なら良いけどさ」

彼女が俺の方を見て首を横に振った。

「とんでもないです！私で良いなら喜んで」

よし、契約成立。バインダーから紙を取り出す。

「番号教えてもらって良い？休み確認して連絡するから。香西さんも休み確認しといて」

「わかりました。
番号は０９０…」

彼女の名前と番号を裏紙にメモする。

電話しよう、今日帰ってすぐに。

今月から毎日教習があっているため、休みがまちまちになっている。だから実は自分の休暇はとっくにチェック済みだ。連絡先を知る手段としてはセコいといえばセコいが、まあ結果オーライだ。

早く仕事が終わらないもんかとじれったくなった。

―44―

何回やってもまともに駐車できなかった。
また下手な姿をさらしてしまって恥ずかしい思いをしたもんだ。
彼が今日も横からハンドル操作をして駐車している。何かすごく…
すごくこう、じーっと見てしまう。

「じゃあコレ復習で」

当たり前じゃないか。こんなので合格だったら教習所のシステムを疑う。

彼がいつものように印鑑を押しながら話しかけて来た。

「復習になると落ち込む香西さん」

「そこまで落ち込んでないじゃないですか」

「でもこの辺へこんだんだよね」

「う…」

私は色んな意味で彼に弱いのだ。

彼が笑いながら話し始めた。

「ドライブの事なんだけど…」

びっくりする。ホントに連れて行ってくれるんだろうか。
ドキドキしてきた。

「…ホントに行くんですか?」

彼は少しだけこっちを向いた。

「折角だし行かない?何回も通ったら道覚えるだろうし。
…嫌なら良いけどさ」

ホントに連れて行ってくれるなら、それはそれは嬉しいことだ。
慌てて前言を撤回する。

「とんでもないです!私で良いなら喜んで」

よし、と言って彼は自分のバインダーからプリントを取り出し、裏紙を使って何かを書き始めた。

「番号教えてもらって良い?休み確認して連絡するから。
香西さんも休み確認しといて」

「わかりました。
番号は０９０…」

内心心臓が止まるかと思った。これは現実の世界の話？

教習が終わって、しばらくの間携帯とにらめっこを続けた。

―45―

家に帰り着いた時、時計は１０時を指していた。
大学生ならまだ起きてるだろうと思い、電話をかけた。

…出ない。

何度かかけてみるが、留守番サービスに接続される。
もしかしたら何かしているかもしれない。例えば皿洗いとか。
しばらく時間を置くために晩飯を食べる。

すると俺の携帯が鳴った。
画面を見ると、他の誰でもない、彼女からだった。
不用心な奴め。そう思って電話を取る。

「もしもし」

『あの、さっき何度かお電話頂いてたんですが…』

しばらく黙ってみたが、もう無理だ。どちら様ですか?と尋ねよう

ともしたけど、話をしたいという欲求に負けた。

「古野ドライビングの内村です」

『あ、やっぱり？すみません、お風呂に入ってて…』

彼女が笑っている。が、そこは彼女のためにガツンと言っておかないと。

「かけ直すなんて不用心だなぁ」

『すみません…でも根拠はないけどそうだって思ったんです』

受話器の向こうで彼女が笑っている。何だか嬉しかった。

「あ、でさ、休みなんだけど…一番近い休みが今度の火曜なんだよね。どう？」

『あー…火曜はバイトが…』

「何だとー！？」

『すっ、すみません！』

電話でも会話の雰囲気は変わらない。だからこそついついいじってしまう。

「いいよいいよ。じゃあ木曜は？」

『あ、その日なら大丈夫です』

よし、決まり。

「じゃあ朝から空けとけよ。9時に下山駅前ね」

『はい』

その柔らかな声からいつもの笑顔を想像する。無意識のうちに俺の頬も緩んだ。

「とりあえずさ、アドレス教えとくから連絡して？メールだったら教習の合間でも出来るし」

『わかりました』

電話を切るのは惜しかったが、彼女は明日バイトらしいし、俺も明日仕事がある。

「じゃあ今日はこの辺でね。おやすみ。バイト頑張れよ」

『はい。おやすみなさい』

彼女がいた頃を思い出させるやり取りだった。

―46―

お風呂から上がったとき、オルゴールの着メロが聞こえた。

「ずっと携帯鳴ってたよー」

お姉ちゃんがテレビを見ながら言った。慌てて着替えて携帯を手に取る。

０８０から始まる番号から3回ほど着信があった。

もともと電話はほとんど使ってないから、この番号の主は彼だと確信した。

発信ボタンと数秒格闘した後電話をかけた。彼がどのタイミングで取るのか緊張する。

『もしもし』

彼だ。いつもとなんか違う風に聞こえる声にドキドキする。

「あの、さっき何度かお電話頂いてたんですが…」

数秒沈黙が流れた。間違い電話だったのかと不安が募る。
すると携帯の向こうから軽い笑い声が聞こえて来た。

『古野ドライビングの内村です』

「あ、やっぱり？」

脱力した。もし違っていたらひどく後悔していただろう。

「すみません、お風呂に入ってて…」

『かけ直すなんて不用心だなぁ』

向こう側で彼が笑いながら言った。一応心配してくれているのだろう。

「すみません…でも根拠はないけどそうだって思ったんです」

『次からは知らない番号からかかって来てもかけ直すなよ？
あ、でさ、休みなんだけど…一番近い休みが今度の火曜なんだよね。
どう？』

スケジュール帳をぱらぱらめくりながら答える。

「あー…火曜はバイトが…」

『何だとー！？』

わざとらしく彼が大きな声を出した。笑うことしか出来ない。

「すっ、すみません！」

彼もまた笑っていた。

『いいよいいよ。じゃあ木曜は？』

「あ、その日なら大丈夫です」

『よし、決まり。
じゃあ朝から空けとけよ。９時に下山駅前ね』

「はい」

…ん？朝から？

朝からって…昼でお開き？
それとも何往復もするつもりなんだろうか、検定コースを。

あれこれ考えていたが、彼の声にはっとする。

『とりあえずさ、アドレス教えとくから連絡して？
メールだったら教習の合間でも出来るし』

「わかりました」

『じゃあ今日はこの辺でね。おやすみ。バイト頑張れよ』

「はい。おやすみなさい」

短い電話が終了した。用件だけではあったけどお互い次の日に仕事があるし、短いとはいえ楽しかった。

それはさておき、何とメールをしろというのか。
集合時間も場所ももうとっくに指定されている。

「むぅ…」

何度もメールを打っては消去した。

―47―

なんてこった…。

彼女とのドライブデートを翌日に控えた今日、何と彼女の指導が入っていた。
彼女とはあの電話以降特に接触がない。

気恥ずかしさが募る。

気を取り直して配車へ向かうと、珍しく彼女が車の外に立っていた。

「おはようございます、運転席どうぞ」

「あ、はい」

二人同時に車に乗る。何だか微妙な空気が流れていていたたまれない。

「…仮免の表示板前と後ろにつけた?」

「あ、今つけました」

会話はそれだけだった。どうしようか悩む。

いつもの雰囲気を出すには開き直るしかないと決心する。

「メールは？」

彼女はシートベルトを着ける動作を途中でやめて固まっている。

「メールしてって言ったじゃん」

「本文は作ったんです。送信してないだけで」

「しろよ！」

笑う俺をよそに、彼女はいつも通りむぅ、と唸った。

「だって今更送る内容なんてないじゃないですか。集合時間も場所も決まってるのに…」

「行き先決まってないじゃん」

彼女がえ？とでも言いたげな顔をしている。

「え、検定コースと家から大学と教習所までの道でしたよね？」

本気で言ってたんだ。おかしくて笑ってしまう。

「ＯＫ、ＯＫ。じゃあその他は俺にお任せって事で」

「はぁ…」

彼女は少し困惑気味で承諾した。

今日も相変わらずお世辞でも上手いとは言えない駐車措置が続く。

「ホラ、もっと綺麗に駐車してよ」

「むー…」

彼女が横やら後ろやらをきょろきょろと見渡す。

可愛らしい小動物を横目に、包帯の取れた左手の人差し指を見つめる。

「…そういやチーズケーキは？」

彼女が前を向いて口をかぱっと開けた。

「…忘れた」

「はぁ！？次の時間にくれるんじゃなかった？」

「でも今持って帰っても邪魔になりません？

どうせ明日会えるんだし、その時にでも渡そうかなって思ってたんですけど…嫌でした？」

なるほど、一理ある。
明日どんなチーズケーキを渡されるのか楽しみだ。駐車と違って料理は上手いはずだから。

―48―

教習カードとにらめっこを続けていた。
何故私は今日予約を入れたのだろう…ドライブは明日なのに。

「お疲れさまです、香西薫です」とだけ書かれたメールを削除して、いつもはコートのポケットに入れている携帯を鞄の中にしまった。
後部座席に荷物を置いて一息着く。今日どんな顔をして会えば良いのだろう。

すると彼の声が背後から聞こえて来た。
「おはようございます、運転席どうぞ」

「あ、はい」

慌てて車に乗った。

微妙な空気が流れているのが手に取るようにわかる。彼の顔を見ることなんて出来なかった。

「…仮免の表示板前と後ろにつけた?」

「あ、今つけました」

それだけ。ただそれだけ。どうしたら良いのか全くわからなかった。

「メールは？」

諦めてシートベルトを着けようとする私に、思いもしなかった質問が投げ付けられる。

送ろうとはしました。送信寸前までは作業したんです。何と答えたら良いのか…頭がぐるぐるする。

「メールしてって言ったじゃん」

彼が苦笑しながら言った。

「本文は作ったんです。送信してないだけで」

「しろよ！」

いつものように笑っている。

彼は間違いなく私がどれだけ携帯と格闘したか知らない。

「むぅ…だって今更送る内容なんてないじゃないですか。集合時間も場所も決まってるのに…」

「行き先決まってないじゃん」

「え、検定コースと家から大学と教習所までの道でしたよね？」

それ以外の行き先なんて厚かましくて言えない。好意を寄せているのがバレて引かれようもんなら、実用コースを選ぶのが無難だ。

「ＯＫ、ＯＫ。じゃあその他は俺にお任せって事で」

その他？ってどういうこと？
わけがわからなくなる。

これ以上考えても頭が痛くなるだけだ、と諦めて発車した。

他の人もこんな状態だったんだろうか。路上で駐車すれば苦情が出そうな感じでとりあえず駐車した。

「ホラ、もっと綺麗に駐車してよ」

「むー…」

再び車を動かして何とか綺麗に駐車しようとする。やっぱり他の生徒さんはこんなに下手ではないんだろう。

いつもより集中できない理由なんて決まってるじゃないか。彼の視線が気になるからだ。

「…そういやチーズケーキは？」

思い出した。今日持って来る約束だった。

「…忘れた」

「はぁ!?次の時間にくれるんじゃなかった?」

適当な事を言ってごまかす。

「でも今持って帰っても邪魔になりません?
どうせ明日会えるんだし、その時にでも渡そうかなって思ってたんですけど…嫌でした?」

なるほどー、と彼が納得してくれた。明日こそは忘れないように持って来なきゃ。

―49―

俺は子供か。

あくびをしながら下山駅前まで車を走らせる。恥ずかしい話、まともに寝ることなんて出来なかった。

しかも当日に睡魔が襲ってくるという最悪のパターン。遠足を楽しみにしていたあまり寝不足になって、当日体調を崩して結局あまり楽しめなかった小学生と同じ。

目もかなり早く覚めてしまったし、することもないので家を出て来た。時計はまだ8時半を指していた。

30分も早く来てどうするんだと自分に言い聞かせる。すでに下山駅に到着した車を止め、何をしようかあれこれ考えた。が、することも見つからず、とりあえず携帯を手に取るしかなかった。

『明日は下山駅前に9時集合だよ。覚えてる?』

『私そこまで馬鹿じゃないですよ…』

『持って来るものはチーズケーキね』

『…はい』

昨日のやり取りを思い出す。彼女の微笑みが頭から離れなくなって来ている。

俺もまだ若いな、なんて思いながらふと助手席の方に目をやると、もう着いてしまったらしい彼女がきょろきょろと周りを見渡していた。

おいおい、まだ２０分前だぞ、と言いたくなるが、人の事を言えるはずもない。

ふっと笑ってから、手にしていた携帯から電話をかける。彼女はどんな素振りを見せてくれるだろうか。

彼女の携帯に今着信があったのだろうか、ぴくんっと動いた。もう小動物としか言いようがない。

俺がじーっと見ているのに、それに気付く事なく笑みを浮かべて携帯を耳にあてた。
頬が熱くなるのがわかる。

『もしもし？』

「おはようございます」

『あっ、おはようございます。

丁度良いタイミングですね！今駅前に着いたんですよ』

彼女は目の前に止まっている車が俺のだとは思ってないようだ。

「で、チーズケーキは？」

受話器の向こうで笑っている。

『またそれですか…ちゃんと持ってます』

彼女の手元を見ると、小さな白い箱があった。あの中に彼女お手製のケーキが入っているのだろう。

「合格。じゃあ車に乗って良いよ」

え？と言って彼女がきょろきょろし始めた。あまりの面白さに笑ってしまう。

「目の前の車の助手席ね」

彼女が気付き、右手で口を塞いで顔を赤くしている。

助手席のドアを開けて彼女が尋ねて来た。

「ず、ずっといたんですか？」

「うん。いつ気付くかなー、ってずっと見てた」

「…目の前にいたなんて…」

彼女が呟きながら席についた。
そんなに恥ずかしかったんだろうか…いじらずにはいられない俺はSなのかもしれない。

―50―

やばい。ほとんど寝てない。

小学生の時からそうで、イベント事の前日はまともに眠れない。おかげさまで今猛烈な睡魔に襲われて、布団から抜け出せない状況だ。

いや、こんなんじゃダメだ。折角彼がドライブに連れて行ってくれるんだから。そう自分に言い聞かせて起きる。

それからの作業はあっという間だった。
朝食をとり、歯を磨いて、着替えて、髪をといて、時計やネックレスをつけて。

もう終わり。どうしろと言うのか。

『明日は下山駅前に9時集合だよ。覚えてる?』
『私そこまで馬鹿じゃないですよ…』
『持って来るものはチーズケーキね』
『…はい』

あ、チーズケーキ。慌てて冷蔵庫から取り出した。小さな箱ではあったが、一切れじゃ何だか寂しかったので二切れ入れた。

早速することがなくなる。今腕時計は8時半を指していた。家から駅までは徒歩１０分。ダラダラ歩けば良い時間になるだろうか…。

が、私の予想に反してジャスト１０分で着いてしまった。

どうしようか、もう着いちゃいましたと電話しようか。いや、運転中かもしれない。携帯を開いてあれこれ考える。

するとマナーモードに設定していた携帯が震え出した。画面に表示されていたのは『内村新一』という名前だった。
何故だか頬が緩んでしまう。

「もしもし？」

『おはようございます』

「あっ、おはようございます。
丁度良いタイミングですね！今駅前に着いたんですよ」

運転中でも電話が出来る装置を付けてるんだろうか、とかあれこれ考える。

『で、チーズケーキは？』

「またそれですか…ちゃんと持ってます」

手に持っていた箱を目線の高さまで持ち上げた。喜んでくれるだろうかと不安ではあったが、味見の段階ではバッチリだ。

『合格。じゃあ車に乗って良いよ』

「…え？」

もう来ているのだろうか。辺りを見渡してみるけど、彼の姿は見当たらない。

受話器の向こうから笑い声が聞こえた。

『目の前の車の助手席ね』

はっとする。そうだ、ドライブだから車で来てたんだ。それからあのちょっと乙女チックな一部始終を見られていたみたいだ。

助手席のドアを開けて恐る恐る尋ねた。

「ず、ずっといたんですか？」

「うん。いつ気付くかなー、ってずっと見てた」

「…目の前にいたなんて…」

恥ずかしいなぁ、もう。目の前で見てたなんて反則だ。

―51―

とりあえず車を検定コースの起点まで走らせた。彼女はまだ仮免中だし、俺の大事な車を運転させる訳にはいかないから、俺が運転するしか手はない。

いつもと条件が違っていて緊張する。何せ『デート』だ。いつ以来だろうかと考える。

「じゃあ今から1コース走るから頑張って覚えてね」

「はい」

返事だけは良い。果たしてきちんと覚えれるのだろうか。答えは大体見えている。無理だ。

笑いを堪えるのが大変だった。

「あ、そういえばありがとね、チーズケーキ」

彼女の膝に小さな白い箱が乗っている。昼のデザートにするか、3時のおやつにするか、迷い所だ。

すると俺の腕にそっと彼女が触れた。予想外の接触にドキドキする。

「お返し、楽しみにしてます」

なんて心臓に悪い奴なんだ、コイツは…それだけのために腕を掴んだのか。
ドキドキして損した気分だ。

「えぇ？」

「二倍で良いですよ」

「は？」

『二倍で』って…何で二倍返しなんだよ、と心の中でつぶやく。
彼女が笑いながら喋り始めた。

「中には三倍返しを要求する子もいるんですよ？」

なんて恐ろしいんだ…今時の女性はそんなもんなんだろうか。

あれこれ考える俺をよそに彼女が爆笑する。

「嘘ですよ！お返しなんていりません。見返り欲しさに作ったんじゃないんですから」

優しい子だな、と思う。もとは無茶振りだったから結構迷惑を掛けただろう。わざわざ今日のために作り直してくれたんだから…。

「いや、俺からちゃんと何かお返しするよ。何が良い？」

そうですねー、と言って彼女が数秒黙り、そして口を開いた。

「私専用のカーナビになってください」

…え？

いくら運転に慣れているとはいえ、こんな意味深発言をされては運転が疎かになりそうだ。

情けないことに1コースの終点を通過してしまった。

―52―

彼の車はそれはそれは綺麗だった。車が大好きらしくて、手入れを入念にしているみたいだ。

いつもとは真逆で、彼が運転席に、私が助手席にいる。運転する彼の姿がスマートで、いつも以上にドキドキする。

「じゃあ今から1コース走るから頑張って覚えてね」

「はい」

頑張ってはみるけど、覚えれるかな…。ただでさえ脳内がショート寸前なのに、いつもでも覚えれない道を覚えろなんて無理な話だ。

赤信号で停車したとき、彼がこちらを見て話しかけて来た。

「あ、そういえばありがとね、チーズケーキ」

とりあえず何か言っておこうと思い、思い付いたままに行動した。

彼に強調するかのように腕に手を添える。

「お返し、楽しみにしてます」

「えぇ？」

期待通りの反応で何だか面白かった。普段私に話しかけてくる彼もこんな感じなんだろうかと思う。

「二倍で良いですよ」

「は？」

「中には三倍返しを要求する子もいるんですよ？」

彼が目を泳がせている。普段見ることの出来ないその様子についつい笑ってしまった。

「嘘ですよ！お返しなんていりません。見返り欲しさに作ったんじゃないんですから」

もともと彼に渡せたらな、と思いながら作った。だから本当に渡せるなんて有り難い話だ。

すると彼はちらっとこちらを向いた。

「いや、俺からちゃんと何かお返しするよ。何が良い？」

本当に?予想外の言葉に胸を躍らせてしまう。
今私が望んでいるものといえば…

「そうですねー…私専用のカーナビになってください」

言った後にはっとする。

これ、遠回しの告白じゃないか…。

思い付いたままに発言するという私の馬鹿さ加減に恥ずかしくなって来た。彼の顔が直視できない…。

―53―

何度か検定コースを走ったあと、車を下山まで走らせた。
次は…彼女の家から教習所、三國大それぞれだ。駅から近いという家に向かう。

「あ、ここです」

彼女が右手にある建物を指した。

「へー、何階？」

「2階です」

へえ、と言ったあと彼女のアパートの駐車場に車を停めた。

「よし」

「は？いやいや、早く大学に連れてい…」

俺が彼女の膝元にある箱を指差して言葉を制止した。

「小腹空いたし、それ食べようよ」

えーっと、と言って彼女は少し困惑していた。

「いや、家にあげろとは言わないからさ、とりあえず食べて良い？」

「あー…良いです…よ」

どう思われたのかはよくわからないが、とりあえずためらいがちに箱を開けた。

中に入っていたのはいかにも手作りな感じのチーズケーキ。何だか無性に嬉しくなる。

「おー、美味そう！
…あれ？」

よく見てみると2個のチーズケーキが仲良く並んでいた。

「あぁ、1個だと何か寂しかったんで、2個入れてみただけです。気にしないでください」

丁度良い。一人で食べるのを見られるのは何か恥ずかしいし、何より気が引ける。

「丁度2個あるし一緒に食べようよ」

「や、良いです良いです」

「もー、遠慮しなさんなって！」

絶対に受け取らないと確信した俺は、箱からケーキを取り出して彼女の目の前に差し出した。

「はい」

彼女は無言で抵抗したが、折れてくれたらしい。俺の手からケーキを取った。

その手はいつかのように小さく、冷たかった。

「よし。じゃあいただきます」

そう言ってケーキを口に運んだ。小さい割に厚みのあるケーキの味が口いっぱいに広がる。

「美味っ！香西さん上手いんだねぇ」

「そんなに褒めたって何もあげませんよ」

彼女が苦笑いしている。
お菓子でこんなに美味しく出来るんだから、普段の料理も間違いなく美味しいはずだ。

アパートを下から見上げた。2階のベランダには洗濯物が干してあった。
彼女はここで毎日美味しい料理を作り、洗濯物を干して、掃除もし

て、などと色んな事を想像する。
そしてまた思う。彼女と一緒にいる人は必ず幸せになるだろう、と。

「…何か…こんな奥さん欲しいよね」

「…え？」

彼女が怪訝そうな顔で振り向いた。
いつものように冗談で受け取ってくれないかと焦る。ここまできてドン引きされるのは嫌だ。

「いや、料理出来て、掃除もしてくれて…めっちゃ家庭的な人」

ああ、と言って彼女は笑った。助かったと思う。

「そんな人、たくさんいますよ。その上綺麗で、賢くて…」

そんな人は求めてない。
俺が求めているのは香西さん、ただ一人だ。

―54―

検定コース6の終点に着いたとき、彼から家まで案内して、と言われたが、方向オンチの私がわかるはずもなく…。
彼が横で笑っている。

「じゃあ下山駅まで行くから、駅から家まで案内してね」

もちろん車内では方向オンチネタでいじられ続けた。
駅を出発して一分もかかっただろうか、という頃に家が見えた。

「あ、ここです」

「へー、何階？」

「2階です」

「へえ」

今から発車かと思いきや、彼がいきなり駐車場に車を停め始めた。
今の状況に頭がついて来てくれない。

「よし」

「は？いやいや、早く大学に連れてい…」

彼がすっと私の膝元を指差した。そこにあるのは見なくともわかる、

昨日作り直したチーズケーキだ。

「小腹空いたし、それ食べようよ」

「えーっと…」

食べても良いんだけど…と思う。ただ感想を聞きたくない。本当はマズイのに「美味しいよ」と言われるのが一番辛い。

「いや、家にあげろとは言わないからさ、とりあえず食べて良い？」

自分の事でいっぱいいっぱいだったので食べる場所にまで頭が回らなかったが、それは置いといて、彼はとりあえずお腹が空いているらしい。

反応を見たくないから、とお預けにするのは可哀相だろうか。

「あー…良いです…よ」

無視だ、無視。彼がどんな反応をしようと関係ない。そう開き直って箱を開け、彼に差し出した。

「おー、美味そう！

…あれ？」

彼の人差し指が箱の上あたりで小さく旋回し始めた。その反応の原因には心当たりがある。

「あぁ、1個だと何か寂しかったんで、2個入れてみただけです。気にしないでください」

すると彼がぱっと顔を上げて私と目を合わせた。

「丁度2個あるし一緒に食べようよ」

何を言ってるんだろうか、この人は。遠回しに「こんなにいらない」と言っているのか…頭がぐるぐるする。

「や、良いです良いです」

「もー、遠慮しなさんなって！」

彼が箱からケーキを取り出して、私の目の前にずいっと差し出した。

「はい」

彼が真っすぐと私を見ている。私はアイコンタクトで『結構です』と送ったけど、それは全くと言っていいほど通用しなかった。きっと私が取るまでこの状況が続くのだろう。

埒が開かなくなったので、渋々彼の手から受け取った。

その手はいつかのように大きく、温かかった。

「よし。じゃあいただきます」

私はとりあえず彼の反応を見るまで静止していた。何を言われるかドキドキする。

「美味っ！香西さん上手いんだねぇ」

「そんなに褒めたって何もあげませんよ」

でも何だか嬉しかった。気持ちを込めて作った分、結果が現れたみたいだ。

素直に喜べない私はツンデレなのかもしれない。

ケーキを食べ終えた彼が窓の外を眺めながらぽつりと呟いた。

「…何か…こんな奥さん欲しいよね」

「…え？」

今、何て？『オクサン』って何？お嫁さんの事？

彼の意図が読めない。

「いや、料理出来て、掃除もしてくれて…めっちゃ家庭的な人」

「ああ…」

そんな事ね。私すぐにのぼせ上がるからダメなんだ、と自分に言い

聞かせた。

「そんな人、たくさんいますよ。その上綺麗で、賢くて…」

悲しくなって来た。私は料理上手くないし、その上可愛くも賢くもない。

彼の口から出た理想はまさに彼にはお似合いの女性像で、私には程遠い。

―55―

もう周りは次第に暗くなり始めた。

彼女の自宅から大学、教習所に何度か車を走らせた後、ある場所へ向かった。

「もうこれだけ行き来したんだから覚えたでしょ」

彼女は首を横に傾けたままわざとらしく窓の外を見た。

コイツ俺の努力を無駄にしやがって…。笑いが込み上げてくる。

「まー頑張りなさい」

「…はい」

彼女が縮こまっていく。見た目はしっかりしてるのに、ぼけっとしてる…いやいや、ちょっとばかり天然っぽいところが可愛い。

そしてある場所についた。どんな反応をされるか正直不安だ。

そう、彼女側に建っている建物は俺の住んでるアパートだ。

不安を紛らわすかのようにハンドブレーキをぐっと引いた。

「ここ、どこと思う?」

彼女がえぇ?と言ってきょろきょろする。心拍数が上がって来た。
ヤバイ、寿命縮まりそう…。
彼女がくるっと振り返ったとき、口から心臓が出てくるかと思った。
ええい、ままよ。

すると彼女は全くの予想外の言葉をぶつけて来た。

「えー…っと、吉…原?」

いや、地名を聞いたんではなく…。
あまりの可笑しさについつい笑ってしまう。普通こんな所で地名聞かないでしょ。しかも吉原じゃないし。

「俺の家」

彼女が耳まで真っ赤にした。

「そっちですか!てっきり地理を聞かれるんだと…」

「違います。建物を聞いたんです」

もう笑いが止まらない。
確信した。俺の人生の中で彼女に勝る人はいない、間違いなくだ。

「はー…やっぱ香西さんといると楽しいなぁ」

彼女はむぅ、と言って手で顔をぱたぱたと扇いでいる。その仕種までも可愛いと思う俺は底無し沼にはまっていく気分だった。もう彼女から抜け出せない。

「腹減ったし、晩飯食べに行こうよ。ご馳走する」

「いやいやいや！良いですよ！そんな私のわがままで検定コースとか走ってもらったのに…」

遠慮癖があるみたいだ。問答無用で車を発車させた。

「良いの。楽しかったし」

「でも…」

「あんまり言ってると地名もわからないここで降ろすよ？」

「ぐ…」

折れた。わかりやすいなぁと思う。彼女が俯いたまま喋らなくなった。

彼女のすべてが愛おしい。

笑顔も、ギャップも、方向オンチなところも、全部。

―56―

真冬に比べれば暗くなる時間は遅くなったが、まだ6時ちょっと過ぎだというのにもう暗い。

土地勘も方向感覚もないので、今どこにいて、どこに向かっているのかすらわからない。でもまあ…彼に任せておけば大丈夫だろうと思った。

彼は前を向いたまま話しかけて来た。

「もうこれだけ行き来したんだから覚えたでしょ」

努力はしてみた。それでも自信はあるかと、言われるとすぐに答えることは出来ない。

彼がいつものように爆笑している。

「まー頑張りなさい」

「…はい」

頑張らなきゃ…彼は今、指導員として付き合ってくれているから、これから先は一人で運転しなくてはいけない。いつまでも彼に頼ることなんて出来ないのだ。

しばらく他愛もない会話を続けていると、アパートの入口前で車が停まった。

「ここ、どこと思う?」

「えぇ?」

突然の彼の質問にパニックになる。どこ、ここ。
横にあるアパートや建物から地名を探そうとするが見つからない。

教習所、私の家、三國大の三ヵ所から推測して、何となく間を取ってみた。

「えー…っと、吉…原?」

数秒彼が固まった後、今までにないくらいの爆笑が起こった。
彼が一生懸命笑いを堪えようとしている。

「俺の家」

「そっちですか!てっきり地理を聞かれるんだと…」

恥ずかしい…何を勘違いしてたんだろう。
断言しなかっただけまだマシか、と思う。

「違います。建物を聞いたんです」

彼が一呼吸置くために軽く息を吐いた。

「はー…やっぱ香西さんといると楽しいなぁ」

「むぅ…」

顔が熱くなって来ているのがわかったのでぱたぱたと扇いでみるが、それはもちろん徒労だった。

まだ軽くパニックになっている私とは対照的に、彼は落ち着いて話し始めた。

技能指導の時のようなそれは大人の魅力を感じさせる。彼の背景が夜景なら、なおさら。

「腹減ったし、晩飯食べに行こうよ。ご馳走する」

『ご馳走』。これが最近苦手な単語だ。

おごるのは嫌いじゃないが、おごられるのは苦手だ…何だか申し訳ない気持ちになる。

「いやいやいや！良いですよ！そんな私のわがままで検定コースとか走ってもらったのに…」

私の意見なんか聞かない、とでも言いたげに、こちらを見向きもせずに車を発車させた。

「良いの。楽しかったし」

「でも…」

彼はちらっとこっちを見て、少し強引な口調で喋った。

「あんまり言ってると地名もわからないここで降ろすよ?」

「ぐ…」

卑怯だ。大人しくご馳走されろと言うことか。

横目で彼を見ると、心なしか楽しそうに運転していた。

…もう、何考えてるのかわかんないよ…。

―57―

あの日は本当に夢のような日だった。
食事をして、自宅まで車で送って…

『今日は楽しかったよ。ありがとね』

『いえ、こちらこそ…ありがとうございました』

『とんでもない。
また何かあったら連絡して』

『はい…』

思い返してみても恥ずかしい。
何かあるわけないじゃないか。彼女の事だから、たとえ検定直前なのに経路設計出来ないとしても、俺に頼ったりしないんだろう。
頼もしいような、寂しいような。

デートの数日後、彼女がウチに来ているのを見た。
俺はまたスクールバスの運転手になっていて、定時前に中にいる生徒にバス停を尋ね、運転席に回ろうとしていた時だった。
たとえ目が悪くても、遠く離れていてもわかる、彼女だった。

ショートボブの髪の毛を風になびかせ、すらりとした長身が教習車の運転席のドアに手をかけた。

そうか、今日は高速教習なんだ、と思う。

高速教習もまた指導員が選べない。だから彼女は今、俺の目の前にいるのだろう。

だが何か…後味が悪い。

彼女が担当指導員に見せている笑顔は俺だけのものだと思ってたのに。

話し掛けたい。そばに寄って、軽く頭を撫でて、久しぶりだねから会話を始めて…そんな事は出来るはずがない。

なす術もなくしばらく彼女を凝視していたが、スクールバスの発車時間になったので、慌てて運転席に乗り込む。

乗り込んでも、発車して車が見えなくなるまで彼女を見続けた。

そんな事があったなぁ、とふと思い出す。俺ってこんなに独占欲強かったっけ。

今日の5時から…つまり今から、香西さんの担当に当たる。先日の話や高速の話を中心に話すつもりだが、ボロが出ないようにしなく

ては…。

早まる気持ちを押さえ、いつも指導員室を出る時間になってからドアノブに手をかけた。

配車のそばに彼女が立っていた。

「こんにちは、運転席どうぞ」

「はい」

彼女は後部座席のドアを閉め、俺に歩み寄って教習原簿と仮免許証を渡した。

長身のうえにかかとが少し高い靴を履いているとはいえ、彼女の頭は俺の目線の高さほどしかない。

小春日和に恵まれた暖かさのせいで脱いだコートから現れたシルエットは、想像以上に華奢な身体だった。

彼女が髪を耳にかけながら笑顔を向けた。

「ね、私が来ても綺麗に晴れるでしょ？」

その姿にただただ見とれるしか出来ない。

「…そうだね」

―58―

あのあと結局大人しく食事をおごってもらい、厚かましいことに家まで送ってもらった。

『今日は楽しかったよ。ありがとね』
『いえ、こちらこそ…ありがとうございました』
『とんでもない。
また何かあったら連絡して』
『はい…』

…何かこう、恋人さながらみたいな感じだった。思い出しただけでも顔が火照る。

それにしても「何かあったら連絡を」と言われたものの、どうして良いかわからない。大体こういう時は社交辞令が多いから、実際連絡しても煙たがられたりするだろう。

話題を見つけようとして早10日は経っただろうか、今日彼の教習がある。

いつも彼に遅いと言われ続けている私が、ついに魔の高速教習をクリアしたのだ。
もっとも寿命はかなり縮まってしまったけど…。

そんな事は良いとして、彼に会うのはあのドライブ以来だ。恥ずかしいったらありゃしない。
メールで『明日行くので』か何かを送ってワンクッション置けば良かった、と後悔した。でも今更送るのはもっと恥ずかしい。
私って後先考えないタイプだな、と痛感した。

彼の姿が見えたとき、空を見上げた。まだ二月だというのに春のような暖かい日差しが差し込んでいる。澄んだ青い空が清々しさを感じさせた。

最近私が教習所へ行く時、ほとんどが悪天候だ。その度に彼から「あーあ、香西さんのせいだし」と言われ続ける。
大丈夫だ、快晴じゃないか。

彼が配車に到着したのがわかり、荷物積みを終わらせて後部座席のドアを閉めた。

「こんにちは、運転席どうぞ」

「はい」

ここ数回は車内ではなく、こんな風に車外で教習原簿と仮免許証を

渡す。

大体私が普段履いている靴で外出したとき、ほとんどの周りの男の人は私と同じくらいか少しだけ高い程度だ。

しかし彼は私よりもおそらく１０ｃｍくらい高い。靴を脱いだらもっと身長差があるんだろう。

制服のスーツを着こなし、爽やかな雰囲気を醸し出している彼は、何度見ても見慣れない存在だ。

春風で乱れた髪を直し、掻き上げた。

「ね、私が来ても綺麗に晴れるでしょ？」

「…そうだね」

彼はそう言ったあと、私と同時に天を仰いだ。

―59―

あのデートから少し感覚が空いてしまったせいか、お互いどことなくよそよそしい。

「この前はありがとね」

「いえ、こちらこそありがとうございました」

それから会話する事なく車が検定コースを走る。

こんなんじゃダメだ、せっかく距離が縮まって来てるのに。頭ではわかっているが、なかなか口が開かない。

彼女も黙々と運転していて、話し掛けて来る雰囲気はなかった。

一生懸命話題を探しながらバインダーを開く。すると小さなメモ用紙が目に入って来た。その右端には赤い文字で『Ａｖｅｃ　ａｍｏｕｒ・・・』と書いてある。

これは彼女が渡してくれたケーキの箱に入っていたもので、あの日からいつもバインダーに忍ばせているものだ。

ア…？とにかく、これを話題にする事で沈黙を破ることにした。

「ねぇ、バレンタインにくれたケーキの箱にメッセージカード入れてたでしょ？」

「あぁ、アベック　アムールですか？」

「あ、読み方そのまんまなんだ…とにかくさ、あれって何て意味？」

彼女が何故か苦笑している。

「えー、自分で考えてくださいよ」

何か今日の彼女はいつになくいじわるだ。

「わかるわけないじゃん、大学でやってたの中国語だし。ねえ、何？教えてよ」

彼女が小さくあー、と言ったあと、右折方向に顔を向けて言葉を放った。

「『愛してます』って意味です」

…は？

嘘だろ？こんな急な告白なんてアリなのか？

信じ難い状況に言葉が出ない。

「うそ、だろ…？」

すると赤信号のために車を停車させて、彼女がこっちを向いた。

「あ、よくわかりましたね」

がっくりきた。今までのときめきを返せ。
久しぶりに胸が苦しくなるような感覚になったっていうのに…彼女が意図しているものが全くわからない。

「フェイントかよ！
あーあ、暫く会わないうちにいじわるになったもんだねぇ」

彼女が横で爆笑している。いつもとは立場が逆な感じだ。

「まあまあ。でもあながち嘘でもないんですよ？」

正気か？と疑いたくなる。もちろん彼女が、ではなく俺が、だが。

「アムールっていうのは『愛』って意味です。で、アベックは『～と一緒に』って意味なんですよ」

つまり…

「愛と一緒に？」

意味がわからない。
彼女は前を向いたまま笑った。

「まあ直訳取ったらそうですよね。
『愛を込めて』って意味です」

なるほど、そういう意味か。

しかしよくよく考えてみれば…告白に取れなくもない。その『愛』が示しているものが明白ではないから何とも言いようがないが。

これは何だ、俺への好意と取って良いのか？

普段は指導員として余裕を持って指導してるのに、今日ばかりは無理そうだ。

―60―

車に乗ったは良いけど、会話がない。
私から話し掛けることがほとんどないため、彼の口から言葉が出てくるのを待つしかない。

「この前はありがとね」

「いえ、こちらこそありがとうございました」

これだけ。いつになく会話がない。
私は気恥ずかしさを感じているからなんだけど…彼はどうしていつものように話し掛けてくれないんだろう。

受け身の姿勢がいけないのかな、とか不思議な事を考えながら車を走らせる。

『女の人は受け身でも大丈夫だから良いよね…男はさ、行動しないと相手出来ないじゃん』
『…そうですか?』
『香西さん絶対受け身のタイプだね。わかる』

こんな会話があったのを思い出す。じゃあどうすれば良いんだ。
思考回路がショートする。

そんな私をよそに、彼がバインダーを開いた。数秒バインダーにある何かを見つめたあと、少しだけこちらを見て話し始めた。

「ねぇ、バレンタインにくれたケーキの箱にメッセージカード入れてたでしょ？」

「あぁ、＞＞Ａｖｅｃ　ａｍｏｕｒ＜＜ですか？」

「あ、読み方そのまんまなんだ…とにかくさ、あれって何て意味？」

「えー、自分で考えてくださいよ」

どんな珍解答が出てくるだろう。想像だに出来なくてついつい笑ってしまう。

「わかるわけないじゃん、大学でやってたの中国語だし。ねえ、何？教えてよ」

「あー…」

少し意地悪をしてみよう。どんな反応をするのかが気になる。

「『愛してます』って意味です」

彼がまるで錆びたロボットのような動きをしたあと、固まってしま

った。
目を泳がせて口をぱくぱくしている彼が可笑しくて、笑わないようにするのが精一杯だった。

「うそ、だろ…？」

もうやめよう、彼をいじめるのは。そう思って軽く笑った。

「あ、よくわかりましたね」

彼が思いっきり脱力したのがわかった。彼は姿勢を崩して小さくため息をついた。いつもと真逆の状況が可笑しくて可笑しくて、運転の真っ最中だというのに笑いが止まらない。

「フェイントかよ！
あーあ、暫く会わないうちにいじわるになったもんだねぇ」

「まあまあ。でもあながち嘘でもないんですよ？」

全然違うけど、とはあえて言わない。

「ａｍｏｕｒっていうのは『愛』って意味です。で、ａｖｅｃは『～と一緒に』って意味なんですよ」

「…てことは、愛と一緒に？」

見事な直訳だ。先生が言った単語の意味をそのまま使って、無理矢理訳す中学生みたいな彼があまりにも可笑しかった。

「まあ直訳取ったらそうですよね。
『愛を込めて』って意味です」

…ここまで言う人って絶対受け身タイプじゃないだろうと思う。
けど本意は伝わってないに違いない。伝わってたらむしろ冷や汗ものだ。

私は何度自分の首を絞めたら気が済むんだろう…やっぱり私はMなのかもしれない。

―61―

…決めた、今日はいつも以上にいじり倒してやる。

俺にはＳっ気があるんだなあ、なんて思いながら彼女を見る。今日からは自主経路設計だから、俺は進路指示を出していない。

…まあ実際他の生徒には助け舟を出してあげてるけど。

俺が指示を出さないせいもあって、彼女が泣きそうな顔をして運転している。

でもここは一つ、心を鬼にしなくてはいけない。意地悪とかではない、検定に合格するためには自分で設計させないと。

でも彼女に話し掛ける時にはその気持ちは皆無だ。

「前に走ったことあるし、いい加減覚えたでしょ」

彼女は苦笑いを浮かべるだけで、何も喋らなかった。要は覚えてないということだ。

「もー、この前わざわざドライブして走ったじゃん、ここ」

「…そうでしたね」

「ホントどんだけなんだよ」

「だから、」

来た。お約束の台詞。

「好きで覚えられないんじゃないんだよね」

「好きで覚えられないんじゃないんです」

彼女がわかってるんじゃん、とでも言いたげにちらっとこっちを見る。

「『好きで～じゃないんです』って香西さんの名言だよね」

『迷』言かもしれないけど、と思い、ついつい笑ってしまう。

「…バカにしてるでしょ…」

彼女が再び苦笑いしながら言った。

「いいえ、とんでもない」

ただ『可愛いと思ってます』とは言えない。

「ホント辛いんですよ、方向オンチって」

「またドライブ行く?」

「結構です」

おや、今日の彼女は何だかつれない。だが苦笑してる辺り、まだいじり続けることが出来そうだと確信した。

「方向オンチの香西さん、高速どうだった？怒られた？」

「いいえ…ってか基本私褒められるんですよ」

「何だ…残念」

「っ、何が…」

その瞬間、左折していた車がまさかの脱輪を起こした。S字カーブやクランク、駐車措置で脱輪する生徒はよく見るが、右左折での脱輪は教員生活初めてだ。

笑いを必死に堪えたが、無駄だった。

「おい仮免！」

「すっ、すみません！」

「もー、脱輪する生徒はよく見るけど、こんなとこで脱輪する人初めてよ？」

「私もです」

そりゃそうだろ、とツッコミたくなる。間違いない、誰も彼女には敵わない。

少し動揺している彼女を横目に笑いながら話しかけた。

「まぁまだ教習所に帰って来てたから良かったけどね。路上でするなよ」

「…はい」

今日の教習がおかしい形で終わった。

―62―

今日は彼にいじわるし過ぎたんだろうか。

彼がいつも以上にＳっ気を出している。私が道を覚えてないことなんてわかってるくせに、何も言ってくれない。

…確かに目前に迫っている卒業検定では自力で運転しなきゃだけど…。

彼は私の不安な様子に気付いてだろうか、いつものように笑いながら話しかけて来た。

「前に走ったことあるし、いい加減覚えたでしょ」

わかってるくせに、覚えてないこと。苦笑いを浮かべることしか出来ない。

「もー、この前わざわざドライブして走ったじゃん、ここ」

「…そうでしたね」

「ホントどんだけなんだよ」

軽くため息をついた。

「だから、」

「好きで覚えられないんじゃないんだよね」
「好きで覚えられないんじゃないんです」

わかってるんじゃん。私は最後の最後までいじり倒されるのだろう。

彼は悪びれる様子もなく笑っている。

「『好きで～じゃないんです』って香西さんの名言だよね」

「…バカにしてるでしょ…」

「いいえ、とんでもない」

嘘だ、絶対バカにしてる。
彼みたいに地理に長けている人には、私みたいな方向オンチの苦労なんて伝わらない。

「ホント辛いんですよ、方向オンチって」

「またドライブ行く?」

少しドキッとしたが、どうせからかわれているだけだと思って軽く流した。

「結構です」

すると彼はまだいじり足りないのか、また話しかけて来た。

「方向オンチの香西さん、高速どうだった?怒られた?」

怒られた前提?何かおかしくなってくる。

「いいえ…ってか基本私褒められるんですよ」

「何だ…残念」

「っ、何が…」

どういう意味ですか!

そう言おうとした矢先、車が左に傾いた。

…どうやら脱輪してしまったらしい。

アクセルを踏んで脱出したが、正直かなり焦った。教習時間も終わりに近く、教習所内を走っていたので、助かったといえば助かったが。

一瞬車内に沈黙が流れた後、彼が大爆笑した。

「おい仮免!」

「すっ、すみません!」

彼が目元に手をあてた。笑いすぎて涙が出て来たんだろうか。

「もー、脱輪する生徒はよく見るけど、こんなとこで脱輪する人初めてよ？」

確かに…入校して来たばかりの生徒さんを見ても、右左折で脱輪する人は見たことがない。

恥ずかしさで顔が熱くなるのがわかる。

「私もです」

彼は軽く息を吐いたけど、彼の笑いが暫く止まる様子はない。

「まぁまだ教習所に帰って来てたから良かったけどね。路上でするなよ」

「…はい」

私、何て思われたんだろう…。穴があったら入りたいくらいだ。

―63―

気が重い。

今日も彼女の担当だ。

今まで以上に親密になってるし、会話もずっと続いてるから教習自体は楽しい。

楽しいけど…ついに彼女と過ごす時間に終わりが見えて来てしまったのだ。

配車に行くと、彼女が空を見上げていた。最近はこのスタイルが多い。

「こんにちは、運転席どうぞ」

「あ、はい」

彼女が笑顔で教習原簿と仮免許証を渡して来た。いつもと雰囲気が違って見えるのは、髪を結び、イヤリングをしているからだろう。

小走りで俺の横を通過して運転席へ向かう。ふんわりとした甘い香りがした。

…妙にドキドキする。

少し遅れを取って助手席に座り、彼女にキーを渡す。

「はい」

「あ、ありがとうございます」

彼女はキーを受け取ると同時に髪をほどいた。再び甘い香りがする。さらさらした漆黒のそれは美しい以外の何ものでもない。

…それともう一つ。彼女が珍しくスカートを穿いている。しかも結構短い。

「…香西さんがスカートなんて珍しいね」

「そうですか？」

少なくとも俺の記憶にある限りだと、いつもパンツスタイルだ。

「香西さんがスカートなんて珍しいよね」

「そうでもないですよ？」

「あ、そう？何か俺のイメージではいっつもズボンなんだけど」

「はー…そうですか？結構穿いてますけどね」

穿いてたとしても、こんな姿見たことがない。
丈は短く、模様の入っている灰色のタイツの下からは肌が覗いていた。
何と言うか…その、こう、そそられてしまう。

「パンツ見えてるよ」

俺のその言葉に彼女は苦笑した。

「嘘でしょ」

慌てふためく様子もなく、彼女はあっさり答えた。絶対の自信があるみたいだ。

俺は彼女と一緒に笑ったが、内心かなりホッとした。
下ネタともセクハラとも取れ、最悪嫌われるところだったからだ。

いつもよりなまめかしい彼女にペースを乱されないよう、いつものようにいじってみた。

「お姉ちゃんからこき使われてる香西さん」

彼女が軽く笑った。

「こき使われてるっていうか…『ごめんごめーん、やろうと思ってるんだけど』って感じですよ。マイペースなんです」

「いや、俺はお姉ちゃんが一枚上手だと思うね」

ん？と彼女が尋ねて来た。

「だからさ、香西さんが全部やってくれるって見越してるからやってないんだよ、マイペースにかこつけて」

「あぁー…そっかぁ、そうなのか…」

赤信号のため車を停車させ、やられた、という風な顔をしている彼女を眺め、教習原簿の写真に目をやった。何だか写真と別人に見える。

俺の横にいる香西さんは大人っぽいけどふんわりとした雰囲気を出している。が、写真の彼女はきりっとしていて、言い方が悪いが何だか刺がある感じがする。

「香西さんこの写真と別人に見えるね」

すると彼女はあー、と言った。どうやらこの写真を気に入ってないらしい。

「私すっごい写真写り悪いんですよね」

気分を害してしまっただろうか。慌てて否定する。

「そんな事ないよ」

「だから私写真嫌いなんですよ」

「そうなの？」

せっかく可愛いのに…と思う。

その何もかもを優しく包んでくれそうな笑顔で写ったら…見ているこっちまで心が温かくなるだろう。

可愛らしさ、上品さ、賢明さ、全てを兼ね備えた彼女はまさに、

「薫お嬢様」

はあ、と彼女が言った。苦笑いを浮かべている。

これだ。さらに距離を縮める方法。さりげなく名前を呼べる方法。

胸の中に愛しさが溢れる。

「方向オンチの薫さま」

―64―

今日が17回目の教習。

つまり、今日を含めてあと3回で二段階が終了する。あくまでも上手く行けば、の話だけど。

失敗して補講になって、彼といる時間が長くなったら良いな、なんて馬鹿げたことを考える。彼にとっては良い迷惑な話だろう。

配車に向かい、荷物を積んで空を見上げた。今朝は天気が悪かったけど、今では青空が広がっている。

まだかすかに残る鉛色の雲が少し残念な感じだった。

「こんにちは、運転席どうぞ」

彼が笑顔で私のそばにやって来た。普通に笑えば良いものを、何故だかにやけてしまって顔を上げることが出来ない。

「あ、はい」

教習原簿と仮免許証を渡し、小走りで運転席へ向かった。彼が車の後ろの仮免表示板をチェックしている間に運転の準備を済ませる。

「はい」

彼が少しあとから助手席に座り、キーを手渡してくれた。発車直前はいつもこんな感じだ。
ここ最近彼は白手袋をはめておらず、キーを受け取ったときに触れる指が温かくて何だか落ち着く。

「あ、ありがとうございます」

とりあえずエンジンをかけてみたが、どうしたんだろう…彼の落ち着きがない。そわそわしているというか…

彼が少しだけこっちを向いて話しかけて来た。

「…香西さんがスカートなんて珍しいね」

「そうですか？」

彼の教習の時何度か穿いている。そう珍しいことでもないけどな、と思った。

が、彼にとっては物珍しかったのか、再び同じ言葉を口にした。

「香西さんがスカートなんて珍しいよね」

似合ってないのかな、なんて考えながら車を発車させた。

「そうでもないですよ？」

「あ、そう？何か俺のイメージではいっつもズボンなんだけど」

「はー…そうですか？結構穿いてますけどね」

確かに最近は寒くてズボンが多かった。でもスカートとの比率は半々な感じだ。

すると間髪入れずに予想外の言葉を口にした。

「パンツ見えてるよ」

「嘘でしょ」

思わず苦笑した。冗談っぽい口調からそれが嘘なんてわかりきっている。

でも内心かなり焦った。もしホントだったら…路側帯横断のために一旦停止したとき、さりげなく膝元を見た。

…良かった、大丈夫だ。

それにしても彼にしては珍しい内容だな、と思った。いや、これが本性か？

男は狼だ、なんて聞いたことがあるけど、もしそうだとしたら距離が縮まって来ているということなんだろうか。

訳がわからなくなって来ているところで彼が話しかけて来た。

「お姉ちゃんからこき使われてる香西さん」

とりあえず笑ってみたが、お姉ちゃんがホントに古野ドライビングに通いそうなので、きちんと誤認識を改める。

「こき使われてるっていうか…『ごめんごめーん、やろうと思ってるんだけど』って感じですよ。マイペースなんです」

すると彼は軽くため息をついた。

「いや、俺はお姉ちゃんが一枚上手だと思うね」

「ん？」

「だからさ、香西さんが全部やってくれるって見越してるからやってないんだよ、マイペースにかこつけて」

「あぁー…そっかぁ、そうなのか…」

そんな気がせんでもない。してやられた…。

すると彼は何を思ったのか、教習原簿をじーっと見ていた。

「香西さんこの写真と別人に見えるね」

「あー…私すっごい写真写り悪いんですよね」

特にそれ、最悪。

部活の合宿の翌日が入校式で、疲れが取れてない身体を引きずって教習所へ行った。
普段特に化粧をしてる訳じゃないが、その頃は眉が薄く、それなのに書き忘れたため、写真を見たとき愕然とした。
これが免許証の写真になるなんて…！

彼はいつもと違って、笑う事なくそれを否定した。

「そんな事ないよ」

そう言ってもらえたことは嬉しかったが、その写真をまだまじまじと見られているのがこの上なく恥ずかしい。

「だから私写真嫌いなんですよ」

「そうなの？」

元がそんなに可愛い訳じゃないから、写真写りが悪いなんてもう最悪。

「写真撮らないの？」

「いや、部活とかバイトとかで撮られますけど…」

「へー…薫お嬢様」

「はあ…」

苦笑いしか出てこない。何でお嬢様？しかも突然。私、そんなのとは掛け離れてる庶民なのに…。

「方向オンチの薫さま」

彼が再び『名前』を呼んだ。いつになく胸が温かくなるのがわかった。

―65―

いつにないペースでどんどん会話を続ける。

「こき使われてる薫さま」

彼女は前を向いたまま笑っている。

下の名前を呼びだしてから、いつも以上に親密になって来た気がする。

そのせいか、時折ふらついたりした時、手助けはしないと決めていたのに、ついつい横からハンドル修正をしてあげてしまう。

…彼女にはめっきり弱いみたいだ。

「こき使われてんのにさま付けって凄いよね」

「ホントですよ」

「で、方向オンチの薫さまは道覚えたの？」

彼女が軽く笑う。答えなんて聞かなくてもわかる。

ついふっと笑ってしまう。

「どうせわかんないんでしょ。香西さんさ、めっちゃ頭良いのにぼ

けっとしてるよね」

「何を…」

そう言いつつも彼女は笑っている。

「でも友達にもギャップが凄いねって言われます。『しっかりしてそうなのに天然だよねー』って」

「天然っていうか考えが行動に伴ってないっていうか…実は何も考えてないでしょ？」

「失礼な！」

彼女が笑いながら反論してくる。

「何か俺、結構香西さんにひどい事言ってるよね」

一応自覚はある。他の女性にこんなに言ったことはない。

「ホントですよ、もー…」

だって仕方ないじゃないか。好きな子ほどいじめたくなるって言うし。

…俺はガキか。

「香西さんいじられキャラでしょ」

「そんな事ないですよ？」

右折待ちの彼女がちらっとこちらを向いた。

「友達に『教習所どう？』って聞かれたから『こうだよー』って話したら、『そんなにいじられるなんて珍しいよね』って」

「…あ、俺？」

会えないときでも話題にしてくれてるんだ、と思う。もしかしたらそれは悪口かもしれないけど…彼女に限ってそれはない。

「そうですよ」

「俺いじってないし」

「あ、そうなんですか？じゃあ今までのは気のせい？」

「うん、気のせい気のせい」

「へー、そっかー」

何か良い雰囲気になって来たところで、残念ながら5コースの終点に着いた。会話を中断せざるを得ない。

「はい、じゃあ安全な場所に駐車してください」

駐車措置を終えた後、彼女に検定の時の合図を出す。

「エンジン切って、車から下りて後ろの人と交代ね」

「はい」

確かに今日はただの教習だけど…一応模擬的にやっている。
それを知らないでか彼女には動く気配が全くない。

「いや、下りろよ！」

「あっ、はい！」

彼女が慌てて車から下りた。もー…この子は。笑いが止まらない。
彼女に勝てる人なんて俺の前には現れないだろう。きっと、一生。

小走りで車を一周し、再び戻って来てから発車措置を行う。
が、肝心な事もせずにシートベルトを着けようとしていた。

実は、彼女が車から離れてる隙にルームミラーをいじったのだ。

「ちょっと、何か忘れてない？」

彼女が不思議そうな顔をしてきょろきょろし、えーっと、と呟いた。

「これでしょうが」

「はぁ！」

彼女は俺が指差したルームミラーを見つめ、右手で口を覆った。

「ほら、後ろの車が見えるように調整して」

「はい…あ、れ？あれ？」

彼女がルームミラーに手をかけたまま動かなくなった。

「え？何？」

「いや、あれ？今…あれ？」

暫くこの状態が続き、結局俺がルームミラーを訂正してあげた。

「ホラ。どこで手間取るのさ」

「あ、あぁ…」

急いで発車措置を終えてエンジンをかけた。

…大丈夫だろうか。せめて検定試験は一発で合格させてあげたいのだが。

―66―

彼が私を『薫さま』と呼ぶ意図がわからない。何か変に意識してしまって、運転に集中出来ないじゃないか…。

「こき使われてる薫さま」

その言葉には苦笑するしかない。

ただ名前を呼ばれているだけに過ぎない。が、何だかふわふわした気分になって、運転が疎かになりそう…というかなって来ている気がする。今日は横からのハンドル修正がかなり多い。

彼は私の気持ちに全く気付く事なく、笑いながら話し始めた。

「こき使われてんのにさま付けって凄いよね」

「ホントですよ」

何だかため息まで出て来そうだった。

「で、方向オンチの薫さまは道覚えたの?」

軽く笑った。答えなんて聞かなくてもわかるでしょう。

彼は悟ってくれたのか、少し肩を震わせた。

「どうせわかんないんでしょ。香西さんさ、めっちゃ頭良いのにぼ

けっとしてるよね」

「何を…」

『天然だよね』とかは何か可愛いイメージがあるが…『ぼけっとしてる』はナシだろう、と突っ込みたくなる。

「でも友達にもギャップが凄いねって言われます。『しっかりしてそうなのに天然だよねー』って」

「天然っていうか考えが行動に伴ってないっていうか…実は何も考えてないでしょ？」

つまり今までの発言から、彼は私を天然だとは思っていない。実際彼は以前『香西さんは天然じゃないよ』と言っていた。

「失礼な！」

彼が笑ったあと軽く息をついて話し始めた。

「何か俺、結構香西さんにひどい事言ってるよね」

一応自覚はあるんだ。どうやら彼にはホントにＳっ気があるらしい。

「ホントですよ、もー…」

「香西さんいじられキャラでしょ」

「そんな事ないですよ？

友達に『教習所どう？』って聞かれたから『こうだよー』って話したら、『そんなにいじられるなんて珍しいよね』って」

「…あ、俺？」

アンタ以外に誰がいる、と言いたくなったが、そこは我慢しておこう。

「そうですよ」

「俺いじってないし」

嘘だ。『だって香西さんいじりやすいんだもん』ってこの前言ってたじゃないか。

だから二人とも変なノリで会話が進む。

「あ、そうなんですか？じゃあ今までのは気のせい？」

「うん、気のせい気のせい」

「へー、そっかー」

はい、嘘。彼は私をいじってると思ってるし、私は彼からいじられてると思っている。

さっきの会話とは打って変わって終点に着いたらしく、指示が出た。

「はい、じゃあ安全な場所に駐車してください」

ここ終点なんだ、と思いつつ駐車措置をする。

「エンジン切って、車から下りて後ろの人と交代ね」

「はい」

検定の時の指示が出た。目前に卒業検定を控えた今、覚えなきゃいけないことが色々ある。

そんな意気込んでいる私とは裏腹に、彼が笑い出した。

「いや、下りろよ！」

今再現の最中だと気付き、かなり焦った。慌てて下車する。

「あっ、はい！」

ぐるっと車を一周し、助手席を通りすぎようとした時、彼が窓から顔を覗かせた。

「じゃあ運転席に戻って来て」

「はい」

運転席に座って発車措置をする。座席良し、ロック良し、さあシートベルトを着けようとした時に、彼からストップがかかった。

「ちょっと、何か忘れてない？」

周りを見回してみる。危険なものは特にない。キーも刺さってるし…左右もきちんと確認済みだ。

「えーっと…」

彼は笑いながら前を指差した。

「これでしょうが」

「はぁ！」

気付かなかった。いつの間にルームミラーが手をつけられていた。彼がせかすような口調で喋る。

「ほら、後ろの車が見えるように調整して」

「はい…あ、れ？あれ？」

ルームミラーに手をかけて修正しようとした時、異変に気付いた。後部座席の背もたれしか見えない。

「え？何？」

「いや、あれ？今…あれ？」

確かに左右は動かせるが、さすがに上下には動かせないだろう。いや、動かせるもんなんだろうか。

すると彼が呆れたように手を伸ばし、ルームミラーを右に向けた。

「ホラ。どこで手間取るのさ」

「あ、あぁ…」

なんだ、左右に動かすだけで見える角度が変わって来るんだ…。文系の私の頭にはなかなか入り難い内容だ。

―67―

光陰矢の如しとはまさに俺のためにあるようなものかもしれない。
今日の教習もあと半分を切り、今日が終わってしまえば残すところあと2回になってしまう。

「一つ聞いていい？」
彼女がん？と尋ねた。
「どうやったら道に迷うの？」
「は？だから…」
「あ、好きで迷ってるんじゃなかったね」
彼女が横でむぅ、と唸る。
「方向オンチの薫さま」

いつもの雰囲気で何ですか、と返してくれるかと思いきや、彼女からの返事はなかった。代わりに、別の話が始まった。

「もう、最近夢にまで出て来るんですよ」
「マジで？」

「私は助手席に座ってるんですけど…地図とにらめっこしてて、『今どこ？』って聞かれてもわかんなくて地図くるくる回してて、『もー、香西さーん！』って言われるんです」

黙って耳を傾ける。主語こそ省かれているが、彼女の夢での話し相手はおそらく俺だろう。

「で、目が覚めたら涙が止まらなくなっちゃって」

「いじめられすぎて？」

笑ってる俺とは対照的に、彼女が少し悲しそうな顔をした。こんな彼女の顔を見るのは初めてだ。

「いや…多分心のよりどころを求めてたんでしょうね。最近バイト漬けだったし。

自惚れてるかもですけど、私って結構周りに頼りにして貰ってて、相談されたり愚痴聞いたりするんですよ」

何となくわかる。そして彼女の性格上、そんな人達は放っておけない。

「で、結局私は誰にも愚痴言えなくて…お姉ちゃんにも。ストレスを溜めてるつもりとか全然なかったんですけどね」

そうは言うが彼女の事だ、抑えて抑えて溜めてないフリを続けていたに違いない。

「でも…結構年上の人って私が求めている言葉をくれるんですよ。

『頑張りすぎだから、周りの期待とか全部捨てて一つの事だけに集中してみたら?』とかね。それを聞いたらすごく救われた気分になる…だからきっと、私は一生年上の男の人と一緒じゃないとダメなんだろうなー、って。2、3コ上とかじゃなくて、近くても6上とか」

少しドキッとした。彼女の求めている答えを果たして俺が与えることが出来るだろうか。

だが、条件として俺は一応ピッタリだ。そして俺は彼女自身を求めている。

「でもそういう人との出会いってないんですよね」

この彼女の言葉に答えるのに時間はかからなかった。

「いるじゃん」

「え?どこに?」

赤信号で停車させてちらっとこちらを見た。

「ここに」

多少の恥ずかしさはあったが、ここで食い下がっては男の名が廃る。

「俺的には香西さんみたいに賢くて、でもぼけっとしてて、いつも

笑顔で面白い人好みだけど」

彼女が軽く笑った。

「あんまり言ってると本気にしますよ？」

今度は俺が笑わなかった。

「良いよ」

その瞬間、彼女が青信号に変わってアクセルを踏んでいた足を緩めたのがわかった。

「ほら、５０キロまで出して」

「…はい」

暫く沈黙が続いたが、俺が話した以上俺が破らなくてはと思う。

「一応お互いの利害は一致してるよね」

「まぁ…そうですね」

彼女は前を向いたまま答えた。

まだ教習は残っている。だがこのチャンスを逃してどうするんだ。

「香西さんの求める答えを出してあげられないかもしれないけど…いつでもちゃんと受け止めるからさ」

彼女は何も答えない。少し顔に朱がさして来た気がする、彼女の頬がほんのり赤い。

「ねえ、付き合ってみない？」

彼女は頷いたような首を傾げたような曖昧な返事をした。

―68―

悲しいくらい時間が早く進んでいく。私が彼と過ごせる時間は徐々になくなって来た。

「一つ聞いていい？」

「ん？」

「どうやったら道に迷うの？」

意地悪過ぎるだろう、と思う。卒業が見えて来るにつれて、彼のＳっ気が増して来ている気がする。

「は？だから…」

「あ、好きで迷ってるんじゃなかったね」

「むぅ…」

彼は横で笑っている。最初の頃は軽く笑う程度が多かったが、最近ではめっきり大爆笑が多い。

「方向オンチの薫さま」

よく見るこの風景。それは現実だけでなく、夢にまで出てくる風景だ。

「もう、最近夢にまで出て来るんですよ」

「マジで？」

彼が再び笑っている。

「私は助手席に座ってるんですけど…地図とにらめっこしてて、『今どこ？』って聞かれてもわかんなくて地図くるくる回してて、『もー、香西さーん！』って言われるんです」

彼は前を見たまま聞いていた。

「で、目が覚めたら涙が止まらなくなっちゃって」

「いじめられすぎて？」

「いや…多分心のよりどころを求めてたんでしょうね。最近バイト漬けだったし」

どこまで話そうか迷いつつ、とりあえず一連の流れを説明する。

「自惚れてるかもですけど、私って結構周りに頼りにして貰ってて、相談されたり愚痴聞いたりするんですよ。

で、結局私は誰にも愚痴言えなくて…お姉ちゃんにも。ストレスを溜めてるつもりとか全然なかったんですけどね」

目の前にあの夢の光景が広がる。
『大丈夫だよ、俺がついてるから』。夢で彼はそう言って頭を撫でてくれた。

「でも…結構年上の人って私が求めている言葉をくれるんですよ。『頑張りすぎだから、周りの期待とか全部捨てて一つの事だけに集中してみたら?』とかね。それを聞いたらすごく救われた気分になる…だからきっと、私は一生年上の男の人と一緒じゃないとダメなんだろうなー、って。2、3コ上とかじゃなくて、近くても6上とか…でもそういう人との出会いってないんですよね」

言った後に後悔した。何でこんな事赤裸々に話したんだろう…。最悪彼に気があるのがモロバレだし、しかも男に飢えてると取られたらもうおしまいだ。

しかし彼の口から出て来た言葉は、想定外のものだった。

「いるじゃん」

「え?どこに?」

「ここに」

思考回路が停止した。ここには私と彼以外誰もいない。
つまり…何を言っているの?彼の顔を見たいけど、運転中なのでそ

れは出来ない。

「俺的には香西さんみたいに賢くて、でもぼけっとしてて、いつも笑顔で面白い人好みだけど」

ダメだ、本気にしてはダメなんだ。そう言って笑いながら軽く流す。こういうのは8割方お世辞なのだ。

「あんまり言ってると本気にしますよ?」

彼は明らかにこっちを向いて、普段とは違うトーンで答えた。

「良いよ」

何、言ってるの…?今この状況に頭が追い付かない。

「ほら、50キロまで出して」

「…はい」

少し慌ててアクセルを踏んだが、今のやり取りで頭がいっぱいで、不謹慎ながら速度維持とかそれどころじゃない。

彼がそれに追い撃ちをかけるかのように口を開けた。

「一応お互いの利害は一致してるよね」

「まぁ…そうですね」

『一応利害は一致』って…と思う。つまり仕方なくって事？

彼の言葉に一喜一憂してばっかりで、せっかくの検定コースが全く頭に入らない。

「香西さんの求める答えを出してあげられないかもしれないけど…」

これはこの前の夢の続き？もう訳がわからない。

そんな私をよそに彼は言葉を続けた。

「いつでもちゃんと受け止めるからさ…ねえ、付き合ってみない？」

この状況に私の頭だけが取り残されている。

付き合うって、どこに？いやいや、カレシカノジョの間柄になるということだ。

―69―

教習は残り5分を切った。今日、今に限ってこの5分が長い。

やっぱり状況的に俺が沈黙を破るしかない。

「じゃああと5分あるから縦列駐車ね」

「はい」

その返事で、初めての教習を思い出した。

彼女は緊張気味でハンドルを握り、最初の方は『はい』しか言わなかった。

今ではもうこんな関係になってるなんて、あの時誰が想像しただろうか。

彼女はバックするのに丁度良い位置に車を停めた。が、レンジをRに入れたまま動く気配がない。

「ちょっと。早くしてよ」

腕を軽く叩いた。彼女はというと、右手を頬にあてて考え事をして

いる。

「えっと、えっと」

「縦列駐車です。はい、どうぞ」

彼女がやっとハンドルを切ったが半分しか切っておらず、それはまた別の駐車方法だった。

「縦列駐車ですけど！全部切りなさいよ」

「あっ、はい！」

大丈夫だ。

彼女の運転技術ではなく、俺達の関係が。

いつもみたいに面白おかしく事が進む。これから先、この状態が崩れることはきっとないだろう。

俺はいつものように笑い、彼女を見つめた。

「香西さん、起きてる？」

「起きてますよ！」

初めてと言って良いほど至近距離で目が合った。何だか吸い寄せられてしまいそうだ。

再び前を向いて笑った。

「短期間で忘れる香西さん」

「覚えてます！」

「はー…やっぱ香西さんといると面白いわ」

「春先だからね、頭がぼーっとするんです」

「春先だからじゃなくて常にでしょ？」

「ひどっ！」

笑いながら駐車場へと戻った。この状況になって振り返ってみれば、5分なんてかなり短い。

「はい、ハンドル貸して」

この時いつも彼女は手を挙げたまま止まる。その仕種が可愛くて可愛くて仕方がない。

こんな事言ってたら惚気だとか言われるんだろうな、と自虐的なことを考える。

「はい、じゃあ駐車措置して」

「はい」

何もなかったかのように駐車措置を終え、最後の教習の指示を出した。

教習原簿に印鑑を押そうとしている時、彼女が体をこっちに傾けて覗き込んで来た。大人っぽい彼女だが、まだ所々にあどけなさが残っている。

「原簿まだ使う?」

「いや、今日はこれだけです」

「はーい、じゃあお疲れさまでした」

そしてふと思い出した。返事が中途半端だったことを。

彼女が運転席のドアを開けたので、慌てて引き止めた。

「ちょ…待った!」

彼女もさっきまでの出来事を忘れたかのように、え?と言って振り返った。

「あのさ、さっきの返事まだちゃんと貰ってないんだけど」

「さっきの?」

少し首を傾けたあと、思い出したのか彼女の顔が少しだけ赤くなった。

「後悔しないですか？」

彼女から言われた言葉は意外なものだった。誰が後悔なんてするもんか。

「しないしない。するわけがないじゃん」

「ホントに？料理上手くないし、掃除下手だし、頭悪いし…そんなので良いんですか？」

最後の方は切実そうに訴えかけて来た。彼女はどちらかというと謙遜するタイプみたいだし、もしそうだとしても彼女とならやっていける自信があった。

「そんなので良いって言うか…むしろおっさんで良いの？」

「まだ若いでしょ」

脱線しそうになるのを抑えて話を続ける。

「ともあれさ、返事は今じゃなくて良いから、真剣に考えてもらって良い？」

「だから、返事ならしたじゃないですか」

「え？いつ？」

「運転中」

そうか、あれはＯＫサインだったんだ。
嬉しさが込み上げてくる。俺と彼女の間に『繋がり』が出来たという事だ。

と嬉しいのもつかの間、彼女がまた外に出ようとした。

「っ、かお…」

「次の教習、始まっちゃいますよ?」

彼女がいたずらっぽく笑った。

電話しよう、いつかのように家に帰ってすぐ。

―70―

あと5分、どうしよう。
あの後から教習所に戻って来ても沈黙が続いている。私は運転するのが精一杯で、他の事なんて気にかけている暇はない。

と言いたいところだが、さっきからずっと考え事ばかりしている。これは夢だろうか？彼は本気で言ってるんだろうか？
頭からぐるるる、と音が聞こえて来そうだ。

「じゃああと5分あるから縦列駐車ね」

「はい」

それ以外なんて喋れなかった。
言われるがままに車を停め、バックさせようとした。

準備をしたは良いが、パニックになってるせいもあってハンドルを切る方向と量をど忘れてしまった。

「ちょっと。早くしてよ」

彼が腕を軽く叩いた。せかす口調にますます焦ってくる。

「えっと、えっと」

「縦列駐車です。はい、どうぞ」

とりあえず思い付いたままにハンドルを切ったが、当たり前というか何というか、見事に間違っていた。

「縦列駐車ですけど！全部切りなさいよ」

「あっ、はい！」

いつもの雰囲気に戻った。何だ、お互い照れ臭かっただけか。

そう思う自分に気付き、はっと我に返った。さっきのが罰ゲームだったらどうするんだ。

訳のわからない事を考えてるなんて知らない彼は、笑いながら話しかけて来た。

「香西さん、起きてる？」

「起きてますよ！」

どこに教習中に居眠り運転する奴がいるんだ。もしかしたらちゃんと話を聞いてないとか思われたのかもしれない。

彼は笑い上戸だ、と思わせるくらいに笑っていた。

「短期間で忘れる香西さん」

「覚えてます！」

「はー…やっぱ香西さんといると面白いわ」

「春先だからね、頭がぼーっとするんです」

「春先だからじゃなくて常にでしょ？」

「ひどっ！」

駐車場へ戻る指示を受けて素直に戻るが、最近の彼はそこまで言うか、と言いたくなるほどずばずばと言ってくる。

そんな彼はSで、あまり嫌だと思わない私はMなんだろう。

「はい、ハンドル貸して」

ハンドルからパッと手を離すと、彼が横から手際よくハンドル操作をした。

見とれるのがばれないように、いつもわざとらしくハンドルか外しか見ない。

「はい、じゃあ駐車措置して」

「はい」

彼に負けじと手際よく駐車措置を終え、次の教習の指示を受けた。

彼が教習原簿に印鑑を押そうとしているのを覗き込む。何とか自主経路設計は合格できたみたいで一安心した。

「原簿まだ使う？」

「いや、今日はこれだけです」

「はーい、じゃあお疲れさまでした」

今日の予定も終わったし、帰ろうと思ってドアに手をかけた時、後ろから引き止められた。

「ちょ…待った！」

「え？」

「あのさ、さっきの返事まだちゃんと貰ってないんだけど」

「さっきの？」

記憶をさかのぼる。思い当たるのはもうアレしかない。

思い切って話をしてみた。

「後悔しないですか？」

彼は少しびっくりした顔をしたけど、即座に答えた。

「しないしない。するわけがないじゃん」

「ホントに？料理上手くないし、掃除下手だし、頭悪いし…そんなので良いんですか？」

愛想尽かされて捨てられるのがオチな気がする。
そんな私をよそに、彼は逆に私に質問して来た。

「そんなので良いって言うか…むしろおっさんで良いの？」

「まだ若いでしょ」

笑いながら答えた。その歳でおっさんなんて早過ぎるだろう。彼におじさん臭さはなく、むしろ男の魅力しか感じない。

「ともあれさ、返事は今じゃなくて良いから、真剣に考えてもらって良い？」

…あれ？
多分彼にとってさっきの反応はどっちつかずだったんだろう。実際曖昧な返事をしてしまったし。

「だから、返事ならしたじゃないですか」

「え？いつ？」

「運転中」

彼が小さくあ、と言った。やっぱりはっきりと答えるべきだったと後悔した。

次の時間に教習が入っている生徒さんが動き出したので、車から出ようとした。しかしその時、またもや後ろから引き止められた。

「っ、かお…」

「次の教習、始まっちゃいますよ?」

くるっと振り返って答える。

彼の言葉の続きは『が変』とかじゃなくて、私の名前の『る』だっただろう。もしかしたら『さま』が付いてるかもしれないけど。

―71―

家に帰り着いてベットになだれ込んだ。緊張の糸が切れてぐったりする。

何と呼ぼうか。多分『薫』が普通だが…何か面白くないな。

それはおいおい考えるとして、早速彼女に電話をかけた。コール音がいつ切れるかドキドキする。

『もしもし?』

「こんばんは」

『こんばんはー、お疲れさまです』

彼女の柔らかい声に自然と頬が緩む。

それにしても電話したは良いが特にこれといった話題が見つからず、沈黙が流れている。

『えーっと…どうしたんですか?』

「いや、まあ声が聞きたくなったっていうか…」

何を言ってるんだ、俺は。
そういえば、と思ってさっきあれこれ考えてたことを話してみることにした。

「あのさ、何て呼んだら良い？」

『いや、普通に下の名前で良いでしょう』

「えー、面白くない」

『そこに面白さを求めないでください！』

二人同時に笑った。

『じゃあ私は何て呼んだら良いんですか？』

「下の名前で良いんじゃない？」

『…新一…さん？』

ドキッとした。彼女に名前を呼ばれるなんて…

あれ？

「そういえば俺、香西さんに名指しで呼ばれたことないよね」

『だって先生って呼ぶのか、さん付けで呼ぶのかわからなかったんですもん』

「じゃあ俺のフルネームは？」

『内村新一さん』

覚えててくれたんだ、と思う。指名されてたし、あれだけずっと一緒にいれば知ってて当たり前ではあるが。

「ありがとう、香西薫さま」

『ちょっと、さま付け止めてくださいよ！』

「えー、何で？」

『何でででも！』

思わず大爆笑してしまった。

が、笑い終えたあとに不安に襲われた。

「俺達さ、これから大丈夫かな？」

『ん？何が？』

「だってさ、よくよく考えれば俺と香西さんって１０歳離れてるじゃん」

『良いんじゃないですか？世間には３０以上年の差がある夫婦だっているし』

「でも俺が４０のおっさんの時、香西さんは３０でまだ女盛りでし

よ？」

『嫌ならご破算にしますか？』

彼女の言葉にかなり焦った。付き合い始めて数時間で破局なんて聞いたことがない。

「っ、いや、そうじゃなくて！
ただ…香西さんはそれで良いのかなって」

『良いに決まってるじゃないですか。こんなに私を必要としてくれる人ってそういないですもん』

「そっか…ありがとね」

『え？何がですか？』

歳が離れてるのに受け入れてくれたこと、俺の不安を吹き飛ばしてくれたこと、彼女は年下なのに俺の全てを受け入れてくれる。

「いや、何でもない」

そう言った俺の顔は穏やかだったに違いない。

「そうだ、今度休みが出来たらドライブにでも行かない？」

『じゃあ私が免許取れたら行きましょう』

「何で？」

『ペーパーにならないように』

「やだよ、教習中の香西さん見てるとめっちゃ不安だもん」

『失礼な！』

受話器の向こうから彼女の笑い声が聞こえる。俺もつられるようにして笑った。

「今度休みが出来たら、ね。免許取れたらまた考えてあげるよ」

『むー…』

いつものように唸っている姿が目に浮かんで、何だか微笑ましい気分になる。

「ちなみにどこに行きたい？」

『フランス』

「行けるわけないじゃん！」

今度は彼女が爆笑している。

『嘘です嘘です。いちご狩りが出来るとこに行きたいな』

「わかった、調べとくよ。

因みに次いつ？」

『明日です』

不意打ちを喰らった気分だ。次で卒業検定に必要な教習は終わる。
それが明日なんて…

「聞いてない」

『だって言ってないですもん』

確かにそうだ。だが何か落ち着かなくなって来た。

それを感じ取ったのか、彼女が笑って話し始めた。

『良いじゃないですか、明日終わってもこれからずっと会えるんだし』

彼女の言葉にはっとした。そうだった、俺達付き合ってるんだった。
これからきっと俺は彼女の尻に敷かれっぱなしなんだろう。

「そうだね」

『ね？』

…何だか電話だけじゃ物足りない気分。

―72―

家までぶらぶら帰っている最中も、まだ頭がぼーっとしている。
夢か？頬をつねってみようか…いや、最近の夢はつねっても痛いらしい。

家に帰り着いて、布団も敷かずにカーペットに寝そべった。今日はお姉ちゃんがいないから、一人であれこれ考えてても怪しまれないだろう。

丁度その時電話が鳴った。こんな時間に誰だよ、と思いつつ携帯を手に取ると、そこに表示されていたのは彼の名前だった。
再び心拍数が上がる。

「もしもし？」

『こんばんは』

「こんばんはー、お疲れさまです」

何だろうか、何を言われるんだろうか。そっちの意味でもドキドキが止まらなかった。

しかしそんな私の思いとは裏腹に、2、3秒ほど二人の間に沈黙が流れた。

「えーっと…どうしたんですか？」

『いや、まあ声が聞きたくなったっていうか…』

思わず絶句してしまった。顔が熱くなってくるのがわかる。

何と言葉を続けて良いのかわからない。ありがとう、か？嬉しい、か？私も、か？

一人であたふたしているのが電話越しに伝わったのか、彼が話題をふってくれた。

『あのさ、何て呼んだら良い？』

「いや、普通に下の名前で良いでしょう」

むしろ何と呼びたいのかが気になる所だけど、墓穴を掘りそうなのであえて聞かないことにした。

『えー、面白くない』

「そこに面白さを求めないでください！」

彼はいつものように大爆笑している。

「じゃあ私は何て呼んだら良いんですか？」

『下の名前で良いんじゃない？』

「…新一…さん？」

その瞬間彼が喋らなくなったので、名前を間違えたのか不安になる。
が、彼は少し声のトーンを上げてあれ？と言った。

『そういえば俺、香西さんに名指しで呼ばれたことないよね』

「だって先生って呼ぶのか、さん付けで呼ぶのかわからなかったんですもん」

『じゃあ俺のフルネームは？』

「内村新一さん」

間違えるはずがない。何度携帯に表示されたこの名前とにらめっこしたことか。

『ありがとう、香西薫さま』

「ちょっと、さま付け止めてくださいよ！」

『えー、何で？』

「何ででも！」

彼は大爆笑していたが、軽く一息ついてトーンを落とした。

『俺達さ、これから大丈夫かな？』

「ん？何が？」

『だってさ、よくよく考えれば俺と香西さんって１０歳離れてるじゃん』

私はそこまで気にしたことはなかったが…彼は真剣に悩んでるみたいだ。年の差ってやっぱり気になるものなんだろう。

「良いんじゃないですか？世間には３０以上年の差がある夫婦だっているし」

『でも俺が４０のおっさんの時、香西さんは３０でまだ女盛りでしょ？』

何を言ってるんだ、と思う。年齢差とか、お互いにまだ知らない過去とか、そんなのは問題じゃない。彼と一緒にいたい、ただそれだけだ。

「嫌ならご破算にしますか？」

『っ、いや、そうじゃなくて！

ただ…香西さんはそれで良いのかなって』

「良いに決まってるじゃないですか。こんなに私を必要としてくれる人ってそういないですもん」

『そっか…ありがとね』

「え？何がですか？」

『いや、何でもない』

幸せだ。この時間が、会話が、彼の声が、私の全てを満たしていく。

『そうだ、今度休みが出来たらドライブにでも行かない？』

「じゃあ私が免許取れたら行きましょう」

『何で？』

「ペーパーにならないように」

『やだよ、教習中の香西さん見てるとめっちゃ不安だもん』

「失礼な！」

さっきとは打って変わって、彼が声を上げて笑っている。

『今度休みが出来たら、ね。免許取れたらまた考えてあげるよ』

「むー…」

『ちなみにどこに行きたい？』

「フランス」

『行けるわけないじゃん！』

当たり前じゃないか。行けるものなら連れて行って欲しいくらいだ。
彼の全力ツッコミに思わず笑ってしまう。

「嘘です嘘です。いちご狩りが出来るとこに行きたいな」

『わかった、調べとくよ。
因みに次いつ？』

「明日です」

『聞いてない』

「だって言ってないですもん」

指導員への報告義務なんてないんだから良いじゃないか、と思う。

それに、

「明日終わってもこれからずっと会えるんだし」

彼が小さくあぁ、と言った。言い出しっぺが忘れる関係なんておかしい話しだ。

『そうだね』

「ね？」

彼のその柔らかな声に胸の高まりがおさまらない。

―73―

彼女と俺の関係は、昨日から外では指導員と生徒、車の中では恋人になった。

…決して変な意味ではないが。

今日は最後の教習になる。彼氏として会うのはもちろん初めてなわけで、今までになく緊張する。

別にウチは生徒との恋愛はご法度じゃないから、ばれても大して問題はないが…何せ１０歳年下の彼女だ。白い目で見られそうな気がする。

早まる気持ちを抑えて配車へと向かった。暖かい春の陽射しに包まれた彼女にはついつい見とれてしまう。

「こんにちは、運転席どうぞ」

「はい、お願いします」

彼女の笑顔につい頬が緩んでしまう。

二人同時に車に乗り込んで、彼女が黙々と発車準備を始めた。落ち着きがない俺は彼女に話し掛けたくてしょうがない。

「薫さま」

俺の言葉に彼女が苦笑した。

「第一声がそれってどうなんですか…」

「えー、何で？」

「…何でもないです」

可愛いなぁ、と思う。ホントに小動物みたいだ。

さっきから惚気っぱなしなのは置いといて、だ。

「よし、じゃあ今日はみきわめだからね」

「はい」

「まあ香西さんなら無理だろうけど」

「どういう意味ですか！」

彼女が反論してくる。

「はー、俺香西さんにかなりひどい事言ってるよね」

「ホントですよ、もー…」

彼氏だとしても、そうじゃなかったとしても、彼女の反応ひとつひ

とつに笑わせられてしまう。

手間取りつつも頑張って縦列駐車をしている彼女を見つめた。

「香西さんさ、そのキャラって素？」

「は？素ですけど…何で？」

「マジウケるから」

「どの辺が？」

「存在が」

「存在を笑われたの初めてですよ…」

彼女は笑いつつも少しすねてしまった。

「それだけ俺が香西さんを好きって事なんだからさ、そんないじけないでよ」

「むー…」

「仕方ないじゃん、香西さんドMなんだもん」

縦列駐車を終え、場外に出ようとしていた彼女が何か言いたげな感じでこっちを向いた。

「は？」

「香西さんドMじゃん」

「どの辺が」

「全体的に」

答えになってないっていうのはよくわかる。だけどどの辺が、と言われたって細かくは言えない。

「『私をいじってください』ってオーラが出てるもん」

「どんだけなんですか！」

やばい、きちんと指導しなきゃいけないのに、笑いすぎて指導に集中できない。

彼女は最初の頃に比べてかなり余裕が出来たのか、たまに手を動かしつつ話すようになった。

といってもほんの1、2秒だが。

「そういえばバレンタインのお返しは？」

「え？」

「え？」

彼女は俺と全く同じように耳に手をあてた。

もちろんちゃんとお返しは考えている。教習中はさすがに渡せないから、今度のデートの時にでも渡そうと思ってはいるが…

「何の話？」

彼女が小さくむぅ、と言った。

「あーあ、せっかく忙しい時間割いて作ったのになー…」

前チーズケーキをくれた時、彼女は『すぐ出来た』と言っていたが、やっぱり手間がかかってたみたいだ。ちゃんとお返ししないと何だか申し訳ない。

「あれ何か立派だったもん。すっげぇ手が込んでるなって思った。あれ作るのに相当時間かかったでしょ？」

彼女は左手を軽くひらひらさせて運転を続けていた。

「時間自体は全然かかってませんよ」

「でも凄かったよ、あれ」

「頑張ったんです。だからお返しを」

実はもう買っている。それはまだ言っちゃいけない秘密だ。

そのせいもあって、彼女には意地悪を言ってしまう。

「竹トンボでもあげるよ、手づくりの」

「いりません」

会話に気を取られすぎてたまに加速不良になったり、判断が遅くなったりと大変といえば大変だったが…今日のみきわめは何とか合格だ。

もっともこの先は補助ブレーキがないから、彼女の運転する車には乗りたくないが。

―74―

教習原簿を握る手に汗をかいて来た。彼氏とかいつ以来だろう。しかも彼は指導員で、１０歳も離れている。

遂に今日が最後となった。『先生と生徒』という関係は今日で終わるが、何せ昨日から『彼氏と彼女』の関係が始まっているから、何だかややこしい感じがする。

のたのたと準備をしていると、わざとらしいと言いたくなるほど彼が他の指導員と話しながらやって来た。今までにこんな姿見たことがない。

「こんにちは、運転席どうぞ」

「はい、お願いします」

車と彼のあいだをするりと抜けて運転席に回る。二人ともシートベルトを着けるやいなや、彼がこっちを向いて話し掛けて来た。

「薫さま」

「第一声がそれってどうなんですか…」

「えー、何で？」

何か…さま付けで呼ばれるのは抵抗感がある。何でとか言われても、嫌なものは嫌なんだが…

「…何でもないです」

つい彼だから良いか、とか思ってしまう。そんな私はもう末期だろう。

「よし、じゃあ今日はみきわめだからね」

「はい」

「まあ香西さんなら無理だろうけど」

「どういう意味ですか！」

私の言葉に彼が大爆笑する。

「はー、俺香西さんにかなりひどい事言ってるよね」

「ホントですよ、もー…」

「香西さんさ、そのキャラって素？」

思わずバックしていた車を停め、彼の方を見た。彼もまた私を真っすぐ見ていた。

その強い眼差しを長時間見るのは実に心臓に悪い。

「は？素ですけど…何で？」

「マジウケるから」

「どの辺が？」

「存在が」

怒るべきなのか、嘆くべきなのか、もう訳がわからなくなって来た。

『存在がウケる』とか普通彼女に言うだろうか。

「存在を笑われたの初めてですよ…」

「それだけ俺が香西さんを好きって事なんだからさ、そんないじけないでよ」

「むー…」

ドSだ。前々から思ってはいたが…あれか、好きな子ほどいじめたくなるってやつか。

そう考えると愛されてるんだなぁ、と思い、顔が熱くなってくる。

しかし彼は私の淡い期待を無視して、何とも言えない言葉を発した。

「仕方ないじゃん、香西さんドMなんだもん」

「は？」

誰がいつドMになったというんだ。一応自覚がないこともないが…
何だか認めたくない。

「香西さんドMじゃん」

「どの辺が」

「全体的に。『私をいじってください』ってオーラが出てるもん」

「どんだけなんですか！」

私ってそんなにMっ気満載だったんだろうかと少し不安になった。
多分、彼の気のせいだ。

「そういえばバレンタインのお返しは？」

どうせ恋人同士になったのなら、もらったっておかしくない話だ。
しかし彼はわざとらしく右耳に手をあてた。

「え？」

「え？」

「何の話？」

「むぅ…」

ここで引いたら絶対負ける。そう確信した私は大袈裟に話をしてみることにした。

「あーあ、せっかく忙しい時間割いて作ったのになー…」

「あれ何か立派だったもん。すっげぇ手が込んでるなって思った。あれ作るのに相当時間かかったでしょ？」

彼は見事に引っ掛かってくれたが、その反応には何故か良心が痛んでしまった。

「時間自体は全然かかってませんよ」

「でも凄かったよ、あれ」

あまり付け込むなんて事はしたくなかったけど、一か八かの賭だ。

「頑張ったんです。だからお返しを」

「竹トンボでもあげるよ、手づくりの」

何でそんな…。

何だか少年っぽさが残っている彼に、ついつい笑ってしまう。

「いりません」

そして私は今日、無事に技能教習の全課程を修了した。

―75―

付き合い初めてからというもの毎日電話をしている。もっともかけるのはいつも俺からだが。

最後の教習から約一週間経った今日、珍しく彼女から着信があった。

「もしもし？」

『こんばんはー。卒検受かりましたよ！』

「あ、ホントに？おめでとう」

もちろんこれだけじゃ満足しないのが俺だ。

「香西さんが自主経路設計も駐車も合格とか奇跡だね」

『ひどっ！私頑張ってたじゃないですか！』

「頑張ってた『けど』、道も覚えれないし、駐車手間取るし」

『むー…誰が教えたと思ってるんですか』

彼女の反応には全く飽きが来ない。いつものように爆笑する。

『ちょっと、そんなに笑わなくても良いでしょう！』

「だって香西さんマジウケるんだもん」

『私そんな面白い事言ってません』

何とか笑いを堪えようと軽く一息ついた。

「それにしてもさ、ホントよく自主経路設計合格したね」

『頑張ったんです』

地図すら読めない彼女は覚えるのにかなり苦労しただろう。そこは褒めてあげないといけない。

「おーえらいえらい」

自他共に認めるSの俺は、見事な棒読みで彼女を褒めた。もちろん彼女の反応は期待通りで面白い。

『そんな棒読みで褒められても嬉しくないし』

「よくがんばりました」

『無視ですか』

彼女といるとホントに退屈しない。いつも楽しい気分にさせてもらってばっかりだ。

「はー…ウケるー…」

電話の向こうで小動物がむぅ、と唸った。

その直後だっただろうか、彼女がねえねえ、と言って話し掛けて来た。

『私いつまで香西さんって呼ばれるんですか?』

そう言われてみれば…いつもの癖でついつい苗字で呼んでしまう。

『もしかして普通に下の名前で呼ぶのが面白くないからわざと?』

釈明しようとしてたのに…そう言われてしまったらいじる以外に選択肢なんてないじゃないか。

「ご不満ですか薫さま」

『当たり前でしょう!何でそこでさま付けなんですか』

やばい、明日腹筋が筋肉痛になってそうだ。笑いが止まらなくなってくる。

「当たり前でしょうって…」

『良いです、今日教習アンケートの指導が悪かった指導員の所に『内村新一さん　最低でした』って書いたから』

Mはsにもなり得るというが…俺があれだけやめて、と頼んだのに書いてしまったのか。校長に呼び出し喰らったらどうしてくれるんだ。

「嘘!?ちょ、ま、おい!書かないでって言ったじゃん!」

『嘘に決まってるじゃないですか』

その言葉にかなり脱力した。俺がどれだけ冷や汗かいたと思ってるんだ。

「うわ、マジ焦った…」

彼女が笑いながら言葉を続ける。

『だって楽しかったですもん、ホントに』

家に押しかけていじめ倒してやろうかと思ったが、その言葉にそんな考えは吹き飛んだ。
そこは素直に話しておこうと思う。

「俺もすっごい楽しかったよ。不器用ながら頑張ってるの伝わって来たし、真面目だから教え甲斐あったし、何より人が良い。バカが付くほどね」

彼女が照れたような口調で答えてくれた。

『…そうですか?』

「香西さんが家族からも友達からも先輩からも…みんなに好かれる理由、わかるもん」

『そんな今更褒めたって何もあげないですよ』

何もいらない。彼女がそばにいてくれるだけで良い。

「よし、じゃあ今度の火曜、お祝いにドライブに行こう。いちご狩りの出来るとこちゃんと見つけたから」

『ホントに!?わぁ、楽しみです』

「香西さんが免許取る前に行かないと…死ぬ目に遭いそう」

『どういう意味ですか』

名前を呼ぶのは明日の電話の時のお楽しみにしておこう。

―76―

初めて彼氏が出来たときはまだ携帯を持ってなかった頃だったから、今みたいに毎日電話がかかってくるのが何だか新鮮で楽しい。

そしてついに今日、卒業検定を合格した。これは着信を待つのではなく、自分から報告したいと思う。

彼がどんな反応をしてくれるかドキドキする。びっくりするだろうか、喜んでくれるだろうか。

彼が電話を取るのにそう時間はかからなかった。

『もしもし?』

「こんばんはー。卒検受かりましたよ!」

『あ、ホントに?おめでとう。
それにしても香西さんが自主経路設計も駐車も合格とか奇跡だね』

何か予想はしていたが…嬉しいような悲しいような、微妙な心境だった。

「ひどっ!私頑張ってたじゃないですか!」

『頑張ってた『けど』、道も覚えれないし、駐車手間取るし』

「むー…誰が教えたと思ってるんですか」

私の反論に彼が大爆笑した。私は別に変な事を言ったつもりは全くないのだが。

「ちょっと、そんなに笑わなくても良いでしょう！」

『だって香西さんマジウケるんだもん』

「私そんな面白い事言ってません」

電話の向こうで彼が軽く息を吐いた。

『それにしてもさ、ホントよく自主経路設計合格したね』

「頑張ったんです」

『おーえらいえらい』

彼は私の気を引くためかどうか知らないけど、棒読みで私を褒めて来た。正直、全然嬉しくない。

「そんな棒読みで褒められても嬉しくないし」

『よくがんばりました』

「無視ですか」

彼は無視ですかって…、と言って笑う。きっと笑い上戸なんだろう。

『はー…ウケるー…』

「むぅ…」

私面白いことなんて一言も言ってないのに。

今までの会話をさかのぼって来て、ふと考えた。付き合い始めた日に呼び方の話をしてたのに、未だに二人ともそれを実行していない。

「ねえねえ、私いつまで香西さんって呼ばれるんですか?」

彼があー、と呟いた。もしかして…

「普通に下の名前で呼ぶのが面白くないからわざと?」

『ご不満ですか薫さま』

やっぱりか。以前彼が『好きな子ってどうしてもいじめたくなっちゃうんだよね』と言っていたのを思い出す。これから私はどんないじられ方をしていくんだろう…。

「当たり前でしょう!何でそこでさま付けなんですか」

『当たり前でしょうって…』

彼の笑いが一向に止まらない。少し抵抗してみたくなって、あることないこと話した。

「良いです、今日教習アンケートの指導が悪かった指導員の所に『内村新一さん　最低でした』って書いたから」

ようやく彼の笑いが止まり、一瞬だけ沈黙が流れた。

『嘘!?ちょ、ま、おい!書かないでって言ったじゃん!』

面白い。こんな素直な反応してくれる人ってそうはいないだろう。もしかしたら彼も同じ事を考えてるのかもしれないが。

「嘘に決まってるじゃないですか」

『うわ、マジ焦った…』

１０歳年上の彼を可愛いと思ったら怒られるだろうか。そんな事を考えながら笑った。

「だって楽しかったですもん、ホントに」

振り返ればあっという間の１９時限だった。何度か彼の指導から外れてしまったが…。

すると彼もいつものように落ち着いた雰囲気で話し始めた。

『俺もすっごい楽しかったよ。不器用ながら頑張ってるの伝わって来たし、真面目だから教え甲斐あったし、何より人が良い。バカが付くほどね』

「…そうですか？」

『香西さんが家族からも友達からも先輩からも…みんなに好かれる理由、わかるもん』

すごく嬉しい。嬉しすぎて言葉が出るのに時間がかかるくらいだ。

「そんな今更褒めたって何もあげないですよ」

『よし、じゃあ今度の火曜、お祝いにドライブに行こう。いちご狩りの出来るとこちゃんと見つけたから』

「ホントに!?わぁ、楽しみです」

『香西さんが免許取る前に行かないと…死ぬ目に遭いそう』

「どういう意味ですか」

こんな関係がずっと続けば良いなと思う。

―77―

今日は待ちに待った火曜日だ。彼女と会うのは最後の教習以来…

になるはずだった。

すっかり浮かれ気味の俺は、火曜に先約が入ってた事を思い出した。

池田ちゃんに飲みに行こうと誘われてたんだった。

俺は慌てて日曜の夜に彼女に謝罪の電話を入れた。激怒されると思ったが、あっさりと大丈夫だと言われた。

懐が広いのか、呆れられたのか。

とりあえず今、朝からかなりテンションが低い。

彼女は今何をしているのだろう。丁度こっちも用事が入ったと言っていたが、どこにいるのだろう。

付き合っているというのに何だか余裕がない。

重い身体を何とかベットから起こして身仕度をする。何で昼から飲まなきゃならんのだ。

時間ギリギリに車を近くの駐車場に停め、待ち合わせ場所へ向かった。すでに待っていた池田ちゃんは私服も女らしくなくて、遠目でもすぐわかる。

せっかく可愛い顔と良いスタイルをしているのに勿体ないな、と思いながら話しかけた。

「待った？」

「全然。さ、行きましょうか」

俺の言葉なんて聞かないかのように、腕を引っ張って勇み足で居酒屋へと向かった。性格まで実に男らしい。

あれからしばらく経過し、時計の針が5時を指した。俺達が店に入ったのは1時だったので、かれこれもう4時間も居酒屋にいることになる。

「でね、内村さん、聞いてます？」

「おぉ、聞いてるよ」

「で、また後輩がですよ」

無限ループだ。この話、今日何回目だろう…。

彼女が今日俺を誘ったのは、いわゆる愚痴を聞いてもらうため。
全然気付かなかったが、池田ちゃんに最近彼氏が出来たらしい。しかも相手はよく話に出て来てた大学時代の後輩だ。

男心なんて理解できないだの、女の気持ちがお前にわかるかよだの、わめき放題だ。

「もぉー、聞いてるんですか！」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと聞いてるから。
それよりそろそろ出ようか、お店の人に迷惑かけてるし」

「かけてないですー。私まだ飲むもん」

「ほら、出るぞ」

無理矢理池田ちゃんの腕を引っ張って連れて出た。酔っ払いの代わりに払った代金は、独り身じゃなくなった今では痛い。

「はー…ったく、ほら、歩くぞ」

「…歩けない…」

「は？

…ほら、肩貸してやるから」

池田ちゃんは遠慮なく腕を掴んだ…むしろ引っ張った。全体重がかかってて正直痛い。

夕方に酔っ払いを連れて歩くなんてツイてないなぁ、なんて思っていると、人とぶつかってしまった。

「っ、すみません」

「いえ、すみ…」

相手の言葉が濁った。聞き覚えのある声に思わず顔を上げる。

彼女だった。

しかも何故か隣にはホスト風の男を連れて。

そんなことはさておき、俺と池田ちゃんはぱっと見恋人同士に見えるだろう。浮気ではないことをはっきり言わなくては。

彼女がこっちに歩み寄って来たので、池田ちゃんから離れて彼女のほうへ向かう。

「違、これは誤解で…」

「や、これは違くて…」

同時に発した言葉に二人ともきょとんとした。

「あ、あの、俺コイツの愚痴聞かされててさ、かれこれ４時間」

「あ、私は…中学の時の先生に食事に連れて行って貰ってて」

二人の間に沈黙が流れた。浮気でもないのにこの気まずさはなんだろう…。

すると中学時代の先生とは思えない男が彼女の方に歩み寄った。

「薫、この人どちら様？」

「あ、この人は内村新一さんって言って…」

気に入らない、奴と彼女の距離が。先生と生徒に見えない雰囲気に苛立ち、彼女の腕を引っ張って肩を抱き寄せた。

「香西さんとお付き合いしてる者です。中学時代にお世話になったそうで」

嫉妬心丸出しなのがわかったのか、初めは驚いていた彼女が突然笑

い出した。

「担任に敵意むき出しにしなくても…」

「…担任？」

「うん。中学…あれは二年だったかな？今は辞めて事務職についてるんですよ」

それを見ていた男が俺に近づいて来た。

「薫が話してた彼氏さんですね。
貰い手ないのかな、なんて心配してたんですよ」

「失礼な！」

彼女がいつものように反論した。男はいつもの俺と同じように笑っている。

「でも良かったです、変な男に引っ掛かってなくて。
この子ホントに良い子なんで、大事にしてあげてください」

この男は俺が知らない彼女を知っている。でも俺が知っている彼女と男が知っている彼女の共通部分はただ一つ、彼女が良い子だということ。
知らない過去はこれから知っていけば良い。

池田ちゃんをおいてけぼりにして、後日かなり怒られたのは言うまでもない。

―78―

失敗した、と思う。
彼と電話して数日後、火曜に約束が入っていたのを思い出した。

丁度彼に電話をしようとした時、彼から断りの電話が入った。
彼も先約が入っていたらしく、私達って似た者同士なんだなぁ、なんてぼんやりと考える。

それはそうと、彼の先約って何だろう。誰と会ってどこに行くんだろう。
自分の事は言ってない癖に、彼の事が気になってしょうがない。

相手は彼じゃないとはいえ、久しぶりに会う先生に適当な格好を見せるわけにはいかない。

一通り身仕度を済ませたあと、待ち合わせの場所へと向かった。
まだ先生が来てなかったので、携帯の電話帳を開く。

…彼のデータを出したところで私は何をしたいんだろう。

あれこれ考えていると、先生がやって来た。いかにもホストっぽい格好に周りの視線が集中し、正直辛い。
大学時代のバイトの関係で今もたまにホスト業をしているらしく、それが原因だろう。

「ごめんごめん、お待たせしました」

「いえいえ」

もちろんレストランでも刺さるような視線を浴び続けた。

「先生、良い歳してちゃんとした格好しないんですか…」

「してるじゃん」

「いや、やっぱ良いです」

まだ33歳の先生はオシャレとか色々楽しみたいのだろう。結婚願望がないらしく、お金は全部自分のために使えるらしい。

「ねぇ薫、先生って呼ぶのやめない？」

「と言われてもねぇ…先生は先生だし」

先生は体調不良のために数年前に退職し、治療が一通り終わった最近、再就職を果たした。ちなみに私を含めてクラスの生徒を下の名前で呼ぶのは、フレンドリーさを強調するためらしい…よくわからないけど。

食事が終わって色々と話をした。もちろんその中に彼の話が入っていたわけで、先生から年上とうまく付き合っていく方法を習った。

どうせなら飲みに連れてってあげるよ、という言葉に甘えてバーへと向かう途中、背の高い男の人と肩がぶつかってしまった。

「っ、すみません」

「いえ、すみ…」

聞いたことのある低い声。ゆっくりと顔を上げる。

彼だった。

隣には確か…池田さん、が立っている…というかしがみついている。

それは良いとして、先生の格好が格好なだけに、ホスト遊びしていると勘違いされかねない。

慌てて彼の方へと早歩きで向かう。それに合わせたかのように彼もこちらに向かって来た。

「違、これは誤解で…」
「や、これは違くて…」

同時に発した言葉があまりに似通っていたせいか、二人で目を見合わせてきょとんとしている。

「あ、あの、俺コイツの愚痴聞かされててさ、かれこれ４時間」

「あ、私は…中学の時の先生に食事に連れて行って貰ってて」

びっくりした。それぞれの用事があるのに会うなんて…世界は狭いもんだと思う。

すると先生が私の方にやって来て話しかけて来た。

「薫、この人どちら様？」

「あ、この人は内村新一さんって言って…」

その瞬間、先生の方を向いていた身体が、気付けば彼の方へ引き寄せられていた。今の状況に頭がついてこない。

「香西さんとお付き合いしてる者です。中学時代にお世話になったそうで」

彼は今までになく警戒心をあらわにしていた。嫉妬してくれてるのだろうと思うと、それ自体は嬉しかったが、相手が相手なだけに笑いが出て来る。

「担任に敵意むき出しにしなくても…」

「…担任？」

彼が怒っているような驚いているような顔をした。

「うん。中学…あれは二年だったかな？今は辞めて事務職についてるんですよ」

先生がこっちに近づいてくる足音が聞こえた。

「薫が話してた彼氏さんですね。
貰い手ないのかな、なんて心配してたんですよ」

「失礼な！」

先生がまあまあ、と言って彼の方に向き直した。

「でも良かったです、変な男に引っ掛かってなくて。
この子ホントに良い子なんで、大事にしてあげてください」

私には二人の間に友情が芽生えたように見えた。顔を赤くしたまま
座り込んでいる池田さんが気になって気になって仕方なかったが。

―79―

今度こそ、と約束をして次の月曜にドライブデートをすることになった。

実は池田ちゃんに謝り続けた日、彼女のことを突っ込まれたのだ。

『内村さん彼女出来たんですね』

『覚えてたんだ』

『記憶が飛ぶまで飲んでません！
そんなことより…私彼女さんの顔に見覚えあるんですけど』

『…あ、そう？まぁどこにでもいそうな顔だとは思うけど…』

あの時は何と言ったら良いかわからなかった。卒業生だよ、と言ったって何も問題はなかったのかもしれないが、何となく気が引ける。

電話で他愛のない話ついでにその話をしてみた。携帯の向こうからは苦笑いが聞こえる。

『すみませんね、どこにでもいそうな顔で』

「いや、変な意味じゃなくて…卒業生って言いづらかったんだって」

『うーん、まあわからなくもないですけどね』

一応理解はしてくれているみたいだ。だが、やっぱり出会いの話をしにくい関係ってまずいんだろうか。

彼女を傷つけてはいないか、それだけが心配だ。

わざと話をそらすように彼女に話し掛ける。

「あ、そうだ。俺最近花粉症に悩まされてるんだけど…」

『花粉症にはれんこんが効くんですよ』

「へー」

『鶏のひき肉と合わせてつくね作るとか、煮物でも美味しいし』

自分では作る気にはなれない。面倒だからというのも理由だが、何より彼女がいるから。付き合ってるんだし、作ってもらったって悪くはないだろう。

「ねえ、今度家で作ってよ」

『やですよ、めんどくさい』

彼女は時々意地悪になる。だが俺がいじれば形勢逆転は目に見えている。

「料理が出来ないからって意地張らないの」

『なっ！あのチーズケーキ誰が作ったと思ってるんですか』

彼女はいつも俺の期待に応えてくれる。予想通りの反応についつい笑ってしまう。

「嘘って。美味かったもん、あれ」

『ホントに？料理は作れるけど美味しくないんで…』

彼女はたまにこんな感じで真剣に悩んだりする。彼女の言い草だと謙遜が自虐になりかねない。

「俺チーズケーキ以外食ったことないからさ、上手いかどうかはわからないじゃん。
だから今度作ってよ、普通の飯をさ」

『もうちょっと上手くなってから』

「ダメ、今度」

彼女がむぅ、と唸った。何をそんなに謙遜するんだろうか。

「大丈夫だって、お菓子が作れるなら普通の飯とか楽勝でしょ？」

『…ハードル上げないでくれませんか？』

「上げてない上げてない」

彼女が何か言いたげにうー、と言ったあと、念を押すように切り出して来た。

『不味かったら言ってくださいよ？不味かったのに美味しかったよ、って言われるのが一番辛いんですから』

復習項目がついたらへこむんだから、そんなバカ正直に言ったら泣いてしまうんじゃないかと多少不安になるが、そこは彼女からのお願いだ。腹をくくるしかない。

「わかったよ、楽しみにしてるから」

『…はい』

その後何も喋らなくなった彼女がおかしくて、思わず笑ってしまった。

「何、もー…そんな気負いしなさんなって！」

『だって…』

「仮に今度不味かったとしてもさ、どんどん上手くなっていけば良いわけじゃん」

『まあそうですけど…』

月曜まであと４日ある。限界まで調整するんだろうか…楽しみだ。

―80―

次こそはちゃんとしたデートを…。

付き合い始めてから教習所以外で会うのはこの前の遭遇事件が初めてで、つまり今度のデートは初デートに等しい。

昨日の電話でその約束を取り付け、今日は特に用はないけど日課の電話をしている。

『そういや池田ちゃん覚えてる？若い女の指導員』

「あー…何回か担当してもらったことあります」

『この前のやつでさ、付き合ってるのばれちゃって。それでさ…』

彼がその時の状況説明をした。彼なりに色々考えながら喋ったんだろうけど…

「すみませんね、どこにでもいそうな顔で」

いつも彼からの評価に苦笑いするしかない。彼は少し慌てた口調で話した。

『いや、変な意味じゃなくて…卒業生って言いづらかったんだって』

「うーん、まあわからなくもないですけどね」

確かにそうだ。『指名予約してくれてた生徒と付き合うことになりました』なんて言えないだろう。周囲の反応が私も怖い。

彼を苦しめてはいないか、それだけが心配だ。

黙り込んでしまった私を気遣ってくれたのか、彼が別の話題を持ちかけて来た。

『あ、そうだ。俺最近花粉症に悩まされてるんだけど…』

そういえば最後の方の教習でマスクを何回かつけていたのを思い出す。

「花粉症にはれんこんが効くんですよ」

『へー』

「鶏のひき肉と合わせてつくね作るとか、煮物でも美味しいし」

私も毎年ひのき花粉にやられるので、今年こそは花粉対策を実行してみようと考えている。

なので、今挙げた料理は作った試しがない。

『ねえ、今度家で作ってよ』

「やですよ、めんどくさい」

『面倒臭い』んじゃない、失敗するのが嫌なだけ。
それを知らないでか、彼はいつものように意地悪を言って来た。

『料理が出来ないからって意地張らないの』

「なっ！あのチーズケーキ誰が作ったと思ってるんですか」

そうは言ってみたものの、あれが本当に不味かったなら話にならない。

『嘘って。美味かったもん、あれ』

彼の言葉は精一杯のお世辞にしか聞こえない。

「ホントに？料理は作れるけど美味しくないんで…」

涙が出て来そうだ。彼に気を遣わせるのも嫌だし、まともに料理も出来ない私自身も嫌だ。

彼は優しい声で語りかけてくれた。

『俺チーズケーキ以外食ったことないからさ、上手いかどうかはわからないじゃん。
だから今度作ってよ、普通の飯をさ』

「もうちょっと上手くなってから」

全くもって自信がない。でも彼はそんな私の拒否を許してくれない。

『ダメ、今度』

「むぅ…」

『大丈夫だって、お菓子が作れるなら普通の飯とか楽勝でしょ?』

「…ハードル上げないでくれませんか?」

『上げてない上げてない』

「うー…」

逃げてたってどうしようもないことはよくわかった。ここまで来たら開き直るしかない。

「不味かったら言ってくださいよ?不味かったのに美味しかったよ、って言われるのが一番辛いんですから」

『わかったよ、楽しみにしてるから』

彼はそう言って笑った。

失敗したらどうしよう。そればかり考えてるのが伝わったのか、彼が突然笑い出した。

『何、もー…そんな気負いしなさんなって！』

「だって…」

『仮に今度不味かったとしてもさ、どんどん上手くなっていけば良いわけじゃん』

「まあそうですけど…」

そうは言っても一番最初って色々と重要だと思う。今日からしばらくれんこん料理だな…。

―81―

日が経つのは相変わらず遅い。教習があった時と同じように、彼女に会えるまでの時間が果てしなく長く感じる…たとえそれがたったの４日だとしてもだ。

ようやく彼女に会うことが出来る。池田ちゃんと飲みに行った時に遭遇した時は、結局お互いの約束があったためにすぐ別れてしまった。
なので、こうやってゆっくり会えるのは…そうだ、彼女のために実用的ドライブをした時以来だ。

あの時と気持ちは全く変わらず、あまりの楽しみさにまたあまり寝付けなかったし、予定時間よりもかなり早くに待ち合わせ場所に着いてしまった。
そしてもちろん彼女も。

「早くない？」

「そっちこそ」

彼女に飽きを感じることなんてないだろう。

彼女がいちご狩りに行きたいと言っていたので、場所を調べあげて遠出をした。というのに、すっかり営業が終わってしまったらしい。

「最悪…」

彼女がかなりがっかりしている。それも仕方ない、車で片道一時間はかかっていたのだから。

「こんなオチなしでしょう」

「香西さんがいるせいかもよ」

「何でですか」

「だってほら、いっつも香西さんがウチに来てた時は天気悪かったじゃん。今日は天気良いからその分」

「失礼な！」

「あーあ、いちご食いたかったなぁー」

「…もう何も喋りません」

すねてしまった彼女さえも可愛くて、赤信号になった隙に右の頬を掴んだ。

「ひゃ！むあー！」

何かよくわからない声を出している彼女が面白い。青信号に変わったので、その柔らかな肌から惜しみつつ離れた。

「何するんですか！頬が伸びたらどうしてくれるんですか」

「だっていかにも『掴んでください』と言わんばかりにむくれてたんだもん」

「そんなことないです」

「良いじゃん、香西さんドMなんだから」

いつものようにむぅ、と唸った小動物が俺の左腕を叩いて来た。

「ちょっと、運転中なんですけど」

「知りません」

ああ、アレだ、ツンデレってやつだ。そんなことを思いながら話し掛ける。

「そういやれんこん料理は作れるようになった？」

彼女がうーん、と言ったあと、前を向いたまま言葉を続けた。

「一応、ね。味の保証はないですけど」

どうせ今引き換えしてる最中でこのあとすることなんてないから、例の場所へ向かうことにした。そう、いつかも行ったあの場所へ。

建物の目の前に車を停めてハンドブレーキを引く。さすがにぼけっとしてる彼女でも二回目になればわかるだろう。

「ここ、どこと思う？」

俺の問いに彼女が少し考えている。どこに考える必要があるのだろう。

「えーっと…家、内村さんの」

さすがにわかったか、と思いつつも個人的に面白い展開へ持って行きたい。

「はい、残念。平塚です」

「な、この前は建物を聞いたって言ったじゃないですか！」

「前回と全く同じと思ったら大違いだよ」

「…ドS」

少しふて腐れる彼女を横目に思わず笑ってしまった。仕方ないじゃ

ないか、彼女がドMなんだから。

車から下りて3階の自室へと向かう。今日はいちごが食えなくて腹が減ってる分、彼女の手料理は天の恵みになるに違いない。

―82―

やっと4日経った、という感じだ。
付き合い始めてから毎日電話しているというのに、直接会うまでのインターバルがかなり辛い。

身仕度をしながら、いつまでもこんな新鮮さが続いていけば良いなと思う。

待ち合わせ時間はいつかと同じ9時。今回はちゃんと寝れたけど、早起きしすぎて結果は結局一緒だった。
そして彼も。まだ20分前だというのに二人とも合流してしまった。

「早くない？」

「そっちこそ」

眠そうにしている彼を見ながら、私もこんな顔してるのかなぁ、なんてぼんやりと考える。

去年、今年はまだ一度もいちごを食べてないので、失礼ながら彼だろうがそうじゃなかろうがすごく楽しみだった。

だというのに、いざビニールハウスに行ってみれば『本日の営業は終了致しました』の札が立っていた。

「最悪…」

文句を言いながらシートベルトを着ける私を横目に彼が少し笑った。

「こんなオチなしでしょう」

「香西さんがいるせいかもよ」

一瞬固まったのち、すごい勢いで彼の方を見た。

「何でですか」

「だってほら、いっつも香西さんがウチに来てた時は天気悪かったじゃん。今日は天気良いからその分」

「失礼な！」

彼は車を発車させてから、わざとらしい口調で残念がった。

「あーあ、いちご食いたかったなぁー」

「…もう何も喋りません」

彼の方を向いていた私は顔を前に向け、ほんの少しだけ頬を膨らま

せた。すると横から大きな手が伸びて来て、私の右頬を掴んだ。

「ひゃ！むあー！」

一生懸命抵抗した。今、絶対ひどい顔になっている。

そんな顔を見せたくなくて左側を向くと、丁度青信号になったのか、彼が手を話して車を発進させた。

「何するんですか！頬が伸びたらどうしてくれるんですか」

「だっていかにも『掴んでください』と言わんばかりにむくれてたんだもん」

「そんなことないです」

「良いじゃん、香西さんドMなんだから」

「むぅ…」

『そんなことないです』と言えない私はホントにMなのかもしれない。けどここで引き下がったら負けな気がして、彼の左腕をぱしっと叩いた。

「ちょっと、運転中なんですけど」

「知りません」

わざと助手席の外側の景色を眺める。彼は笑い声を上げたあと、軽

く息を吐いて話し始めた。

「そういやれんこん料理は作れるようになった？」

「うーん…一応、ね。味の保証はないですけど」

「そうなの？へー」

彼にしては珍しくこのリアクションで終わった。

が、やっぱりそういう終わり方があるわけでもなく、気付けば見覚えのある建物の前に到着していた。

「ここ、どこと思う？」

デジャヴってやつか、なんて思いながら考える。いや、全く同じ質問が以前にも…

「えーっと…家、内村さんの」

なので何となく答えには自信があった。しかしどういうわけか、彼がブーッ、と言った。

「はい、残念。平塚です」

「な、この前は建物を聞いたって言ったじゃないですか！」

「前回と全く同じと思ったら大違いだよ」

意地悪だ。なんて意地悪なんだ。
そんな彼には頑張っても敵わなくて、少しだけうつむいた。

「…ドS」

そんな私をよそに彼は車から下り、手招きして彼の部屋まで私を案内した。

―83―

実際こんなに手際が良いなんて思ってもみなかった。

大学に入るまで一切料理をしたことがないと言っていた彼女だが、てきぱきと料理を作っている。

しかも結局買い物に行かなかったため、俺の家の冷蔵庫に入っている食材で作ってもらうことになった。

「何作ってんの？」

「えーっと、豚肉とピーマンの味噌炒めと野菜の牛肉巻き」

全然料理をしない俺がたまたま家に置いていた食材で、彼女が食べたことのない料理を黙々と作っている。先日何となくで適当に買ってきて正解だったなとつくづく思った。

キッチンから俺の部屋にまで美味しそうな匂いが広がって来る。

「おまたせしました」

彼女が温かい料理を運んで来た。

絶対使わないと思いつつ安さにひかれて買ったカラーピーマンが、豚肉ともやしと一緒に味噌と絡められて彩りを飾っていた。使い残していた人参と貰い物のごぼうは牛肉に巻かれ、香ばしいたれが上からかかっている。

久しぶりに実家に帰った時のような料理を目にして、思わず言葉を失ってしまった。

「すご…」

「はい」

そう言って彼女が茶碗を渡して来た。その中にあるご飯は今まで見た中で一番白い。

「いただきます」

まずは一口、味噌炒めを口に運ぶ。味噌の甘みが口一杯に広がり、美味しいの一言で片付けて良いのか正直悩む。

「美味いじゃん」

「ホントに？良かったー」

彼女は笑みを浮かべて箸を伸ばす。

「どこに謙遜する理由があったわけ？」

「んー…だって他の人に食べて貰った事ないから自信なくて」

牛肉巻きだって醤油ベースのたれとの絶妙な味加減がすごく良くて、久しぶりにまともな飯を食った感じだ。

「いや、料理上手いじゃん、お世辞でも何でもなくさ。これだったらいつ結婚しても問題ないよね」

ちょっとばかり意味深発言をしてみるも、彼女に通用しなかった。

「とんでもない、レシピ数少ないですもん。もっといっぱい作れるようにならなきゃ」

残りものでこんなに立派な料理を作る彼女の事だ、きちんと準備が調ったらもっと色んな料理が出来るんだろう。

彼女の言葉に甘えて皿洗いまでしてもらうことになった。片付けさえも難無くこなす彼女は、結婚してもないくせに世界一の嫁さんに見える。

こんな事を言うのも何だが、時間も時間なだけに落ち着きがなくなって来てしまう。だがそこは大人だ、背後から襲うなんて強引な事はしたくない。

「終わりまし…」

そうは言っても俺も男だ。キッチンから引き上げて来た彼女の両手首を掴み、壁へと押しやった。

ゆっくりと顔を近づける。

が、何を思ったのか、彼女は目を閉じる気配すらなくきょとんとしている。

「…どうしたの？」

「いや、それはこっちのセリフですよ」

そんな彼女の言葉にびっくりして、思わず顔を離した。

「質問、今まで付き合った事ありますか」

「一度だけ」

「キスしたことは？」

「ないです」

目の前で今の状況について来れてない彼女は、まだ誰の色にも染ま

ったことはない。つまり、彼女はオトコというものを知らないのだ。

ならば俺の色に染めてしまうだけだ。他の誰にも染められないくらいの深い深い色に。

―84―

れんこん料理を作らせたいなら最初から食材を準備しておけって話だ。彼の部屋の冷蔵庫にあったのはカラーピーマン、もやし、使いかけの人参とごぼう、中途半端に残っている牛肉と豚肉という、何とも微妙なものだった。

冷蔵庫をぱたんと閉じて、頭の中で奴らと格闘する。

どうしよう、今までの努力が水の泡だ。

「…」

私は観念したかのように冷蔵庫から食材を取り出し、ありあわせを作ることにした。思い付きのレシピのため、味の保証はもちろんない。

そんな姿なんて見られたくないのに、彼は興味津々なのか、私のまわりをうろうろしている。

「何作ってんの？」

「えーっと、豚肉とピーマンの味噌炒めと野菜の牛肉巻き」

そう言いながらピーマンを一口サイズに切っていく。いつまで見てるんだろうか…乱雑だとか手際が悪いだとか思われてたら恥ずかし

い。

料理開始から数十分、ようやく二品が完成した。ちょうどご飯も炊き上がって温かいまま食べることが出来そうだ。

お茶碗にご飯をよそう。彼は男の人だからきっとたくさん食べるだろうと多めについだ。

「おまたせしました」

そう言ってテーブルに料理を置いた。

「すご…」

彼は料理を食い付かんばかりの勢いで見ていた。彼の目に美味しそうに映っているだろうか。

「はい」

「いただきます」

私の手からお茶碗を受け取った彼は、すぐさまおかずに箸をのばした。彼の反応にドキドキする。

彼が箸を置いたので、やっぱり失敗したか、と思った。味見をしないくせがついてしまっただけに、自分でさえ味が分かっていないのだ。

しかし彼はそんな心配をよそに目を輝かせて話し掛けてきた。

「美味いじゃん」

「ホントに？良かったー」

今度は箸を止めることなく次々と料理を口にしていた。私も一緒になって箸でつつく。

「どこに謙遜する理由があったわけ？」

「んー…だって他の人に食べて貰った事ないから自信なくて」

彼の勢いは止まる事なく、ハイペースで平らげていく。その姿が嬉しくて嬉しくて、ついつい笑みがこぼれる。

「いや、料理上手いじゃん、お世辞でも何でもなくさ。これだったらいつ結婚しても問題ないよね」

彼はそう言ってお茶を口に含んだ。

「とんでもない、レシピ数少ないですもん。もっといっぱい作れるようにならなきゃ」

こんな料理だけで結婚出来たらどれだけ楽だろうか。そんなことを考えながらテーブルを拭きあげた。

後片付けも私がすることになった。もともと皿洗いとかは好きだったし、一緒にコンロやシンクも掃除しようと思ったからだ。

時間こそかかってしまったものの、食器も全部洗い上げ、キッチン回りもピカピカになったので彼の部屋へと戻った。

「終わりまし…」

ドアのところに立っていた私は、気付けば彼と壁の間に挟まれた。両手首は壊れ物を扱うかのように優しく、何かを訴えかけるかのように強く掴まれている。

そして、彼の顔がゆっくりと近づいて来る。

彼は何をしようとしてるの?今から何が起こるの?
よくわからなくてまばたきしか出来ない。

「…どうしたの?」

「いや、それはこっちのセリフですよ」

私の言葉にタバコ一本分もなかっただろう距離にあった彼の顔が離れた。
彼の顔を見ると、少しだけ眉間にしわが寄っていた。

「質問、今まで付き合った事ありますか」

「一度だけ」

「キスしたことは？」

「まだです」

よくわからない。彼はそんなことを聞いてどうするつもりなんだろう。

そんな私の疑問に対する答えは次の瞬間、一瞬にして明るみになった。

―85―

彼女の小さな声が聞こえて来た。俺はその隣で彼女の髪を撫でている。

「ん…」

幸いにして今日は仕事が休みのため、家でゆっくり出来る。それを狙っていたと言ってしまえばそれまでだが。

朝のやわらかい日差しが俺達を照らした。彼女は寝息を立てて眠っており、何とも幸せそうな顔をしている。そしてそれを眺めている俺もさぞ幸せな顔をしているだろう。

こんな時間を過ごすのは本当にいつ以来だろうか。心も身体も満たされていく感じがする。

彼女が起きないようにそっと抱き寄せて額にキスをした。

「んん…」

眠り姫は起きてしまうかと思いきや、俺の方に背中を向けて再び眠りに就いた。

込み上げてくる愛しさに、彼女を後ろから抱き締める。

「んー…」

「おはよう」

彼女が眠たそうな顔をしながら少しだけこっちを振り返った。

「おはようございます」

「起こしちゃったね。ゴメンゴメン」

そう言って彼女の頭にこつんと額をつけ、包み込むようにもう一度抱き締めた。彼女のぬくもりとやわらかな匂いが伝わってくる。

結局俺達が身を起こしたのは11時頃だった。さすがにこのコンディションで飯を作って貰うのは申し訳なかったので、彼女を連れて食事に行くことになった。

彼女がだるそうにして助手席に乗り込む。

「大丈夫?」

「大丈夫ですよ」

彼女は笑ったが、それは精一杯の笑顔だとすぐにわかった。彼女のことだ、きっと俺に気遣わせないようにしているのだろう。

彼女のその心遣いには申し訳なさをも感じる。

「やっぱ飯食いに行くのやめよう」

「私なら大丈夫なので」

ホラ来た。彼女は自分自身には配慮しない。だからこそ、こういう時に俺が支えてあげなくては。

「ダメ、ゆっくりしてて。夜ドライブ行けなかったら困るし」

「でもお腹空いたんでしょう？」

すごく心配してるような目で彼女が見つめてきた。１０歳も年が下なのに、俺よりもしっかりしている。ここは一つ、頼れる男の姿を見せてやらなければ。

「俺が飯作るよ」

彼女をじっとさせるためとはいえ、とっさに言ったこの言葉にひどく後悔した。普段料理なんてしないから、上手いとか下手とかそんなレベルの話じゃない。

「じゃあお言葉に甘えて…楽しみにしてます」

きっと彼女に言ってしまった同じような言葉は、こんなにも相手にプレッシャーをかけるものだったんだろう。彼女が息絶えないか…心配だ。

せめて買って来ると言っておけば良かったとスーパーの中でつくづく思った。

―86―

温かい。心地良いぬくもりが体全体を包む。

起きてるのか寝てるのか自分でもわからないくらいぼんやりしている。意識はかすかにあるが、まだ目を開けることは出来ない。

今度はぬくもりを額に感じる。

「んん…」

それが何だか良くわからないけど、とりあえず今は起きる気になれない。寝返りを打って再び眠ろうとする。

するとふんわりと身体が包まれた。それは布団でも服でもなく、彼の腕だった。

「んー…」

「おはよう」

彼はきっと私が起きるのをずっと待っていたんだろう。そう思って重たい身体を懸命に彼の方へ向ける。

「おはようございます」

「起こしちゃったね。ゴメンゴメン」

そう言って彼は私の頭にこつんと額をつけ、包み込むように私を抱き締めた。彼のぬくもりとやすらぐ匂いが伝わってくる。

『愛してるよ』

その言葉をあんなに言われたのは今まで生きてきて初めてだった。夢の中でも愛の言葉をささやいてくれた彼の顔を、いまだに直視することが出来ない。

結局私達が完全に起きたのは１１時頃だった。朝昼兼用でご飯を食べようという事で出かけることになったが…正直しんどい。

それを顔に出してしまったのか、彼が運転席から心配そうに顔を覗き込んできた。

「大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

彼に気を遣わせないように懸命に笑顔を作った。だがそれはむしろ逆効果で、彼は心なしか悲しそうな顔をした。

何だか彼に迷惑を掛けてばかりで、いたたまれなささえも感じる。

「やっぱ飯食いに行くのやめよう」

彼はそう言ってシートベルトを外した。私はシートベルトを着けたまま動かない。

「私なら大丈夫なので」

「ダメ、ゆっくりしてて。夜ドライブ行けなかったら困るし」

彼はそっと私の右手を取った。その真っすぐな瞳と視線を合わせる。

「でもお腹空いたんでしょう？」

「俺が飯作るよ」

彼が即座に答えた。私のことを想ってくれているのが痛いほどに伝わって来て、心がじんわりと温かくなってくるのがよくわかる。

「じゃあお言葉に甘えて…楽しみにしてます」

この時彼に見せた笑顔は、さっきの精一杯の笑顔とは全く別のものだったに違いない。

彼が苦労していたら、せめて手伝いだけでもしよう。

―87―

あれから数日が経過した。彼女は今実家に帰っており、またしばらく会えない日が続いている。

結局あの日はてこずっている俺を見兼ねて、彼女が腕を振るってくれた。

つくづく頼りない男だなあと思う。彼女より１０年も長く生きているのに、彼女の方が出来ることが多々ある。

そんな俺は、気を取り直して今日も元気に出勤している。

今日は大串美樹という彼女と同い年の生徒を担当することになった。彼女との楽しかった教習が頭をよぎる。今のところ彼女に勝る人は出て来ていない。

「こんにちは、運転席どうぞ」

「はい」

少女はいそいそと運転準備を終え、車を発車させた。

いつものように生徒と話題を探す。

「…大串さんって三國大なんだ」

「はい」

彼女との初めての会話を思い出しながら会話を続ける。あの時はこんな関係にまで発展するなんて想像だにしなかった。

「部活とか何やってるの？」

「交響楽部です」

思わず教習原簿を握り締めたまま振り返った。実は彼女も交響楽部なのだ。なんでもヴィオラをやっているとか。

「香西さん知ってるよね？」

その問いに赤信号で停車させた少女がこちらを向いた。

「知ってますけど…もしかして内村さんですか？薫が言ってた」

「なになに、香西さん何って言ってたの？」

すごく気になる。何と評されているんだろうか。そして…この少女

は俺達の関係を知っているのだろうか。

少女は青信号にかわってアクセルを踏んでから、前を向いたまま答えた。

「いじめられるって言ってました」

あながち間違いではない。彼女をいじめ…というかいじり続けたのは確かだし、今だっていじっている。でもそれはちゃんと愛がこもってるし、何より…

「だって香西さんいじりやすいんだもん」

少女は笑ったあと一呼吸置いて話し始めた。

「でも薫がそんなにいじられるの珍しいですよ」

「あ、そうなの？」

「周りからすごい頼れるから…私なんか頼りっぱなしで申し訳ないくらい」

自分の彼女がこんなにも誉められるなんて、何だか誇らしい。

だがとりあえず彼女をネタに会話を続けた。

「香西さんってさ、オカンみたいだよね」

「お母さんみたいに面倒見良いですよ。
色々お世話になってるから、そろそろ薫も報われて良いくらいです」

実は報われてるんだよ、なんて言いかけたが、ここで変な話をするのはマズイ。

「そうだね、自分のために時間割いて欲しいよね。
きっと幸せになれる子なんだから」

あたかも自分に言い聞かせるかのようにつぶやいた。

―88―

昨日から実家に帰って来た。慌ただしい毎日やストレスを感じるものから遠ざかり、穏やかな日を過ごすことが出来る。

あの日、彼は料理に苦戦していて危うく手を切るところだった。結局私が作ることになった…といってもカレーだったのでかなり手抜きだったけども。

彼が私のためにこんなにも懸命に何かをしてくれたのがくすぐったいほど嬉しかった。あの日の事を思い出すと、今でも笑みがこぼれる。

地元に帰って来たのもあって、ようやく運転免許を習得した。これから彼とのデートの時は私も運転することが出来ると思うと、次はいつになるかすごく楽しみだ。

真っ先に彼に連絡したかったが、今は昼間ということもあってあとで電話をかける事にした。どうせならメールよりも電話で彼の反応を知りたい。

試験場からちょうど帰ってきた頃に着信があった。美樹ちゃんから

だ。

「もしもーし？」

『薫ー！会いたいよー！』

「実家から帰ったらデートでもしようか」

美樹ちゃんは結構悩みとかストレスとかを溜め込んでしまうタイプなので、私がたまに話を聞く形を取っている。詮索はしたくないから決して自分からは聞いたりしないけど。

そんな彼女が電話なんて、よっぽど何かがあったのだろうかと心配になる。

「何、何かあったの？」

『実はさ、薫の担当してる内村さんに今日当たって』

少し拍子抜けした。何だ、そんな事か。

悩み事ではなかったから一安心したものの、何か余計なことを言われてないかが不安になる。

「マジか…何か言われた？」

『いや、特には…交響ですって言ったら香西さん知ってるよね？っ

て聞かれた』

同じ部活なら知ってて当然じゃないか、と心の中で突っ込む。

「何か変なこと言ってなかった？」

『うーん…あ、オカン言うてたよ』

携帯を耳に当てたままがっくりと膝をついた。なんて事を…

「ひ、どっ！ひどい！私まだ二十歳なってないし」

『えー、でも薫お母さんみたいだし』

みんな口をそろえて言う。何を…何を言うんだ。男性経験なんて皆無に等しいのに、何がオカンだ。お嫁さんになれる保障でさえもないのに。

「…次会ったら内村さんに文句言いまくってやる」

『あはは、頑張って！』

そういえば、とふと思う。美樹ちゃんに彼との関係を秘密にしてて

良いんだろうか。

「…あの、さ」

『うん？』

止めておこう、彼との話は。何でも相談し合うと約束した仲だけど、これればかりはやっぱり話せない。

「何かあったらいつでも言ってね。力になれるかわかんないけど話聞くから」

『ありがとう。薫大好き！』

いつか、出来れば早く彼のことを話したい。

―89―

ちょうど家に帰り着いた頃、彼女から着信があった。

「もしもし」

『あ、もしもしー。免許取れましたよ！』

これは何とも喜ばしいことだ。彼女が彼女なだけに…

「まさか取れるとは思わなかったよ。よく頑張ったね」

『当たり前でしょう、私を誰だと思ってるんですか』

「え？方向オンチの薫さま」

電話の向こうで彼女がむぅ、と唸った。今目の前にいたら面白かっただろうにと思う。

「あ、そうそう。今日交響の子に会ったよ」

『知ってます。聞きました』

あの子と彼女は仲が良いみたいだから、直接聞いていたのだろう。

「で、何て言ってた？」

『秘密です』

「何でよ」

彼女は答える様子もなく黙っている。

「ねえ」

『…すみませんね、まだ二十歳にもなってないのにオカンで』

それか、話されたのは。訂正するつもりはないが、彼女の機嫌を損ねたなら機嫌取りをしなくては。

「変な意味じゃないんだって。ほら、しっかりしてるじゃん、面倒見も良いらしいし」

『私まだ１９ですよ？』

「老け顔？」

『さっ、いてー！もう口ききません』

本気で怒ってないとわかってるからこそ言えることであり、もちろん冗談に決まっている。

「いや、俺だって高校の時からずっとこの顔でさ、でもおかげで今は若く見られるよ」

彼女からの返答はない。今彼女が目の前にいないのがもったいないと思った。

「ごめんって、怒らないで？」

何か言いたげにうー、と唸り、口火を切った。

『じゃあ、今度ドライブに連れてって下さいよ。私が運転するから』

「は？やだよ、補助ブレーキないもん」

『…もう知らない』

完全にすねてしまったようだ。彼女があまりに面白くて、可愛くて、笑いがいっこうに止まらない。

「香西さんドMなんだもん、仕方ないじゃん」

『仕方なくない、このドS！』

彼女の精一杯の抵抗があまりにおかしい。３ヶ月前は赤の他人だったなんて信じ難い雰囲気だ。

「わかったわかった、今度俺連休取れるからさ、旅行にでも行こうよ。そしたら心置きなく乗れるし」

『…お金ないです』

「宿代だけで良いよ、車だし」

『むー…』

こんなせっかくのチャンスを逃してしまったら、男とこの名が廃る。

「まだ春休みでしょ?行こうよ。
行かないんだったらもう車乗せないから」

『セコい!良いです、レンタカー乗るから』

「薫」

この一言で、色々と抵抗していた彼女がついに折れた。

『っ、わかりましたよ…』

多少強引ではあったが、結果オーライだ。ツンデレな彼女はこうでもしないとOKをくれない。

「温泉行こうよ、癒されるし」

『格安でお願いします…！』

「はいはい、任せなさい」

パソコンを持ってない俺は、情報誌をぱらぱらとめくりながら笑った。

「ちなみに二泊三日で大丈夫？」

『三連休取れたんですか？』

「そうなんだよ、今まで頑張ってきたからね。月曜から三日間」

『今度ですよね？なら大丈夫です』

「了解。良い所調べとくから」

電話の向こうからやわらかな声が響く。

『お願いします。楽しみにしてますね』

―90―

夜9時半を回ったところで彼に電話をかけた。多分この時間なら家に帰り着いているだろう。

『もしもし』

「あ、もしもしー。免許取れましたよ！」

『まさか取れるとは思わなかったよ。よく頑張ったね』

前半部分は聞こえなかったとして、誉められたことを素直に喜ぶ。

「当たり前でしょう、私を誰だと思ってるんですか」

『え？方向オンチの薫さま』

何となく言われる気はしていた。私達の関係がどんなものであろうと、この構図に変わりないことに苦笑してしまう。

すると彼はそうそう、と言って別の話題を持ちかけてきた。

『今日交響の子に会ったよ』

美樹ちゃんのことだ。この人他に何を言ったんだろう…。

「知ってます。聞きました」

『で、何て言ってた？』

「秘密です」

『何でよ』

素直に喋ったら何か負けな気がする。
とりあえずオカン呼ばわりされたことを抗議しなければ。

『ねえ』

「…すみませんね、まだ二十歳にもなってないのにオカンで」

まだ十代なのに『私まだ若いんですけど』とか言わなきゃいけないのは正直辛い。

『変な意味じゃないんだって。ほら、しっかりしてるじゃん、面倒見も良いらしいし』

「私まだ１９ですよ？」

『老け顔？』

この人は『親しき仲にも礼儀あり』という言葉を知らないのだろうか。Sの人ってこんなにもずけずけと言ってくるのだと痛感した。

「さっ、いてー！もう口ききません」

彼が大爆笑して話す。

『いや、俺だって高校の時からずっとこの顔でさ、でもおかげで今は若く見られるよ』

そんな事言われたって嬉しくないし、フォローにも聞こえない。どうせ私は老け顔ですよ。

完全にすねてしまった私の機嫌を伺うように彼が話し掛けて来た。

『ごめんって、怒らないで？』

ならばアレでいくしかない。私にとっての切り札だ。

「じゃあ、今度ドライブに連れてって下さいよ。私が運転するから」

『は？やだよ、補助ブレーキないもん』

言われると思ったが、押して駄目なら引いてみろ作戦で、特別リアクションを取らないことにした。

「…もう知らない」

だがそれは何故か逆効果で、彼が再び笑い始めた。

『香西さんドMなんだもん、仕方ないじゃん』

「仕方なくない、このドS！」

彼は今までの中で一番と言えるほどの大爆笑をした。私は別に面白いことを言ったつもりはないのだが、彼に言わせれば私のすべてが笑いのツボらしい。

彼は軽く息を吐いて呼吸を整えた。

『わかったわかった、今度俺連休取れるからさ、旅行にでも行こうよ。そしたら心置きなく乗れるし』

「…お金ないです」

『宿代だけで良いよ、車だし』

悩む。お金がないことは事実だが、だからと言ってその他資金を彼に出して貰うわけにはいかない。

『ねえ、春休みでしょ？行こうよ。
行かないんだったらもう車乗せないから』

人がせっかく真剣に悩んでるのに、それをへし折るかのような言葉

には反論するしかない。

「セコい！良いです、レンタカー乗るから」

『薫』

今、自分でもドキッとしたのがわかった。ズルい、いきなり名前で呼ぶなんて反則だ。

「っ、わかりましたよ…」

電話の向こうでは彼が良かった、と言った。

『温泉行こうよ、癒されるし』

「格安でお願いします…！」

『はいはい、任せなさい』

彼の笑った声が聞こえてきて、何だかぽかぽかした気分になる。

『ちなみに二泊三日で大丈夫？』

「三連休取れたんですか？」

『そうなんだよ、今まで頑張ってきたからね。月曜から三日間』

スケジュール帳で予定を確認しながら答える。

「今度ですよね？なら大丈夫です」

『了解。良い所調べとくから』

「お願いします。楽しみにしてますね」

私はこの時、旅行がかなりハードなものになるとは思ってもみなかった。

―91―

腕時計をちらっと見る。時間は9時半を過ぎていた。

今日は待ちに待った月曜日だ。良い宿も見つけたし、温泉も堪能できるし、久しぶりにプライベートで車に乗れるし、もう最高だ。

ただ気になるのが彼女だ。

今日は9時集合なのに、彼女がまだ来ていない。いつもなら20分前には二人ともいるというのに。

すると大きなカバンを抱えた女性がバタバタと走って来た。他の誰でもない、彼女だ。

「ちょっと、30分遅刻ですけど」

「す、すみません…寝坊しちゃって…」

彼女が息を切らしながら答えた。

俺は彼女が事故にでも遭ったんじゃないかとすごく心配したのだ。

なのに寝坊なんて…お仕置き決定だ。

「よし、香西さんの運転は中止」

「は！？何でですか！」

「遅刻したからに決まってるでしょーが」

いつものようにむぅ、と唸った彼女は何も言わずに助手席に座った。

車を走らせること一時間、ようやく半分くらい経過した。先はまだまだ長い。

「今どこかわかる？」

「いや、全然…」

笑ってしまった。確かに近所がわからない彼女が県外を知るはずがない。

「何がおかしいんですか」

「え、存在が」

「良いです、もう口きかない」

彼女はこうやってすぐいじける。可愛いといえば可愛いが、一言で言えば面白い以外の何物でもない。

「ごめんって、変な意味じゃないんだよ」

わざとらしく窓の外を見ている彼女の頬を掴んだ。運転中なので、どんな顔をしてるのか見ることは出来ないが。

「むああ！」

彼女が全力で振り切った。軽くつかんでいたが、今の勢いでは痛いはずだ。

「何するんですか！仮にも彼女ですよ！」

「だってー」

賑やかな道中だ。これが三日続くのかと思うと楽しみでしょうがない。

目的地に着いた頃、彼女が突然にょーん、と言い出した。あまりの可愛さにあれやらこれやらしたくなるが、時間も時間なだけに我慢しなければ。

「何、どうしたの」

「いや、着いたなぁって」

確かに時間が結構かかってしまった。座りっぱなしで正直きつかっただろう。

「よし、じゃあ荷物を置いて街を見て回ろうよ」

「そうですね」

車から下りてそれぞれの荷物を持って旅館へと向かうと、入り口には中年くらいの女将が立っていた。

「内村様ですね、お待ちしておりました」

「ちょっと街を見て来ます。荷物お預かりして頂いて良いですか？」

「もちろんです、夫婦水入らずでごゆっくり楽しんで来てくださいませ」

思わず彼女と目を見合わせた。

夫婦って…俺達がか？確かに俺は年も年だから、次に付き合う人は結婚も視野に入れてないといけないとは思ってたし、でも彼女は１０歳離れてて、でも彼女に勝る人は出て来そうもなくて、

「内村さん？」

彼女の言葉に我に返る。彼女の方に目をやると、少し不思議そうな顔をしていた。

「どうしたんですか？」

「いや、何もない…」

そうだ、今日渡そう。バレンタインのお返しに買ったプレゼントを。

―92―

最悪だ、時計は待ち合わせ時間から２０分過ぎた時間を指していた。

昨日の夜、元彼から電話がかかって来た。中学以来の連絡のため、どうしたのかと電話に出た。どうやら一浪して三國大に入学したらしい。

電話が終わったのが４時だったため、仮眠程度にしようと思っていたのにこのザマだ。

簡単に身支度を済ませて下山駅まで全速力で走る。私の姿を見つけたらしい彼は、笑いながら腕時計を指差していた。

「ちょっと、３０分遅刻ですけど」

「す、すみません…寝坊しちゃって…」

「よし、香西さんの運転は中止」

「は！？何でですか！」

「遅刻したからに決まってるでしょーが」

わかってる。３０分くらい待たせたならそんなこと仕方ない事だ。
でも何か…素直に従いたくない。

「むぅ…」

一時間くらい経っただろうか、彼が眠気覚ましのコーヒーを飲みながら尋ねて来た。

「今どこかわかる？」

わかる訳ないじゃないか。ナビをこれでもかというくらい凝視する。

「いや、全然…」

彼がいつものように声を上げて笑った。私は今、別に面白いことを言ったわけでもしたわけでもない。

「何がおかしいんですか」

「え、存在が」

「良いです、もう口きかない」

「ごめんって、変な意味じゃないんだよ」

じゃあどういう意味なんだ。普通彼女に『存在がおかしい』なんて

言うだろうか？

いじけること数秒、突然彼が右側の頬を掴んで来た。右頬ばかりが伸びていきそうな気がする。

「むあああ！」

全力で彼の手を振り切ったが、かなりひりひりする。頬をさすりながら彼の方を向いた。

「何するんですか！仮にも彼女ですよ！」

「だってー、香西さんドMなんだもん」

そればっかりだ。本気で嫌がってない辺り否定出来ないので、何だか悔しい。

やっと目的地に着いた。助手席で体を伸ばす。

「にょーん」

彼がこっちを向いたのではっとした。美樹ちゃんの口癖が移ってしまっている。

「何、どうしたの」

「いや、着いたなぁって」

彼が頭を撫でながらそうだね、と言った。この甘い雰囲気が私には似付かわしくて何か落ち着かない。

「よし、じゃあ荷物を置いて街を見て回ろうよ」

「そうですね」

彼の後ろについて玄関へと向かうと、優しい笑顔が印象的な女将が私達を待ってくれていた。

「内村様ですね、お待ちしておりました」

「ちょっと街を見て来ます。荷物お預かりして頂いて良いですか？」

「もちろんです、夫婦水入らずでごゆっくり楽しんで来てくださいませ」

思わず彼と目を見合わせた。

夫婦って…私達の事だろうか？つい苦笑してしまった。

「夫婦じゃないですよ」

「あら、これは失礼。では恋人同士でしょうか？」

何だか恥ずかしくて、照れながら答える。

「ええ、まぁ…ねぇ、内村さん？」

彼の方を振り向くと、眉間にしわを寄せて何やら考え事をしている。

「内村さん？どうしたんですか？」

「え？あ、いや、何もない…」

何もないことはないんだろうけど…あえて聞かないでおこう。

―93―

風情のある街をぶらぶら散歩すると、必ずお店の人に言われるのが『若い奥様ですね』という言葉だ。

彼女は気に留めるつもりもないのか、その度に違いますよ、と笑い飛ばした。

旅館に戻って来て、畳の上に寝転ぶ。何だろう、何かもやもやして動く気にならない。

「大丈夫ですか？」

彼女がひょっこりと覗き込んで来た。この前オトコというものがどんなものかを教えたばかりだというのに、無防備にも程がある。

警戒されて近付けないよりは良いか、と思い、彼女の腕をぐいっと引っ張った。

もちろんというか何というか、彼女はそれによってバランスを崩し、俺の胸の上になだれ込む形になった。小さな肩を抱き寄せて目を閉じる。

「えーっと、どうしたんですか？」

明らかに彼女は状況について来れていなかった。ため息が出てきてしまう。

「あのさぁ、こうやって二人で旅行に来てるわけじゃん。何とも思わないわけ？」

彼女は俺の上でもそもそと動きながら答えた。

「え？楽しいですよ」

ダメだ、彼女にとって俺が初めてだから何もわかってないんだ。

「そうじゃなくて」

そう言って彼女の唇を強引に奪った。彼女の身体が強ばっているのがわかる。

惜しむかのように彼女の唇から離れた。身体を起こして二人並んで座る形をとる。

「こっちの意味です。『奥さん』とか言われても意識しないわけ？」

彼女は顔を真っ赤にしてうつむいき、何も喋ろうとはしない。俺だけがドキドキしてるみたいで、何だかあほらしくなってくる。

「ねえ、」
「だからっ、」
強い口調で切り出してきたのでびっくりして顔を上げた。彼女は目を潤ませながら、上目で俺を見つめている。
「意識しないように笑ってごまかしてただけです…」
ヤバイ、可愛すぎる。ちょっといじめすぎたかな、と思った俺は、今度はそっと額に唇を寄せた。
「ゴメンゴメン、本当に俺好かれてるのかなって不安になったからさ」
この世には若くてかっこよくて何でも出来る人なんてたくさんいる。１０歳も離れてたら目移りされたっておかしくない話だ。
そんな俺の考えが伝わったのか、彼女が俺の胸に飛び込んで来て、背中に手を回した。
「新一さん以外の人なんて好きになるわけないじゃないですか、バカ」

この後どうなったかなんて言うまでもない話だ。

―94―

風情のある街をぶらぶら散歩すると、必ずお店の人に言われるのが『素敵な旦那さんですね』という言葉だ。

気恥ずかしさを紛らわすために、わざとらしく笑い声をあげながら違いますよ、と言い続けた。

旅館に戻って来ると、彼が畳の上に寝そべった。彼の顔を覗き込むと、だるそうな、やる気のなさそうな顔をしていた。

「大丈夫ですか？」

彼がゆっくりと私の方へ視線を向け、しばらく動かなくなった。

心配するのも束の間、いきなり彼が右腕を引っ張って来た。あまりの力強さに体勢を崩し、彼の上に覆いかぶさる形になった。大きな手が私の肩を包む。

耳にはっきりと彼の胸の鼓動が届く。それを聞いてドキドキが増していくのがわかった。

とはいえ、今どういう状況で、今から何が起こるかなんて全くと言って良いほどわからない。恐る恐る彼に尋ねた。

「えーっと、どうしたんですか？」

彼がため息をつく。

「あのさぁ、こうやって二人で旅行に来てるわけじゃん。何とも思わないわけ？」

「え？楽しいですよ」

いかにも『楽しくないです』みたいな顔をしてしまったんだろうか。それで彼に嫌な思いをさせたんだろうか。

頭がぐるぐるしてきた。

「そうじゃなくて」

あれこれ考えている私をよそに、彼が私を強く抱き締め、次の瞬間には目の前に彼の顔があった。

数秒経ったあと、彼が私から離れた。彼が身体を起こしたので私もそれに続き、彼に寄り掛かるように座った。

「こっちの意味です。『奥さん』とか言われても意識しないわけ？」

顔が熱くなるのがわかる。意識しまくってるに決まってるじゃないか。

「ねえ、」

「だからっ、」

少し苛立ったような彼の口調に怯えつつ、それでも私の気持ちが伝わって欲しいと思う。私の頭の中は、いつも彼でいっぱいなのだ。

「意識しないように笑ってごまかしてただけです…」

彼は目を見開いてびっくりしていたけど、すぐにふっと笑い、私の額にそっと口付けた。

「ゴメンゴメン、本当に俺好かれてるのかなって不安になったからさ」

こんなに私を必要としてくれる人なんてそうはいない。そんな彼を好きにならない訳がないじゃないか。

彼の胸に飛び込んで、すがりつくかのように抱きついた。

「新一さん以外の人なんて好きになるわけないじゃないですか、バカ」

気付けば私はさっきとは真逆の体勢になっていた。

―95―

日も落ちて辺りはすっかり暗くなってしまった。身を起こして部屋にあった浴衣に着替える。

「浴衣着ないの？」

「ん…」

彼女はそう言ってぱたぱたと部屋の奥に行ったきり戻って来ない。

その原因は少なからず心当たりがある。間違いない、部屋が明るかったからだ。

俺としてはむしろいつもとは違った可愛らしさを見ることが出来たから満足だったが、彼女にとってはそうではないのだろう。

『新一さん』

切なそうに何度も呼んだ彼女の声がまだ耳に残っている。こんな恋愛をしたのはホントにいつ以来だろうか…。

気付けば彼女は浴衣を着て障子の影からじーっと俺を見ていた。目が合った瞬間にさっと隠れてしまった姿は、小動物以外に何と表現出来ようか。

ついつい笑みがこぼれて来る。

「薫、こっちにおいで」

そう言っても出て来ないだろうと確信した俺は、そっと障子の方へ向かった。まるで獲物を狩りに行く獣のようだと心の中で苦笑してしまう。

障子の奥を覗こうとした瞬間、彼女が同じタイミングで顔を出した。出会い頭に衝突してしまうかのようにお互いがびっくりする。

それと同時に彼女の両手首を掴んだ。彼女の身体がびくっとしたのがわかる。

「捕まえた」

「バカップルじゃないんですから…」

そう言いながら顔を真っ赤にさせてうつむいた。肩まで伸びた髪を結っていて、いつもと違う雰囲気がまた色っぽい。

彼女を抱き締めて頭を撫でる。ほのかにするシャンプーの香りと汗の匂いが入り交じっていて、当然の事だが『彼女がここにいてくれ

る』という実感が湧いてくる。

額にそっと口付けをして微笑んだ。

「よし、温泉に行こう」

良い歳して若い子と手を繋いで歩くなんて正直恥ずかしい気もするが、彼女の小さくて冷たい手を握ると、彼女を守っていかなくてはという気持ちになる。さっきも俺の腕を必死に掴んでいた彼女の手はか細くて、俺が守らなければ消えてしまいそうな気がした。

そしてそれを身をもって実感する事になるなんて、その時は想像さえも出来なかった。

この幸せな時間がずっとずっと続けば良いと願う。

「薫」

最愛の人の名前を呼んだ。彼女はそれに答えるかのように笑顔を見せた。

「…読んでみただけ」

「良い歳してやめてくれません？バカップルごっこ」

そう言いながら彼女は声を上げて笑った。

世界で一番、大切なひと…。

―96―

気付けば周りはすでに暗くなっていた。彼が立ち上がって着替えはじめる。

「浴衣着ないの？」

「ん…」

布団から出てない状況のまま彼から浴衣を受け取り、それを軽く羽織って障子の向こう側へと向かった。

今、この前以上に彼の顔が見れない。確かにこの前よりは楽ではあったが、何せ恥ずかしい姿を見られてしまったのだ。

浴衣に着替えおわって、覗くような感じで彼の様子をちらっと見た。浴衣姿が大人の魅力を増していて、ついつい見とれてしまう。

『薫』

いつもいじってくるときとは全く違う、全てを包んでくれるような

声。数時間たった今でもドキドキするなんて、きっと私は依存症になるんだろう。

あれこれ考えていると、不意に彼と目が合った。今までのことが一瞬にして鮮明に蘇り、思わず身を隠してしまった。

ダメだ、早くクールダウンしないと、せっかくの旅行を台無しにしてしまう。

無駄だとはわかっていても、顔をぱたぱたと扇ぐ。早く、早く普通に戻らなきゃ。

すると、彼の低くて優しい声が部屋に響いた。

「薫、こっちにおいで」

名前を呼ばれただけなのに心拍数が上がる。あの時から名前で呼ぶなんて卑怯すぎる。

そんな彼には勝てなくて、そーっと障子から顔を出した。

しかし私の予想に反して、彼はすでに目の前にいた。正面衝突しそうになってびっくりする。

それと同時に彼が両手首を掴んで来た。あの時と一緒…顔が一気に熱くなるのがわかる。

「捕まえた」

「バカップルじゃないんですから…」

そう言って私は顔を伏せた。正直今までバカップルはＫＹだとか思っていたけど、どうなんだろう…さすがに外ではしないから大丈夫か。

そんな私をよそに彼はふわっと私を包み込み、額に唇を寄せた。噴火するんじゃないかと言いたくなるくらい真っ赤になっていくのが自分でもわかる。

「よし、温泉に行こう」

彼はそう言って優しく微笑みかけた。

手を繋いではいるけど、彼が私の前を歩いているので、まるで手を引かれて歩く子供のようになっている。

…この大きくて温かい手がいつも私を包み込んでくれるんだ…。

嬉しいような恥ずかしいような気持ちで彼の手を握り返した。彼は少しだけ後ろを振り返り、笑顔で私の歩調に足並みを合わせてくれた。

大好きだ、大好きなんだ。
こんな気持ちが溢れてくるなんて初めてと言っても過言じゃない。

この幸せな時間がずっとずっと続けば良いと願う。

「薫」

最愛の人が名前を呼んでくれた。私はあえて何も言わず、彼に笑顔だけを向ける。

「…呼んでみただけ」

「良い歳してやめてくれません？バカップルごっこ」

そんなことを言いつつも、彼の左腕に抱きついた。

どうかこの時間が永遠でありますように…。

―97―

俺は結構長風呂をする派だが、風呂から上がってきても彼女の姿がまだない。

待つ事数分、彼女がコーヒー牛乳のビンを持ってぱたぱたと出て来た。まだ乾いてないのだろう、結った髪から滴が落ちて来て何だか色っぽい。

「はい、これ。いりますか？」

彼女がビンを差し出す。彼女の手から受け取った冷たいそれは、火照りすぎた身体を良い具合に覚ましてくれる。

「ん…ありがと」

はい、と言って彼女にビンを渡した。もちろんというか何というか、そこには一滴たりとも残っていない。

彼女がビンを奪い取って猛抗議してきた。

「ちょっ、と！全部飲んで良いなんて一言も言ってないし！」

「『いりますか？』って言ったじゃん」

「全部飲んで良いなんて言ってません」

「全部ダメとも言ってないよね」

いつものようにむぅ、と唸った彼女だが、浴衣を着ていていつも以上に大人びて見えるため、そのギャップにまたぐっとくる。

そんなことを思っている俺が２９歳なんて…人生まだまだ捨てたもんじゃないと思う。

２人で浴衣のまま下町を歩く。風情たっぷりで、ずっとここにいればな、とふと思う。

すると俺達の横を二歳くらいの子供がよちよち歩いていた。その行く先を見ると、若い夫婦が手を広げて待っていた。

その姿を見ながら、俺の未来図がこうであって欲しいと想像する。嫁として横にいるのは言うまでもない、彼女だ。

「わー、可愛い…」

彼女が目を輝かせながら子供を見つめていた。俺はつい生唾を飲み込んでしまう。

「…欲しい？」

彼女が俺の手を握ったまま、え?、と言って振り返った。

「やだなぁ、連れて帰ったりしませんよ」

…何となく想定内ではあったが、彼女は本当に素でこんなことを言っているのか疑問に思う。

「お母さんが学生結婚で、大学四年の時にお姉ちゃんを産んだから、何かそういうの羨ましいなって」

あながち理解出来てなくもないみたいだ。これはＯＫサインを出しているのだろうか。

「何、誘ってんの?」

彼女はきょとんとして俺を見つめた。少し考え事をしたのか、返事に数秒かかった。

「誰を?」

「俺を」

俺以外に誰がいるんだ、と聞きたくなったが、次の質問で何を考えていたのかわかった。

「どこに？」

…なるほどね。ただのオファーだと思ったみたいだ。あれだけ教えてあげたというのに、彼女は全くと言って良いほど理解してない。

ふっと笑って彼女を見つめる。

「あとで教えてあげる」

何もわかってない彼女は笑顔のまま、わかりました、と答えた。

―98―

私は元々お風呂が大好きで、温泉ともなれば露天風呂で３０分も過ごしたりする。
外の景色を眺めながら背伸びをした。あとでこんな良い所に連れて来てくれた彼に感謝しなきゃ。

そうこうしているうちに４０分も経過していた。さすがにまずいと思って慌てて湯槽から上がる。長くなってきた髪を結んで浴衣を着た。

のぼせた身体を覚まそうと、自販機にあったコーヒー牛乳を買ってみた。こぶりだけど、彼と半分にしても問題ない量ではある。

お風呂場から出てくると彼がすでに待っていた。ずいぶん待たせてしまったんじゃないかと慌てて彼に近寄る。

「お、来たね」

「はい、これ。いりますか？」

そう言って彼にビンを手渡した。
彼は何も言わずに笑顔だけを向け、ビンの蓋を開けた。

その時、彼がぐいーっとコーヒー牛乳を飲み干してしまった。私の分なんて一滴も残っていない。

彼は満面の笑みで空のビンだけを渡した。

「ん…ありがと」

「ちょっ、と！全部飲んで良いなんて一言も言ってないし！」

「『いりますか？』って言ったじゃん」

「全部飲んで良いなんて言ってません」

「全部ダメとも言ってないよね」

「む、ぅ…」

確かにそうだけど…そう言われてしまったら反論しようがない。

私はきっとこの先彼と喧嘩したとしても勝てないんだろうな、と痛感した。

2人でぶらぶらと下町を歩く。家族旅行の時とはまた違った感じで、何事も楽しい。

すると私の足元を二歳くらいの子供がよちよち歩いていた。ふとその子の行く先に目をやると、若い夫婦が笑顔で子供の到着を待っていた。

「わー、可愛い…」

私は子供とか、小さくてぷくぷくした感じのものを見ると目を奪われてしまう。この子も最近歩けるようになったばかりなのか、小さな足で懸命に歩いている姿がとにかく可愛い。

すると彼が突然手をぎゅっと握って来た。

「…欲しい？」

「え？」

思わず彼の方を振り返った。ぬいぐるみ感覚で連れて帰りそうとでも思ったんだろうか。つい笑ってしまう。

「やだなぁ、連れて帰ったりしませんよ」

でも切に子供が欲しいと思う。出来ればずっと可愛い時期のままで。

「お母さんが学生結婚で、大学四年の時にお姉ちゃんを産んだから、何かそういうの羨ましいなって」

大学二年になる今年、お母さんがお姉ちゃんを生んだ歳まであと2年だ。対抗意識があるわけじゃないけど、何だかつい比較してしまう。

彼は少し笑って言葉を発した。

「何、誘ってんの？」

「誰を？」

「俺を」

「どこに？」

コンサート？いや、まだずいぶん先のこと…映画？いやいや、『え』の字も言ったことないし…ドライブ？誘ったっけ？

彼がふっと笑ったあと、真っすぐと私を見つめた。

「あとで教えてあげる」

何であとで？そう思ったけど、ちゃんと教えてくれるだろうと期待してあえて聞かないことにした。

―99―

朝、小鳥のさえずる声で目が覚めた。せっかくの旅行だというのに、昨日は半日近く部屋にこもってしまった気がする。

温かい布団の中で身体をのばし、彼女の方を向いた。しかしそこに彼女の姿はない。

俺はガバッと起き上がって浴衣に着替えた。どこだ、どこにいるんだ。

すると彼女が部屋に入って来た。どうやら朝風呂に入りに行ってたらしい。どう考えたって逃げる事も連れ去られる事もありえないのに、かなり脱力した。

「何、どうしたんですか？」

彼女が笑いながら尋ねて来る。きちんと乾かしてある髪からシャンプーの香りがした。

「いや、朝起きたら横にいなくてびっくりしただけ。方向オンチのくせにいろんなとこに行こうとするよね」

「建物内で迷子になりません」

「この前迷ってたくせに」

そう言って彼女の髪をくしゃくしゃっとした。彼女は慌てて手ぐしで髪をなおす。

「何するんですか！」

「だって可愛かったんだもん」

ほんの冗談で言ったつもりだったが、彼女はぴたっと手を止めて顔を赤らめた。昼も夜も素直な反応が可愛らしくて仕方がない。

「よし、じゃあ朝飯食って出かけようか」

ゆったりとした雰囲気で朝飯を食ったあと、洋服に着替えて外出の準備をした。だが彼女が服を持って障子の向こうに行ったっきり出て来ない。

「何、いまさら隠す必要なんてあるわけ？」

障子の向こう側からは、むあー、とホントに小動物の鳴き声かのような声が聞こえてきた。

「もうちょい！待ってください」

ほどなくして彼女がひょっこり顔を出した。膝丈のふんわりとした青いワンピースが女性らしさを演出し、爽やかな印象を与える。

「お待たせしました」

彼女がえへ、と笑った。慈しむような目で彼女を見つめる。

「じゃあ出掛けようか」

「えーっと、ホントに良いんですか？」

そう言って彼女がシートベルトを着ける。今彼女がいるのは俺の車の運転席だ。

「運転させろって言っといてそれはなしでしょ」

「や、だって…」

俺は少しだけ彼女の方を向いてシートベルトを着けた。

「まあ…今回は補助ブレーキないから死ぬ目に遭うかもしれないけどね」

「ひどい…」

そう言いつつエンジンをかけた。懐かしい、まだ彼女が生徒だった頃を思い出す。

「はい、じゃあ準備が出来たら発車してください」

彼女が俺と一緒に笑った。一呼吸おいてフロントガラスを見つめている。

「はい」

ナビを起動させてないのはドライブを楽しむためだ。ホラ、旅にトラブルはつきものって言うじゃないか。

－１００－

目が覚めると私は彼の腕の中にいた。ぬくもりが全身に広がる。

ふと彼の顔を見ると、彼はまだ眠っていた。

いつも見てる彼とはまた違う顔…その整った顔立ちについ見惚れてしまう。

彼を起こさないようにそっと布団から出て浴衣に着替える。さすがに一度お風呂に入らなくては外に出られない。

痛む腰で何とか浴場へと向かった。今日、今ばかりはこの温泉の効用なんて信用出来なくて、看板を見て苦笑してしまった。

数十分後に満足気に帰ってきた私とは裏腹に、部屋に入ってみると彼がかなり慌てた様子で立っていた。私と目が合った瞬間脱力して布団の上に座り込んだ。

「何、どうしたんですか？」

彼のそばに座って袖を引っ張る。

彼は少し疲れたような顔で笑顔を見せた。

「いや、朝起きたら横にいなくてびっくりしただけ。
方向オンチのくせにいろんなとこに行こうとするよね」

どこまでバカにされるんだろう。こんな小さな旅館なんてどう考えたって迷い様がない。

「建物内で迷子になりません」

「この前迷ってたくせに」

反論の余地がない私の髪をくしゃっとした。せっかくといてきたのにもうぐちゃぐちゃだ。

「何するんですか！」

「だって可愛かったんだもん」

一生懸命動かしていた手を止めた。そんな恥ずかしい事さらっと言わないでよ…！
そんな考えが顔に出たのか、彼がふっと笑って頬を撫でた。

「よし、じゃあ朝飯食って出かけようか」

旅館の朝食を食べたあと、部屋に戻って支度を始めた。洋服を持って目の届かない所へ行く。

「何、いまさら隠す必要なんてあるわけ？」

明らかに足音がこっちに近づいて来る。確かにいまさらな事だが、何だか見られたくない。

慌ててワンピースを着るけど、焦っている時ほどスムーズな作業が出来なくて、逆にもたついてしまった。

「もうちょい！待ってください」

ようやく着替え終わって、彼の前にふらりと姿を現した。

「お待たせしました」

彼が目を見開いたまま何も言わないので、とりあえず笑ってみた。すると彼もやわらかな笑顔を返してくれた。

「じゃあ出掛けようか」

そう言って2人で部屋をあとにした。

ここまでは順調だったけど、今からまさかの運転になってしまった。実の所卒業検定以来乗ってないため、助手席に座るのが彼であって

もかなり不安だ。

「えーっと、ホントに良いんですか？」

「運転させろって言っといてそれはなしでしょ」

彼はそう言って苦笑した。確かにそうなんだけど、何せ彼の車だ。下手に傷つけることなんて出来ない。

「や、だって…」

「まあ…今回は補助ブレーキないから死ぬ目に遭うかもしれないけどね」

「ひどい…」

相変わらず意地悪な彼も、それを否定出来ない私も、何だかいろんなものがおかしかった。

彼は軽く息を吐いてちらっとこちらを向いた。

「はい、じゃあ準備が出来たら発車してください」

懐かしい、あの時と一緒だ。

彼と初めて会ったのは丁度三ヶ月前。目まぐるしく過ぎていった時間はかけがえのない宝物になった。

それを噛み締めるかのようにハンドブレーキをぐっと引いた。

―101―

あれはまさにジェットコースターのような恐怖心だった。

彼女の運転が卒検以来…つまり約二週間ぶりとあってかなり危なっかしかった。しかも今回は補助ブレーキなんてないもんだから、不安で不安で仕方がない。

しかしいざ乗ってみるとそうでもなかった。確かに相変わらず判断が遅かったり、速度が遅かったりはしたが、教習の時と同じ感じでとても楽しかった。

「はー…それにしてもカーナビないとあんなに苦労するんだね」

車から降りてドアを閉める。

「何でカーナビ消したんですか！訳わかんないことになっちゃったじゃないですか」

彼女が文句を言いながら車からおりて来た。それも仕方ない。県外という彼女にとってはある意味新大陸で、カーナビも使わずドライブしていたのだ。

「まぁでもカーナビあったって薫使いこなせないでしょ？あってもなくても一緒」

小動物が些細な抵抗としてむぅ、と唸った。俺がナビを起動して運転しなかったら、今頃ここに帰り着いてなかっただろう。

「そんなことないです、私カーナビ使えますもん」

「え？ここ来るとき理解してなかったじゃん。
地図が読めない薫さまはカーナビも使えないでしょ」

「…ドS」

彼女が戦法を変えて来た。めっきり弱い彼女につい笑ってしまう。

「だぁって薫ドMなんだもん」

そう言って耳元に顔を近付けた。彼女がぴくんっと動く。

「アレはドM以外のなにものでもない反応だったけど」

そうささやいて彼女から離れた。彼女の顔がみるみる赤くなっていくのがわかる。

「バカ！変態！」

部屋に戻っても彼女はわざとらしく無視して来た。ちらっとこっちを見てくる辺り本気で怒ってるわけではないらしい。

…ツンデレめ。そう思いながら彼女に近づいて行く。

そして、

「ひぁ！」

不思議な声を上げた彼女を無理矢理といわんばかりに捕獲した。一生懸命抵抗しているが、彼女はあまりに非力だった。

「ねぇ薫、何で無視するの」

「何でって…自分の胸に訊いてくださいよ」

「わかんないなぁ」

そう言って彼女の唇を奪った。彼女は声になってない声を発している。

「可愛い」

彼女から離れた俺はそのまま彼女を抱え上げた。さすがにここまで来ると、次に何が起こるのか理解出来るようになって来たみたいだ。

「ちょ…っ、と…！」

彼女を布団の上に降ろし、上着に手を掛けたその時だった。

邪魔をするかのように彼女の携帯が鳴った。彼女が携帯を手に取ると、電話だったらしい、耳に当てて話を始めた。

だが彼女の様子がおかしい。

「…奏…？」

眉間にしわを寄せたまま知らない名前を呼んだ。

―102―

車に揺られて約四時間、やっと旅館まで帰って来た。

行きがけに運転していたけど、途中でカーナビがついてないことに気付いて少々パニック。きっと彼が運転交代してくれてなかったら、軽く難民みたいになっていたところだった。

たまに彼からアクセル踏んで、とか早く右折してよ、とか言われたけど…まあよし。

それは置いといて、行きにある程度運転させておいていきなり爆笑し、『いや、やっぱり俺が運転するよ』と言ってカーナビを起動させたのは正直ずるい。

「はー…それにしてもカーナビないとあんなに苦労するんだね」

彼が車から降りながら喋った。

「何でカーナビ消したんですか！訳わかんないことになっちゃったじゃないですか」

自分だけ文明の利器使ってくれちゃって…。

そんな私をよそに、彼は笑いながら車の鍵をかけた。

「まぁでもカーナビあったって薫使いこなせないでしょ？あっても

なくても一緒」

「むぅ…」

確かにカーナビあったってよくわかんないし、彼も実際何度もカーナビを無視していた。でもここで負けたくない。

「そんなことないです、私カーナビ使えますもん」

「え？ここ来るとき理解してなかったじゃん。地図が読めない薫さまはカーナビも使えないでしょ」

私の無駄な意地っ張りは見事に砕け散った。

「…ドS」

「だぁって薫ドMなんだもん」

何が、どこが。いつも訊くけど明確な返事は返って来ない。彼は私が次に口にしようとしている言葉がわかっているからか、耳元に口を近付けてきた。いきなりの事にびっくりしてびくっとしてしまう。

「アレはドM以外のなにものでもない反応だったけど」

そうささやいて彼が離れた。アレって…アレ以外に何もない。余裕の笑みを浮かべている彼とは対照的に、私は顔を真っ赤にした。

「バカ！変態！」

部屋に帰ってもあえて彼と口をきかないことにした。彼がどんな反応をしてくれるのか楽しみだし、お詫びに何かしてくれるかもしれない。

ちらっと彼の様子をうかがうと、彼が視界から消えていた。

あ、れ…？

その時だった。

「ひぁ！」

びっくりした。気付けば彼は私の真後ろにいて、腰に腕を回している。彼の腕から逃れようとするものの、左手首を捕まれているためうまく動けない。

「ねぇ薫、何で無視するの」

「何でって…自分の胸に訊いてくださいよ」

彼はふっと笑って私をつかんでいる手の力を緩めた。

「わかんないなぁ」

逃げれる。そう思った矢先、目の前には彼の顔しかなかった。抵抗しても抵抗しても、それは無駄なことだってわかっている。

「可愛い」

彼がそう言って私を抱え上げた。さすがにもう次に何が起こるかわかる。

「ちょ…っ、と…！」

彼は何も言わず、ただ笑みを浮かべて私をそっと布団の上に降ろした。彼の手が伸びてきたその時、

私の携帯が鳴った。助かった、と思いながら携帯を手に取る。年齢的にもきちんと分別がある彼は、残念そうにしているものの、その

場に座って待機している。

名前も確認せずに電話をとった。

『…薫？俺だけど』

何で？この前話したばっかりだし、もう話すことなんてない

「…奏…？」

元彼が電話の向こうで急にごめんね、と言った。

―103―

彼女が相変わらず険しい顔で話を続けていた。若干言葉が濁っている。

『かなで』という名前からは男か女か判断出来ないが、とりあえずせっかくのこの機会を丸潰しにされたのは確かな事実だ。１０歳も年上だというのに、全然余裕がない。

歳が離れているからこそ、余裕がないのかもしれないが。

電話が長引きそうな雰囲気にイラッとし、立ち上がって彼女に近づいた。

「あのね、」

そう言った彼女の携帯を取り上げる。

「悪いけど、今お取り込み中だから」

男だろうが女だろうが関係ない。問答無用で電話を切って彼女に手渡した。

「なっ、何するんですか！せっかく話してたっていうのに」

彼女は強く反論したが、表情を見る限りだと本気で怒ってるわけではないらしい。

「だって何か困った顔してたし」

彼女は図星とわかる顔色になった。

「ねぇ、この人誰？」

彼女は黙って目を逸らした。言いにくそうな雰囲気を出している。

別に彼女を疑ってるわけではないので、そこまでは追求しない。追い詰められてしまった、という雰囲気の彼女の頭をそっと撫でる。

「ゴメン、嫉妬」

すると彼女が俺の袖をぎゅっと掴んだ。俯いているので顔は見えないが。

「…元彼です、中学の時の」

思わず眉をひそめた。以前『一人とだけ付き合ったことがある』という話を聞いたことはあったが、まさかこんな形で接触するなんて…。

ただ、そいつは彼女と『付き合う』という事をしただけなので、意地悪く言えば奴は元彼でも何でもなく、昔の友達だ。つまり、奴がどうあがこうが俺には勝てないだろう。

もっとも、相手がわかった途端に勝利を確信するのも情けない話だが。

彼女の頭を抱き寄せた。サラサラの髪の毛が俺の指の隙間から流れ落ちる。

「そっか」

「怒ったりしないんですか？」

彼女がびくびくしながら尋ねて来た。確かに俺は独占欲が強いが、あまり束縛はしたくない。

「別に…浮気じゃあるまいし、友達と電話くらい…」

ね?、と言って額に口付けをした。彼女の表情が次第に和らいでくる。

「せっかくの旅行なんだからさ、楽しもうよ。今日明日で終わっちゃうし」

「…そうですね」

彼女が腕を絡ませて来た。大丈夫、彼女が俺から離れるなんて有り得ない事なんだ…。

―104―

「何、どうしたの？」

『いや、何となく…元気かなって』

困る、今電話されてもかなり困る。かといって折角かけてくれた電話をないがしろには出来ないし、でもだからと言って彼を放置したままには出来ない。

『今何してんの？』

「えっと、今旅行中」

『へー…誰と？』

『彼氏と』

そう言えば済むものを、何故か口から出てこない。彼との関係に後ろめたさなんて何一つないはずなのに。

私は一体どうしたら良いんだろう。そう思った矢先、彼が私の手から携帯を奪い取った。今までに見たことのない剣幕に、怖ささえも感じる。

「悪いけど、今お取り込み中だから」

彼は担任と会ったときよりも刺のある口調で喋った。するとそのまま電話を切ってしまった。びっくりしていた私はそれを見てはっとする。

「なっ、何するんですか！せっかく話してたっていうのに」

彼の手から携帯を取って反論した。と言っても実際は助かった、という気持ちでいっぱいだった。

「だって何か困った顔してたし」

やっぱり彼は察してくれていたんだ。ただ、あの言葉が出てこなかった事に罪悪感を覚える。

「ねぇ、この人誰？」

追い打ちをかけるかのように彼が尋ねて来た。元彼との関係はもうとっくに終わっている。なのに何で？『彼氏と旅行に来てる』と言えなかった。

彼は私の全てを察してくれたのか、そっと頭を撫でてくれた。

「ゴメン、嫉妬」

胸が痛くなるのがわかる。私は嫉妬してもらえるほど彼に愛されているんだ。震える手で彼の袖を掴んだ。

「…元彼です、中学の時の」

誤解されたくない、だからこそ素直に言うしかない。
彼は少し険しい顔をしたが、すぐにふっと笑った。

「そっか」

「怒ったりしないんですか？」

うっすら涙を浮かべた目で彼を見た。彼は優しい笑顔のまま私の頬をさすった。

「別に…浮気じゃあるまいし、友達と電話くらい…ね？」

私の頬に彼の唇が落ちて来る。じんわりと心が温かくなり、自然と頬がゆるむ。

「せっかくの旅行なんだからさ、楽しもうよ。今日明日で終わっちゃうし」

「…そうですね」

そう言って二人で星空を眺めた。

―105―

帰り道は彼女が運転することになった。この前とは違ってカーナビを起動させる。

「はい、じゃあ準備が出来たら発車してください」

はい、と彼女が笑顔で言った。

昨日の夜に俺の腕の中で告げられた言葉…『しばらく新一さんとは会えません』

それは嫌われたからでも何でもなく、大学が始まってしまうからだ。休みも合わなくなるし、夜だって部活があるからそう簡単には会えなくなる。

隣に座っている彼女は家も活動場所も近いというのに、果てしなく遠くにいる感じがする。

「しばらく会わなくなるって事はさ、しばらく運転しないって事だよね」

「う、ん…はい、そうですね」

いつかと同じように前を向いたまま彼女が答えた。

「あーあ、折角感覚が戻って来たっぽいのにまた運転しなくなるんじゃ…俺もう乗らないからね」

「何でですか」

彼女がちらっとこちらを向いた。

「え、補助ブレーキないからだよ。今だって心臓バクバク」

彼女がハンドルを握る力を強めて、うー、と唸った。

この状態でさえまだいじり足りないと思う俺は、彼女の言うとおりドSなんだろう…何故かなんて今更説明する必要はない。

「たぶん部活の関係でたまに車乗りますよ」

「可愛そうな部員さんたち…」

「どういう意味ですか」

苦笑している彼女を眺めながら笑った。が、それはから笑いでしか

なかった。

気付いて欲しい。物凄く寂しいと思ってる事、ずっと傍にいて欲しいと思ってる事、そして、これからも一緒にいたいと思ってる事。

『私と仕事のどっちが大事なの！』

こんなセリフはドラマの中でだけだと思っていた。実際この言葉を投げ掛けられると訳が分からなくなる。

『…仕事』

そう行って俺は元カノと別れた。どうして同時に計りにかけられないものかけるんだ。

そして彼女も…同じ事を言って俺から離れていくんだろうか。

「…え、聞いてます？」

彼女の言葉にはっとした。折角旅行に来たのにこんなんじゃ楽しめない。最終日なんだからもっと楽しまなければ。

「ごめんごめん、どうしたの？」

「どっかインターチェンジ寄りませんか？昼食がてら休憩しましょう」

「良いよ」

ポケットに入っている渡しそびれた『プレゼント』を握り締めて、笑顔で答えた。

―106―

運転席に座ってまずした事はカーナビの操作。流れで私が運転することになったんだけど…正直不安だ。何せ上手にカーナビが扱えない。

結局カーナビ操作は彼が手際よく済ませてくれた。

「はい、じゃあ準備が出来たら発車してください」

「はい」

自動車学校を卒業した今でも、このやりとりが好きだ。あの時と全然変わらない、優しく語り掛けてくれる彼の声が心地良い。

昨日の夜、彼に『しばらく会えません』と言った時、彼が悲しそうな、苦しそうな顔をした。

もちろん彼に愛想を尽かすなんて有り得ないことだし、私だって会いたいとは思っている。でも仕方ない事なんだ…自動車学校と大学は時間帯が違う。

私と彼の家なんて離れてはいるものの、物理的に不可能な距離では

ない。なのに…彼の存在が遠く感じる。

そんな私の考えを知らないでか、彼はいつものように話し掛けて来た。

「しばらく会わなくなるって事はさ、しばらく運転しないって事だよね」

「う、ん…はい、そうですね」

「あーあ、折角感覚が戻って来たっぽいのにまた運転しなくなるんじゃ…俺もう乗らないからね」

彼がシートの背もたれに全体重をかけるように寄りかかった。

「何でですか」

「え、補助ブレーキないからだよ。今だって心臓バクバク」

誰が私に指導したと思ってるんだ。そんな私の攻撃は間違いなく無意味になるだろう。

「たぶん部活の関係でたまに車乗りますよ」

何度となくカーナビの指示を無視する私を横目に、彼が笑いながら

答えた。

「可愛そうな部員さんたち…」

「どういう意味ですか」

彼が大きく笑い、私もそれにつられるようにして笑った。

それと同時に、とてつもない不安に襲われた。

次に彼に会えるのはいつだろうか、彼は私のことを想っててくれるだろうか、活動場所が違うからと離れてしまわないだろうか。

『高校別になっちゃってうまくやっていける自身ないからさ…お互いのために別れようよ』

中学校の卒業式の日、元彼にこう告げられた。何故だか悲しいとも寂しいとも思わなかった。

『別に良いけど』

当時は学校が違うだけでうまくやっていける自身がないなんて、小さな男だと思った。

でも…彼にだけはそんな事言われたくない。

話題を繋ごうと彼に話を振った。教習の時とは違って余裕が出てきたので、少しだけ彼の方を向いた。

「そうそう、燃費の良い運転の仕方ってあります？」

ちらっと横目で彼を見ると、口元に手を当てたまま動かない。

「ねえ、聞いてます？」

彼がえ？、と言ってこちらを向いた。どうやら聞こえてなかったらしい。

「ごめんごめん、どうしたの？」

「どっかインターチェンジ寄りませんか？昼食がてら休憩しましょう」

「良いよ」

夜遅くて朝早かったし、彼は疲れがたまっているのかもしれない。初心者マークの着いた車を駐車場内で懸命に走らせた。

―107―

目が覚めてため息が出た。いつもの日常に戻ってしまった…彼女に出会う前と同じ、退屈な退屈な時間。

車やドライブ自体は好きだからまだ良かったものの、生徒との会話が彼女以上に盛り上がったりすることがない。

彼女も大学が始まってしまって、いよいよ本格的に会えなくなった。春休みの間は俺の家に来ていたが、学年も上がり、留学も視野に入れて勉強するらしく、しばらくそう簡単に会えなさそうだ。

「内村くん」

仕事に向かおうとする俺を校長が呼び止めた。優しい笑顔の辺り、呼び出されての説教ではないみたいだ。

「はい」

「確か7時限以降に教習入ってなかったよな」

「はい…6時限も入ってないですが」

「ではだね」

校長がすっと指差した。その先にあるのは段ボールだった。

「あの中に入ってるティッシュを15時から二時間ほど、三國大で配って来て欲しいんだよ」

正直面倒臭い。大好きな車から離れて、正社員なのにティッシュ配りなんて…。

だが彼女に会えるチャンスはある。もしかしたら、大学ではまた違う顔で過ごしているのかもしれない。

高ぶる気持ちを抑えて笑顔で答えた。

「わかりました」

先輩の指導員とティッシュを配ること一時間、俺のやる気だけが減っていく一方で、ティッシュはいっこうに減らない。

彼女にメールする暇もなかったが、時間を作ってでもメールしておけば良かったと後悔した。大学の入り口にいるとはいえ、この広い大学で、授業時間も知らない彼女とばったり会えるなんて不可能に等しい。

「古野ドライビングスクールでーす」

世間は冷たい。完全無視で素通りしていく学生がほとんどだ。

誰も受け取ってくれないティッシュを握り締めて、大学の中の方を振り返った。授業が終わったのか、生徒の波が押し寄せる。

そしてその中に姿を認める。春らしいフェミニンなコートをなびかせて、ゆっくり近づいてくる女性。

視力が悪いために細めていた目を徐々に開けた。笑顔で手を振ってくるのは他の誰でもない、彼女だった。

「薫…！」

「こんにちは」

彼女に会えると期待していただけに、この出会いはすごく嬉しい。自然と笑みがこぼれてくる俺に、彼女が笑顔を向けた。暖かい陽射しを浴びた彼女の姿が眩しい。

「久しぶりだね！元気？」

「おかげさまで」

「あ、そうだ。ホラ、これ持って帰ってよ」

持っていたティッシュを全部渡した。彼女が苦笑している。

「俺ずっと配ってんだけどさ、全然減らないんだよね。手伝ってよ」

「は？いやいや、私今からバイトですよ」

まだ5分も経っていない。なのにもういなくなってしまうのか。

「嘘ばっかり」

「いや、前電話で話したでしょ」

彼女が笑った。動くたびにゆれる髪の毛から良い香りがする。

「じゃあ今日電話するから」

「バイト終わるの１０時なんで、帰ってそのまま寝ちゃったらすみません」

大学の敷地に入らないように彼女に近づく。

「次会えるの、いつになるかな」

彼女は少し首を傾けてうーん、と言った。

「ゴールデンウィークは絶対どこか行きましょうね。それ以前に会える日があればまた連絡します」

そう言って彼女はバイトへと向かった。

―108―

だるい…とにかくだるい。布団をかぶり直してもそもそと動く。ついに大学が始まってしまった。

今年からは前に彼と約束したように自転車通学にした。初日から早速こけて怪我したというのは彼には秘密にしているけども。

彼に会えない日常なんて退屈以外の何物でもない。毎日電話したとしても物足りない。彼の顔が見たい、ただそれだけだ。

４限がぎりぎりに終わり、時計は１６時を指していた。今からバイトだと思うと気が重い。

駐輪場まで移動しながら携帯を見ると、美樹ちゃんからメールが来ていた。そして、そこに書かれた文字に衝撃を覚える。

『通用門に内村さんいるよ』

着信は一時間前にあったらしい。なので最初はかなり落胆した。

しかしもう一度読み返してみると、そこには『いた』ではなく『いる』と書かれている。

胸が高鳴っていくのがわかる。いるはずがない、そう思っていても、期待が裏切られるかもしれないとわかっていても、足は通用門へと向かう。

ゆっくりと、ゆっくりと、通用門に近づく。そしてそこに彼の姿があった。

何やらティッシュを配っているらしく、ちらっと差し出しては受け取ってもらえずに立ち尽くしている。やる気のない感じが遠くからでもわかり、思わず笑ってしまった。

私が近づいているのがばれないようにそっと近づく。が、彼は何を思ったのかこちらを振り返り、私の方を凝視した。彼に向かってひらひらと手を振ってみる。

「薫…！」

彼が長身の身体を完全にこちらに向けた。久しぶりに見る笑顔が疲れた私を癒してくれる。

「こんにちは」

「久しぶりだね！元気？」

「おかげさまで」

「あ、そうだ。ホラ、これ持って帰ってよ」

彼が手に持っていたティッシュを全部私の手に置いた。卒業生に渡しても仕方ないだろう、と思い苦笑する。

「俺ずっと配ってんだけどさ、全然減らないんだよね。手伝ってよ」

「は？いやいや、私今からバイトですよ」

「嘘ばっかり」

「いや、前電話で話したでしょ」

私だって彼がここにいるならバイトなんて行きたくない。だけどそういう訳にもいかなくて。

彼はそれを察してくれたのか、今日の陽射しのように温かな笑顔を作った。

「じゃあ今日電話するから」

「バイト終わるの１０時なんで、帰ってそのまま寝ちゃったらすみ

ません」

大学に入ってはいけないらしい彼がぎりぎりまで歩み寄る。私が行けば良いものを、何故かその時足が動かなかった。

この敷居が彼と私を隔てるものを表そうとは、この時想像だに出来なかった。

「次会えるの、いつになるかな」
「うーん…ゴールデンウィークは絶対どこか行きましょうね。それ以前に会える日があればまた連絡します」

「わかった。行ってらっしゃい」

彼は笑顔で手を振った後、こちらに背中を向けて健気に仕事を続けた。

―109―

だんだんイライラしてきた。これで今日6回目だ…。

昨日はバイトだったから仕方ないとはいえ、今日何故か彼女が電話に出ないし、メールの返信すらない。

10時を過ぎているし、部活が終わってないということももう寝ているということも考えにくい。

ため息を吐きつつももう一度電話をかけた。長いコール音の後、いつもと違う声色の彼女が電話に出た。思わず言葉を呑んでしまう。

『…もしもし』

「…どうしたの?」

彼女の声は泣き声に近かった。何故今傍にいてあげることが出来ないのか、歯痒くて仕方がない。

『何でも、ないです…電話遅くなって、すみません』

「良いよ別に。泣きたい時はいっぱい鳴きな?話もいつでも聞くし」

何があったのかは彼女の口から語られるまで聞かないでおこう。この判断が後に影響するなんて、この時は夢にも思わなかった。

1ヶ月ぶりに指名生徒が出来た。彼女が卒業してまだそのくらいしか経っていないのに少々驚いてしまう。
そんなことはさておき、これで俺の指名生徒は今三人になった。

教習原簿には『江原ゆかり』と書いてあった。三國大の4年生らしい。写真を見ると清楚なお嬢様タイプの美人な女性だ。

原簿を握り締めて配車へと向かう。女性は車の外で俺を待っていた。

「こんにちは、運転席どうぞ」

「はい」

女性は顔を少し赤らめて車に乗り込んだ。

そもそも、そもそもだ。俺とは今まで接点もなかったのに…何で俺を指名したんだろう。

彼女は初めて当たった時に『自分に合う』と判断したから俺を指名したんであって、この子と俺とは一段階から接触がない。

ヴィジュアルで選ばれたか？と思いながら発車の指示を出した。

「江原さんは三國大の４年なんだ」

はい、と女性が答えた。彼女の初めての教習と重なって、何故だか二人だけの領域に入られた気がして気分が悪い。

「この辺に住んでんの？」

「そうです。一人暮らししてて」

「へー…じゃあ自炊とかするんだ」

「良いお嫁さんになれるように頑張ってます」

失礼ながらばっさり斬ろう、興味ない。こんなことを言ったら彼女が怒るかもしれないが、確かに女性は彼女より数倍可愛い。だがよくある『猫かぶりの可愛らしさ』も感じてきて、ちょっと気が引ける。

だから総合で言えば彼女の方がダントツ上だ。惚気てばかりで申し訳ないが。

「江原さん彼氏いないの？」

「いません」

赤信号で車を停車したあと、真っすぐ俺を見つめて来た。自惚れたくはないが…俺に気があるとかいうやつか？

「あ、そうなんだ…意外」

「そういう内村さんはどうなんですか？」

「今度一ヵ月記念日ってとこかな」

歯車が狂いだしたのはこの時からだった。

―110―

電話の着信があった。彼の番号で登録している着メロと違っていたので、誰だろうと思いつつ携帯を手にした。

そして画面に表示された名前に動きが止まってしまった。

『篠塚奏』

最近やたらと連絡してくる元彼だ。中学生の頃を思い出す…アイツはあの時も積極的だったな…。

「もしもし…どうしたの？」

『いや、声が聞きたくなったっていうか…』

「もういいよ、それ」

あの頃と変わらないやりとりに思わず笑ってしまう。しかしよく考えてみれば、裏を返すとあの時と一緒だということになる。

『あのさ、良かったら今度の休日映画でも行かない？確か金曜大学休みになるよね』

思わず息を呑んだ。言おう、今度こそ。

「あー…私今付き合ってる人いるからさ…聞いてみないとわかんないな…」

『嘘…マジで？
…この前の旅行の人？』

「うん、そう」

それから私は質問攻めを受けた。彼の年齢、職業…簡単に答えられるものではなかった。周りには秘密で、という条件で話をすると、元彼の反応は予想通りというか…断固反対された。

『車校の指導員と付き合ったりして良いわけ？』

「別に問題はないみたいだけど」

『しかももう３０歳なんだろ？』

「また２８だよ」

『一緒だよ…とにかく、騙されてるんじゃない？良い年して女子大生に手出すなんて下心見え見えじゃん』

彼の事を何も知らないくせに。なのに何で…！

「…彼の何を知ってるの…」

『薫？』

「何も知らないくせにそんな事言わないで！」

元彼は数秒黙ったあと、重い口を開けた。

『…もう俺の知ってる薫じゃないんだね』

「あんたの知ってる私って何？」

『でも俺、高校三年間もずっと薫しか想ってなかったんだよ…だから、たとえ薫に彼氏がいたとしても絶対諦めない』

そう言って元彼は電話を切った。布団に携帯を落としてしまったと同時に、涙がたくさんこぼれ落ちてきた。

彼を侮辱されたこと、元彼の気持ちをあっけなく踏みにじったこと…悲しくて悔しくて、涙が止まらなかった。

その時、設定していた着メロが鳴った。泣いていたのが悟られない

ように涙を拭いて電話に出る。

「…もしもし」

『…どうしたの?』

ダメだった。いくら涙は拭えても、鼻声っぽくなってしまった声は治らない。

彼の前では笑顔しか見せないと決めていたのに、彼の声を聞いたとたん、涙があふれ出た。電話越しに伝わらないように声を絞る。

「何でも、ないです…電話遅くなって、すみません」

元彼と電話した、と話せたとしても、言われたことを言えるはずがない。

彼はいつものように優しい声で私を包んでくれた。

『良いよ別に。泣きたい時はいっぱい鳴きな?話もいつでも聞くし』

優しい人だ、彼は。あえて事情を聞かないでくれる。

だから、このことはそっと胸にしまっておこう。

この時すでに運命の歯車とやらが回りだしたなんて、想像だに出来なかった。

―111―

「内村さん彼女いたんですね…残念です」

女性は前を向いたまま運転を続けた。突然何を言い出すかと思えば…この子はどういうつもりで言ったんだろう。

何で？と聞こうとした俺の言葉を遮るように、女性が話し始めた。

「彼女さんっておいくつなんですか？」

「2…9歳」

とっさに嘘をついてしまったが…素直に話してばれるよりは良いかと思う。同時に彼女にはホントに申し訳ないと思った。

「タメですか？」

「あー…うん、そう」

「へー、どこで出会ったんですか？」

「教習所で」

そう口にしてからはっとした。どうする、どうするんだ。

そしてまたふと思った。どうして俺は必死で彼女のことを隠そうとするんだろう。

言えば良いのに、『ウチの卒業生で１９歳の人』と。なのに、その言葉が口から出てこない。

世間体を気にしてるのかどうかは自分のことなのにわからない。

「別の教習所の…指導員でさ、」

「そうなんですね」

女性はまた淡々と運転を続けた。と次の瞬間、ハンドル操作に手間取って電柱に衝突しそうになった。とっさに横からハンドル修正をして難を逃れたが、彼女よりタチが悪い。

「コラコラ、ちゃんと運転に集中して」

「…すみません…」

そうは言ってみたが、運転に集中出来ないのは俺の方だ。

浮気してるわけでも何でもないのに嫌な汗が出てくる。彼女の笑顔

が頭から離れず、何故か罪悪感が募っていく。

…どうして、最近彼女は電話に出てくれないんだろう…。

いつもこんな風にまわりに嘘を言ってしまう俺に険悪感でも抱いたんだろうか。

そして俺は、事の重大さを知らないまま一ヵ月を過ごすこととなった。

―112―

まどろみの中目が覚めた。天井をふと見上げ、ぼんやりと騒ぎ立てる周りを見た。

両親が泣いている。友達が手を握っている。奏が安堵の表情を浮かべている。

生きてたんだ、と思う。

数日前に交通事故に遭った。原因は飲酒運転と信号無視。私が通りかかった時、小さな子供がひかれそうになっていた。

助けなきゃ。乱暴ながら子供を突き飛ばし、それからの記憶がない。

「薫…！心配したのよ！」

お母さんが涙でぐしゃぐしゃになった顔で笑顔を作った。お父さんはそんなお母さんの肩を抱いている。

「良かったよ…もう起きてくれないのかと思った」

手を握ってくれていた美樹ちゃんがさらに力を込めて手を握った。

私の腕に美樹ちゃんの涙がつたってくる。
奏は何も言わずに笑顔だけを向けてきた。

そこに、彼の姿はない。

あとで聞かされて知ったことだけど、今日は事故からちょうど三週間らしく、私は二週間近く意識不明の状態だったらしい。
彼が来てくれると言ったコンサートも、結局出ることもなく五月に入ってしまった。

ひどく落ち込む私の病室にノックの音が響いた。

「薫っち！具合どう？」

ひょっこり顔を出してくれたのは、ＯＧのゆかりさんだった。四年生だけど、実は留年。一応前期卒業の見込みはあるらしい。

「ゆかりさん…！」

「意識戻って良かったよ。ハイ、これ。食べれるかわかんないけど

…もし食べれそうなら食べて」

「ありがとうございます」

ゆかりさんの作るお菓子は市販のかと思うくらい美味しい。ゆかりさんは私のためにこんなにたくさん作ってくれたらしく、すごく嬉しい。

さっそくその内の一つを口にしたとき、ゆかりさんが嬉しそうに話し掛けてきた。

「最近良い人見つけたんだ！すっごいかっこよくてさ！彼女いるらしいんだけど、最近微妙みたい。だから頑張ってみようと思って」

こんなに良い人が好きになる人だ、相手の人も素敵な人に違いない。

「応援してます！うまくいったら教えて下さいね」

歯車は、止まる事なく動いていた。

―113―

前と違ってやる気の出ないティッシュ配り。行き交う学生達をぼんやりと眺める。

ここ一ヵ月近く彼女と連絡が取れない。電話をしても、メールをしても、いっこうに反応がないのだ。

それとは裏腹に、指名生徒の江原さんとの距離が縮まった。一度告白まがいを受けたが、一応まだ彼女がいるのでやんわりと断った。

それにしても何で連絡を取ってくれないんだろう。

不安、悲しみ、怒り、いろんな感情が入り交じっている。

大学の中へふと目をやるが、彼女の姿は見受けられない。

次第にイライラしてきた俺に、恐る恐る女性が話し掛けて来た。

「あの…」

よく見ると交響楽のお友達だった。一度しか担当になったことがないため名前は出てこないが、とりあえず彼女の友達だ。

「おぉ、久しぶりだね」

「またティッシュ配りしてたんですね」

「…まあね」

お友達は声を上げて笑った。はー、と言って一呼吸置く。

「薫がいたら良いんですけどね」

俺はその言葉にぎゅっとティッシュを握り締めて尋ねた。

「香西さんって今何してんの？」

お友達が少しためらいがちに口を開いた。

「入院してます」

その言葉に、頭をハンマーで殴られた感覚に陥った。

「…っ、何で！？」

「三週間前…交通事故に遭って…二、三日前にやっと意識が戻ったんです」

「今どこにいるの？」

「三國大附属病院です。お見舞い、行ってあげたら薫喜びますよ」

そう言ってお友達は次の授業へと向かった。

何も知らなかった事実。俺は彼女が生死をさまよっている事も知らず、連絡をよこさない彼女に苛立ちを覚えていた。

江原さんにさりげなく告白された時も、彼女さえいなければ気持ちに答えてあげられたのにと思った。

知らなかったとはいえ、そばに寄り添って手を握ってあげることもなく…。

会わせる顔がない、と思った。それでも会いたい。きっと寂しそうに病室で過ごしている彼女に、今すぐ。

仕事が終わって教習所に戻るなり、帰る支度を済ませて病院へと向かった。

―114―

ゆかりさんが帰ってからは孤独な時間だけが過ぎていった。昼下がりだというのに、私はただただ外を眺めるしかなかった。

彼は今、何をしてるんだろう…。

その瞬間にはっとした。携帯を探すが見つからない。

あの彼のことだ、連絡が取れなくなって心配してるんじゃないかな…。

早く聞きたい、彼の声。独りぼっちで、寂しくて、辛くて、そんな私をいとも簡単に包み込んでくれるだろう。

その時、再びノックの音がした。ふわっと病室のカーテンがゆれる。ドアのところには奏が立っていた。小さな花束を持って、挨拶代わりに少しだけ手をあげた。

「具合どう?」

「ん、元気だよ。せっかくの晴れだから早く散歩したいって思うく

らい」

「彼氏さんは？来た？」

その言葉に胸が詰まる。私と彼が付き合ってると誰も知らない今、彼に私が病院にいることを知らせる人はいない。

傍にいてほしい。だけどそんな願いは届くはずなくて。

絞りだすように言葉を出した。

「来てないよ…連絡手段ないんだもん」

「携帯は？」

「見当たらなくて…」

うつむいてしまった私の頭を奏はやさしく撫でた。

「そういえば今更だけど、何で奏は私がここにいるの知ってるの？」

奏が撫でていた髪の毛をくしゃっとした。彼と同じその行動に切なさが込み上げてきて、涙が出そうになった。

「何でも何も…救急車呼んだの俺だし」

「何で？」

「たまたま通りかかったんだよ」

そう言って手を私の頭から離した。

目が覚めた日から毎日病室に来てくれる奏。昨日も、今日も、きっと明日も。

こんなにも想ってくれているのはあの頃と変わらない。でもあの頃と違ってその気持ちには応えることが出来ない。

「…ごめんね、奏…」

「どうしたの、急に」

「ううん、いつも傍にいてくれてありがとう」

「何だよ今更」

奏が屈託のない笑顔を見せた。

早く良くなろう。支えてくれる奏のためにも、一日も早く。

―115―

面会時間ぎりぎりに病院へ駆け込んだ。早足で病室へと向かう。

『香西薫』という名前を見つけるや否や、病室のドアを乱暴に開けた。

そこには着替え中の彼女がいて、目を大きく見開いたまま固まっている。

何も言わずつかつかとベッドへ向かい、彼女を力一杯抱き締めた。

硬直していた彼女の体から緊張が取れ、そっと俺の腕を掴んだ。あまりにも弱々しい彼女の手に涙がこみあげてくる。

彼女は俺の腕の中で声を殺して泣いていた。俺は涙を堪えて彼女を力強く抱き締めるしかなかった。

「あーあ、帰れなくなっちゃったよ」

病室の椅子に座りながらわざとらしく喋る。あれからそうこうしているうちに３０分以上経過し、面会時間がとっくに過ぎてしまったため、病室から出るに出られない。

「そうですね…明日仕事でしょう？」

「このまま行くよ」

「汗臭いですよ」

その言葉に彼女の額をつついた。彼女がにょっ、と不思議な声を発したあと、額をさすりながらこっちを見てきた。

「汗かいてないし」

「走って来たのに？」

「競歩です競歩」

彼女が笑っている。約一ヵ月ぶりに見るその笑顔にほっとする。

離れていったと思った彼女。もういなくなってしまったと思った彼女。でも確かにここにいて、繋いだ手から痛いほどのぬくもりが伝わってくる。

「意識戻ったんならもうちょっと早く連絡してよね」

「だって携帯が見当たらなくて」

「マジか…あ、そうだ」

そう言って彼女の右手を握った。小さな薬指に以前買った指輪をはめる。

遅い遅いホワイトデーのプレゼントだ。

だがサイズも適当に買ったせいでぶかぶかで、今にも外れて落ちてしまいそうだった。

彼女が笑いながら目元を押さえた。彼女の目は涙で潤んでいるようだ。

「大事にします、ずっと」

俺は何も言わずに頷いて、彼女の唇に自分のそれを重ねた。

―116―

来るはずがないとわかっていても、心の中で期待してしまっている自分がいる。

携帯があれば話は別なのに、今だに見当たらないがために彼と連絡が取れない。

彼とはかれこれ一ヶ月近く連絡を取ってないことになる。早く会いたい、声が聞きたい。約束したゴールデンウィークはとっくに突入してしまっているのに。

言うことをきかない体を恨めしげに思いながら着替えを始めた。一人では着替えにくい状況だけど、さすがにもう下着だけでも替えないと気持ち悪い。

廊下がバタバタと騒がしいと思った次の瞬間、病室のドアが大きな音を立てて開いた。

思わず息を呑んだ。ドアのところに立っていたのは、少し息を乱した彼だった。

今見ているのは、夢？そんなことを思う暇もなく、彼は何も言わずに傍にやって来て、私を力一杯抱き締めた。

彼だ、私がずっと望んでいた彼だ。今まで頑張って作って来た笑顔が、我慢していた感情が、一瞬にして全て壊れていった。

とめどなく流れてくる涙を止めることが出来ないまま、私は彼の胸に顔をうずめた。彼はそんな私の頭を包み込んでくれるようにそっと撫でた。

彼がゆっくり病室の丸椅子に座りながら話し掛けて来た。

「あーあ、帰れなくなっちゃったよ」

面会時間が終わってしまったため、帰ろうに帰れなくなってしまった。彼がいなくなってしまうのはこの上なく寂しいけど、明日仕事に行きにくいのはもっと困る。

「そうですね…明日仕事でしょう？」

「このまま行くよ」

「汗臭いですよ」

彼は私の額を突いた…というか、指した。思わず美樹ちゃんのリアクションが出てしまう。
おでこをさすりながら彼を見つめた。

「汗かいてないし」

「走って来たのに？」

「競歩です競歩」

彼はそう言ったあと、私の髪の毛をくしゃっとした。

会いたかった。何人お見舞いの人が来ても、そこに彼の姿がなくて虚無感が募った毎日。することもなく、ただただぼんやり過ごす毎日。
今繋いでいるこの手が、涙が出るほどに幸せなことだった。

「意識戻ったんならもうちょっと早く連絡してよね」

「だって携帯が見当たらなくて」

「マジか…あ、そうだ」

彼はそう言って私の右手を握った後、ズボンのポケットから何か探し始めた。彼の部屋の合鍵だろうか、と思ったが、出てきたものはまったく想像つかないものだった。

シンプルなデザインの指輪。でも私には大きすぎて。

きっと私に悟られないようにこっそり買ったんだろう。お父さんが誕生日に買ってくれた指輪みたいにサイズの合わない指輪を見つめ、思わず笑ってしまった。

愛されてるって、こんなに素敵なことなんだね。そう思いながら彼を見つめた。

「大事にします、ずっと」

彼はそっと頬に手を添えて口付けをした。彼の手に重ねた私の手には、シルバーの指輪が光っていた。

―117―

あの日、一ヵ月ぶりに触れた彼女は心から俺の心を温かくしてくれた。もっとも、アレだけじゃ済まないのが正直な気持ちではあるが。

パワーも補充出来たと思いながら配車へと向かう。今日の6時限は江原ゆかりの担当だ。

「お願いします」

「はい、運転席どうぞ」

発車措置を終わらせて教習所から出ようとしている江原さんが、左右確認ついでに俺の方をちらっと見てきた。

「…何か今日機嫌が良いですね」

「ん？そう？」

「何か良いことでもあったんですか？」

話したい、彼女と再会出来た喜びを。話せる範囲で話をしてみた。

「昨日彼女とやっと会えてさ、まじ良かったー」

「そうなんですね…何してたんですか？」

「入院してた。事故に遭ったんだって」

「そうなんですか？私の後輩もですよ」

何でどいつもこいつも入院してんだ、と心配になりつつも話を続ける。

「でもマジ会えて良かった。携帯まだ手元に戻って来てないから連絡取りようなくてさ、知らされなかったら自然消滅してたのかもね」

江原さんが少し残念そうな顔をした。その理由なんて何となく想像がつく。

「とりあえずおかげさまで元通りって感じかな」

「良かったですね」

空元気としか取れない明るい声に申し訳なさを感じる。それに俺はこんな良い子に好かれるほど人間出来てない。

「江原さんもこんなのと違っていい男出来ると思うよ」

「そんな事ないですよ」

どれに対して否定の言葉を入れたのかわからないが、ここですっぱり諦めるものだと思っていた。

「あ、そうだ。この前言ってたお菓子、作って来ました」

「マジで？」

数時限前、江原さんが特技をお菓子作りだと言っていた。冗談で『作って来てよ』と言ったが…まさか本当に持って来てくれるとは。自分では作れないし、かといって買う気も起きないし、俺にとっては有り難い差し入れだ。

「じゃあ今日帰って早速いただくよ」

「感想教えてくださいね」

楽しげに江原さんが話す。何となく不意に彼女がチーズケーキを渡した時を思い出した。もっとも彼女はあまり感想を聞きたくなさそうだったが。

それに、実を言うと江原さんの教習回数は残り少ない。あと数回で卒業検定を受けるのだ。指名するんだろうけど、何やら暇がなさそ

うな感じだ。

しかしそれを狙っていたのか、間髪入れずに話し掛けて来た。

「っていうかアドレス教えてくださいよ」

ここまで来るといよいよ面倒臭い。とりあえず今俺の頭にあるのは失礼ながらどうやって断ろうか、ただそれだけだ。

「んー…また今度ね」

俺の場合は結果オーライだったから良かったものの、彼女に連絡先を聞いた時同じ事を思われていたとしたら、それはそれは悲しい事だ。

別に教えても大丈夫なんだろうが、状況が状況だけに教えたくない。

でも…携帯にまた一件女性のメモリが増えたら彼女は嫉妬してくれるだろうか?そんな浅はかな事を考えながら教習所へと戻った。

―118―

病室に暖かな陽射しと爽やかな風が満ちている。退屈な事に変わりはないけど、私がここにいる事が彼に伝わったのならこれ以上不安に思う必要なんてないのだ。

今から何をしていようか悩んでいると、看護婦さんがやって来た。実はこの看護婦さんに彼がここに泊まったことがばれてしまった。看護婦さんは今回だけ、と見逃してくれたのだ。

「香西さん顔がすっきりしましたね」

「そりゃあ病院食あんまり食べてないですから、体重結構落ちたでしょう」

私の言葉に看護婦さんが爆笑した。腰に手を当てて呆れたようにため息をつく。

「そっちじゃなくて。疲れが取れた感じっていうか、重荷が降りたっていうか…生き生きしてますね」

そっちか。猛烈に恥ずかしくなる。こんな話彼にしたところで『ホラ、ぼけっとしてるから』なんて言われるのは目に見えている。言わないのが賢明だ。

お茶を口に含みながら答えた。

「…そうですか？」

「旦那さんのおかげでしょうね」

吹き出しそうになったお茶をぐっ、と堪えると鼻に行ってしまい、ひどく咳き込んだ。

「け、結婚して、ません」

「でも香西さんがお休みになってる時『妻が、妻が』って手を握っておっしゃってましたよ」

あのやろう…。

顔がどんどん熱くなってくるのがわかる。誰が妻だ。

つまり、その、彼は結婚を意識してるんだろうか。それともふざけてるんだろうか。

答えは明白、後者だ。

咳き込みながら看護婦さんに訂正する。

「まだ、結婚して、ないんで、勘違いし…ないで、ください」

看護婦さんは私の背中をさすりながら、トドメの一撃を加えた。

「『まだ』ってことは近いうち結婚するんですか？」

とりあえず病室が個室で良かったとつくづく思う。盛大に咳き込んでいる私の世話をしつつも、看護婦さんが容赦なく質問してくる。

「旦那さんかっこいいですよねー。どちらでお知り合いになったんですか？今何年目ですか？」

「もうすぐ、二ヵ月です…」

けほ、と咳き込んだ。少しは楽になってきた気がする。

もうすぐ二ヵ月…その内のほぼ一ヵ月を意識不明で過ごしてしまった。その間、どんなことが起こってたんだろう。彼はどんな思いで過ごしてたんだろう。

そんな事情を知らない看護婦さんは目を丸くしていた。

「まだ二ヵ月だったんですか…じゃあそろそろ子供を…」

「新婚じゃありません！」

わざとらしく笑って冗談ですよ、と言った。私は気温のせいもあって結構汗をかいている。

「もう…」

この話が彼の耳に届くなんて思ってもみなかった。

―119―

今日も仕事帰りに病院へと向かう。面会時間を過ぎているのであくまでもこっそりだが。

病院へ着くと、背後から声をかけられた。

「新ちゃん」

振り向かなくともわかる、看護婦の高木美幸だ。

「何、今日も見逃してくれるの？」

「だーめ。面会時間終わってるじゃん」

「この前は見逃してくれたのに」

「一回目だからよ」

美幸は大学で同期だった。看護士を目指しているとは聞いた事があったが、まさか本当になったとは…しかも三國大付属で彼女の担当になったなんて。

面白半分で美幸があたかも俺と面識がないように振る舞い、彼女が寝たあとにもう一度病室へと来た。その時彼女のことについて一通り説明していたのだ。

「彼女さん可愛いね。新ちゃんにはもったいない」

「何がよ」

苦笑する俺を横目に、美幸が指折り数えながら話し始めた。

「まず天然でしょー、それから素直で、うーん…とにかくね、可愛い」

「天然なんじゃなくて何も考えてないだけ」

「相変わらずドSねー」

美幸が笑った。見た目こそ違うものの、美幸は彼女にそっくりだ…性格も、雰囲気も、ドM加減も何もかも。

だが失礼ながら今まで一度も美幸を恋愛対象に見た事はなく、たとえコイツが素っ裸で寝てたとしても、『風邪引くぜ』と布団をかぶせてやるだけに違いない。

「自慢のドMちゃんだからね」

そう言って車に寄りかかった。美幸は笑いながら歩み寄って来た。

「でも可愛かったー。新ちゃんのこと『旦那さん』って言ったら顔真っ赤にして否定してたし」

その様子が目に浮かぶ。可愛い奴め、と思うとふっと笑みがこぼれる。

「あ、そうそう。『子作り』勧めてみたよ」

「…は？」

吸おうとして手にしたタバコを思わず落とした。

「そしたら噴火するんじゃないかってくらいまで顔真っ赤にして黙っちゃった」

「当たり前だろ！そういう免疫ない子なんだから」

「あれ、手出してないの？」

「だ、したけど…」

何なんだ、この誘導尋問は。美幸は彼女が女子大生なのも知っている。何か処罰でも受けなきゃ行けないんだろうか…。

「もー、新ちゃんやらしー」

「うるさい」

タバコに火を点けながら答えた。美幸の様子を見る限りだと、まわりに変な話はしなさそうだ。

「まあでももうすぐ３０だもんね。結婚も子供も考えなきゃ」

「人のことより自分の面倒見な？婚期逃しちゃうよ」

自惚れだが、俺がいなければ彼女は美幸と同じ人生を歩んでいただろう。人の面倒ばかりで自分はそっちのけ…だからこそ、誰よりも幸せになって欲しいと思う。

「そうだねー…新ちゃんが紹介してくれたら考える」

美幸がやわらかい笑顔を浮かべた。それを眺めながら携帯灰皿にタバコを捨てる。

「任せとけ」

美幸に免じて今日は帰ろう…どうせ明日は一日休みだし。

―120―

頭がぼんやりする。さっきから思考回路が無限ループに入ってしまった。

旦那さんって彼よね？妻って呼んでたのホント？なら結婚するの？まだ早いよね。じゃあ数年後？そもそもそこまで続くの？てか子供って…。

この繰り返しだ。

頭が痛くなって来たので無理矢理考えるのをやめた。すると、静かになった病室に携帯のバイブの音が響いた。

とっさに体が反応した。どこ！？体が思うように動いてくれない。

すると看護婦さんがやって来た。

「どうしましたか？」

「いや、携帯をずっと探してて…今バイブ鳴ったから近くにあるのかなって」

「えーと…」

看護婦さんが何やらきょろきょろし始めた。私の携帯を探してくれているらしい。

「あ、ありましたよ」

大量に積まれて若干ごちゃごちゃしている荷物の中からやっと携帯が出てきた。

何故か充電の切れてない携帯…きっとお姉ちゃんが家から充電器を持って来てずっと繋いでてくれたんだろう。なら携帯の在処を教えてくれれば良かったのに、と恨めしく思う。

携帯依存症の女子高生みたいだ、と自嘲しながら携帯を開く。そこにあるのは大量のメールと不在着信だった。

先に不在着信を確認すると、３０件以上不在があり、その主は全て彼だった。最初の方は一日に5、6回かかって来ていたのに、最近の日付になるにつれて2、3日に1回となっていた。

誰も彼に知らせてくれないとはいえ、この結果に少し傷つく。

それから気を取り直してメールを確認した。部員からの連絡メールが多数を占めていたけど、それ以外はやっぱりもっぱら彼だった。一通一通確認するたびに胸が痛くなる。

『今から電話出来る？』
『水曜休みになったんだけど会えないかな？』
『忙しい？メールウザかったらやめるよ』
『何かあったの？俺で良いなら話聞くよ』

『忙しいのか何なのか知らないけど、無視はナシだろ。俺のことが嫌になったんならはっきり言えよ』

思わず携帯をベッドに落として両手で口を覆った。涙がとめどなく溢れて来て、どうやって止めたら良いのかわからない。

私は今まで何をしてたんだろう…。

入院していたとはいえ、彼に嫌な思いしかさせてなかった。最低な彼女…もう彼女失格だ。色んな思いが交差し、ただただ泣くしかなかった。

それなのに彼は私の入院を知るや否や病室まで駆けつけてくれ、ずっと私の面倒を見てくれていた。

でも今、彼の姿はここにない。

彼はどんな気持ちで私と接しているんだろう。『嫌になった』んじゃなく、『嫌になられた』ならとてつもなく悲しい。

次に彼が来たときは思いの丈をぶつけるしかない。きっと不器用な私たちはそれ以外の術を知らないのだろう。

―121―

今日は一日中彼女に付きっきりの予定で病院に来た。
ご両親やお姉さんが来たらそこで挨拶すれば良いし、まぁ…名前を忘れたが交響のお友達に会ったらその時はその時だ。

ノックをして病室に入った。彼女は少し目を見開いたあと、ばつの悪そうな顔をして俯いた。
上着を荷物置きに置いて丸椅子に座る。

「何、どうしたの？」

彼女はしばらく黙っていたが、追い詰められたような表情で俺を見つめた。

「…ごめんなさい」

再び彼女は俯いた。謝られる節がない。

「何のこと？」

「携帯、見つかったんです」

その言葉にはっとした。彼女の意識がなかったのを知らなかったとはいえ、ついイライラのあまりひどいことを送ってしまった。

「知らなければ…携帯なんて見つからなければ良かったって思いました。
でも逃げちゃダメだって思って…」

「ゴメン！本当にゴメン！」

彼女の瞳には涙がたまっていた。今この状況で、それを拭ってあげる資格は俺にはない。

「すごく嫌な思いを一ヵ月近くもさせてしまったんですよね」

「違…っ！」

そう言って彼女の肩を掴んだ。彼女は涙を浮かべたまま俺を真っすぐ見つめた。

「不安だったんだよ…俺もうすぐ３０で、でも薫はまだ２０くらいじゃん…若くてカッコいい奴はたくさんいるし、そんな奴が出て来たら俺に勝ち目なんてないからさ」

「大丈夫って言ったじゃないですか。私は新一さん以外の男の人をそんな風に見ることなんて出来ません」

今までにない強い口調で言ってきた。

きっと彼女も…俺と一緒で不安だったんだろう。つくづく不器用な二人だ、と自嘲気味に笑ってしまった。

「何も面白いことなんて言ってません」

「わかってるわかってる。そうじゃなくて…不器用だなぁって。俺も薫も」

「良いのかどうかわからないけど…私には気持ちをぶつけることしか出来ないんですよ」

「俺もだよ」

そう言って彼女の頭を撫でた。彼女の目から涙は消え失せ、少し照れながら嬉しそうに笑った。

良い雰囲気になってきたところで、仲直り（少し語弊があるかもしれないが）のキスでもしようと彼女の頬に手を添えた。彼女は俺の手を包むように手を重ね、そっと目を閉じた。

徐々に徐々に近づき、唇が触れるか触れないかの距離になった…

その時、ノックと同時に勢い良く病室のドアが開いた。

「薫っち、遊びに来たよ！」

ドアのところには何故か江原さんが立っていた。

―122―

あれから携帯が鳴っても手にしなくなってしまった。誰に何を言われるのか正直不安だ。

でもこの前彼が病室に来て泊まったりしていた辺り、実際メールのことを彼本人が忘れているのかもしれない。

ああだこうだ考えて気持ちに整理がつかないまま、ドアからノック音がした。面会時間あたまから来る人なんて誰だろうと思いつつドアに目をやると、暑さのせいか上着を手に持っている彼が立っていた。

いざ彼を目の前にすると謝罪の言葉しか出て来ない。でも何から謝れば良いかわからなくて。

彼はいつものようにやさしい口調で尋ねてきた。

「何、どうしたの？」

どうしよう。それだけが頭をよぎった。

「…ごめんなさい」

搾り出すように声を出すと、彼は少し困った感じで笑った。

「何のこと？」

「携帯、見つかったんです。知らなければ…携帯なんて見つからなければ良かったって思いました。
でも逃げちゃダメだって思って…」

彼はガタン、と椅子から立ち上がった。私に差し伸べようとした手は決して私に触れることなく、宙をさまよっていた。

「ゴメン！本当にゴメン！」

「すごく嫌な思いを一ヵ月近くもさせてしまったんですよね」

「違…っ！」

彼はそのまま手を私の肩に置いた。強くて、でも優しい手。
そのぬくもりを感じながら顔を見上げると、彼もまた苦しそうな顔をしていた。

「不安だったんだよ…俺もうすぐ３０で、でも薫はまだ２０くらいじゃん…若くてカッコいい奴はたくさんいるし、そんな奴が出て来たら俺に勝ち目なんてないからさ」

何でそんなこと…。旅行でも言ったはずなのに、『あなたしかいない』と。

「大丈夫って言ったじゃないですか。私は新一さん以外の男の人をそんな風に見ることなんて出来ません」

少し目を大きく見開いた彼は、そのあとふっと笑った。強い口調で言ったのがそんなにおかしかったんだろうか。

「何も面白いことなんて言ってません」

少し拗ねた私の頭をぽんぽんと叩いて彼が笑った。

「わかってるわかってる。そうじゃなくて…不器用だなぁって。俺も薫も」

「良いのかどうかわからないけど…私には気持ちをぶつけることしか出来ないんですよ」

「俺もだよ」

不器用な私たちはこれから先も嫉妬し、すれ違い、ぶつかり合って気持ちを確かめるんだろう。

ずっと私の頭を撫でていた手が、私の頬へ落ちてきた。彼の手にそっと手を添える。

彼の顔が近づいてくるにつれて目を閉じた。

こんな時に限って来客者がやってくるらしい。ノックと同時にドアが開いた。

「薫っち、遊びに来たよ！」

そしてこんな時に限って、あまり来ない人がやって来たりするのだ。

―123―

彼女の部屋に入ってきた江原さんが最初に口にしたのは俺の名前だった。ここに来たことから彼女の知り合いであることがわかる。

知り合いのお見舞いに来たら自分の指導員がいるなんて、誰だって驚くだろう…しかもこんな状況で。

「ゆかりさん！あの、えっと、」

「知り合いなの？」

俺の問いに少し顔を赤くしながら彼女が答える。

「部活の…先輩です」

「へぇ」

「え、薫ちゃん？どういうこと？何でここに…」

『内村さんがいるの？』

「内村…さ…ん？」

そう続くであろう江原さんの言葉をさえぎるようにして、座っていた彼女のベッドから立ち上がった。

「ごめんね、騙してて。俺の彼女ってコイツのことなんだ」

彼女に背を向けているためどんな顔をしているのかはわからないが、江原さんはあからさまに『意味がわからない』という風な顔をした。

「だってこの前別の自動車学校の教員だって…」

「だから、嘘ついてごめん。あれは嘘だったんだよ」

江原さんは入り口に立ったまま動かない。表情も少しずつ固くなってきた。

「言える自身がなかったんだよ…自分の彼女が担当の生徒だったなんて」

実はつい最近、先輩指導員たちに奥さんとの馴れ初めを聞いた。すると、びっくりすることに半数以上が生徒だった。指導員によっては２０も離れた夫婦だっていた。

『内村は彼女が生徒だったりして悩んでるとか？』

『…何でそれが？』

『わかるよ。携帯見ては一喜一憂したりしてさ。
この前のティッシュ配りの時の、あの子なんだろ？』

『ま…あ』

『何か昔の俺を見てる気分だよ。
胸を張れ、内村。別に彼女のことを隠す必要なんてないだろう？いつまでも後ろめたさなんて感じてたら彼女に失礼だ。
一人の女性として好きになったんならそれで良いじゃないか』

そうだ。俺にはもう隠す必要なんてないのだ。
自信を持って彼女を紹介しても良いのだ。

香西薫は、俺が好きになった一人の女性なんだから…。

「でももう誤魔化す必要なんてないし…だから正直に話すよ。
俺はコイツと付き合ってる。だから江原さんの気持ちに応えることは出来ないんだよ」

江原さんは何も言わずに病室を去った。病室には微妙な空気が流れる。

さっきと同じようにベッドへと腰掛ける。二人分の重みでギシ、と鳴った音は静かな部屋に響いた。

「怒ってる？」

彼女は何も言わずに首を振った。真っ直ぐ見つめられた時、何を言われるのか、とてつもない不安に襲われた。

「何か…状況に付いていけないっていうか…つまりどういう事だったんですか？」

かなり拍子抜けしてしまった。彼女は江原さんから俺の話を聞いてなかったらしい。

もっとも、聞いていたらこんな面倒なことにならなかったんだろうが。

首を少し傾けている彼女の頭を撫でた。

「また今度ね」

「私にも知る権利あるでしょう」

「だって話長くなるからめんどくさいもん」

「むぅ…」

小動物のご機嫌取りをしようと頬にキスをした。いつものようにむあー、と不思議な声を発する。

「ちょ、ここ病院だから！」

「この前キスしたじゃん」

「う、あ…れは良しとして、」

「何で今はダメなの？」

彼女に迫るようにして両手をつく。

まだ昼前くらいの時間だったと思う。

―124―

ドアを開けた直後のゆかりさんは、目をぱちぱちさせたまま何も言わない。それも無理はない…可愛がってた後輩が彼氏らしき男とキスする寸前だったんだから。
人によっては『このおっさん誰?』なんて反応しかねない。

「ゆかりさん!あの、えっと、」

こんな現場を見られた恥ずかしさと、どう彼のことを説明して良いのかと、頭が訳わからないことになっている。

すると彼は私の方を振り返り、少し小さめの声で話かけて来た。

「知り合いなの?」

「部活の…先輩です」

「へぇ」

「え、薫ちゃん?どういうこと?何でここに…」

来た。

どうしよう。そう思った瞬間、彼が急に立ち上がった。少しだけゆかりさんの方に近づく。

「ごめんね、騙してて。俺の彼女ってコイツのことなんだ」

…

は？

全くもって状況が掴めない。騙すって何の事？コイツって私？頭がぐるぐるする。

「だってこの前別の自動車学校の教員だって…」

「だから、嘘ついてごめん。あれは嘘だったんだよ。言える自身がなかったんだよ…自分の彼女が担当の生徒だったなんて」

意味がわからない。このメロドラマ的状況に一人置いてけぼりの私

は、きっと変な顔をしているに違いない。

「でももう誤魔化す必要なんてないし…だから正直に話すよ。俺はコイツと付き合ってる。だから江原さんの気持ちに応えることは出来ないんだよ」

私は今変な夢を見ているのだろうか。気持ちに応えるって何？何なんだこの昼ドラみたいな展開は。

そもそもゆかりさんと彼の接点がわからない。どういう関係なんだろうか？

そんな事を考えているうちにゆかりさんは帰ってしまったらしい。お礼どころかまともな挨拶さえも出来なかったので、本当に申し訳なく思う。

彼が小さく溜め息をついてベッドにドカっと座った。二人の重さにベッドが苦しそうな音を立てる。

「怒ってる？」

彼が私の顔を覗き込むようにして尋ねて来た。怒るも何も…状況が掴めないんじゃどうしようもない。

「何か…状況に付いていけないっていうか…つまりどういう事だったんですか？」

彼は何を思ったのか、ふっと笑って頭を優しく撫でた。

「また今度ね」

「私にも知る権利あるでしょう」

「だって話長くなるからめんどくさいもん」

いじわる。そんな事を思って少しむくれたが、予想外に彼が私の左の頬に口付けをして来た。

。

顔がみるみる赤くなるのが自分でもわかる。

「ちょ、ここ病院だから！」

「この前キスしたじゃん」

「う、あ…れは良しとして、」

「何で今はダメなの？」

彼が私の両脇に肘をつく態勢で近づいて来た。自由のきかない身体は、逃げようにも逃げることが出来ない。

―125―

彼女は気持ち後ろへと下がったが、まだリハビリをしてないのもあって俺から離れるのは不可能に等しかった。

「子供欲しいんだって？」

「だっ、誰がいつそんな事を…！」

「看護婦さんが言ってたよ、『奥様がお子さん欲しがってましたよ』って」

「そんな事…！」

言ってない。むしろ美幸は子作りを彼女に勧めたのだ。

もちろん彼女がＹｅｓと言ったところで、全快して退院しなければ話は進まないのだが。

「っ、ていうか、看護婦さんに私のこと『妻』って言ってたんでしょ？」

「え？」

アイツ…彼女に何を吹き込んだんだろう。

確かにこの歳にもなれば、結婚も視野に入れたお付き合いをしなくてはならない。だがそれを彼女に打ち明けたところで、まだ１９歳の女性には重すぎる話だ。

だが美幸がそんな事がばれそうな発言をしていたのなら、腹をくくるしかないのだろう。

「…悪い？」

「何開き直ってるんですか」

「ダメ？」

「もう…色んな人に変な事言わないでくださいよ」

何とか難は逃れたようだ。だが何故か心にもやもやが残る。

おそらく俺は、彼女を逃すともう結婚出来ない気がする。年齢的に…子供とか、マイホームとか、とにかく色々考えると、もう結婚しなくてはいけないのだろうと思う。

彼女が大学を卒業するまで待つか、学生結婚をしてもらうか。今の俺の頭にはこの二択しかない。

大学卒業を待てば俺はもう32になるからなんか遅い気がするし、この期時世で女子大生に学生結婚させるのも気が引ける。

あれこれ考えるのも面倒になったので、そのまま彼女に口付けた。唇から伝わってくるぬくもりを一生俺だけのものにしたくて。

惜しむように彼女の唇から離れた。

そして、ゆっくりと語り掛けた。

「俺は欲しいけどね、子供」

「はぁ…」

今の返事で直感した。意味がわかってない。そういう方が教え甲斐がある、なんて言う人もたまにいるが、なんてったってめんどくさい。

「薫は?子供欲しい?」

「そりゃあ…結婚すれば子供いるでしょう」

「何人が良いかな」

俺がしゃべってるのを彼女がぽかんとして見ている。このくだりだと、どう考えても『子供』という単語には『俺と彼女の』という言葉がくっついてくるのに、彼女は最初だけあんなリアクションをしておいて、今のこの話を他人事のように聞いているようだ。

「俺は三人がいいけど…薫は？」

ようやく全てを理解したらしい彼女は、顔を真っ赤にして俯いた。

「…お任せします」

プロポーズの言葉は、今はまだとっておこう。

―126―

逃げ場がない。じり、とベッドの上を後退りしても、それは明らかに無力だった。

彼が力強い眼差しを私の方へ向け、ふっと笑って話しかけて来た。

「子供欲しいんだって？」

「だっ、誰がいつそんな事を…！」

「看護婦さんが言ってたよ、『奥様がお子さん欲しがってましたよ』って」

「そんな事…！」

言ってない…！確かに看護婦さんに『お子さんまだですか？』なんて聞かれてはいたけど、あれは夫婦と勘違いされてたんであって、別に現実とは無縁の話だ。

そこでふと彼に言いたかったことを思い出す。

「っ、ていうか、看護婦さんに私のこと『妻』って言ってたんでし

ょ？」

彼は少し目を見開いたあと、再びふっと笑ってさらに顔を近付けて来た。

「…悪い？」

「何開き直ってるんですか」

「ダメ？」

「もう…色んな人に変な事言わないでくださいよ」

恥ずかしさのあまり、彼から顔を背けた。それでも身体に穴が開くんじゃないかと思わんばかりに真っすぐ見つめられ、ゆっくりと彼の方を向いた。

そして、目の合ったその瞬間。

彼に唇を奪われた。何かを堪能するような、長い長いキス。

私は縋るように彼のシャツの袖を掴むしか出来なくて。

彼が私から離れると、いつもの優しい笑顔を作った。

「俺は欲しいけどね、子供」

「はぁ…」

この雰囲気のあと、突然願望を言われたって正直困る。自分の置かれている状況を忘れ、何故か純粋に『へー、子供欲しいんだ』と思う自分がいる。

「薫は？子供欲しい？」

「そりゃあ…結婚すれば子供いるでしょう」

「何人が良いかな」

呆気にとられた。それは自分がお嫁さんになる人と話せば良いじゃん、と思う。今一緒にいるのに、別の女の人のことを考えられるのも悲しい話ではあるけど。

彼は一瞬困ったように笑い、私の頬を撫でた。

「俺は三人がいいけど…薫は？」

そして悟った。今までのくだりは全て彼と私の事だったんだ。

つまり…この先は自意識過剰が産んだ妄想かもしれないので、あえて何も考えない。

「…お任せします」

私の顔はどれほどまで赤くなってるのか想像もつかなくて、そんな顔を見せたくない一心で再び俯いた。

―127―

今日から彼女のリハビリが始まった。彼女の頑張り次第では約一ヶ月くらいで退院出来るそうだ。

ただ『あの』彼女の事だ、無理をしかねない。

仕事中も彼女の事が気になって気になって仕方がなく、かなり落ち着きがない状態だ。教習中は生徒との会話で何とか紛れはするが、空き時間なんかは携帯を片手にそわそわしてしまう。

出来る事なら一日中彼女のそばにいてあげたかったが、仕事もあるし、彼女に付きっきりになる訳にはいかないのも十分承知している。でも…それでも彼女の事が心配でたまらないのだ。

休み時間中、池田ちゃんが隣の机から話しかけて来た。

「内村さん、大丈夫ですか？何かさっきからそわそわしてますけど…」

「んー…いや、俺の彼女がさ、一ヵ月前に交通事故に遭っちゃって。最近意識戻ったんだけど、今日からリハビリらしくて心配で…」

「それはまた災難でしたね…でも危険予測ディスカッションなんかに使えるんじゃないですか?」

「あー…っと、今回の事故パターンは危険予測とちょっと訳が違うやつだから、使おうに使えないかも…」

じゃなくて。

「とにかく、アイツは色々と無茶しそうだから心配なんだよ」

すると池田ちゃんがクスッと笑った。笑われる心当たりがない。いつも彼女はこんなふうな感じなんだ、と思いながら口を開く。

「面白いことなんて言ってないけど?」

「すみません…何か彼女さんが羨ましいなって」

「何でよ」

「だってあんなモテモテな内村さんからこんなに大事にされてるじゃないですか」

自惚れたくはないが、確かにモテているとは思う。実際言い寄って来た生徒は江原さんが初めてではない。

「でもさ、俺に限ったことじゃなくて、指導員って大体モテてない?」

「私生徒から告白された事ないですよ？」

「それでもさ、池田ちゃん指名してる男子生徒多かったじゃん」

少し首を傾げたあと、池田ちゃんがためらいがちに頷いた。

「知ってる？こういうの『教習所マジック』って言うんだよ」

だから、正直なところ卒業したらそのほとぼりは冷める。俺が彼女と一緒に入れるのは、彼女が決して『教習所マジック』にかからなかったからだろうと思う。

「とりあえず俺は生徒以外からはほとんど告られないから、モテてるとは言えないと思うよ」

「まあでもね、内村さんの事狙ってる生徒たくさんいますよ。彼女さんにあまり不安感じさせないようにしてくださいね」

「そうする」

俺は笑顔で立ち上がって喫煙所へ向かった。

―128―

初夏らしい風が病室に吹く。爽やかな空、ちょっと汗ばむ陽気。

そんな日に私がすることはただ一つ、リハビリ。

軽傷ではないけど、意識がずっとなかった割にそう酷いものでもないらしい。一番頑張らなきゃいけないのは足…歩行練習だ。

ただひたすら歩くことが結構辛いことを知らない、というか、身体の自由がきかないってこんなにも不便だったんだ、という事を思い知らされた感じがする。

先生から『この程度で済んだなんて奇跡的なことだ』と言われたのを噛み締めながら一歩一歩歩く。

それは、彼のそばを離れたくないと強く願ったから…。

リハビリ中は絶対に彼に助けを求めたりしないと決めてたので、辛いとか、苦しいとか、絶対思わないようにしている。

早く『もう普通に歩けるようになったよ』と言えるために。

「香西さん、そろそろリハビリ終わりましょうね」
いつもの看護婦さんが私の方に来てそう言った。
「あと少しだけ」
「彼氏さん心配しますよ、そんな無理しちゃ」
「そんな事ないですよ」
私は軽く笑ったが、看護婦さんは私を無理矢理引っ張って車椅子に座らせ、部屋の方へと押して行った。
「ちょ、まだ…」
「健気なのはわかるんだけど…一回新ちゃんに怒ってもらおうかな」
一瞬、思考回路が停止した。新ちゃん?誰それ。
私の疑問に対する答えは、看護婦さんのため息と一緒に出て来た。
「香西さんの彼氏…新ちゃんはね、私の大学の同期なのよ。この前ここで会った時は本当にびっくりしたんだけど」
「それってつまり…」

子作りだの何だの、私や彼に変な事を吹き込んでいたのは、それが原因だったらしい。

「こ、この前話してた事って…」

「全部新ちゃんに言っちゃった」

その場に倒れてしまうかと思った。でも私はまずいことを喋ってないから大丈夫だ。

「とにかく、新ちゃん物凄く心配してたんだから、無理は絶対ダメ」

「でも早く治して…」

私の言葉を遮るかのように看護婦さんが私の頭を撫でた。

「無理して余計悪くしたらさらに心配するでしょう」

「…はい…」

「いい子ね」

そう言って再び車椅子を押し始めた。そして、病室に入ろうとする

時にわざとらしい口調で話しかけて来た。

「新ちゃんから愛して貰えるなんて、かなり贅沢な話よ。サークルでもかなりモテてたんだから。
新ちゃんかなり結婚意識してるみたいだし、大事にしてあげて」

「は、ぁ…」

ケッコン？何それ。美味しいの？
そんな事しか頭にない。看護婦さんの言葉は現実離れしてて、他人事のように聞こえて来る。

「…結婚って…誰とですか？」

看護婦さんは私の身体を横たえさせると、くすっと笑ってみせた。

「香西さん以外に、誰がいるんですか？」

看護婦さんが病室からでたあと、私は変な汗をやたらとかいていることに気付いた。

―129―

仕事を終わらせたあと、こっそりと面会に行く。一応まだギリギリ面会時間だし…大丈夫だ。

ノックをして病室へと入る。すると彼女がボーッとして外を眺めていた。

「薫？どうしたの？」

俺の言葉に彼女がびくっとした。携帯事件と同じような反応に、また何か不安にさせるような事をしたのか心配になる。

しかし、彼女の頬に手を添えてくいっと顔を向けさせると、彼女が顔を真っ赤にさせていた。

「何、どうしたの…」

「べ、つに…何も…」

そう言って俯いたっきり、彼女はうんともすんとも言わなくなった。

「薫…？」

彼女は少し上目遣い気味にこちらを見た。それでもすぐに目を反らし、視線が泳いでいる状態だ。

「何かあったの？」

「…あの！」

彼女があの時と同じように話を切り出した。ただ前と違うのは、彼女の言葉に開き直り感がある所だ。

「け、ケッコンって美味しいんですか？」

「…は？」

『ケッコン』って…血痕？いや、そんな訳ない。じゃあ結婚？何で唐突にそんな事を…しかも『美味しいんですか？』とか…。そう思ったとき、彼女が少し慌てたように話し始めた。

「か、看護婦さんが…新一さんが結婚をかなり意識してるって、言ってたから…」

思わず固まってしまった。奴め…俺があれだけ慎重に動いてたのに、それを打ち砕くかのようにあっさり喋りやがった。

ならばもう当たって砕けるしかない。彼女の手を包み込むようにし

て握る。

「結婚って人それぞれと思うけどね…ただ俺のに関しては激甘にするつもりだけど」

彼女の顔を覗き込むと、今までになく顔が真っ赤になっていた。

もうすぐで2ヶ月…出会ってからは4ヶ月だが、それでもマンネリさえ感じさせない彼女に愛しさが募る。

そのままゆっくりと顔を近づけ、そっと口付けをした。そのまま押し倒してしまいたい衝動に駆られるが、彼女は怪我人だし、ここは病院だし、常識と理性がそれを懸命に引き止める。

少し顔を離し、もう一度口付ける。この時間と幸福感と女性と、全てが永遠に俺のものになってくれることを願うかのように。

「早く怪我治してドライブに行こうよ」

彼女の唇から離れてそう言った。彼女は顔を赤らめたまま、嬉しそうに笑ってくれた。

「頑張ります」

「無理したらお仕置きだからね」

「な、何でですか！」

「何ででも」

そう言って彼女の髪をくしゃっと撫でた。

―130―

さっきから顔が熱い。でも扇いで涼もうという気にもならない。

結婚…？彼が…私と？夢を見ている気にしかならない。

思い返せば、自動車学校に通っている頃に片思いした彼と両思いだっただけでも嬉しかったのに、結婚までいくって…話が出来すぎている。

でも看護婦さんは『香西さん以外誰がいるんですか？』と言っていた。ということは、彼が結婚を意識しているのは…

「薫？どうしたの？」

ドキッとした。いつの間に病室に入ってきたんだろう。私の考えなんか見透かされてそうで正直怖い。

すると何を思ったのか、彼が私の頬に手を添えて、彼の方へと顔を向けさせた。彼は少しびっくりしたように尋ねる。

「何、どうしたの…」

「べ、つに…何も…」

顔を反らすしかない。今はただただ、彼と顔を合わせるのが恥ずかしくて恥ずかしくてたまらない。

「薫…？何かあったの？」

心配そうに尋ねてくる彼に、今私がどんなことを考えているのか伝えたい。でもそうするにはあまりに恥ずかしすぎて。

「…あの！け、『ケッコン』って美味しいんですか？」

「…は？」

ごもっともな反応だ。何を言ってるんだろう、私…。

それでも脳内がパニック状態を引き起こし、まともなことが考えられない。

「か、看護婦さんが…新一さんが『ケッコン』をかなり意識してるって、言ってたから…」

その言葉を聞いた彼は、ふっと笑って私の手にそっと大きな彼の手を添えた。

「結婚って人それぞれと思うけどね…ただ俺のに関しては激甘にするつもりだけど」

何だそれ。思わず赤面してしまう。彼のに関してだから私のとは限らないのに、何故だか気持ちが高揚する。

ゆっくりと、ゆっくりと、彼の顔が近づいて来ているのがわかる。私も俯かせていた顔を少しずつ上にあげた。

そして唇が重なった。私の全てを包み込んでくれるような優しさにすがりたくなるし、甘えたくもなる。

彼はそれを受け入れるように、再び深い深い口付けをした。

唇が離れた時、彼がそっと私の頬を撫でた。

「早く怪我治してドライブに行こうよ」

「頑張ります」

「無理したらお仕置きだからね」

「な、何でですか！」

「何ででも」

彼との時間が永遠のものであれば良いのに…。

―131―

やっと昼休みに入った。二段階の生徒の指導はある程度楽しいが、正直一段階の生徒は退屈で退屈で仕方ない。

コンビニ弁当をガサッと机の上に置いて一息つく。彼女は今頃何してるんだろう。結局考えることはそこに行き着く。

軽く息を吐いて弁当の蓋に手を掛けた時、池田ちゃんがおもむろに覗き込んで来た。

「あれ、内村さんコンビニ弁当ですか？彼女さんに作ってもらったら良いのに」

「今入院してるって言ったじゃん、この前」

「あ、そうでしたね…」

そう言って池田ちゃんはご飯を一口、口に運んだ。よく見てみれば手にしているのは結構小さな手作りの弁当箱。女性ってこういうの几帳面なんだな、と思う。

「池田ちゃんって彼氏に弁当作ってやってんの？」

「一緒にいれる時は作ってます」

「何か良いね…手作りとかそういうの」

半分なげやり、半分羨ましさが入り混じっている。それをごまかすかのように飯を次々と口に入れた。

「退院したら作ってもらえば良いじゃないですか」

「無理だよ、生活時間帯違うもん」

「…彼女さん何やってる人なんですか？」

しまった。そうだった。

池田ちゃんにまだ彼女の事を詳しく話した事がない。

まあ良いか、と思いつつ、気持ち声を小さめに打ち明けた。

「大学生だよ」

池田ちゃんは俺が予想していた通り、びっくりした顔でこっちを向いた。若干口がぱくぱくしている。

「俺を指名してた生徒だったんだ」

「やっぱりモテモテじゃないですか」

「いや、告ったの俺だよ？」

再び池田ちゃんが勢い良くこっちを向いて目を見開いた。もう良いよ、それ、と言いたくなるようなリアクションについ笑ってしまう。

「なに」

「いや、そうなんだなー、って…」

「そうだよ。誰にも渡したくないって思ったから」

「はー…」

池田ちゃんはそう言って箸を置いた。コレは完全に…質問攻めにあう。

「誰、誰ですか？私知ってます？」

「知ってるんじゃない？セット教習とか応急救護とか、池田ちゃんの担当だったし」

「担当生徒がたくさんいてわからない…」

「じゃあわかんないね」

軽く笑って食後のコーヒーを流し込む。池田ちゃんはちょっと黙った後、意を決したように話し掛けて来た。

「内村さん、彼女さんとの結婚考えてるんですか？」

俺はタバコを吸いに行くために椅子から立ち上がった。池田ちゃんに自慢気な顔を向ける。

「まあね」

池田ちゃんはふっと笑って俺を見た。

「彼女さんが羨ましいですよ、ホントに。こんなにも愛されてるんだから」

「そう伝えとくよ」

そう言って俺は喫煙所へ向かった。

―132―

私の努力が実ってか、先生は『驚異的な回復力だ』とおっしゃっていた。何とか今月中には退院出来そうだ。

それでもまだする事がなくて、ぼんやりと窓の外を眺める。すると、部屋にノックの音が響いた。

「薫ー！」

「美樹ちゃん！」

私のもとへ駆け寄ってくるやいなや、私を力一杯抱き締めた。

「わー、久しぶりのハグだよ」

「本当だねー。早く退院したいよ」

「まだ随分先？」

「いや、もしかしたら今月中かも」

「ホントに？みんな待ってるよ」

にょー、と言って美樹ちゃんは小さくガッツポーズをした。なんて可愛い子なんだ。よしよしと頭を撫でると、嬉しそうにえへへ、と

笑った。

「そうそう、薫の元彼の人…だよね、毎日病室に来てたの」

「あー、うん。最近は実験が忙しいみたいで来ないけど」

「なーにー？寂しいの？」

「いや、別に…」

美樹ちゃんはつまらなそうにえー、と言った。

「でも来てるって事はさ、まだ薫のこと好きなんじゃないの？」

「…だとしたら困る」

「そうなの？」

心配そうに上目遣いで私を見て来た。たぶん私が男だったらイチコロだろうと思いつつ頭を撫でた。

「ごめん、めっちゃ報告遅くなったんだけど、私彼氏出来たんだよ。この世には物好きがいるもんでさ」

「え！？誰！？」

私は無言で頷いたけど、美樹ちゃんは喋って欲しそうな目を向けて、私と同じように頷いた。
でもそれは彼のことを隠したいんじゃなくて、美樹ちゃんが彼を知ってるから気恥ずかしいんであって、きっとそれは伝わっているんだと思う。美樹ちゃんは絶対無理強いはしない。

つぶらな瞳に負けた私は、恥ずかしさを隠すために手元を見た。

「…内村さんだよ」

「え?内村さんて…あの内村さん?古野ドライビングの?」

「う…ん、そう」

「え!?何で!?どういう事!?」

美樹ちゃんは驚きを隠せない表情でこっちを見た。それもそうだよねー、なんて楽観的に考えながら美樹ちゃんの手を握った。

「えーっと、確かあれは3月の…中旬くらいかな?教習が終わるちょっと前に告白され…たんだよね、確か」

「え?電話で?メールで?」

「いや、教習車の中で」

美樹ちゃんは右手で自分の口を覆った。確かにびっくりする事ではある。私ももし美樹ちゃんが同じ事になってたら、驚かずにはいられないだろう。

「嘘…なんか、ドラマみたいだね」

「私もイマイチ信じられないときあるもんね」

「うん、でも内村さんなら絶対に薫を幸せにしてくれるよ」

「だといいな」

二人で晴れ渡った空を眺めた。

―133―

「さて、と」

今日はいつもの休校日だから一日中病院にいるつもりだ。彼女がリハビリを無理してそうな感じもあるし、今日くらいは一緒にゆっくりしておこう。

差し入れに池田ちゃんお薦めのプリンを買って車に乗り込む。つい一応女の子なんだ、なんて思ってしまう。

『香西さん…何かいたような、いなかったような…』

『失礼な奴め』

『じゃあ内村さんは担当生徒全員覚えてるんですか?』

『顔はね』

『同レベルじゃないですか!』

『でもアイツを5、6回は担当してたよ、池田ちゃん』

なのに覚えてないなんて、と池田ちゃんを珍しくいじり倒した。その結果、今日彼女の為に勝手あげることになったプリンを渡され

たのだ。『これで許してください』と。

喜んでくれるかな、と胸をはずませて病室へと向かい、ゆっくりとドアを開けた。

誰もいない部屋。窓は全開になっていて、よく見れば机には紙とペンが置いてあって。

慌てて駆け寄って紙を乱暴に手に取った。そこに書かれていた文字は『お』だけだった。

「…何これ…」

「何してるんですか」

ドキッとして振り返ると彼女が立っていた。いつのまにいたんだろう…というかどこにいたんだろう。

「焦ったー…どこにいたの？何してたの？」

「ロッカーで荷物整理してました。ホラ、ドア開けたらロッカーって死角じゃないですか」

「そうだ…ね…」

そしてやっと気付いた。彼女が松葉杖を使いながら一人で歩けるようになっていることを。

「いつのまに車椅子脱出したの？」

「一昨日です。もう少ししたら松葉杖も脱出です」

彼女が元気になって来ているのが嬉しくて嬉しくて、彼女の傍に行って力一杯抱き締めた。

「頑張ったね」

「早く帰りたかったから」

俺は何も言わずに彼女の頭を撫でた。相変わらずふんわりした香りに心地よさを感じる。

「お土産持って来たから、一緒に食べよう」

「はい」

二人でベッドに腰掛けて、プリンを食べながら談笑した。嬉しそうに笑う彼女を見て、まだ残る少女らしさを感じる。

彼女と結婚するつもりだと言った。彼女以外に誰もいないはずなのに。

いざ結婚のことにぶつかってみるとそう簡単に決める訳にはいかなかった。人生を決めることだし、彼女の分も背負っていかなければいけない。彼女にしてもまた同じだ。

こんな若い子に、１０歳も上のおっさんの全てを背負わせて良いのだろうか。

「どうしたんですか？」

彼女が不思議そうに覗き込んで来た。

「え、何で？」

「何か険しいっていうか…辛そうな顔してたから…」

「あぁ…腹痛いだけ」

「まさかコレが原因じゃないですよね」

「わかんない。車の中に長時間放置してたから」

「そんなもの食べさせないでください！」

本気で反論してくる彼女がおかしくておかしくて、ついつい笑ってしまう。

「大丈夫だって、そんなに時間経ってないから」

そう言って彼女の頭を撫でると、まだ文句が言い足りないのかむぅ、とだけ言った。可愛い奴だ。

―134―

今日は休校日だから彼が来てくれるらしい。結構リハビリも順調で、自分で動けるようになって来たので荷物や部屋を整理する。

お父さんとお母さんに手紙を書こうと思って書き始めたは良いけど、入院期間だからいつ帰れるかわかんないし、バイトもあるし、部活もあるし。スケジュール帳探しがてらに掃除をしているわけだ。

ロッカーをあさっていると、背後からカチャ、と音がした。間違いなく彼だろう。松葉杖を頼りに立ち上がると、ちょうど全開になったドアの扉で彼が見えなかった。

驚かそうと思って彼の背後に忍び寄った矢先、彼が慌てたようにベッドに駆け寄り、乱暴に書きかけの手紙を手に取った。

あれ…どこまで書いたっけ。

彼は少し不安そうな声で言葉を搾り出した。

「…何これ…」

「何してるんですか」

彼がかなりびっくりしたように振り返った。びっくりしたのはこっちなのに…何をそんなに心配してたんだろう。

「焦ったー…どこにいたの？何してたの？」

「ロッカーで荷物整理してました。ホラ、ドア開けたらロッカーって死角じゃないですか」

「そうだ…ね…いつのまに車椅子脱出したの？」

彼が驚きつつも嬉しそうに尋ねた。その姿が嬉しくて嬉しくて、リハビリ頑張って良かったと思った。

「一昨日です。もう少ししたら松葉杖も脱出です」

すると彼はふわりと私を抱き締めた。暖かい匂いが私の全てを包む。

「頑張ったね」

「早く帰りたかったから」

彼はいつも私が求めている言葉をくれる。そのたびに救われた気分になって、すごく落ち着くのだ。

「お土産持って来たから、一緒に食べよう」

「はい」

そう言って二人でベッドの方へ向かった。

相変わらずこのベッドは二人の重さに耐えきれないように悲鳴をあげた。
そんなに古いわけでもなさそうなのに…ということは、私がダイエットしなきゃな感じみたいだ。

というのに彼が持って来たのは有名なプリン専門店のプリンだった。
食べない訳にはいかないじゃないか、と頬張る。

「わー、美味しい！一回食べてみたかったんですよね、ここのプリン」

そう言って彼の方を向くと、何やら険しい顔をしていた。何か考え事でもしているんだろうか。

「…新一さん？」

軽く腕に触れると、彼がはっとしてこっちを向いた。

「どうしたんですか？」

「え、何で？」

「何か険しいっていうか…辛そうな顔してたから…」

「あぁ…腹痛いだけ」

その言葉を聞いて彼の手元に目をやると、彼のプリンはほとんど減っていなかった。

「まさかコレが原因じゃないですよね」

「わかんない。車の中に長時間放置してたから」

「そんなもの食べさせないでください！」

彼がいつものように爆笑した。何も変な事なんて言ってないのに。

「大丈夫だって、そんなに時間経ってないから」

彼の優しい目が、一瞬切なそうに見えた。

―135―

何なんだろうな、この重苦しさは。

そう思いつつベッドから出る。ここ最近朝一番にするのはため息だ。きっと彼女に言えば『幸せが逃げちゃいますよ』なんて笑われるんだろうが。

最近いろんな人に相談しているのだが、大体『恋愛に年齢なんて関係ない』と言う人もいれば、『女子大生と遊んでないで、真剣に結婚を考えた交際を』と言う人もいる。彼女を遊び相手にしたつもりはない。でも実際そう簡単に結婚、とはいかないのだ。

なんせ初老と言われる歳に達した時、彼女はまだ３０歳。他の男に寝取られたって仕方がない。最近不穏な動きがあるみたいだし…。

「内村さん、珍しく車に乗ってる時もだるそうでしたね」

池田ちゃんがコーヒーを持って俺の横に座った。

「あー、考え事」

「彼女さん？」

「まぁ…ね」

ふと冷静になって考えると、池田ちゃんも彼氏持ちの女性だ。色々とアドバイスが貰えるはず…可能性として低い、なんて言ってしまったら殴られそうだが。

「あのさ、例えば結婚相手が１０上だとするじゃん。で、マンネリを感じた頃に、上でも下でも良いけどいきなり年齢の近いイケメンにアプローチされたらどうする？」

「…何で？」

「いや…何となく」

「彼女さん浮気してるんですか？」

「してないと思うけどね」

ただ、言い寄って来る男は結構いるみたいだ。中学時代の元カレとか、小学校の時の同級生とか、部活の友達とか。そして彼女がそれに気付いていないのがタチ悪い。

「彼女さんを想うが故なら本人と話すのが一番ですよ。別れた方が

良いかも、なんて男側だけが考えてる可能性もありますし」

「そっか」

何となく救われたような気分になる。何かを吐き出すかのようにゆっくりと息を吐き、池田ちゃんの方を向いた。

「もうすぐ退院みたいだし、今度ゆっくり話してみるよ、これからどうするか」

「あんまり重いと嫌になって逃げる女の人もいますからね、気を付けて」

「頑張ってみる」

そしてちょうどその時、彼女から一通の着信があった。思わずふっと笑ってしまう。

「噂をすればなんとやらってやつですか？」

「みたい」

高ぶる気持ちを抑えて電話に出た。

「もしもし」

―136―

『お父さん、お母さん、春樹へ

入院生活も大分落ち着いて来て、今リハビリに励んでるよ。私の頑張り次第ではもうすぐ退院みたい。
春樹が期末テストで学年一位取ったらしいから、私も負けないように頑張るよ！
また近々連絡するねー

薫より』

実家宛てにようやく手紙を書き終えた。メールで送っても良かったんだけど、手書きの方が何か気持ちが込もってる気がして手紙にした。まだ中学生の弟は携帯持ってないし。
今になって改めて手紙なんて気恥ずかしさがあるけど、それは言わないでおこう。

手紙を封筒に入れて宛先を書き、糊付けして封をした時、先生が部屋にやって来た。

「体調はどうですか？」

「松葉杖なしでも歩けそうな感じです」

「まだ松葉杖使ってもらいますけどね」

先生が強く、でも冗談っぽく言って笑った。

「香西さん、かなり頑張りましたね。明日にでも退院出来ますよ」

今の先生の言葉に一瞬耳を疑った。明日？ホントに？

「…え？」

「今日荷物をまとめさえすれば昼頃にはご自宅に帰れますので」

「ほ…ホントですか…？」

「医者が嘘をついてどうするんですか」

まだ３０代であろう先生が優しく微笑んだ。自然と頬がゆるむ。

「ありがとうございます！」

「私は何もしてませんよ、香西さんが頑張ったんです。
『旦那さま』によろしくお伝えください」

そう言って部屋から出た先生は私の顔が真っ赤になったのを知らない。

「はー…」

息を吐き出しながら体をのばす。もうこの病室とさよならかと思うと、寂しくなくはない。

思い返せば怒濤の一ヶ月だった気がする。一ヵ月近く意識がなくて、意識が戻ったら彼とちょっとした事件があって、それから一ヵ月のリハビリ。

そして振り返ってみて気付いた。明日は三ヶ月の記念日だ。もう6月も終わりかと思うと、時間の速さにびっくりしてしまう。

一刻も早く彼に退院を伝えたくて、昼間だから出てくれるだろうかと心配しつつ電話を掛けた。
退院したら何をしてあげよう。今まで心配かけた分、沢山のことをしてあげたい。

コール音はすぐに切れた。

『もしもし』

―137―

『あ、もしもし？今大丈夫ですか？』

仕事中だというのに…いや、仕事中だからか、彼女の声を聞いて癒された気分になる。

「おぉ、今昼休み中だから大丈夫だよ。どうしたの？」

携帯の向こうからえへへ、と声がした。きっと嬉しい知らせなのだろう、彼女の声色だけでわかる。

『明日、退院出来るそうです』

「マジで？はー、良かったねぇ」

うん、と小さく声がした。

『まだ松葉杖らしいですけどね、でも歩こうと思えば松葉杖なしでも歩けますよ』

「いや、そりゃダメだ」

彼女のことだから無理をしてでも早く治そうとするだろう。実際それで美幸に注意された事がある。

「お前すぐ無茶するんだから…心配してるこっちの身にもなってよ」

『むぅ』

「とりあえず、明日迎えに行くから。休みだし」

『最近休み多くないですか？』

「気のせい。完全週休二日制だもん」

もうすぐ生徒の数が増える夏休みに差し掛かるから、まともな休みは取れないかもしれない。だから会えるうちに絶対会っておかないと後悔するだろう。

彼女はクスクスと笑っていた。

『そうですか』

「うん、まぁとにかく明日朝一で帰れるようにしといて」

『はい、待ってます』

「ん、じゃあ今から教習行って来るから、またね」

『はい、行ってらっしゃい』

短い電話を切ってふと隣に目をやると、池田ちゃんが何やらにやにやしながら俺を眺めていた。

「な、何だよ…」

「いいえー、別に何も。ただ幸せそうだなって」

「池田ちゃんだってこんなもんだろ」

「教習の合間縫って電話しませんもん。良いなー、ラブラブじゃないですか」

「うるさいな、恥ずかしい事言うな」

「わー、内村さん顔真っ赤ー！」

池田ちゃんが面白そうにけたけたと笑う。何で俺がこんなにいじられるはめになるんだ。

軽くため息をついて池田ちゃんの方を見ると、優しい笑みを浮かべていた。

「退院おめでとうございます」

「ありがとう」

「香西さんにもよろしく伝えてください」

「わかった、きっとアイツ喜ぶよ」

「あ、今度ダブルデートしましょうとも伝えてくださいね！」

「やだよ」

逃げるように指導員室から出た。彼女の退院を祝うかのように、空は晴れ渡っていた。

―138―

一ヵ月近く眠っていたからか、付き合い初め…よりも、付き合う前のドキドキ感が全然変わらない。愛しさと、切なさと、いろんな物が込み上げてくる。

「あ、もしもし？今大丈夫ですか？」

『おぉ、今昼休み中だから大丈夫だよ。どうしたの？』

良かった、と思う。早く退院のことを伝えたくて伝えたくて。でも10分休みなら諦めるしかないと思っていた。

「明日、退院出来るそうです」

『マジで？はー、良かったねぇ』

彼の声のトーンが少し上がった。心から喜んでくれてるのが伝わって来て、くすぐったいほど嬉しい。

「うん…まだ松葉杖らしいですけどね、でも歩こうと思えば松葉杖なしでも歩けますよ」

すると彼が少しだけ強めの口調で話し始めた。

『いや、そりゃダメだ。お前すぐ無茶するんだから…心配してるこ

っちの身にもなってよ』

「むぅ」

彼が心配してくれてるのはよくわかった。けど、一日でも早く彼の元に行きたかった。

多分私が無理してまで早く治そうとしたのを例の看護婦さんがバラしちゃったんだろうな、と思う。

彼は私が思っていることを知らないでか、電話の向こうで軽く笑った。

『とりあえず、明日迎えに行くから。休みだし』

「最近休み多くないですか？」

『気のせい。完全週休二日制だもん』

わかってる、そんなこと。彼に次会える日をいつもどれだけ待ちわびてることか。きっと彼はそんな事想像だに出来ないだろう。

「そうですか」

何だか嬉しくて、ついつい笑ってしまう。彼もそれにつられるようにして、なに、と言いながら笑っていた。

『うん、まぁとにかく明日朝一で帰れるようにしといて』

「はい、待ってます」

『ん、じゃあ今から教習行って来るから、またね』

「はい、行ってらっしゃい」

彼が仕事中なのもあって、恋しさを押し殺しつつすぐに電話を切った。親には今からメールで連絡し、友達にはそれから連絡しよう。

明日か…待ちきれない楽しみが胸いっぱいに広がる。退院したらまず…何をしよう。何をしてあげよう。そんな事ばかりが頭の中を駆け巡る。

―139―

彼女を迎えに行く前にまず部屋の掃除をした。彼女をここに連れて来ようというのも一つの理由だが、これからゆっくり会えるのが楽しみで楽しみで仕方なく、早起きしすぎてしまって出来てしまった時間を潰すためでもある。

結構汚くしてしまった部屋を一通り綺麗にし終わったところで、部屋を見渡した。
彼女は3月下旬からここには来ていない…ということはもう三ヶ月近く来てない事になる。

時間が経つのはとにかく早い。

思えば約半年前に出会ったんだ。

実を言えば一段階の時から当たってたらしいから、もうすぐ7月の今からすれば…あと二ヵ月ちょっとで実は顔を合わせて一年になる。

失礼な話たが、その時は印象に残ってないほど彼女とは会話をしていない。前にちらっと『正直あの時、内村さんあんまり好きじゃなかったんです』と言われたほどだ。

そんな俺が、彼女に再び会って恋をした。

良い意味で普通の彼女。計算高いわけでもなく、媚を売ってるわけでもなく。

その自然体の姿に惹かれていった。

誰よりも他人を思いやる事が出来る彼女。誰よりも俺を想ってくれる彼女。

プロポーズするなら、いつだ。

そんな事を思ってるうちに着メロが鳴った。着信音でわかる、彼女からだ。

「もしもし」

『あ、もしもし？いつ迎えに来てくれるんですか？』

「いつって…」

朝一だから１０時だろ、と思って時計を見ると、とっくの昔に１０時を過ぎていた。

「や、っべ！１０時過ぎてる！」

電話の向こうからは苦笑いが聞こえる。

『もう、何やってるんですか…急がなくて良いですからね。待ってます』

「ごめん、すぐ行くよ」

俺も苦笑して電話を切った。今すぐ行かなくちゃ、と慌てる気持ちが車のキーを忘れたり、財布を忘れたりなんかする行動に表れている。

彼女が俺を待っている。それだけで胸が高鳴ってしまう。

もう三十路前なのに青春を謳歌しているみたいで、何だか少し恥ずかしかった。でも彼女を想う気持ちを止めることは出来ない。

プロポーズするなら、今だ。

－１４０－

ぼちぼちと荷物整理を終わらせて、一息着いたのが１０時前１０分だ。もうすぐ…もうすぐ彼が迎えに来てくれる。

楽しみで仕方ないのを抑えるかのようにひたすら荷物をカバンの中に詰める。
着替えはとっくに済ませているため、あとはもう迎えを待つだけだ。

ベッドに座って携帯を眺める。メールや電話はほとんど彼で、友達とか家族とはたまに連絡を取っていたくらいだ。

といってもそんな毎日2、3時間の電話をしていた訳でも、毎日１０通以上のメールをしていた訳でもない。程よい距離感のまま、この一ヶ月間過ごして来た。

今日は家に送ってもらってゆっくりしよう。多分入院前の部屋の状況と変わってないはずだから、彼を部屋に上げても問題ないはず。

携帯を握り締めて病室の時計を見た。あと5分…この5分が長いんだよなぁ、と思いながら空を眺めた。

そして、気付けば１０時半を回っていた。１０時に迎えに来るって言ったのに…ちょっと恨めしく思ったけど、彼は社会人で忙しい人。仕方ないといえば仕方ないことなのだ。

くすっと笑って電話を掛けた。もしかしたら疲れて爆睡してしまっているのかもしれない。その姿を想像すると、１０も年上の彼が可愛く見えてきてしまう。

そんな私の考えとは裏腹に、彼はすぐに電話に出た。

『もしもし』

「あ、もしもし？いつ迎えに来てくれるんですか？」

『いつって…やっべ！１０時過ぎてる！』

寝坊かな？仕方ないなぁ。

何だか笑みが自然のうちにこぼれてきた。幸せだ。なんて幸せなんだ。

「もう、何やってるんですか…急がなくて良いですからね。待ってます」

私がわざとらしく言ったせいもあって、彼は苦笑していた。

『ごめん、すぐ行くよ』

はい、待ってます、と小さくつぶやいて電話を切った。

彼が来るまで数十分。これから彼にしてあげたいことを頭に描きながら彼を待った。

―141―

「お待たせしました」

ドアを開けると優しい笑みを浮かべていた彼女に話し掛けた。この時間をどれだけ待ちわびたことか…。

彼女の手を取って立ち上がらせる。まるでお姫さまをエスコートするかのような動作に、彼女はくすっと笑った。

「お待ちしてました」

「ゴメン、何か色々考え事してたらさ、結構時間かかっちゃって」

「そんなに考え事してたんですか?」

「まぁ…ね」

それが何なのか、言ってしまえば楽になるのに言えるはずもなくて。

俺はひたすら彼女に笑顔を向けた。

「帰ろう」

「はい…あ、私の家覚えてますか?」

「…まあ」

忘れるはずがない。付き合う前に初めてデートした時に寄った場所だ。部屋にはまだ上がった事はないが、写メならちらっと見たことがある。

「申し訳ないんですけど、家まで送ってもらって良いですか？」

「えー、めんどくさ」

「何言ってるんですか、荷物置きに帰らなきゃ」

「俺ん家で良いじゃん」

「部屋も散らかってそうだし…」

「退院早々お姉ちゃんにこき使われるんだ」

彼女は苦笑いを浮かべていた。

「仲良いですって」

「でも『もー、ホラこれ、早くやってよ』みたいに言われるんでしょ？」

「そんな事ないですよ！」

俺たちが通って帰る通路は明るい笑いでいっぱいになった。他からすれば迷惑な話だったのかもしれないが。

車に荷物を積んで出発する。旅行以来のドライブになるため、ガキかとツッコまれそうだがめちゃくちゃわくわくしている。

「よーし、じゃあ発車しまーす」

「はい」

久しぶりに緊張する運転かもしれない。少しでもカッコ良く、スマートに見せなければと思う。

ハンドブレーキをおろして出発をする。すると彼女は窓を開けて外を眺め始めた。

「…目つぶってごらん」

俺の言葉に彼女は何も言わず、笑みを浮かべたまま目をつぶった。

「そんでもって窓から手出して」

横目でその姿を確認する。何をしても可愛く、美しく、優雅に見えてしまう。

「軽く手を握ってごらん」

「…んー…？」

「それ女の人の胸の感触なんだって」

彼女が凄い勢いで俺の方を振り返った。口をぱくぱくさせている彼女がおかしくて、ついつい笑ってしまう。

「ば…っか、変態！」

「でもなんか楽しそうだったじゃん」

「何も知らなかったからです！こんなさせて何がしたいんですか！」

「えー…今ここで言わなきゃダメ？」

「知りません。好きにしてください」

ぷいっと顔を背ける彼女だが、俺としてはいかにもいじって下さい的な感じがする。

またあの楽しい生活が戻って来たのだ。

「じゃあ俺の好きにします。文句はナシよ？」

何もわかってない彼女はうんうん、と頷く。それを確認した上でハンドルを切った。

―142―

ぽすっとベッドの上に座る。

「あー…ひーまー…」

彼はいつ来るんだろう。そんなことを考えながら脚をぷらぷらさせる。

待ち遠しくて待ち遠しくて仕方がない彼。ちょっと廊下から足音が聞こえてきたのにぴくっと反応して、今か今かとばかりにそわそわしてしまう。

そして、

「お待たせしました」

彼はノックのあとドアをそっと開けた。どこの王子さまだとツッコみたくなる様子についつい笑ってしまう。

「お待ちしてました」

「ゴメン、何か色々考え事してたらさ、結構時間かかっちゃって」

「そんなに考え事してたんですか?」

「まぁ…ね」

彼は私に顔を見せずにそう言った。

私の荷物をいとも軽々と持ち上げて、彼はにっこり笑った。

「帰ろう」

そう、今日は家に帰る日。荷物とかの整理もしなきゃだし、誰とは言わないけど不安要素もある。

「はい…あ、私の家覚えてますか？」

「…まあ」

「申し訳ないんですけど、家まで送ってもらって良いですか？」

「えー、めんどくさ」

何でここまで来ていじられなきゃならんのだ。早速ドSぶりが発揮され始めたみたいだ。

「何言ってるんですか、荷物置きに帰らなきゃ」

「俺ん家で良いじゃん」

「部屋も散らかってそうだし…」

「退院早々お姉ちゃんにこき使われるんだ」

まあそんなことはしないだろうけど、状況的にはたから見ればそうなる。その様子がもう頭に浮かんで来て苦笑いを浮かべた。

「仲良いですって」

「でも『もー、ホラこれ、早くやってよ』みたいに言われるんでしょ？」

「そんな事ないですよ！」

そんな他愛のない話をしながら駐車場へと向かった。何でもない当たり前のこと、でもそれが私にとってはすごく幸せな事だった。

「よーし、じゃあ発車しまーす」

彼は教習の時と同じような声の調子で喋った。

「はい」

彼が車を発車させると同時に、窓を開けて外の景色を眺めた。いつの間にか季節は夏になっていて、少し汗ばむ陽気だ。

すると彼は何を思ったのか、前を向いたまま話し掛けて来た。

「…目つぶってごらん」

今から何をするのか見当も着かないけど、とりあえず言われるがままにやってみることにした。

「そんでもって窓から手出して」

何を企んでいるんだろう。そう思いつつ窓からそっと手を出した。

「軽く手を握ってごらん」

「…んー…？」

何かの映画のワンシーンであったような気がする…名前は全然覚えてないけど。

すると彼が嬉しそうな感じで口を開いた。

「それ女の人の胸の感触なんだって」

なんて事させるんだ。そう思いながらダッシュで手を引っ込めた。

彼はいつものように爆笑している。

「ば…っか、変態！」

「でもなんか楽しそうだったじゃん」

「何も知らなかったからです！こんなさせて何がしたいんですか！」

「えー…今ここで言わなきゃダメ？」

「知りません。好きにしてください」

助手席側の窓の方にくるっと首を向けた。隣からは笑い声が聞こえる。

「じゃあ俺の好きにします。文句はナシよ？」

はいはい、と言わんばかりに適当に頷いた。これが後に影響するなんて夢にも思わなかった。

―143―

俺は、夢を見ていたんだ。

彼女と永遠に一緒にいられる夢。子供も作って、毎日が賑やかで楽しくて幸せいっぱいの日々。

そんな日が、絶対に来ると思ってたのに…。

「う、ん…」

おそらく冷房が切れたからだろうその暑さに不快感を覚えながら目を覚ました。

それとは裏腹に、ふわっとした温かい香りが俺を包む。すごく落ち着く匂い。

ふと顔を上げると、彼女が寝息を立てて眠っていた。

この状況につい眉間にしわが寄る。自分でも何でこうなってるのかわからない。

というのも、いつも彼女は俺の腕の中で眠る形だ。それが今日は何

故か状況が逆になっている。

そして今、夢がよぎった。

彼女と別れてしまう夢。俺は婚後の生活も描いていたのに、涙を浮かべたまま微笑む彼女から一言言われる。

『無理よ、誰も祝福してくれないもの』

それからうなされ始めたといっても過言ではないだろう。

不安だ、不安なんだ。

彼女に抱きつき、胸に顔を埋めた。俺の目の前からいなくならないでくれとすがりつくかのように。

その瞬間、彼女が俺の頭に手を回した。びっくりして顔を上げるが、彼女は相変わらず静かに寝ている。

その姿を見てふっと笑ってしまった。幸せだ…これ以上の幸せなんてないくらいに。

「うー…あっつい…」

目を覚ました第一声、彼女はそうつぶやいた。はいはい、と言って窓を開けに行く。すると彼女がベッドで何やら動き始めた。

「どうしたの？」

「待ってください、着替えるから」

なんかもう、こんな事されてたらいじめたくなるじゃないか。ふっと笑って窓に寄り掛かる。

「何をいまさら」

「もう少しだから」

聞く耳なんて立てずにシーツの中でもそもそと動く。どこの小動物だ、お前。

彼女に悟られないようにそっと近づく。

「むあー」

そう言って彼女がシーツから脱出した時、がばっと彼女を後ろから抱き締めた。

「ひゃ！ちょ、どうしたんですか？」

「何でもない」

何でもない。ただずっとこうしていたい。

そう思うのは利己的なんだろうか。常識はずれなんだろうか。他人に迷惑を掛けるんだろうか。

どうかこのまま…。

―144―

あれは昨晩のことだった。

シャワーを浴びた後ベッドへと向かった。すると彼はもう体を横に向けて眠っていた。

こっちだってもう疲れ切って眠いっていうのに…ついふっと笑ってしまった。

まあ良いか、と思ってバスタオルのまま布団に入った。今から着替えようとするほどの気力も体力も残ってない。

彼の横に寝そべって寝顔を眺めていた。いつも先に寝てしまう私にとってはかなり貴重な姿。

くすっと笑って頬に触れたその瞬間だった。

「か、お…る…」

彼は寝ているというのに苦しそうな、辛そうな顔をした。その瞬間

に胸が締め付けられるような感覚がした。
私に助けを求めているの？それとも…。

前者であって欲しいと一心に願いながら彼を庇うかのように抱きしめた。彼は落ち着いてくれたのか、穏やかな顔で寝息を立て始めた。

そして、一瞬の不安。

彼はずっと私の傍にいてくれるのだろうか。これから先も、ずっと。

自分の不安を紛らわすかのように彼の額に口付けをした。

それから先のことは覚えていない。気付けば朝になっていて、彼が頭を撫でていた。

せっかくで何なんだが、何せ部屋を締め切っているから、こう二人でくっついていると朝方とはいえ暑い。

「うー…あっつい…」

そう言いながら体を伸ばすと、彼は少し笑ってはいはい、と言いながら窓を開けに行った。

そして自分の状況に気付く。体に巻いてたはずのバスタオルは、寝相が悪いせいか床に落ちていた。つまり…

あわててシーツを被って服を探した。

「どうしたの？」

「待ってください、着替えるから」

「何をいまさら」

彼は笑っているけどそれどころじゃない。

「もう少しだから」

焦れば焦るほどうまく服が着れない。落ち着け、落ち着くんだ私。

大げさながら熱気と二酸化炭素が充満する空間からやっとの思いで脱出した。

「むあー」

その瞬間、後ろから思いっきり抱き締められた。シーツを脱いだ時に目線の先にいるはずの彼の姿はない。

「ひゃ！ちょ、どうしたんですか？」

「何でもない」

何でもないよ、と言って彼は私の肩に額を置いた。

ホントに何もなければ良いんだけど…そういう訳にもいかないみたいだ。

―145―

あれからの俺たちの流れは神様の気まぐれでも何でもない、必然だった。

夏休みシーズンの教習所の多忙さ、彼女のバイトや部活でのスケジュールのタイトさが祟って、一切連絡を取らなくなった。それも、どちらともなく…。

何とか彼女が完治するところまでは見届けたが、それからどうなったのかは知らない。

一度両親に彼女との事を結婚も含めて相談してはみたが、ただ一言、NOだった。

10歳も離れてること、だから子供もあまり期待出来そうにないこと、彼女の就職のこと…

色々反論してみたが、あんなに頑固な両親は初めて見た。姉貴に続いて私大に入ったことも、在学中に車を買うことも許してくれた親がこんなにも反対するなんて…。

そう、これは紛れもない必然。
俺たちはきっと、これから先誰からも祝福されないのだ。きっと、一生。

それは多分彼女も勘づいていたこと。だからお互いに連絡が取れない。

…いや、取らないのだ。

彼女と自然消滅をして5年、俺は相変わらず独り身で頑張っている。
もちろん、彼女以来お付き合いした人はいない。

俺はついに次の誕生日で35を迎える。いよいよ婚期を逃して足掻いている状況。後輩の池田ちゃんにはすっかり抜かれ、今や一児の母だ。

世間でいう負け組に入れられてしまったせいか、婚活という名の合コンにもよく連れて行かれる。

一応ウケは良いが、年齢を口にすると結構渋られる。何せ誘ってきた奴がかなりの女好きで、自分の年齢を顧みらずに若い子ばかりを呼ぶからだ。

そして今日も、例の合コンがある。そいつの尻拭いもしなくちゃいけなくていい加減ゴメンなので、今後は参加しないことを条件について行った。

「サンキューな、新一。今日で最後なのは残念だけど…」

「まあ出会いないから仕方ないよね」

「でもさ、今日結構良い子が来るって！何でも車の会社に勤めてるとか…」

車好きの俺には聞き逃せない単語。すごく詳細が気になる。

「どこ？日産？トヨタ？」

「いや、確か…プジョーだった気がする」

「マジで！？」

かなり失礼だが、コイツと知り合いで良かったと今初めて思った。

「若いの？」

「えーと…今２４で、入社してすぐフランスの本社に大抜擢された

って。二年経つ前に戻って来たらしいけど」

『フランス』

あの日から一日たりとも忘れたことがない彼女が専攻していたもの。久し振りにそんな単語聞いたな、と思った。

結局、彼女が留学している間を待つ以前に、留学する前に別れたので俺には縁がないものではあるが。

「まあいいや、中で圭介待ってるし入ろうぜ。女の子たちは後で来るって」

いつの間にか巻き添えを食らっている大学時代の友人が待っている席へと足を運んだ。

―146―

夏は嫌いだ。

私にいろんなものを与え、私からいろんなものを奪っていった。

5年経った今でも忘れない、あの夏。

夏休みシーズンの教習所は忙しくて、7月の下旬から休みがなくなった。一応指導員にはちゃんと休暇が与えられてたけど、彼は最近は技能だけじゃなく学科の授業や、検定員の資格の勉強なんかもあってかなり忙しくなった。

家に行っても会話はなく、メールの返信はなくて、電話にも一向に出ない。

こうなることは初めからわかっていた。私はまだ子供で、彼には迷惑しか掛けないから。

まわりから祝福されないことも、彼から捨てられることもわかっていた。

最初からわかっていたこと。だからもう彼を追い掛けたりはしない。

十分に良い夢を見させて貰ったから…。

あれから5年、私は社会人として働いている。
大学専攻のフランス語を生かすつもりが、皮肉にも彼が好きだったプジョーの支社に勤めることになった。

私ももう25になる。四捨五入すれば三十路だ。
昔は「年齢なんて別に…」とか言ってたけど、さすがに子供も旦那も彼氏さえもいなければかなり焦る。

言い寄ってくる人がいなくはない。昔バイトで一緒にお仕事したことがある谷原賢二さん。爽やかなイケメンで、私の5つ上の人。携帯のセールスを仕事にしている。

何ヵ月か前、フランスから帰って来た時に偶然にも谷原さんと再会した。
一年半ぶりの再会に盛り上がってそのまま飲みに行き、それからよく連絡を取るようになった。
ちょうど彼と連絡が取れなくなった時期に初めて谷原さんと仕事をご一緒した。不謹慎ながら彼の笑顔にかなり癒された部分はある。
そんな谷原さんには内緒で合コンに連れて行かれることになった。
別に恋人同士じゃないから報告義務はない。でも谷原さんがそれを知ったら悲しむというか拗ねるというか、センチメンタルになるのだ。
まあ数合わせだし良いか、と軽いノリで参加することにした。いかにも「嫌です」って顔したら社会人の名が廃る。そう言い聞かせて合流した。
この先に待っているものが何とも知らずに…。
大学時代の合コン好きの友達に振り回されるハメになった私と千尋は、彼女を横目に顔を見合わせて肩をすくめた。
「ホラー、早く！圭介さんたち待ってるよっ！」

意気込む彼女を見ながらぽつりと呟いた。

「圭介って…満里奈が狙ってる人だったっけ？」

「確か…」

今回はどうやらお膳立てに撤すれば良いみたいだ。

―147―

何となく落ち着かなくなって来た。合コンなんて最近よくやってるのに…。

相手三人が可愛いらしいから?若いらしいから?

いや、さっきから引っ掛かるのは『プジョー』と『フランス勤務』の二つ。

もう会うことはないとわかっていても、彼女の姿が浮かんでしまう。

いい加減振り切らないと一生独身貴族で終わってしまう。もうあれから5年経ったのだ。

「こんばんはー」

その言葉にはっとした。ようやく女の子たちが合流したみたいだ。

一人は満里奈という前見たことがある子。そして残り二人は…

目が合った瞬間に息を呑んだ。何年経っても見間違えるはずがない、彼女だ。

昔と違うのはさらに細身になったのと、髪がセミロングほどになったこと。スレンダーというよりはグラマーな感じになっていた。

…彼女か？

見間違えるはずがないと自負していても、何だか別人に見える。

彼女は少し目を大きく見開いていたが、すぐにあの頃と同じやわらかい笑顔を作って会釈した。

「じゃあまず自己紹介から…原田圭介です。歳は…この前３５になったばっかり。恥ずかしいけど…
仕事は証券会社に勤めてます」

「俺は市原誠でっす！歳は秘密。趣味はサーフィンで、仕事はまぁ…派遣を」

この流れで来たら間違いなく最後は俺。適当に座ったはずが真向いにいる彼女にはあまり目を合わさないように喋る。

「えっと、内村新一です。３４歳で…えー、自動車学校に勤めてます。趣味はドライブ…かな」

女性陣から拍手が贈られた後、彼女がゆっくりと口を開けた。

「香西薫です。今２４歳で、車の会社に勤めてます」

すると誠がこれ見よがしにはいはい！と手を挙げた。

「キミ?プジョーで働いてるの」

「あ、そうです」

「フランスで働いてたんだよね?」

「一年半くらいですけど」

「じゃあさ、」

あまりの彼女への絡み方にイラッとして、つい口を挟んでしまった。

「まだ自己紹介終わってないから後でな」

「あ、じゃあ私が…高島千尋です。今調理師学校でフランス語講師してます」

何故か最後の方は俺を見ながら紹介をした。とにかく彼女達は大学の同期らしい。

「宮地満里奈です！血液型はＡ型で、好きなタイプは優しい人です！」

この子が圭介目当てなのは見え見えだ。そして誠が彼女狙いなのも…。

ならば俺が守らなきゃ、と思う。

そんな俺の意志に反して俺は席を変えられて千尋という子の前に、そして俺が座っていた席には誠が座って彼女と談笑していた。

―148―

聞くところによると、今日は10歳くらい年上の人達が来るらしい。

頭に真っ先に浮かんだのは彼…今何をしているんだろう。

そんなことを考えてはっとした。彼はもう昔の人。いい加減振り切らないと一生独身貴族で終わってしまう。もうあれから5年経ったのだ。

そして、もうすぐ想いを伝えてくるだろう谷原さんに失礼だ。

自惚れんなよ、と言われそうだが、谷原さんには何度も遠回しに告白されたことがある。

谷原さんももう三十路ということもあって、結婚を視野に入れてるらしい。頭が良くて、優しくて、面白くて、料理も出来ると来れば文句の付けようがない旦那さまになることは間違いない。

…とりあえず今はそれは置いておこう。

連れられて入った店には既に男の人が来ていた。挨拶して回らなきゃ、と思いながら精一杯の笑顔を振り撒いた。

「こんばんはー」

一人一人に会釈しながら奥へと向かう。最後の人に挨拶しようとした時だった。

自分の目を疑った。

目の前にいるのは、彼。紛れもなく一時期お付き合いしてた彼だ。

あの頃と変わってない様子にほっとしつつ頭を下げた。

「じゃあまず自己紹介から…原田圭介です。歳は…この前３５になったばっかり。恥ずかしいけど…
仕事は証券会社に勤めてます」

「俺は市原誠でっす！歳は秘密。趣味はサーフィンで、仕事はまぁ…派遣を」

全くもって興味ない。二番目の男は下心丸出しでこっちを見てくるから嫌になる。
…谷原さんに迎えに来てもらおうかな、彼氏役で。

そして彼の番がやって来た。ガン見してるのがバレないように、ちらちらと彼の方を見る。

「えっと、内村新一です。３４歳で…えー、自動車学校に勤めてます。趣味はドライブ…かな」

変わってない、何も。

それが嬉しくもあり、悲しくもあった。

愛しい。でもそんな気持ちは届くはずもなくて。

吹っ切るかのように軽く息を吐いて、出来る限り元気よく喋った。

「香西薫です。今２４歳で、車の会社に勤めてます」

「はいはい！」

名前は覚えてないが、とにかく一番面倒臭そうな男がいきなり手を挙げて来た。

「キミ？プジョーで働いてるの」

「あ、そうです」

「フランスで働いてたんだよね？」

「一年半くらいですけど」

「じゃあさ、」

「まだ自己紹介終わってないから後でな」

勘弁してくれ。その思いが彼に伝わったのか、彼が制止してくれた。こういう気配りが大好きだった。

そして、隣に座っていた千尋が彼の方を控えめに見つめながら口を

開けた。
何だかムカムカする。もう彼の彼女でもなんでもないはずなのに。

「あ、じゃあ私が…高島千尋です。今調理師学校でフランス語講師してます」

最後の方は彼を真っすぐ見つめたのを見て余計にイライラして来た。
そこでもう一度冷静になってみた。私はもう嫉妬する資格もない。
それに最近大きくなりつつある谷原さんの存在。

割り切るしかないのだ。

満里奈が挨拶を終えたところで、面倒臭そうな男が彼を押しのけて私の前に陣取った。ここは一つ…アレしかない。

―149―

千尋という子と話してる合間合間にちらっと彼女を見た。時折目が合うがすぐに反らされてしまう。

彼女は市原と談笑しているが、基本困った感じの笑顔だ。奴は気付いてないが俺にはわかる。

…まああんなにがっつかれるとね。

「香西さん彼氏は？」

「いませんよ」

「ウソ、マジで？」

俺も市原に合わせてそう声に出しそうだった。

すると俺の向かいに座っている女性が横から入っていった。

「薫ちゃん5年前に別れた彼氏さんがまだ気になってて、あれから誰とも付き合ってないんだよね」

その言葉に驚いて彼女を見た。彼女は慌てて女性を止めている。

「ちょ、千尋！そんな情報いらないから！」

「え？」

そう言って彼女の耳元でひそひそと話した。彼女はばつの悪そうな顔をして一瞬俺を見た。

何かもどかしいこの状況。

すると空気が読めるはずがない奴が身を乗り出して彼女の両手を握った。

「俺がそいつを忘れさせてやる！」

「…ありがとうございます…」

俺達の事なんて何一つ知らないくせに、『忘れさせてやる』とか気安く言うな。無性に腹が立って来た。

すぐに彼女は何を思ったのか、焼酎が入ったグラスを市原に渡した。

「じゃあ二人が出会えた事に乾杯しましょう」

その様子にさらにイラッとする。彼女はこんな奴に騙されるほど浅はかで尻軽だったのか。

しかしわけは違った。

あれから３０分くらいは経っていただろう。二人の様子を目に入れないように千尋さんと話していたが、あまりに気になって隣の様子をちらっと見ると、市原は潰れて倒れていた。

原因であろう彼女はカクテルを片手に退屈そうに携帯をいじっている。

「い、市原？」

彼女が気付き、携帯を机に置いた。

「お酒弱いらしいのに沢山飲んじゃって、潰れちゃいました。どうしましょう？」

「…俺が連れて帰るよ」

圭介が連れて行かれてから一時間以上は経っている。もう二人は帰って来ないだろう。

「コイツ潰れちゃったし、今日はお開きで良いかな?」

二人の女性は無言で頷く。

「俺酒飲んでないから車で送れるけど…どうする?」

「じゃあ…お願いして良いですか?」

期待は外れ、そう口にしたのは千尋さんだった。

「えっと…香西さん…は?」

彼女と今日初めて目が合った。あの頃と変わらない優しい目。でもどこか悲しそうで。

「迎えが来るんで大丈夫です」

「そう…」

とりあえず二人を車に乗せて足早に彼女の元へ向かう。迎えって誰だ。彼氏はいないと言ってたはず…。

「薫」

彼女はくるっと振り返った。あの時のようにあどけない少女さはもう残っていない。

「…最近どう？元気だった？」

「まあ、おかげさまで」

「さっき言ってた事だけど…」

「さっき？」

言え、言うんだ。緊張する気持ちを紛らわすかのようにぐっと拳を握った。

「ほら、俺が忘れられないって…」

「ああ」

そう言って彼女は俺に背を向けた。しばらく沈黙が流れる。

「ホントです」

その言葉に胸が詰まりそうになる。

「でも私は新一さんの幸せを一番に願ってます」

「じゃあ…」

「香西さん？」

想いを伝えようとしたのに、こんな時に限って邪魔が入る。

声のした方を向くと、若い男二人が立っていた。

―150―

さっきから何度となく彼と目が合う。その度に何故だか恥ずかしさや気まずさを感じて目を反らしてしまう。

千尋に嫉妬しないためにもこの男の人との会話に集中してみることにした。

…は良いけど名前がわからない。市原…隼人じゃなくて何だっけ。

男の人はそれを知るはずもなく、楽しそうに語りかけて来た。

「香西さん彼氏は？」

「いませんよ」

「ウソ、マジで？」

その瞬間に彼からも視線を感じた。千尋は目の前に座っている人が私の元カレなんて知るはずもなく、痛い一言を告げた。

「薫ちゃん5年前に別れた彼氏さんがまだ気になってて、あれから誰とも付き合ってないんだよね」

「ちょ、千尋！そんな情報いらないから！」

「え?…嫌な合コンの時それで逃げるんじゃなかったっけ?」

「そうだけど…」

その元カレがこの場にいる時は話が別だ。恥ずかしくて彼の顔なんか見れたもんじゃない。

すると男の人がいきなり手をギュッと握って来た。

「俺がそいつを忘れさせてやる!」

「…ありがとうございます…」

あーもう。極力この手は使いたくなかったが…仕方がない。焼酎を手渡して精一杯の笑顔を向けた。

「じゃあ二人が出会えた事に乾杯しましょう」

何も知らない男の人は嬉しそうに乾杯した。

あれから何分経っただろう。男の人は目の前で倒れている。私は冷

ややかな目を送ってカクテルに口を付けた。

もともと学生飲みを何度となく経験した私にとってはこれくらいは何ともないし、むしろちょっとやそっとじゃ潰れたりしない。酒豪のイメージがつきそうなので釈明すると、誘われたときしか飲まない。まあ今日は訳が違うけど。

携帯に着信が入っていたので見てみると、谷原さんからのメールだった。今日は飲みに行くから会えないとの事。もともと会う約束をしてたわけじゃないけど…。

すると彼がびっくりしたような声をあげた。

「い、市原？」

肩を軽く揺すっている彼に一応の説明をした。

「お酒弱いらしいのに沢山飲んじゃって、潰れちゃいました。どうしましょう？」

「…俺が連れて帰るよ。コイツ潰れちゃったし、今日はお開きで良いかな？」

きっと途中抜けの二人はよろしくやってるんだろう。そんなオッサンみたいな事を考えながら頷いた。

「俺酒飲んでないから車で送れるけど…どうする？」

「じゃあ…お願いして良いですか？」

彼の提案に真っ先に乗ったのは千尋だった。
気にしない気にしないと自分に念仏を唱えていると、彼がためらいがちに尋ねて来た。

「えっと…香西さん…は？」

帰りたい。一緒に帰りたい。
でも素直になれない自分がいて。

「迎えが来るんで大丈夫です」

嘘だと知らない彼はそう、と言って二人を車に乗せに行った。

これでいい、これでいいんだ。自分にそう言い聞かせていると、彼が後ろから駆け寄って来た。

「薫」

懐かしい声。ずっと聞きたかった声。だからこそ愛しくて、せつない。

「…最近どう?元気だった?」

「まあ、おかげさまで」

「さっき言ってた事だけど…」

「さっき?」

「ほら、俺が忘れられないって…」

「ああ…」

告げてしまおうか。でもそうすると前に進むことは出来ない。

「…ホントです…でも、私は新一さんの幸せを一番に願ってます」

だから否定もしなければ、受け入れてとも言わない。これがあの時から選んだ道だったんだから…。

すると横からいきなり柔らかい声が聞こえて来た。

「香西さん？」

この声。この口調。

振り向けばそこには谷原さんと同僚の岩本さんの姿があった。

―151―

誰だコイツ。
昔似たような事を思った記憶がある。確か初めて旅行に行った時に彼女に電話をかけて来た…あれは元カレだったな。

若い風貌、すらりとした長身、柔らかくエレガントな雰囲気はまさに紳士を思わせる。

俺には足りないものを持っている男にカチンと来る。彼女とどういう関係なんだ。

「谷原さん…？何で…？」

「え？香西さんこそどうしたんですか？」

「えっと、私は飲み会に誘われて…」

「そうだったんですか」

谷原さんと呼ばれた男は合コンだと疑う様子もなく頷いていた。

「谷原さんは？何で岩本さんと…」

「ああ、メールしてたでしょう？一緒に飲むの岩本っちゃんなんで

す」

「久しぶり」

もう一人の岩本さんという男は、谷原と違って彼女にはタメ口だった。

こっちも長身で、凛とした雰囲気を醸し出している。

…会社の同僚か？だとしたら、こんな男達に囲まれている環境なんて不安で堪らない。まさに数年前感じたような不安が…。

「はあはあ…」

彼女が納得したようなしてないような声をあげた。

「良かったら一緒に飲みません？岩本っちゃんも久しぶりに香西さんと話したいみたいですし」

「いえいえ、お二人でごゆっくりどうぞ」

「来ないんですか？ホントに来ないんですか？男二人じゃムサいじゃないですか。お金の事は気にしなくて良いんですよ？」

俺をそっちのけで楽しそうに進む会話にさらにイライラして来た。
悪あがきの第一声を発する。

「薫、俺もう帰るから」

すると反応したのは彼女ではなく、谷原だった。

「ご友人ですか？」

とうの昔に別れてしまった俺にとっては、彼氏から友人ランクに下がっていることを痛感させられた。しかも最も言われたくない相手に告げられてしまうなんて…。

「…っ、まあ」

感情を押さえて話す。奴の顔が余裕の笑みを浮かべているようにしか見えて来ず、悔しさが募る。

「香西がお世話になってます」

「ちょ…！」

谷原が会釈する。彼女が困惑する。岩本が笑っている。

堪えられない目の前の光景。彼女はもう、俺の手に届く存在ではなくなったのだ。

何も言わずに踵を返し、無言で去って行こうとした。

「新一さん」

その時に彼女の切なそうな声が聞こえた。振り向くことも、言葉を返すこともなく、ただ立ち止まった。

「今日はお会い出来て嬉しかったです。また連絡ください。…どうかお幸せに」

今戻ってはダメだ。きっと泣いてしまう。

彼女がどんな顔をしているのかを見ることもなく、その場を立ち去った。

―152―

「谷原さん…？何で…？」

谷原さんのオフィスはここからはちょっと遠い。飲みに来るにしてはえらく離れた場所を選んだことになる。

谷原さんは少しだけ身を屈めるようにして話し掛けて来た。

「え？香西さんこそどうしたんですか？」

「えっと、私は飲み会に誘われて…」

「そうだったんですか」

谷原さんは合コンだと疑うことなく納得してくれた。これが大人の余裕ってやつなんだろう、と思う。

「谷原さんは？何で岩本さんと…」

「ああ、メールしてたでしょう？一緒に飲むの岩本っちゃんなんです」

「久しぶり」

いつ以来だろう、久しぶりに岩本さんに会った。元モデルとあってその辺の人達より数段かっこいい。

岩本さんとも谷原さんとも学生時代に一緒に働いた仲。久しぶりの再会は嬉しいが、戸惑いの方が大きかったりする。

「はあはあ…」

わかるような、わからないような。

すると谷原さんはそんな事を気に止めもせず、柔らかい笑顔を向けて来た。

「良かったら一緒に飲みません?岩本っちゃんも久しぶりに香西さんと話したいみたいですし」

「いえいえ、お二人でごゆっくりどうぞ」

「来ないんですか?ホントに来ないんですか?男二人じゃムサいじゃないですか。お金の事は気にしなくて良いんですよ?」

いつもこんな感じだ。寂しいんですか?と聞きたくなってしまう尋ね方が昔からおかしかった。子犬のような目で見られたらつい頷いてしまいそうになる。

「薫」

その時後ろから彼の声がした。ぴくんっと反応した後彼の方を振り返ると、辛そうな顔をして立っていた。

「俺もう帰るから」

彼は目を合わせる事なくそう告げた。その彼に真っ先に声を掛けたのは谷原さんだった。

「ご友人ですか？」

谷原さんは気付かなかったかもしれないが、私はそこに一瞬の動揺を見つけた。
友人という関係で片付けられてしまう現実に打ちのめされた私もまた、同じだった。

「…まあ」

彼は少し不機嫌な声を発した。すると谷原さんは嫌味でも何でもなく会釈をした。

「香西がお世話になってます」

一緒に仕事をした時に、店舗で似たような挨拶をした。でも今はわけが違う。ビジネスの挨拶でも何でもなく、どちらかといえば家族がする挨拶だった。

それを見て岩本さんは爆笑している。今はそれどころじゃないのに。

「ちょ…！」

「何でですか？挨拶しなきゃダメでしょう。マズかったですか？」

「え…っと、いや、何でも…」

「谷原ちゃん突拍子ないなー」

ふと気付くと彼は何も言わず帰ろうとしていた。慌てて彼の背中を追いかけ、呼び止めた。

「新一さん」

彼は立ち止まってはくれたが、決して振り向いてはくれなかった。

息が詰まりそうになる。涙が出て来たのか、視界が一気にぼやけて彼の姿がはっきり見えない。

「今日は、お会い出来て…嬉しかったです。また、連絡ください…どうかお幸せに」

彼は少しだけ顔を向けたあと、足早に立ち去った。彼の顔が全然見えない。

泣き崩れそうになるのを必死に堪えて谷原さん達の元へと向かった。

―153―

ここ数日ため息しか出てこない。

あのあと…彼女は谷原のところへ行ったのだろうか。そもそも、彼女と谷原は付き合っているんだろうか。

でも合コンで「いない」って言うくらいだからいないのか…いやいや、あの谷原の態度がずっと引っ掛かる。

こんな考えが行ったり来たりだ。谷原のことが頭に浮かぶだけでイライラする。教習中は生徒との会話で何とか忘れられるが、空き時間なんかはずっと考え事をしている。

そのおかげでかタバコの量が増えた気がするが…。

今は結婚して坂井となった池田ちゃんが手作りの弁当を広げたあと、じーっと俺を見た。

「…なに？」

「いーえ、相変わらずコンビニ弁当なんだなって」

幸せを見せびらかされてる気分で、つい意地を張ってしまう。俺だって愛妻弁当欲しいのに。

「仕方ないじゃん、作ってくれる人いないんだもん」

池田ちゃんは二口ほど弁当を食べたあと、箸を置いて俺の方を見た。

「内村さんって、まだ香西さんのこと引きずってるんですか？」

図星だ。だからこそムキになってしまう。

「別にそんなことないし」

「じゃあ何で彼女出来ないんですか？」

「こっちが聞きたいよ」

「内村さん」

隣をちらっと見ると、池田ちゃんが睨むような険しい顔を向けていた。

「別にどうも思ってないなら、この前の合コンのことなんて気にしないでしょう」

彼女のごもっともな意見に口をつぐんでしまう。

池田ちゃんは軽くため息をついて再び箸を手にした。

「今更都合の良いこと言ったって、逆に香西さんが傷付くだけですからね」

池田ちゃんは一応一通りのことを知っている。5年前に自然消滅したことも、この前合コンで会ったことも、その時に谷原が現れたことも。

確かに今更「ずっと忘れられなかったんだ」と言ったところで都合がいい話なだけだ。それならどうしてあの時別れることになったのかという話になる。

時間が戻ってしまえば良いのに、と思う。

彼女にこうしてまた出会い、再び惹かれるくらいなら最初から別れなければ良かったんだ。

そうしてればきっと大学卒業後に籍を入れて、今頃は子供ももうけていただろうに…。

どう思われたってもう一度気持ちを伝えるべきなんだろう。伝える前に諦めるのはもったいない。

この前の俺をずっと忘れられなかったという言葉を頼りにして。

俺は再び、彼女に恋をした。これは曲げようのない事実。

ならばもう一度、ゼロから始めればいい。

―154―

今仕事中だというのに集中して作業が出来ない。

ずっと気になっているのは彼の事、そして谷原さんの事…。

あの日、結局三人で飲むことになった。私はもちろん、一切泣き顔なんか見せなかった。

とりあえず乾杯を済ませたあと、岩本さんが話し始めた。

「いやー、それにしても香西ちゃん久し振りだよね」

「ホントですよね。最後にお会いしたの学生の時ですもん」

「あの香西ちゃんが社会人だもん」

「年齢感じるよね」

谷原さんがそう言って料理を口にした。岩本さんは焼酎を飲んでいる。

「でもさー、谷原ちゃんから香西ちゃんの話聞いててビックリした。フランス行ってたんだって?」

「あ、はい」

そう言ったあとでふと疑問が生じる。谷原さんはどんな話をしたんだろう。変な話をされてなければ良いけど。

「もっと早くに俺が連絡取れてれば飲み行ったりしてたのに」

「岩本っちゃんって確か…」

谷原さんが言葉を濁した。岩本さんは何だよ、と言って軽く肘で谷原さんを突いた。

焼酎のグラスを机に置いてじっと見つめられる。

「綺麗になったよね」

「そうですか？」

「谷原ちゃんが香西ちゃんの話しかしなくなったのもわかるもん」

…え？

ぱっと谷原さんの方に目をやると、相変わらず子犬のような目を向けている。

「まだ香西ちゃんが販売員の仕事してた時さ、ぶっちゃけ俺香西ちゃん気に入ってたんだよね」

岩本さんが言ってる意図が全く読めなくて、カクテルのグラスに口を付けたまま黙って聞いていた。

「何か珍しかったんだよね。可愛こぶらないし、媚びないし、天然だし、面白いし。真面目で謙虚だったじゃん」

昔彼に同じような事を言われた気がする。みんな同じように取るのかな、と思う。

「今まで女に妥協したことがなかった分、何か新鮮でさ。それをちらっと前谷原ちゃんに話したらこうなったんだよね」

…どうなったの？話の筋が見えない。
もう一度谷原さんの方を向くと、どうしたんですか？というような顔を見せた。

「香西ちゃん、実際谷原ちゃんどうよ」

「えーっと…面白くて、優しくて、頭良くて、紳士的で…カッコイ

イと思います」

「とんでもないです」

谷原さんはそう言って頭を下げた。岩本さんがよしよし、と頭を撫でている。

「彼氏にするとしたらどんな感じ?」

後から思えば意味深な流れで来た話だが、この時の私は結構お酒が入って来たのもあってそこまで考えが行かなかった。

「私にはもったいないくらいです。横に並んで歩くのが恐縮ですもん」

「そんな事ないですよ?僕で良ければいつでもそばにいますよ」

その後の事ははっきり言って覚えてない。記憶が飛んだわけではないが、とりあえず帰って、とりあえず起きて、とりあえず会社へと向かった。

その時に谷原さんからのメールがあったのに気付く。

『今夜会えませんか？』

断る理由がそこにはなかった。

―155―

合コン以来、千尋さんから結構メールが届くようになった。もし期待させてしまってるのなら、最初からアドレスなんて交換しなきゃよかったとつくづく思う。

市原のヤローは交換する前に潰れたから良いとして、やっぱり気になるのは谷原だ。今俺がこうして携帯を眺める時間に会っているのかもしれない。

焦燥感が募る。彼女を逃してしまったらもう終わりだ。

そんな気持ちばかりが前に出て、慌てて電話を掛けた。

電話はあっさり取られた。彼女の柔らかい声が聞こえる。

『もしもし？』

「っ、今どこにいるの？」

『どこって…』

そう言ったきり彼女は何も喋らなくなった。もしや、とふと思う。

「まさか今いる場所がわかんないとか言わないよね」

『えっと…』

絶対そうだ。現在地をわかっていない。

あの時と変わらない方向オンチ加減に笑いが出てくる。

「相変わらず方向オンチだね」

『ほっといてください』

あの頃と同じように彼女が拗ねた。その様子すら可愛くて可愛くて仕方なかった。

は置いといて、だ。今はいろんな意味で一刻を争う時期。そんなのんきにはしてられない。

「明日さ、仕事何時に終わるの？」

『えーっと…明日は6時までですね』

俺は仕事終わって家に帰り着くのが大体9時。迷惑じゃなければそ

の後に会うことは可能だろう。

「明日さ、9時頃会えたりする？」

『夜ですか？』

「もちろん」

彼女はかなり考えてるのだろう、うーん、と言ったまま言葉が出ない。

「厳しい？」

『いや…大丈夫だと思いますけど』

「じゃあ明日家に迎えに行っても良い？」

『良いですけど…私引っ越したんで場所知らないでしょう？』

何気ないその言葉にいろんなことがよぎる。あの家は一度もあがらないままだったとか、引っ越しを手伝ったのは誰だろうとか、もう谷原は彼女の部屋に行ったのだろうとか。

「…引っ越してたんだ」

『はい、吉原に』

「マジで?結構近いんだ」

『そうですね』

「そしたら詳細教えてくれたら行くから」

その言葉に対する返事はなかった。電話の向こうでは沈黙が続く。

「…薫?」

それに対する返事すらなく、不審に思って携帯を見ると通話終了の画面が表示されていた。

電源が切れたか?まあ明日またメールすれば良いか。

何も知らない俺はそれで片付けてしまった。

―156―

結局今日は谷原さんに連れられて食事に行くことになった。私も谷原さんも6時で仕事終わりなので、二人にとっては都合が良い。

待ち合わせ5分前に駅に来たというのに、谷原さんはもう車を停めて待っていた。運転席側のボディーに寄り掛かっていた長身は、私に気付くや否や軽く会釈した。

「早いですね」

「仕事癖でね、１０分前には集合場所に必ず行くんですよ」

「前私と一緒に入った時も、私が来る頃にはいましたもんね」

「ええ。
じゃあとりあえず行きましょうか」

谷原さんにエスコートされるままに助手席へと乗り、目的地へと向かった。谷原さんは温厚な見た目や人柄とは裏腹にスピード狂だ。いつも高速では１４０ｋｍを平気で出す。今日は一般道なのでその辺は大丈夫だけど…。

緊張を感じるのはそれもあるけど、プライベートで男の人の車に乗

るのは彼と谷原さんの時しかない。バイトの頃も今も、何故だかお互い車の中では無言になる。

すると谷原さんが突然質問を投げ掛けて来た。

「香西さんは…確か今はお付き合いしてる人はいなかったですよね？」

「はぁ…はい、そうです」

「結婚願望とかあります？」

この何とも言えない意味深な流れにうろたえる以外方法はなかった。

「そりゃあ…結婚したいとは思いますよ」

その瞬間だった。携帯のバイブがいきなり鳴りだした。ポケットから取り出すと、そこにはあるはずのない『内村新一』の名前が浮かび上がっていた。

ためらいながらも携帯を開き、そっと耳元にあてる。

「…もしもし？」

『今どこにいるの？』

何故か電話の向こうの彼はかなり切羽詰まっていた。こっちも何故だか胸がつまるような気がした。

「どこって…」

そう言ってまわりを見渡してみる。方向オンチの私にはわからない場所。谷原さんがハンドルを握っているならなおさらだ。

…どこ、ここ。

すると彼は吹き出して笑った。さっきの張り詰めたトーンでもない、昔聞いた優しい声だった。

『まさか今いる場所がわかんないとか言わないよね』

「えっと…」

キョロキョロと辺りを見回してみるが、見当もつかない。

その時谷原さんは何を思ったのか、いきなり路上に車を停めた。そして何も言うことなく、じっと私を見つめていた。

『相変わらず方向オンチだね』

彼は苦笑いの末こう言った。あの時と同じようなからかい方についムキになってしまう。

「ほっといてください」

彼は大きめの笑い声をあげた後、少し咳払いをした。短期間でも付き合っていたからわかる、何か大切な話をするときの仕草だ。

『明日さ、仕事何時に終わるの？』

ドキッとする。期待してはいけないのに、彼が私を気に掛けてくれている気がする。

震えそうになる声を一心に我慢して、ゆっくりと、はっきりと答えた。

「えーっと…明日は６時までですね」

『明日さ、９時頃会えたりする？』

「…夜ですか？」

『もちろん』

「うーん…」

会えるかどうかではなく、彼が何を意図しているのかをひたすら考

える。彼に捨てられたはずの私は、もう彼を想ってはいけないのに。

『厳しい？』

「いや…」

会いたい。
その気持ちに勝つことは出来なくて、たとえ私がどんな目に遭うことになったとしても、ただただ彼に会いたいと思う。

「…大丈夫だと思いますけど」

『じゃあ明日家に迎えに行っても良い？』

「良いですけど…私引っ越したんで場所知らないでしょう？」

『引っ越してたんだ』

「はい、吉原に」

この辺りからだろう、優しく見守っていた谷原さんの顔が真剣そのものになった。決して横を振り向いてないが、視線が痛いほどに刺さってくるのがわかる。

『マジで？結構近いんだ』

「そうですね…」

『そしたら…』

その後彼がどんな言葉を続けたのかはわからない。気付けば私の携帯は谷原さんの手によって奪われ、電源を切られていた。

そして私自身が今、谷原さんの腕の中にいる。

「僕と、お付き合いしてくれませんか？」

強く、だけど優しく私を抱き締めている谷原さんは、耳元で囁くように語り掛けた。

―157―

電話が切れた後、一応デートのことをメールしてみた。が、今日の昼になっても返信がない。約束は今日だというのに…。

スクールバスを走らせ終え、指導員室に戻って来た。何度となく携帯を見てはがっかりしての繰り返しに、教習に向かおうとしている池田ちゃんが不思議そうに見つめた。

「どうしたんですか?また合コンの女の子からですか?」

「いや…メール待ち。返事が帰って来なくて…」

「誰からですか?」

何だか答えたくない。適当にまあね、と答えると、カンの鋭い池田ちゃんはその答えに気付いた。

「内村さん…積極的ですね…。もうヨリ戻しの行動に移るとは」

「うるさい」

興味津々に俺を眺める池田ちゃんを払いのけて立ち上がった。

「ホラ、早く教習行って来いよ」

「じゃあ後で詳しく教えてくださいね。行って来ます」

きっと世界中の人が俺と彼女のことを反対したとしても、池田ちゃんだけは祝福してくれるだろうと思う。いや…古野ドライビングには俺のことを応援してくれる人がたくさんいる。

まわりの環境に恵まれてるじゃないか、と思うと、今までの考えについ笑ってしまう。あの時俺に反対したのは親だけだった。ならしつこいくらいに説得すれば良かった。

後悔してももう戻らないのだから、前に進むしかないと思う。

取り留めのないことをあれこれ考えていると、携帯が机の上で震えた。急いで携帯を手に取ると、そこには『香西薫』の文字が表示されていた。

落ち着け自分、と言い聞かせるように息をゆっくり吐き、メールを開く。

そこには『ごめんなさい、やっぱり今日は会えません』と記されていた。

今日を凄く楽しみにして朝から落ち着かなかった俺は、冷や水を浴びせられたような状態になった。
そのあと体調が悪いのか、後日会うことは出来るか、などメールしたが、ただ一言『ごめんなさい』としか返って来なかった。

嫌な予感がよぎる。彼女は谷原に奪われたのではないだろうか。だからもう俺とは会えないと言うんじゃないだろうか。

仕事中だというのにとっさに電話を掛けた。このまま黙って見ていたくない。彼女に出会ったのも、彼女を想ったのも、彼女を愛したのも、俺の方がずっとずっと先だったのに。

彼女は仕事中なのか、それとも別の理由か、電話に出ることはなかった。思いため息を吐いて携帯を握り締める。せめて留守番電話にだけでも…。

「…内村です。しばらく会えなさそうで残念です。でも俺は、今すぐにでも会いたい。だから…連絡ください」

俺の気持ちが届くのを切に願いながら電話を切った。

―158―

目が覚めた瞬間に飛び起きた。目元を右手で覆ってため息を吐く。

私は夢を見ていたんだ。

谷原さんに抱き締められて、告白されて、家に連れて行かれて、そして愛された。

なんて夢を見てしまったんだという気分に襲われる。そんな願望でもあったんだろうか。

ふと顔を上げると、見たことがない風景が目の前に広がっていた。私の部屋にも、彼の部屋にも、似ても似つかない部屋。

胸騒ぎがした瞬間、左の方から声が聞こえてきた。

「目、覚めましたか」

ここはどこ？何で谷原さんが？

もしかしてあれは…夢ではなかった？

谷原さんはそんな私をよそに優しい笑みを浮かべた。

「家まで送ろうかと思ったら爆睡しちゃってて…起こしても起きなかったのでうちに連れて来ちゃいました」

少しおどけてみせた谷原さんは実家暮し。もしここじゃなかったら収容先はホテルしかない。それを考えると何故だか恐怖感を覚え、シーツをぐっと握った。

谷原さんはそれに気付いたのか、少し苦笑いした。

「大丈夫です、寝込み襲うような野暮な男じゃないですよ」

その言葉に生き返ったような気分になる。谷原さんは嫌いではないし、むしろ好意を持っているくらいだ。順序をわきまえてくれる人で助かったと思う。

力なく数回頷くと、谷原さんがいきなりベッドに上がり込み、私を正面からぎゅっと抱き締めた。あまりに突然のことに目を見開くこ

としか出来ない。

「頑張ったんだから褒めてくださいね」

その言葉を聞いて慌てる。どうやってここまで連れて来たんだろう…どうにせよ抱えて来ただろう事は確かだ。

「すみません！重いのに運ばせてしまって…」

すると谷原さんは私を抱き締めたまま頭をそっと撫でた。

「すごく軽かったですよ。そうじゃなくて…」

少しだけ距離を離して額同士を合わせる。

「香西さんに手を出さないように頑張ったんですよ。だから褒めてくださいね」

さらに二人の距離が開く。気付けば谷原さんの両手が私の両肩に置かれていた。

そしてゆっくりと、谷原さんの顔が近づいて来る。私は目を合わせることが出来なくて顔を反らした。

谷原さんはまるで私を諭すかのように優しく語り掛ける。

「だから言ったじゃないですか、僕とお付き合いしてくれませんかって」

あの告白は夢じゃなかったんだ。びっくりして顔を上げる。

その瞬間、谷原さんが唇を重ねてきた。どんなに抵抗しても男の人の力には適わない。

息苦しさをおぼえた頃、ようやく谷原さんと離れた。といっても二人の距離が超至近であることに変わりない。

「僕はあなたが好きなんです。そんな言葉では片付けられないくらいに」

この時私は、手元に携帯がないことに気付いていなかった。

―159―

やる気が全く出ない。ぼけーっとしながら煙草をふかた。

今日の仕事もあと三時間で終わりなのに、相変わらず彼女からの連絡はない。

重いため息を吐くと、今日の教習を終えた池田ちゃんがふらりとやって来た。

「どうしたんですか？ため息なんてついちゃって」

黙っていても埒が開かないので、煙草の火を消しながらもう一度ため息を吐いた。

「いや、何かさ…メールしたら『やっぱり会えません』って断られたよ。何回メールしても『ごめんなさい』しか返って来なかったし」

「電話は？」

「出ない。だから一応留守電だけ残したけど」

池田ちゃんはなんで？という疑問を全面に出して首を傾げた。

「昨日の段階では香西さんＯＫ出したんですよね？」

「まあ」

「ドタキャンするような人には思えないし…」

お前は彼女のことを知ってんのかよ、とツッコみたくなるが、確かにそうだ。彼女は身勝手な行動をする人ではない。

「だからこそ理由がありそうじゃん」

「例えば？」

「谷原と付き合うことになった、とか」

池田ちゃんは何も言わず、面食らったように顎を引いた。

「で、俺と会うの気が引けた、とかね」

「…本当に？」

切なそうな目で池田ちゃんが見つめて来た。言葉が詰まって話すことが出来ない。

…俺だって、こんなこと思いたくないのに。

「内村さん、それ直接香西さんに聞いたんですか？」

「いや、そうじゃないけど…」

「なら諦めたり落ち込んだりは早すぎでしょう！」

そう言ったと同時に俺の背中を叩いた。元々体育会系の池田ちゃんに思いっきり叩かれるとマジで痛い。

「っ、いったい！」

「痛くなるように叩いたからです」

「あ、そう…」

何となく後輩に反論出来ない。つくづく弱いなぁと思うが、確かに俺が女心をわかってないというか、根本的にわかってないというか、とにかくそのことは痛いほどにわかった。

「じゃあさ、どうなの？池田ちゃんがアイツと同じ状況だったらどうして欲しいの？」

「わー、何か言い方がやらしー」

「どこがだよ！いいから答えて」

「んー…やっぱ電話とかじゃなくて直接会って、連絡取れなくなっ

たのを謝ってもらって、それからぎゅってして欲しいですかね。抱き締めるコミュニケーションって一時ＣＭにあったみたいに」

やっぱり女性の視点は違う。池田ちゃんにアドバイス貰って良かったと思う。

「てか池田ちゃんもそんな乙女みたいなこと言うんだ」

そのあとまた本気で殴られたのは言うまでもない。

―160―

再び目が覚めた。私はまた変な夢でも見たんだろうか…。

でも毎度のことながら目の前に広がる風景を目の当たりにして、現実に打ちのめされる。

ここは谷原さんの実家。谷原さんの部屋。

「起きてましたか」

谷原さんが部屋に入って来ながら言った。私は軽く会釈して笑顔を作る。

「すみませんね、疲れてたでしょうのに」

あれ?と思う。何か疲れるようなことあっただろうか。そしてふと『ある事』がよぎった。記憶にはないが、あるとすればアレしかない。

「…谷原さん、何かしましたっけ?」

「え?何がですか?何かあったんですか?」

「…いえ」

谷原さんは紳士だ。寝込みを襲うほど野暮じゃないと言ったくらいだから、告白してすぐ、なんては考えにくい。好意を持っていたくせに…いや、好意を持っているからか、谷原さんの行動一つ一つに安堵する。

「あ、そうそう」

谷原さんがベッドの方に向かいながら話し掛けた。座った時には二人分の重みでベッドが苦しい声をあげた。

「会社には電話しておきましたよ」

はっとして時計を見る。時計はもう5時を指していた。

今日は水曜日。土日が週休の私は普通に考えて仕事がある。

「やっぱ…！」

「大丈夫ですよ」

谷原さんが諭すかのようによしよし、と頭を撫でる。

「突然の高熱を出したので有給貰えるよう頼みました」

「で、ＯＫ出たんですか？」

「もちろん。新型インフルじゃ困るからって明日も貰っちゃいました」

びっくりして開いた口が塞がらない。いつの間にそこまでしていたんだろう。谷原さんは行動力がある人、というのを改めて実感した。

「どうせなら今日明日ここでゆっくりしません？僕は仕事水木が休みですし、両親は旅行中でいないので気遣いはいらないですし」

変な意味はないですよ、と最後に付け足された。

「でも好きな人とは多くでも一緒にいたいと思うでしょう？」

谷原さんの言葉に顔が火照るのがわかる。クサイ台詞をさらっと言ってのけるし、なによりも何だか似合う。

「…でも私は…」

いまだに彼のことが引っ掛かっている。

すると谷原さんは私の唇の前に人差し指を立てた。

「今はまだ返事はいりません。迷いがあっても構いません。でも…」

そう言って私の前に出していた右手をゆっくり開いて、私の頬をつたうようにして耳の裏へと移動する。

「仕事で培ったセールストークで口説き落としてみせます」

昔一緒にお仕事した時も、店舗の女性たちと交渉に行く前に、「綺麗所を口説き落として来ます」と言った。普段なかなかＯＫをくれない人たちが許可をくれたのが印象的だった。

私はすっかり、優しさの中に揺るぎない自信を覗かせる瞳から目を反らせなくなった。

―161―

何としてでも機会を作って彼女と話すしかない。あの時俺が悪かったことを謝らなくては、と思う。

何があっても彼女の傍にいるという約束を破ったこと、回りから祝福されることも幸せになることも絶対にないと勝手に思ったこと、そして5年前のあの日、連絡を取らなくなったこと…。

仕事から帰って来て、真っ先に彼女に電話を掛けた。だが淡い期待は脆くも崩れ、彼女が出ることはなかった。

それとは逆に、登録外の電話番号からの着信があった。不審に思いながら電話を取る。

「もしもし?」

『内村新一さんですか?』

聞き覚えのある声。少し高めのトーンで誰が喋っているのか名前を聞かずともわかる。

『谷原賢二です』

「どうして俺に電話を？」

『挨拶はナシで本題に入っても？』

「問題ありません。何故あなたが俺に電話を掛けたのか気になりすぎて」

では、と谷原が言った。今から直接対決になることは誰が見てもわかる。

『香西がいつもお世話になっているようで』

「いえ、こちらこそ」

『単刀直入にお聞きしますが、内村さんは香西のご友人なんですか？』

「じゃあ何だと思うんです？」

『もともとお付き合いしてたんじゃないかと』

ふっと余裕の笑いが出てしまう。谷原のカンに触ろうが何だろうが、この際関係ない。

「そうですが…それが何か？」

『そして今、未練がましく連絡を取っていると言うことですか？』

この前聞いた彼女とのやりとりの時とは違う、少し厳しめの口調。
それでも俺は絶対に屈したりしない。

「未練がましくっていうか…ただアイツに話したいことがあるんです」

『ヨリを戻すための何かを？』

「いけませんか？」

いえ、と言って谷原が黙った。俺は勝利を確信したが、それはあっけなく砕け散った。

『どうしようと内村さんの勝手です。ですが、内村さんが彼女を傷つけたという事実は忘れないでいただきたい』

まるでヘビに睨まれたカエルかのように、俺が何も喋れなくなった。

『彼女は俺が貰います。俺は彼女を傷つけたりしない』

黙って奴の宣戦布告を聞くしかない。谷原に対して今まで感じたことがないくらいの敵対心を覚える。

『もっとも俺は強引に奪おうとは思いませんけどね』

それでは、と言って谷原は電話を切った。奴の電話の意図がわからないが、とりあえず宣戦布告された以上は対等に戦っていこうではないか。

最後に笑うのは俺だ。

―162―

唇の上まで湯槽に浸かり、ぷくぷくと音を立てた。

とりあえずお風呂に入りませんか？と谷原さんに言われて、特に異議を唱えることもなく大人しくお風呂を使わせてもらうことになった。谷原さんは今夕食を作ってくれているらしい。

まだ付き合い始めた訳でもないのにこんなにお世話になるなんて、これから健全なお付き合いをしていくんだとしたらやっぱりダメなことだ。

そして脳裏に浮かぶ彼の笑顔…。

その時ようやく気付いた。

彼と約束していたのはまさに今日。ざばっと風呂から上がり、急いで着替えて谷原さんの部屋へ向かう。

するとリビングからひょっこりと谷原さんが顔を出した。

「上がりましたか。ちょうど晩飯も出来上がりましたよ」

申し訳ないがそれどころじゃない。今はまだ7時のため、ぎりぎりまだ仕事中だ。頑張れば間に合うかもしれない。

「す…みません！私の携帯見てないですか！？」

「見てないですけど…車に置きっぱかもしれないですねぇ。どうしたんですか？」

「えっと、携帯が見当たらなくて…キー貸して貰えませんか？」

谷原さんは落ち着け、と言わんばかりに肩にそっと手を置いた。

「僕が取って来ましょう。その間に食べててください。今日はカルボナーラですよ」

さあ、と言って私を椅子に座らせた。普通にレストランで出てそうな温かな料理が目の前に置いてある。

なんて私は谷原さんに弱いんだろう。一人で大人しくパスタを食べながら思う。

温かくて美味しいカルボナーラは谷原さんの得意料理。わざわざ私のために腕を奮ってくれたんだと思うと、嬉しいけど何というか…

複雑な気分になる。

もし私がここまでしてくれてる谷原さんにＮＯを出したらどうなるんだろう。

振った後のことなんて気にしてたらやっていけないのかもしれないが、谷原さんは間違いなく傷付くだろう。こんなに想ってくれる人なんてそうそういない。

それに私は…谷原さんのことをどう思っているんだろう。

彼のことを引きずっているのは確か。でももし彼にもう恋人がいたら…。

だからといって『彼がダメだったから谷原さんで』何ていう失礼なことは死んでもしたくない。

そして谷原さんに惹かれつつあるのも確か。

いったい私はどうしたら…。

「どうしたんですか？」

背後から谷原さんの声がしてびっくりした。いつの間に戻って来たんだろう。

「あ、いえ…」

「はい、携帯。助手席のシートに落ちてました。すぐ見つかって良かったですよ」

「ありがとうございます」

安堵の表情を見せると、谷原さんがそっと私の肩に手を置いた。

「大丈夫ですか?」

子犬のような目で心配そうに私を見ている。昔仕事で一緒に働いたときも、ふと気付いたらずっと横から、あるいは少し後ろから心配そうに眺めていた。

みんなあの時から変わってない。変わったとすればそれぞれの想い。

笑顔を谷原さんの方へ向けた。それが泣き顔に似ているなんて思いもせずに。

「大丈夫ですよ」

―163―

奴を立ち上がれないくらいボコボコにしてやる。

そう決意したものの彼女に連絡することもしてもらうこともなく、一夜を明かした。

ならば今日こそは彼女に連絡しようと決心する。今日なら彼女は電話を取ってくれるはずだ。

昨日の谷原からの電話で直感した。あのメールは彼女からではない、谷原からのものだ。それを知らずにしつこく連絡してくる俺に痺れを切らして黒幕登場、と言ったところだろう。

つくづく器の小さい男だ、と思う。今だから豪語出来るのかもしれないが、奴は確実に俺に勝てないと思っている。

勝利の握りこぶしをぐっと握った時、池田ちゃんに学科教本で頭をぱこん、と叩かれた。

「…あのさ、俺一応先輩なんだけど」

「だって呼んでも呼んでも反応しないから。お客さんですよ」

客なんて心当たりがない。誰だと思いながらロビーに向かうと、そこには千尋さんが立っていた。

「あ、こんにちは」

「あ、どうも」

それ以外に会話が続かない。失礼な話、全くと言って良いほど興味がない。俺から話し掛けるこどがないため、千尋さんが話し始めた。

「仕事でたまたま近くを通りかかって…いらっしゃるかなぁって」

「そりゃあもう、教員ですから定時までいますよ」

それだけだ。気まずさに耐えられなくなり、初めて自分から口を開いた。

「すみません、今から教習がありますので」

会釈をしてその場を立ち去った。あとでメールででもフォローするのが礼儀だろう。

だが今それどころじゃない。さっきからずっと携帯のバイブが鳴っていて、鬱陶しさに眉間にしわを寄せて携帯を手にした。

そこにあるのは『香西薫』の文字。何故か真っ先に谷原の顔が浮かぶ。また奴が彼女の携帯を使って姑息なことをしようとしているのかと思うと、無性に腹が立って仕方なかった。

「ふざけんな！良い加減にしろよ！」

電話を取って真っ先に怒声を浴びせた。しばらく沈黙が流れたあと、電話の向こうからは予想に反して全てを包んでくれるような優しい声が響いた。

『えーと…すみません』

ぷち、と電話が切れる音がした。谷原だと思って怒鳴った相手は間違いない、彼女だった。

冷静になって考えなくても彼女の携帯からなんだから、彼女が掛けているのは当たり前だ。谷原は自分の携帯から電話を掛けて来たのに。

慌てて電話を掛け直す。

頼む、出てくれ。その一心でコール音をひたすら聞く。

そして諦めようとしたその時、彼女がようやく電話に出た。

『はい』

―164―

携帯を手に取って着信履歴やメールを見たが、彼からの連絡はなかった。

あのあと私が泣いてしまうんじゃないかと心配した谷原さんがそっと抱き締めてくれた。

でも私は、その時初めて谷原さんを拒否した。「大丈夫です、心配かけてすみません」と。

あまりの気まずさに居たたまれなくなって谷原家を出たのはまだ9時前。少し散歩をしてくるから、という理由で一人で外に出歩いた。

10時を回ったところでまた携帯を置いて来たのを思い出し、大人しく谷原さんの元へ戻った。気分が落ち着いたせいか、谷原さんには自然な笑顔を向けれた。

「ご心配おかけしました。今日はちゃんと家に帰ります」

そして家に帰り着き、気付けば朝になっていて今に至る。昨日はトータルで何時間寝たんだろう。

それはとりあえず置いといて、携帯を眺めながら彼のことを考えた。どうして彼は連絡をくれないのか。

その時、ふと数年前のやりとりを思い出す。あれはまだ付き合う前の頃…後で話を聞いたらすでに想い合っていた頃だった。

『女の人は良いよねー…受け身でも彼氏出来るからさ。男って動かないとダメじゃん』

『…そうですか?』

『うん。香西さん絶対受け身タイプでしょ。わかる』

初めてドライブに行った日はどうした?受け身にならないように頑張ったはず。じゃあどうして今は受け身になってるの?

思えば私はいつも受け身だった気がする。私から、なんて皆無に等しい。

ならば今、私から動くしかない。たとえそれが悪い方に転がったとしても…。

ゆっくり呼吸をしながら電話帳を開き、通話ボタンを押す。今日は普通に仕事があるだろうし、大体いつもこの時間に休憩に入ってるはず。

彼がいつ出てくれるのか、それを考えただけで心拍数が上がる。

ぷち、と音がしたのでもしもし、と言おうとした時だった。

『ふざけんな！良い加減にしろよ！』

…

「えーと…」

心当たりがあるやらないやらで困惑する。彼に怒鳴られたことなんてなかったし、こんなに声を荒げるなんてよっぽどのことがあったに違いない。

「…すみません」

ひとまずここは謝って電話を切った。
思えば5年前、私が彼に捨てられる形で終わったも同然の関係。いまさら私が言い寄ったところで迷惑な話だ。

でも怒鳴られるほどの…何をしただろう。連絡をした事？谷原さんに会ってる事？
何かよくわからない。

はっと気付くと携帯がオルゴールの着メロをずっと鳴らしていた。
あの時から設定を変えてないためディスプレイを見なくてもわかる、彼からだった。

恐る恐る手を伸ばして電話を取る。

「…はい」

『もしもし』

耳に懐かしい声が響いた。

―165―

「もしもし…」

手汗がひどい。初めて電話した時も、初めてドライブに行った時も、こんなんじゃなかったはずだ。

とりあえず『谷原』という単語は一切出さないつもりだ。いちいち奴のやってることを暴露するような余裕のない男にはなりたくない。

「あの、ごめん…最近間違い電話多くてさ、着信確認しないで出ちゃった」

それにしてもあんな決意なんてするんじゃなかったと後悔する。どう考えたってこの理由は不自然すぎる。無理に隠そうとするとこうなる事がよくわかった。

が、彼女はぼけっとしている…もとい、天然なせいか普通にそれを信用した。

『すみません、そんな時に急に電話しちゃって』

多分この電話の相手が彼女じゃなかったら、ひどい修羅場になっていたと思う。ヨリを戻す希望が潰えるくらいに。

「いや、ごめんね、こんな反応になっちゃって…で、どうした？」

『えっと…』

電話の向こうでけほ、と軽く咳払いする声が聞こえた。

『昨日はホントにごめんなさい。色々あって電話もメールも出来なくて…』

彼女の言葉で推測が確信に変わった。やっぱりアレは谷原の仕業だったのだ。

いちいち暴露するのもどうかと思うし、とりあえず俺も謝ることにした。

「いや、誘っといてこっちこそ連絡しないでごめん」

誘おうかどうしようか悩む。誘ったところで彼女に『何で今更』と思われてしまうのは避けられないだろう。今こうなるくらいなら、といつも出てくる後悔の念が込み上げて来る。

だが、予想外の言葉が俺の耳に届いた。

『あの…もし良かったら今度家に来ません？お詫びに夕食作ります』

「…マジ？」

胸の鼓動がうるさいくらいの音を上げる。一番近い休みは…明日だ。
だが夕食とくれば別に仕事終わりでも大丈夫なはず。

「ちなみに今日は…？」

『うーん…出来れば今日は避けて欲しいです』

「忙しいの？」

『そうじゃないですけど…部屋掃除したいから』

えへ、と声が聞こえた。自然と笑みがこぼれてくる。
懐かしいこの感覚。時間が一気に昔に戻った気がする。

「良いよ別に、今更そんなの気にしないし。それに…」

彼女がまだ教習生だった頃見上げてた空を眺めた。なあ、今もこの空が澄んだ青に見えてるか…？

「お前が綺麗好きなの知ってるし」

電話の向こうでくすっと笑い声がした。

『わかりました…今日古野ドライビングに迎えに行きます』

予期せぬ出来事に、ただただ神様に感謝するしかない。

―166―

あえてゆっくり呼吸をする。そうでもしないとおかしくなりそうだ。

彼から電話が掛かって来た。今までだったら何でもないことなのに、今、この状況では心臓に悪い。

『あの…』

彼がためらいがちに言った。何を言われるのか考えるだけで変な汗が出て来る。

『ごめん…最近間違い電話多くてさ、着信確認しないで出ちゃった』

後で思い返せばそんなことあるもんか、と思うが、その時は不思議なことに大納得した。

「すみません、そんな時に急に電話しちゃって」

『いや、ごめんね、こんな反応になっちゃって…で、どうした?』

「え、っと…」

言葉に詰まる。言おうとしていた事は決まっていたのに、いざとなると頭が真っ白になってしまう。

「昨日は…ホントにごめんなさい。色々あって電話もメールも出来なくて…」

谷原さん家で過ごしていたことを知られたらどう思われるだろう。それをひた隠しにしようとするが、何とも言えない罪悪感に襲われた。

しかし彼はそれを全部受け入れてくれるかのように優しく声をかけてくれた。

『いや、誘っといてこっちこそ連絡しないでごめん』

今更誰にも彼を渡したくないという気持ちになる。もう手遅れかもしれないけど、でも…。

「あの…！」

口が勝手に動く。

「…もし良かったら今度家に来ません？お詫びに夕食作ります」

彼からの返事が怖い。

そう思ったが、意外に彼はあっさりと嬉しそうな声を上げてくれた。

『マジ？ちなみに今日は？』

「うーん…」

確かに嬉しい話ではあるが、やっぱり彼が来る以上万全な状態にしておきたい。別に汚いわけじゃないが何となく嫌だ。

「出来れば今日は避けて欲しいです」

『忙しいの？』

「そうじゃないですけど…部屋掃除したいから」

無言が続く。どんな返答をされるのか不安だったが、彼はふっと笑った。

『良いよ別に、今更そんなの気にしないし。それに…』

空に目を向けて続きの言葉を待った。ねえ、この青い空をあなたも

眺めてるの…？

『お前が綺麗好きなの知ってるし』

彼が軽く息を吐いた後そう言った。褒められたみたいで嬉しくて、つい笑みがこぼれてしまった。

「わかりました…今日古野ドライビングに迎えに行きます」

時計はまだ、１時を指していた。

―167―

あれはいつの話だっただろう。早く仕事が終わらないかとそわそわしていた時があった。

確かあれは…初めて電話した日だったっけな。

今日は彼女がわざわざ車で迎えに来てくれるらしいから楽しみでしょうがない。方向オンチかつ不器用な彼女は今どんな運転をしているんだろうか。

思えば5年前、彼女は俺の指名生徒だったにも関わらず、お世辞にも上手い運転とは言えなかった。

あれこれ考えてる俺の目の前に、一台の黒い車が止まった。運転席から出て来たのは待ちわびた彼女。何とも言えないような気持ちが広がる。

「お疲れさまです」

「ごめんね、今日とか無理言って」

「いえ、暇だったので」

彼女は合コンで見たのとは違う、優しい笑顔を見せてくれた。この笑顔が俺だけに向けられていると思うだけで、胸が温かくなる。

車に乗り込んだは良いが、彼女があまりにあっさりと運転するからぶっちゃけ楽しくない。俺の脳内では「車の会社に勤めてるのに運転下手なの？」的なことを言いたかった。

「…運転上手くなったね」

「ん？まあ毎日運転してますからね」

「左折で脱輪した頃とは大違いだ」

「一回しかしたことないじゃないですか！」

大声で笑ってしまった。
何も変わってない。変わったとすれば彼女の容姿と少女さが残っていないところだ。

「それにしてもだいぶ変わったよなー…髪伸びたし茶髪になったね」

「似合わないですか？」

ふっと笑って彼女の頭をぽんぽんと叩いた。

「似合ってるよ。大人の女性って感じ」

えへへ、と彼女が嬉しそうに笑った。前にも増してその仕草が可愛いと思う。

それと同時にふとこんなふうに谷原とも接してるのかと思うと、すごく胸が苦しかった。

「聞いてます？」

その言葉に我に返った。全くもって彼女の話を聞いてない。

「ごめん、何？」

「何でもないです」

大人びた彼女も拗ねるんだ。その一面を見たからにはいじらずにはいられないだろう。

彼女の左側の頬を軽く掴んだ。

「むあー！な、にするんですか！運転中ですよ！」

頑張って振り払った彼女が面白すぎる。そんなにムキにならなくても…。

「はー…相変わらずウケるー…」

「何が」

「存在が」

赤信号で停車したと同時に軽く睨まれた。もちろんその目線はあまりに無力だ。

「他の女の人にもそんな事言ってるんですか？」

「言うわけないじゃん、薫だけだし」

「…何か前にも聞いた気がします…」

「それだけ俺が薫好きって事なんだからさ」

確か5年前にも同じことを言った。あくまでも自然に。

何を言われるのか正直怖かったが、俺の言葉はあっさり流された。

「あ、家着きましたよ」

軽くため息を吐いて車から下りた。

―168―

今自分が古野ドライビングに向かっているのが不思議だ…しかも自分の車で。5年前、まだ彼と付き合ってない頃はこんな事になるなんて想像も出来なかった。

話の流れとはいえ、彼を迎えに行って家に招くことになった。良い歳した大人二人なんだから一夜の過ち、なんて事は考えにくい。

それは置いといて。

どうしようという気持ちで頭がいっぱいになる。ご飯を食べるにしても何を話せば良いんだろう。この五年間、フランスでの仕事、それか谷原さん…。

一番最後は候補から外しておくとして、今さらこの五年間を話したところで『だから何?』となってしまえばもう終わりだ。フランスの話したってまず説明しといた方が良いことがありすぎて、本題に辿り着けそうもない。

だからといって、別の男の話をするのはかなりなマイナス要素になる。

別に谷原さんを嫌って思ってるわけでもないけど…。

そうこうしているうちに古野ドライビングに着いてしまった。そして予想に反して彼がもう駐車場で待っている。

逃げも隠れも出来ない私は、なすすべもなくまるで降参するかのように車から降りた。

「お疲れさまです」

彼は笑顔で手を挙げてくれた。

「ごめんね、今日とか無理言って」

「いえ、暇だったので」

今日はあえて谷原さんの話題は避けることにした。だから今日仕事を休んでしまったことも触れないでおこう。

車に乗り込んでしばらくして、彼がぽつりと呟いた。

「…運転上手くなったね」

「ん？まあ毎日運転してますからね」

教習生として車に乗っていたときと同じ、彼は前を向いたまま少し笑った。

「左折で脱輪した頃とは大違いだ」

「一回しかしたことないじゃないですか！」

彼が昔のように大爆笑した。私的には笑うところなんてないんだけど…。

彼は軽く息をついて、さっきとは違うトーンで話し始めた。

「それにしてもだいぶ変わったよなー…髪伸びたし茶髪になったね」

「…似合わないですか？」

「似合ってるよ。大人の女性って感じ」

『似合ってるよ』

そう言われただけなのに、胸のドキドキが止まらない。笑みが自然と零れてくる。

「ありがとうございます。ダークブラウン系ならまだ似合うかなって…この色選んで良かった」

赤信号になったと同時に彼の方を向くと、彼はぼんやりと前を向いていた。

「…聞いてます？」

「ごめん、何？」

彼はあっさり聞いてないことを認め、むしろ開き直っていた。さっきの嬉しかった気持ちはどこへやら、ついむくれてしまう。

「何でもないです…」

すると彼は何を思ったのか、私の左頬を軽く掴んだ。対向車の人に変な顔を見られまいと必死で振りほどく。

「むあー！な、にするんですか！運転中ですよ！」

彼は相変わらず大きな声で笑っている。

「はー…相変わらずウケるー…」

「何が」

「存在が」

「…他の女の人にもそんな事言ってるんですか？」

「言うわけないじゃん、薫だけだし」

「…何か前にも聞いた気がします…」

「それだけ俺が薫好きって事なんだからさ」

このくだりと最後の彼からの言葉は、私がまだ教習生の頃にもあった。あの時も、そして今も、彼の『好き』が意味するのは何なのかわからない。

変に期待したところで傷付くのは避けられない、と思いつつハンドブレーキをぐっと引いた。

「あ、家着きましたよ」

彼はありがとう、と言って車から下りた。

―169―

部屋のドアが開いた瞬間、ふんわりとした優しい匂いに包まれた。

女性らしさの出ている部屋。オレンジと白を基調としていて、すごくきれいに整頓されている。

「はー…綺麗だね」

「ありがとうございます。でも狭いでしょう？」

そう彼女は言うが、多分9畳くらいはあるだろう。ないのだとしても、片付け方のおかげで広々として見える。

「おじゃまします」

いまさらそう言って、彼女が準備してくれた座椅子に座った。彼女は台所へと向かう。

「ミルクティーで良いですか？」

「あ、ありがとう」

いいえ、と台所から声がした。もう秋になって肌寒いからと、温かいものを準備してくれているのだろう。

そして、会話が全くなかったまま過ぎた数分後、目の前には予想通りほんのり暖まるくらいの温度のミルクティーが置かれた。

「美味しいですよ」

「ん…美味い」

向かい合って座り、微笑み合っている。その光景が何とも言えず幸せで、心まで温かくなっていく。

そしてその数分後、二人の間に鍋が置かれた。最近は朝夜２０℃を切ることが多く、正直布団から出にくくなりつつある。そんな時期の鍋は大好きだ。

「鍋だとたくさん野菜も取れるし良いでしょう？」

「そうだね。いただきます」

決して手抜きではないと分かるのは、ふわふわに作られた鶏団子や、栄養バランスを考えて数種類の野菜が入っているから。

「美味っ！久しぶりに良いもの食った気がする」

「大袈裟ですよ」

彼女が苦笑している。俺は別にお世辞を言ったつもりは全くない。

ひたすら鍋をつつきながら言った。

「お世辞じゃないし。何、そんなに俺の言葉は信憑性ないわけ？」

「そうじゃないですけど…」

「じゃあ素直に喜んどきな」

「そうします」

ちらっと彼女を見ると、箸をくわえたままじっと俺を見ていた。何故だかどきっとするものがあり、次に来ると予想される言動に期待してしまう。

「…なに…？」

「ううん、何でもないです」

そう言うと伏し目がちに箸を手元に置いた。

「全然変わってないなって」

少し彼女が悲しそうに微笑んだ。

今すぐに抱き締めたい。でもそれは彼女にとって迷惑になるかもしれないと理性が止める。

「薫だって…全然変わってない」

「そうですかね…」

何故だか彼女がぽつりと言ったことが胸に重くのしかかる。

やっぱり彼女の気持ちはもう谷原の方に向かったのだろうか…。

「あのさ、言いたかったことがあるんだけど」

彼女はぱっと顔を上げ、小動物のような目を丸くして俺を見た。心拍数が上がるのがわかる。

謝るんだ、5年前のことを。

「ごめん、昔いきなり連絡取らなくなったこと…結婚も考えてたのに周りから反対されまくって不安だったんだ。でも俺は…」

その瞬間、彼女が強く机を叩き、涙を浮かべた目で俺を睨んだ。

「言い訳なんて聞きたくない！」

彼女に付けた傷は想像以上に深い。

俺がこの5年間、彼女を忘れたことがなかったのは揺るぎない事実。

でもそれはまた、とてもとても都合の良い事実…。

「…また出直してくるよ。何思われたって仕方ないと思ってる…でも俺は、まだお前が好きなんだ」

そう言って俺は部屋を立ち去った。

―170―

玄関を通るときも、エレベーターに乗っているときも、特別会話はなかった。別に嫌な雰囲気ではなかったけど、それにしても何だかもどかしい。

もともと部屋を掃除しようとしたのは彼に綺麗な部屋を見せたいせいもあるが、それよりも大きな理由があるとすれば谷原さんが近日ここにやって来るから。昔付き合ってた彼なら失礼な話、部屋が汚くても構わないと思っている。

ドアを開けると、掃除をした甲斐もあって彼の口から感嘆のため息が漏れた。

「はー…綺麗だね」

「ありがとうございます。でも狭いでしょう?」

先に部屋にあがって座椅子を準備する。座ってくださいと言わんばかりにぽすぽす叩くと、それに気付いた彼は靴を脱いでご丁寧に並べた。

「おじゃまします」

私は彼と入れ違いで部屋を出て、キッチンでマグカップ2つを用意した。

「ミルクティーで良いですか？」

「あ、ありがとう」

お湯が沸くのを待ちながらひたすら考える。

受け身じゃダメなのは十分わかっている。でもこんなにも会話がないと、彼をここに呼んだのは迷惑だったんじゃないだろうかと思ってしまう。

ようやくお湯が沸騰し、熱くもぬるくもないちょうどいい温度のミルクティーが出来た。

「美味しいですよ」

彼はコップを受け取って一口口にすると、ほっとしたような顔をした。

「ん…美味い」

良かった、と呟いて私もミルクティーを飲んだ。自然と笑みが零れてくるこの感じは、谷原さんといるときとは比にならないほど大きい。

「ちなみに今日の飯は？」

あれからしばらく他愛ない話が続き、台所に再び向かった私に彼が話し掛けてきた。

「あ、鍋ですよ」

そういってついさっきまで温めていた鍋を部屋に持って行く。土鍋なので何となく温かみを感じた。

「鍋だとたくさん野菜も取れるし良いでしょう？」

「そうだね。いただきます」

彼が鶏団子を口にした。何を言われるのかが不安で、ドキドキしながら彼を見つめた。

「美味っ！久しぶりに良いもの食った気がする」

「大袈裟ですよ」

嬉しい反面オーバーでしょ、と言いたくなるリアクションについ苦笑いしてしまう。

彼は鍋をつつきながらも私の方を見た。

「お世辞じゃないし。何、そんなに俺の言葉は信憑性ないわけ？」

「そうじゃないですけど…」

「じゃあ素直に喜んどきな」

何も変わってない。彼の私に対する態度も、気遣いも、笑顔も。５年前は幸せだったはずのそれらが、今となっては辛いものでしかない。

「…そうします」

私がじっと見ていたのを気付いた彼は、少し曇った顔で尋ねた。

「なに…？」

「ううん、何でもないです…全然変わってないなって」

あの時、彼に縋ってでも一緒にいれば良かった。そうすれば今の状況は違っていたはずなのに。

「薫だって…全然変わってない」

「そうですかね…」

何がだろう。何を意味しているんだろう。

全然変わってないなら、と無駄に淡い期待を持ってしまう。でもどうせ、と思ってしまう自分もいて、頭の中はぐちゃぐちゃになった。

彼はそんな私をじっと見つめたまま箸を置いて、ゆっくりと口を開けた。

「あのさ、言いたかったことがあるんだけど」

目を反らせなくてじっと見つめ返した。内心心臓が口から出て来そうなくらいの緊張感に襲われていた。

「ごめん、昔いきなり連絡取らなくなったこと…結婚も考えてたのに周りから反対されまくって不安だったんだ」

5年前の謝罪。

もしかしたら、今なら気持ちが届くかもしれないという期待が膨らむ。

それと同時に募る憎悪に似た感情。
どうして5年経ったのに、今更そんなことを言うのか。

ドウセマタ、ワタシハステラレルダケナノニ…。

「でも俺は…」

「言い訳なんて聞きたくない！」

とっさに彼の言葉を遮った。耳を塞いで俯く。

彼の方から軽い咳払いが聞こえた。それでも涙が止まらなくなった私は顔を上げることが出来ない。

「…また出直してくるよ。何思われたって仕方ないと思ってる…でも俺は、まだお前が好きなんだ」

真意が謎のまま、彼は自分の家へと帰った。

―171―

彼女を忘れようとして結局忘れられなかった5年間。頑張っても頑張っても忘れられなかったのに、今断ち切ろうとするのは無理がある。

再び出会って、惹かれてしまったから…。

とはいっても結局どうしたら良いかわからない。多分今行動に移したところで余計距離が開きそうだし、でも待ち構えてるだけじゃ谷原に横から取られるかもしれないし。

仕事の休憩中、デスクにうつ伏せになってため息を吐いた。

「…あー…やる気ねー…」

この時間が空き時間になっている池田ちゃんが、コーヒーを飲みながら椅子に座った。

「どうしたんですかー」

数秒経って体を起こし、池田ちゃんの方を見ることもなくぼんやり

とした感じで答えた。

「何かねー…うまくいかないんだよね」

「女心は複雑ですよ」

俺が省略した部分を悟った池田ちゃんはそう言って再びコーヒーに口を付けた。

「まあでもまだ好意を持ってくれてる可能性はあるじゃないですか」

「…家に呼んでくれたこと？」

「一人暮らししてるならなおさら…男と女が自宅で二人っきりなんて、言い方悪いですけど何があってもおかしくないじゃないですか。好意持ってない人なんて部屋に招待したりしないですよ」

「そっか…でも俺さ…」

『言い訳なんて聞きたくない！』

彼女の声がまだ耳に残っている。

滅多に見ることなんてなかった彼女の泣いている姿。俺はただ、為す術もなくその場から立ち去ってしまった。

「…内村さん、香西さんに謝りました？」

「まあ…でも」

「謝った後すぐ余計な言葉を口にしたとか」

池田ちゃんが言ったのが図星だっただけに、ぐっと口をつぐんでしまう。

よくよく考えれば『それでも俺はまだお前が好きなんだ』的な発言をしたところで重いだけだ。しかも謝った直後に。

恋の駆け引きなんて今までやったことがない。そんな俺にどうしろというのか。

再びうつ伏せになってため息を吐いた。

「もー俺はダメなのかねぇー…」

池田ちゃんがマグカップを俺の頭の上にどす、と置いた。鈍い痛み

に頭をさすりながら体を起こす。

「そこで諦めたら、ホントにダメです。無条件に谷原さんに渡すんですか？」

「そうじゃないけど…」

「なら諦めないでくださいね」

にっこりと笑う池田ちゃんに、ただはい、としか言えなかった。

まだ焦る必要はないはず。

―172―

その夜、狙っていたかのようなタイミングで電話が掛かって来た。
一生懸命涙を拭いて携帯を手に取ると、そこにあったのは『谷原賢二』という名前だった。

「もしもし」

『…何か…あったんですか?』

泣いた後というのが伝わってしまったのか、谷原さんが心配そうに尋ねた。引いたはずの涙が何故だか止まらなくなって、喋る事が出来ない。

『香西さん、家教えてもらえますか?今から迎えに行くので』

「…っ、大丈…夫、です…」

『俺を信じて!』

少し強めの口調で谷原さんが言った。

今までなんとなく感じていた距離。それは年上の谷原さんが使う敬

語と人称から来るものであって、もしかしたらそれは気を遣ってくれた結果なのかもしれない。

でも今は、谷原さんがそんな壁を取っ払って私に声を掛けてくれる。

『言ったでしょ、俺が香西さん好きだって。力になりたいと思うのは当然のことでしょ？それとも俺は、香西さんが辛いのを救ってやれないほどダメ男なの？』

「そんなこと…」

『じゃあ力にならせて？今から迎えに行くから、ちょっと待ってて』

そこには谷原さんの声を聞けてほっとしている自分がいた。

十数分後、谷原さんが家に着いた。インターホンが鳴ったので出ると、すごく心配した顔で谷原さんが立っていた。

「すみませんわざわざ」

彼が来た形跡を一切残してない部屋に招き入れ、にっこりと笑ってみせた。それでも若干腫れてしまった目を偽ることは出来ない。

谷原さんは悲しそうな顔をしたまま私をぎゅっと抱き締めた。

彼とは違う匂い、温もり、安らぎ。それに包まれた私は安心感を覚え、谷原さんの胸に手をそっと添えた。

「俺は…香西さんのために何も出来ないの？」

「そんなことないです。現に今、すごい落ち着いて来ましたもん」

少し離れて谷原さんを見上げた。ありがとうございます、と小声で言うと、谷原さんはそっと手を両肩に置いた。

「ホントに？」

「…はい」

目を細めて微笑んだ。

この言葉に嘘偽りはない。彼といた時と同じ…もしかしたらそれ以上に、居心地の良さを感じる。

私は一体、どうしたんだろう…。

―173―

結局彼女と連絡取らないまま一週間を過ごした。俺の頭の中には『諦め』の二文字がうっすらと浮かんで来る。

5年近く想い続けて届かないのなら、諦めたほうが潔いだろう。

でも、5年も想い続けたならそう簡単に諦めるのはもったいない、という気もする。

最近浮いたり沈んだりが激しくて、気疲れすることが多い。何事も気の持ちようだとは思うが…良い歳だし、いい加減新しい出会いを求めたって良いか、とも思う。

悲惨といえば悲惨な俺を気遣って、池田ちゃんが飲みに誘ってくれた。一つしか違わないとはいえ、後輩にこんなに気遣われてはなんだか面子が立たない気がするが…そこは仕方ない。

「何か悪いね、いっつも」

「いーえ、私は内村さんが香西さんと幸せになるまで頑張りますから」

そう言って池田ちゃんはカクテルを一口飲んだ。先輩想いな後輩につい笑みがこぼれてしまう。

「で、最近は全然連絡取ってないんですか？」

「まあね…何か怖くてさ」

「谷原さんに取られるのとどっちが怖いですか？」

なんとなく言葉が出て来ない。谷原に取られるのは確かに嫌だ。かといって彼女に直接拒絶されても…と思う。

「…どっちもかな」

「男でしょー、当たって砕けろで良いじゃないですか！」

それが出来るもんなら普通に考えてこんなに苦労しないだろ、と心の中でつっこむ。まあ池田ちゃんなりに俺を一生懸命励まそうとしてくれてるのはすごく伝わってくるから何も言わないが。

「そういえば…香西さんって勤め先プジョーって言ってましたよね」

俺は特に考えることなくグラスをカラン、と回して答えた。

「うん」

「共通の車っていう話題は何かしたんですか？」

「…いや…」

「ならそれをネタに会話すれば良いじゃないですか」

確かにその手はある。でも今の状況でそれをどう利用して良いのかわからない。

「…う、ん。機会があればね」

「頑張れば機会なんていくらでも作れますよ」

やたらとにこにこして池田ちゃんが言った。どこからそんな根拠が出て来るんだ、と聞きたくなったが、どうせ言ったところで『女のカン』と返されるだろう。

「そーですね」

見向きもせずに適当に答えた俺の背中を、池田ちゃんは叱り付ける

かのように思いっきり叩いた。

―174―

書類をデスクにトントン、としてきれいにまとめながらため息を吐く。

結局私は何がしたいんだろう。

彼に最後に会って約10日ほど経とうとしている。特に何かするわけでもなく、されるわけでもなく。

何か変化があったかと言われれば、きっとそれは谷原さんとの関係がはっきりしつつあることだろう。

これ以上彼を苦しめたくない。私ももう、苦しみたくない。

だからもう、彼と連絡を取り合うのはもうやめようと思った。

だというのに、心のどこかに彼を取られたくないという変な独占欲がある。

悪い言い方をすれば…というより、明らかに二股状態だ。

もう一度ため息を吐いた。

谷原さんは寛大なのか適当なのか、人のわがままに付き合ってくれる性格だ。嫌な顔一つせず「わかりました」という姿に驚きさえしたこともあった。

そんな谷原さんにこれ以上の失礼な行為は許されない。たとえ本人が気にしないよと言ってくれたとしても、だ。

義務感からではなく純粋に、谷原さんが好きになったような気さえした。その性格が、きっちりしてないと気が済まない私をすべて受けとめてくれそうだから。こんなに想ってくれる人もいないだろう。

…彼を例外として。

「結局どうすりゃ良いのー…」

そう言ってデスクにぺたりと顔をつけた。デスクの冷たさが何となく心地よくて、ゆっくりと目を閉じた。

その時、同僚の松嶋くんが私の背中をぽん、と叩いた。寝呆けたような顔で振り返る。

「なに…？」

「香西ちゃんにお客さんだよ。女性の方で、池田さんっておっしゃる方なんだけど…」

「池田さん？」

女性の池田さんはあいにく何人も知り合いなため、どの池田さんなのか正直わからない。

高校からの友達か、大学からの友達か…思いつく人を頭に浮かべながら席を外した。

受け付けで待っているということだったので急ぎ足で向かうと、そこには私と同じ背丈の女の人が立っていた。セミロングで真っ直ぐな黒髪のその人は、私がそっちに行っているのに気付いたらしく、笑顔で私の方を振り返った。

「香西さんですよね？お久しぶりです」

お久しぶりというか、私の顔を覚えているのかは正直疑問ではある。

でもそこに、私には面識がある人が立っていることは確かだ。

「池田さん…」

古野ドライビング教員の池田さんだった。

―175―

何だかあの日から時間が経つのが遅く感じ、週に二回あるはずの休みまでが長く感じた。

今日は休暇なので、息抜きがてらドライブに行くことにした。とりあえず周辺をドライブしてから県外の絶景スポットでも行ってみようと思う。

…おっさん一人で行くなんて淋しすぎるが、まあそこは目をつぶっておこう。

都市高に乗る前に街中を走る。昼前とあって人通りや車が多い。ちょうど赤信号になったので停車すると、横断歩道にはたくさんの人が溜まっていた。

そして、歩行者信号が青に変わったとき、見覚えのある男が目の前を通り過ぎた。

１８０はあるだろう長身、清潔感のある短い黒髪、悠々とした立ち

振舞い。

…間違えるはずがない、谷原だった。

カジュアルでもフォーマルでもない格好をした谷原は仕事の休憩から戻って来たのか、ビルの方へと向かっていた。ビルの入り口には色んな会社の名前が並んだ看板みたいなのが立っているが、谷原が勤めてるのは多分「株式会社　ソレイユ」というやつだろう。いや、案外住友生命とかの大企業かもしれない…。

それはともかくとして、なんか腑に落ちない。

奴が人望ありそうなのは何となくわかるし、人から好かれやすい性格っぽいし、何だか同性から見ても結構良い男だと思う。それだけならまだしも、彼女まで谷原の元に行ってしまったら…。

そんな考えを振り切るかのように信号が変わった瞬間にアクセルを踏んだが、意識すればするほどそれは拭い去れなかった。

あいつは仕事が終わったら彼女に会いに行くんだろうか。

あいつはこの時間も彼女とメールしたりしてるんだろうか。

あいつはもう彼女に自分の気持ちを伝えたんだろうか。

あいつは…。

「あーもう！」

頭をガシガシと掻いて無理矢理考えるのをやめた。ダメだ、こんなんじゃダメだ。

気の紛らわしに車に置いてあったＣＤを適当に取って流した。俺に落ち着けと言わんばかりに流れたのはバイオリンの音色で、それがなおさら俺の気持ちを駆り立てた。

戦場のメリークリスマス…これは紛れもない、彼女がくれた部活の演奏会のＣＤにある曲だった。

『へー、結構曲多いね』

『ちゃんと私も弾いてるんですよ』

『あ！戦場のメリークリスマス入ってる！俺これ好きなんだよね』

『ちょっと、聞いてます？』

『聞いてる聞いてる！はー、ウケるー…そんなに怒んなくても良いじゃん』

あれはまだ彼女がまだ教習生だった頃のやりとりだ。

もう何年も前の光景が目の前に広がり、幸せな気持ちにも辛い気持ちにもなった。

きっと、いや確実に、俺には彼女しかいない。

心では決心を、頭では計画を描きながらアクセルをさらに踏んだ。

―176―

教習生の頃何回か担当してもらっただけで、特に親しくなったわけではない池田さん。そんな人がわざわざ職場を訪ねて来たんだから、何か特別な事情があるはずだ。

きょうはもともと谷原さんと会う予定だったのを、電話で断りを入れた。かなり失礼なことだったというのに、谷原さんはいつものやさしい口調で大丈夫ですよ、と言ってくれた。

ただし、今度家に招待して食事をする、という条件をつけて…。

それはともかくとして、今池田さんと向かいの席に座ってグラスを交わしている。昔はこんなふうになるなんて想像もつかなかっただけに、内心すごくびっくりしている。

「香西さん、私のこと覚えてます?」

池田さんが身を乗り出すようにして無邪気に尋ねた。私が聞きたい質問をしてきた池田さんについ苦笑してしまう。

「もちろんです。古野ドライビングの池田さんですよね？」

「うんうん」

「私一段階の時と、セット教習の時と…あと応急救護の時も担当してもらいました」

「よく覚えてるねー！嬉しい」

池田さんがとびきりの笑顔を作ってからビールを口にした。

「でも今日はどうされたんですか？」

私の問いに小さくうん、と言ってグラスをテーブルに置いた。真っすぐな視線が私に向けられる。

「…まあ、単刀直入に言えば内村さんの事なんだけど…」

ああ、と思った。確か付き合い始めたばっかりの頃、いろいろあって池田さんに知られてしまったと彼がぼやいてた気がする。

ということは多分別れてしまったことは知ってるだろう。じゃあ…どこから知らないんだろう？

彼の名前が挙がって心拍数が上がっているのを知らないはずの池田さんが、私を見て少しおかしそうに笑った。

「目が泳いでますよ」

とっさに顔を伏せてしまった。それが余計おかしかったんだろう、声を上げて笑いながら私の頭を撫でた。

「わー、髪の毛やわらかーい。いや、ホント香西さん可愛いね」

「むぅ…」

こんな綺麗な人にこんなことを言ってもらえたのが何だか照れ臭くて、ついつい顔が赤くなってしまう。

「内村さんが小動物みたいって言ってたの、わかる気がする」

「！奴はどこまで話してるんですか…！」

にこにこしていた池田さんの顔から明るい笑顔が消えた。伏し目がちに少しだけ笑ってグラスを手に取った。

「まあ…とりあえず恋敵がいて、あと香西さんに謝ってすぐ告白したまで、かな」

池田さんの雰囲気からして真面目に考えないといけない話。なのに今の私にはそれが出来なくて。

あのやろう…。

恋敵っていうのは多分谷原さんだろう。それは別に良いとして、私の情報までだだ洩れな感じがして正直恥ずかしい。

…とりあえず今日、家に帰ったら真っ先に電話してやる…。

―177―

何をやってもどこに行っても落ち着かなくなったので、下道を通って帰ることにした。

車内にはまだ演奏会のＣＤが流れていて、懐かしさと愛しさと寂しさと、いろんなものがいまだに混じりあっている。

…今日も谷原に会うのかな…。

その瞬間、携帯が鳴った。バイブからして電話だったので車を路肩に止めて携帯を手にした。

そこにあるのは『香西薫』の３文字。

先日あんなことがあっただけにどうしたんだろうと思うが、それよりまず胸が詰まって話せるか不安でもある。

「…もしもし」

『バカー！なに人のプライベート流出させてるんですか！』

返す言葉がない。変な意味ではなく、単純に。

心当たりがないことはないが、何の話かがまずわからない。一生懸命頭の中を探してみてもどの辺のことか見当が付かない。

それを知らずに電話の向こうでわあわあと彼女が喋る。

『なんか知らないうちに第三者に知られてるし！多分谷原さんのことも喋ったんでしょ！なんかもう…むあー！…ばかー！…』

最後の方はどんどん声が小さくなっていった。

もう２５になる女性だというのに、どことなくあどけなさが残っている。見た目や立ち振舞いこそそんな感じはしないが、これは俺だけが知っている一面かもしれない。

「バカと言われても」

『むぅ…そうですけど』

軽くため息を吐いた。

「男はみんなバカなの。覚えときな？」

『…そうします』

腑に落ちない感じで彼女が答えた。その様子が何となく見えてきてつい笑ってしまう。

「それは良いんだけどさ、それ誰から聞いた？」

『どれ？』

「プライベートのくだり」

『あぁ、池田さんです』

…

「はぁ？何で池田ちゃん？」

確かに池田ちゃんには多々相談した。俺の唯一の心当たりは池田ちゃんで、でもどう考えても彼女と接点がないはずだ。

彼女は素っ頓狂な声を出して答えた。

『うん？今日職場にいらして、夜一緒に飲みに行ったんです』

「はぁ…」

何だかよくわからない。どういう流れでそうなったんだろう…。

そこでふと思い出した。池田ちゃんのやたらとにこにこした顔。俺にアドバイスをやるために聞いた彼女の勤務先。

…あのやろう。

どこまで彼女に話したかは知らないが、とりあえずかっこ悪い姿さ

えさらされてなければ問題はない。

―178―

『香西さんがね、もし内村さんの申し出た交際を断ったとしても…別にそれは失礼なことじゃない。むしろどっちつかずの態度が人を傷つけることがあるんです。

内村さんにも、彼が敵対視してる人にも、気持ちをはっきり伝えてください。』

確か池田さんはこんなことをいった。

『確か』というのは失礼な話、あんまり覚えてないからだ。親身になってアドバイスをくれていたのに、私の頭に残ったのは個人情報がだだ漏れしてたことだった。

ちょっとした怒りと恥ずかしさ。それが手伝ってあれだけ連絡を取るのをためらっていた彼相手に、勢いあまって電話を掛けた。

長いコール音の後、電話に出たのは呆けたような彼の声だった。

『もしもし』

「バカー！なに人のプライベート流出させてるんですか！」

どんな理由でなのかはわからないが、彼からの返事はなかった。言い訳をしようとしないのはいさぎいいとは思う。が、今はそんなの関係ない。

「なんか知らないうちに第三者に知られてるし！多分谷原さんのことも喋ったんでしょ！なんかもう…むあー…ばかー…」

谷原さんも全然知らない人からネタにされてるなんて知ったらどう思うだろう。何だか申し訳なさも出て来る。

彼は悪びれる様子もなく苦笑いした。

『バカと言われても』

「むぅ…そうですけど」

『男はみんなバカなの。覚えときな？』

「…そうします」

何なんだ、その理屈。

そう心の中で呟いて黙り込んだ。

すると彼が軽く咳払いをして尋ねてきた。

『それは良いんだけどさ、それ誰から聞いた?』

「どれ?」

『プライベートのくだり』

「あぁ、池田さんです」

『はぁ?何で池田ちゃん?』

数秒開いたのちに彼がそう言った。変な話でもしてしまったのかなと思う。

「うん?今日職場にいらして、夜一緒に飲みに行ったんです」

『はぁ…』

わかったような、わからないような、そんな曖昧な返事を彼はした。

とりあえずその話はここで切り、他愛ない会話をした。そこに谷原

さんの名前はもちろん出ない。

仕事のこと、近況、それだけ。

なぜだか私の中で彼の存在が遠く感じた。

―179―

少しため息を吐いてマグカップを置く。

「だからね、まあ確かにありがたい行為ではあるかもしれないけど、さすがに突拍子なさすぎるだろ？」

「だってお互いが先に進めるのに進もうとしないじゃないですか」

池田ちゃんはコーヒーを飲みながらあっさりと言ってのけた。

確かに結果的に気まずくなっていた彼女から電話があり、流れで雑談まで出来た。とはいえ、いきなり突撃職場訪問なんかして飲みに連れていくなんて、実際彼女に迷惑がかからなかったはずがない。

たまたま休みが重なった7時限目に池田ちゃんに昨日のことを話した。すると池田ちゃんは「あら、ばれちゃいましたかー」と別に普通に返してきた。

「っていうか香西さん普通に電話したんですね」

「なんで？」

「いやだって、そんな気まずい雰囲気になった後ってなかなか電話とか出来ないじゃないですか」

「まあねー…」

「それ考えたら結果オーライでしょう」

池田ちゃんが再びコーヒーを口にした。俺は肘を突いて頭を抱えている。

「で、何か掴みはあったんですか？」

「何も…」

「なーにやってるんですか」

軽く肘で突かれた。腕をさすりながら少しすねる。

「そんなこと言われても…ねぇ」

「私の頑張り無駄にしないでくださいよ？」

そう言いながら池田ちゃんは俺の携帯を手に取った。何だか嫌な予感がする。

「ちょ…っ！何やってんだよ！」

「んー…」

俺の手から飄々と抜け出し、しばらくぽちぽち打った後、俺に携帯を渡した。

そこに表示されていたのは送信ボックスの中のメール。宛先は『香西薫』だった。

『昨日は電話してくれてありがとう。色々話が出来て嬉しかったよまた近いうちに逢いたい』

思わず携帯を落としそうになった。

「おま…！なんて事してくれたんだよ！」

池田ちゃんは怖いくらいの笑顔を向け、バッサリと言った。

「もう逃げられないでしょ？絶対に香西さんと結婚までいってくださいね」

引くに引けないこの状況に、ひたすら頭を悩ませるしか手はなかった。

―180―

今日こそは谷原さんと会うことになっている…と思う。週に5回も会うなんて、その辺のカップルと同じくらいかもしれない。

一応今日どうするのかを尋ねるために、昼休みに電話を掛けてみた。

長いコール音の後、いつもの明るい声が耳に届く。

『トゥース！』

「お疲れさまです」

なぜだか自然と笑みがこぼれてくる。谷原さんとの距離があの日以来一気に縮まり、会わない日でもこうやって毎日電話をしている。

『お疲れさまです。どうしたの？』

「あ、今大丈夫ですか？」

『もちろんもちろん。今岩本っちゃんと昼飯食べてるから』

そうですか、と言って何故か黙ってしまった。普通に考えてメール

をすれば良かっただけなのに、谷原さんの声を聞きたいと思ってしまう自分がいる。

『大丈夫？どうしたの？』

その声にはっとして慌てて答えた。

「あ、いや…今日はどうするのかなって…」

ああ、と谷原さんが言った。電話の向こうで少し笑っているらしい。

『今日お邪魔して良いの？』

「え？」

『いや、ご自宅に』

どきっとする。確かに意識がなかったとはいえ流れで谷原さんの家に泊まったときも、彼がこの前家に来たときも、特別何もなかった。

でも今この時期、この状況だと男女二人が密室にいれば、いわゆる男女関係というものが出来上がってしまいそうな気がする。

もちろん谷原さんが私を異性として好きだ、と言ったんだから、私がＯＫを出せばそういう事にはなる。

いや、でも…

『香西さん？』

「は、いっ！」

考えてることがばれてしまったかのような慌てる。谷原さんはそれを知らずに少し高めのトーンで尋ねてきた。

『どうしたの？ホントに大丈夫？』

「大丈夫です。今日家に来るんですよね？準備しておきます」

『ありがとう。今日迎えに行くから』

「待ってますね」

電話を切ってふと顔を上げると、何度となく私を迎えに来てくれている谷原さんを見たことがある同僚に囲まれていた。

「またあの人来るの!?」

「彼氏だったよね?」

「結婚するの!?」

谷原さんは多分、私が知らないだけですごくもててるんだろうなと思う。そしてそれをもやもやと考える自分。

もしかして私…。

―181―

あれから俺の携帯はうんともすんとも言わない。この空いた時間が非常に辛く、あんなメールを送られなければ…と思う。

仕事も終わり、帰宅準備に取り掛かっているときも反応はない。ため息を吐いて携帯をポケットに入れようとした瞬間、手の中で携帯が震えだした。

すごい勢いで画面を見ると、美幸から久しぶりに電話がかかっていた。

「なに」

物凄くがっかりしつつ仕方なく電話に出ると、それが伝わったのか不満そうな声が返って来た。

『何よ、私が電話しちゃいけなかったの?』

「そんな訳じゃないけどさ」

美幸がいつもの明るい口調でまぁいいか、と呟くと、いよいよ本題に入ってきた。

『今度のさ、俊哉の結婚式行く？』

歳のせいか誰のことかわからなかったが、数秒経ったのち学生時代のサークルの後輩だったことを思い出した。

「あいつか！結婚すんの？」

『招待状送ったって言ってたわよ』

あったっけー…と思いながら記憶をたどるが見当が付かない。たぶんダイレクトメールの山の中だろう。

「そうだなー…せっかくだし行くよ」

『で、新ちゃんは何で結婚式呼んでくれてないの？』

「…は？」

『ほら、私がたまたま看護してた彼女さん、結婚したんでしょ？』

なにやら話を聞いていくと、俺は巷では彼女と結婚して三児の父になっているらしい。

『あんなに私が色々面倒見てあげたのに、式に呼ばないなんて薄情じゃない？』

「いや、あのさ…」

『新ちゃん見損なったー』

「聞いてる？」

その言葉に美幸が笑い出した。

『ごめんごめん、冗談だから怒んないで。で、なに？』

「いや…さ、俺まだ結婚してないし、彼女とは5年くらい前に別れちゃって」

『うそ、ごめん…』

声を失っていく美幸に対していや、と軽く言った。

「まあでも今頑張ったらヨリ戻せそうな感じ」

『あ、そうなの?元カノさんとうまくいくといいね』

美幸は色んな事を察したのだろう、深くは聞いて来なかった。その優しさがまた、何となく切なかった。

他愛ない話を終わらせたあと待ち受け画面を眺めたが、そこにはまだ彼女からの着信はなかった。

―182―

従業員入り口前に立って谷原さんを待つ。最近はめっきり寒くなって、手袋を持ってない私はロングコートのポケットに手を突っ込まずにはいられなかった。

そしてさっきから、同僚の覗き見が気になる。気にしないつもりでも、気になって気になって仕方がない。

前ちらっと岩本さんに言われた言葉が不意に思い出される。

『本人は気付いてないみたいだけど、谷原ちゃんすごいモテてるんだよ。隠れが多いってもっぱらの噂だから、取られないように頑張って』

取られる？誰に？

そもそも谷原さんは私のものではなく、私も谷原さんのものではない。

でも谷原さんは今までにないような強い瞳を持って言った。

『仕事で培ったセールストークで口説き落としてみせます』

同僚があれだけ憧れに近い眼差しを向けている谷原さんからこんなことを言われてるなんて、みんなが知ったら嫉妬心で殺されそうだ。

あれこれ考えているうちに一台の車が目の前に停まる。そこから下りてくるのは見なくてもわかる、谷原さんだ。

そしてその瞬間、同僚から黄色い声が飛ぶのも聞こえた。
何故だか困ったように眉間にしわが寄ってしまう。

「ん、どうしたの？」

すごく心配そうに顔を覗き込んでくる。谷原さんの子犬のような目にはいまだに慣れない。

「いえ、なんでもないです」

「ホントに？」

なら良いんだけど、と言ってつけていたマフラーを私の首に巻き付けた。顔を上げると谷原さんがにっこり笑ってみせた。

そして、その時々に聞こえる小さな悲鳴。いい加減耐えられなくなって、つい谷原さんの手を引いて車へ向かおうとする。

「早く行きましょう」

「あぁ…うん」

あえて従業員入り口を振り返らずに谷原さんの車に乗った。無言でシートベルトを着けようとする私の手を谷原さんがそっと握った。

「どうしたの？何かあった？」

「いや、別に…なんか、同僚が谷原さんの話聞いたり、さっきみたいに姿見たりしたらキャーキャー言うから…なんか…」

どんどんうつむいていく私を見て、ふっと笑った谷原さんは私の額を胸元に寄せた。心地良い心臓の音が耳に残る。

「それって…嫉妬？」

耳元でそっと囁いた谷原さんの言葉にかあっと顔が熱くなる。

「いや、そういうつもりじゃ…！」

谷原さんの腕から解放されようとしても、さらに強く抱き締められて逃げることが出来ない。

嫉妬？私が？

やっぱり私は…。

「…香西さんなら…嫉妬も大歓迎ですよ」

ゆっくりと、谷原さんの顔が近づいてくる。

その時、ポケットに入れた携帯が突然震えだした。

―183―

家に帰ってきてからダイレクトメールの山を漁る。アイツからの招待状はどこだ…。

今となっては雑然としたおっさんの部屋。数年前彼女が綺麗にしてくれていた面影はもうない。

自分で片付けりゃ良い話だが、いまいちやる気にならない。汚い部屋だって生活出来るんだったら問題ないだろう。

そこでふと谷原の顔が出てくる。

清潔感がある見た目。何でもきっちりこなしそうな雰囲気。奴の部屋は綺麗に整理されているに違いない。

そう思うとやけにムカムカしてきて、明日も朝から仕事というのに部屋掃除に取り掛かった。意地でも谷原には負けない。どんな点においても、だ。

そして、あれから数時間が経過した。もともとゴミを放置してたわけじゃないから、処分するものとすればダイレクトメールくらいだったが、物が多くて綺麗に収納出来ない。何回置いていっても彼女がしてくれたような整頓された様子にはならない。

彼女はホントに片付け上手だったんだな…。

いなくなって気付く大切さ、なんてよく聞くが、まさに今そんな感じだ。彼女が当たり前のことのようにしてくれてたことが、俺にはなかなか出来ない。そして、5年経ったいまさら、それを痛感する。

机の上に置いてある一通の招待状。その中には俊哉からの直筆メッセージがあった。

『お久しぶりです！お元気ですか？
奥様と二人で式に来ていただければ嬉しいです。
新一さん、また今度久しぶりに飲みに行きましょう！』

美幸の話を聞く限りでは、奥様とは間違いない、彼女のことだ。

たぶん彼女の話を美幸がしたことがあるのだろう。だとしたら、彼女の事を俺の嫁だと思ってる人達は、俺たちの馴れ初めを知ってい

るはずだ。そして、年齢差も…。

そばにいたい。そばにいてあげたい。

俺はいつの間に彼女に甘えたいと思っていたんだろう?あの頃は甘えさせることしかしてなかったのに。

無意識のうちに手が動く。

何を話そうかなんて考えてもないに、携帯を手に取って電話を掛ける。

相手は言うまでもない、彼女だ。

―184―

バイブが鳴っている。メールだと思って携帯を取ろうとした手が、谷原さんに遮られる。

そして今、谷原さんに深い深い口づけをされている。

まだ付き合ってないのに、ここは車の中なのに、同僚が見ているかもしれないのに、そんなことお構いなしに強く抱き締められ、抵抗するにはあまりにも無力すぎた。

「ふ…」

谷原さんが離れた瞬間、不意に声が漏れた。あまりの恥ずかしさに右手で口を覆い、助手席側の窓の方に体を向けた。

すると谷原さんが後ろからぎゅっと抱き締めてきた。自分の中で熱が上がってくるのがすごくわかる。

「…惜しいですけど、続きはまた家で…」

耳元で囁いたあと谷原さんは私から離れ、何事もなかったかのように車を発車させた。

私は手の甲を頬にぺたぺたくっつけながら熱を冷まそうとしてみた。谷原さんがちらっと私の方を見て、何かを慈しむかのようなやわらかい笑みを浮かべた。でも私は、恥ずかしすぎてそれを直視することは出来ない。

それをはぐらかすためにさっきの受信メールを開いた。そこにあるメールに思わず眉をひそめてしまう。差出人が『内村新一』と書いてある。

『昨日は電話してくれてありがとう。色々話が出来て嬉しかったよまた近いうちに逢いたい』

…確か私は理不尽にバカとしか言ってない。それなのに嬉しかったなんて、実は彼にはM気質でもあったんだろうか。

とかそんなこととより、今は胸のドキドキが止まらない。別に誰かと付き合ってるわけじゃないのに、浮気がばれそうになった時のような心境…いや、したことないからわからないけど、とにかくそんな感じで心拍数が上がる。

それを何故か冷静に考える自分もいて、すごく滑稽な感じがする。恋人はどっちで、浮気相手はどっちに当てはまるんだろう？

でも現実問題、それについて直面しているわけで。浮気相手なんて作る気はさらさらないけど、そうじゃなくて私は二人のうち一人を選ばなきゃいけない。

そもそも二人はホントに私が好きなんだろうか？谷原さんなんか特に…罰ゲームとかじゃないよ…ね？

私があれこれ考えてるのを知らないはずの谷原さんがくすっと笑った。

「どうしたの？」

「へ？」

あぐらをかいたような体勢という、あまりお行儀のよろしくない座り方をしている谷原さんが、私の頭をよしよしと撫でた。

「さっきからいろんな顔してるから。顔赤くしたり、眉間にしわ寄せたり、何か考え込んだり」

「そ、そんなにわかりやすかったですか…？」

「うん。で、もちろん俺のことも入ってるんでしょ？色々考えてる中に」

大人しく首を縦に振ったが、どういうことを考えてたかは言わない。

…いや、言えない。

―185―

はぁ…、とため息を吐く。

やはりと言うか何と言うか、コール音が長く続いている。この前の話だと仕事が終わるのが俺より早い彼女は、この時間はもう家にいるはずだ。

なのに出ない。それはもしかしたら…。

次の瞬間、思いがけなく彼女が電話に出た。しかしその声は、何故だかすごく緊迫したような、震えているような、そんな色を帯びていた。

『…っ、もしもし！』

「な、何？どうしたの？」

『いえ、何でも…それよりどうしたんですか？』

その言葉のあと、艶っぽいとも言えるため息が聞こえてきた。走った直後なのだろうか。

「いや、さ…メール見…た？」

『…メール…？あぁ…見ましたよ』

「あ、そう？」

今になって『アレ池田ちゃんが勝手に書いた奴だからなかったことにして』とは言えない。

『で、そのメールがどうかしたんですか？』

「あ、えっと…」

軽く咳払いをする。今までに経験したことのないような緊張感が俺を襲う。

「近々…会えないかな？都合は薫に合わせるから」

『近々…だと…月曜、が…っ！や…！』

「薫？薫！？」

おかしい。

走った直後だとしても、いくら運動不足の彼女でももう息は落ち着いてくるはずだ。なのに息遣いが荒く、聞き覚えのある甘い声が耳に届く。

まさか…！

「薫！」

その時、彼女の高い声に変わって、男性としてはちょっと高い声が響いた。

『ご無沙汰ですね』

「お前…！アイツに何してんだ！」

『野暮なこと聞かないでくださいよ』

そう言って谷原がふっと笑った。

『ただ、戯れてるだけです。内村さんもいらっしゃいますか？』

「ふざけるな！」

俺は乱暴に携帯を切り、家を飛び出した。

彼女を助けなければ。その一心だけが俺を動かす。車を飛ばして向かうは彼女の家。そこが外れれば俺にはもうどうしたら良いかわからない。

頼む、家にいてくれ。必ず奴の手から助け出すから。

何かのヒーローみたいな心境でひたすら車を運転した。この前家に招かれておいてよかったとも思う。

家に到着した時、彼女の部屋は真っ暗だった。あわてて部屋のある階まで駆け上がる。

息を切らしながらインターホンを押し、反応がないのでドアを叩く。

「薫！薫…！」

どうして俺は彼女を守れない？その気持ちが駆け巡る。

ドアの前にへたり込んで、静かに涙を流した。

―186―

結局、何だかんだで谷原さんのお家にお邪魔することになった。今日はご両親がいらっしゃるらしいんだけど、谷原さんの恋人だと勘違いされたらどうしよう…。

「さあ、上がって」

「お邪魔します」

リビングに入ると、私を真っ先に出迎えてくれたのは犬だった。大きなゴールデンレトリバー。綺麗な毛並みは大切に育てる証だろう。

「わー、可愛い」

「マーフィーって言うんだ。母がエディ・マーフィーが好きで」

「へー…よしよし」

マーフィーが尻尾をふりながら大人しく座った。いいこいいこ、と撫でていると谷原さんが私の肩を抱いて屈んだ。

「マーフィーがこんなに初めて見る人に懐いてるの、初めて見た」

「あ、そうなんですか？」

油断して谷原さんの顔を見た瞬間、マーフィーがすごい勢いで襲ってきた。

「ちょ…重っ！」

「すごい懐いちゃいましたねぇ」

「や、谷原さん助けて…！」

その時、カバンから再びバイブの音が聞こえてきた。ぱたぱたと床を叩くが、そんなことをしても携帯が手元に届くはずがないので、谷原さんが笑いながら携帯を手渡してくれた。

「…っ、もしもし！」

『な、何？どうしたの？』

名前を確認しないまま電話を取ったが、声ですぐに彼だとわかる。

「いえ、何でも…それよりどうしたんですか？」

その時、マーフィーに頬を舐められた。動物は好きなんだけど、状況が状況だけに今はご遠慮願いたい感じ。谷原さんは楽しそうに眺めてるだけで助けてくれなくて…もう！

そんなことを全く知らない彼は、少しためらいがちに言葉を続けた。

『いやさ、メール見た？』

「…メール…？」

記憶を辿らなくてもわかる、彼がM気質を出したメールだ。そんなことないんだろうとは思うけど。

「あぁ、見ましたよ」

『あ、そう？』

「…で、そのメールがどうかしたんですか？」

状況が状況だから急じゃなければ後が良い。そう思ってることは彼も、マーフィーも知らない。

『あ、えっと…近々…会えないかな？都合は薫に合わせるから』

「近々…だと…」

後にしてほしいと思ったくせにその場で考えてしまう。

「月曜、が…っ！や…！」

空いてますよー、と続けようとした瞬間、マーフィーが首筋を舐めた。思わず変な声が出てしまって恥ずかしくなる。

谷原さんが苦笑しながら携帯を取り上げ、何を思ったのか画面を確認して電話に出た。

「ご無沙汰ですね…野暮なこと聞かないでくださいよ、ただ戯れてるだけです。内村さんもいらっしゃいますか？」

やっとの思いでマーフィーをどけた私と目が合った瞬間、切られちゃった、と言って携帯を手渡してくれた。

「何で俺と内村さんが知り合いなのか知りたい？」

谷原さんは私の中で生まれた疑問に気付いていた。

―187―

あったかい。昔感じたことのあるぬくもりに包まれている。

そうだ、あれは彼女がいつも俺を包んでくれてたぬくもり。彼女のぬくもりに包まれていた俺は、間違いなく幸せだった。

俺は確か、彼女の部屋の前から動かなかった。彼女を弄んで満足気に出てくる谷原をぶん殴るまでは動かないと決意して、それからの記憶がない。

なのに何であったかいんだろう?俺はもしかして死んだのか?何だかふわふわする…。

「あ、目覚めました…ね」

ふと目を見開くと、枕元で俺を見守ってたのは何故か一番見たくもない谷原だった。

とりあえず飛び起きると、そこは見覚えのある暖色系の部屋…そう、どう見ても彼女の部屋。俺はそのベッドに横たわっていた。

意味がわからない。とりあえず部屋から出てきたら俺が不覚にも眠ってて、凍死しないように部屋に入れてやったってところか。

力一杯谷原を睨み付けると、それに気付いた谷原が軽く息を吐いた。

「俺に感謝してくださいよ?香西が一緒にいたものの、あなたを運んだのはほぼ俺一人なんですから」

「そんなの頼んだ覚えはない」

谷原はやれやれ、とため息を吐き立ち上がった。

「薫ちゃん、内村さん目覚めたよ」

谷原が向いた先の台所から、えー?と声が聞こえてくる。ぱたぱたと部屋にやってきた彼女は髪を束ね、青いチェックのエプロンをしていた。谷原と並んで話してる様子が新婚さんの様子にしか見えてこず、余計にムカムカする。

そんなこと知るはずもない彼女が枕元にやって来て、床にすとんと座った。

「寒くないですか？」

「いや、別に…」

そっぽ向こうとした俺の額を彼女の手がとらえた。か弱く、冷たい手。守ってあげたい、温めてあげたいという気持ちが広がるが、俺の残った体力と谷原の目がそれを許さない。

彼女はそっと微笑んで手を離した。

「熱、だいぶ引きましたね」

「あ、ぁ…うん…」

「もう、びっくりしたんですよ。家に帰って来たら新一さんがドアの横で熱出して倒れてたんですもん」

ね、と彼女が谷原に話し掛けた。谷原は彼女の横にあぐらをかいて座り、俺の目をじっと見た。

「見た目以上に非力なくせに、あなたを一人で運ぼうとしたんですよ」

そう言って彼女の肩を谷原がぽんぽんと叩いた。

「だって…でも入り口にいたのが不幸中の幸いで、すぐ部屋で暖を取れたから良かった」

何だか話が見えない。部屋から出てきた谷原が仕方なく俺を運んだんじゃないのか？

「あのさ…」

谷原の方を向いていた彼女がん？と言って俺の方を見た。

「電話した時ってどこにいたの？」

「ああ、谷原さんのお家に。飼い犬のマーフィーに襲われて大変だったんですよ」

マー…。

つまりアレだ、全部俺の被害妄想。あの声は犬のせいで出されたものだったようだ。

「ごめんなさいねぇ、マーフィー一応メスだから許してあげて」

「メスなのにマーフィー…？」

「母がそれだけエディ・マーフィーが好きってことなんだよ」

はぁ、と彼女が納得したようなしてないような声を出した。俺も同じくなんだそれ、としか思えない。

目に見える三角関係がここに揃ったはずなのに、何故だか穏やかな空気が流れ、それに心地よささえ感じている俺がいる。

―188―

自分の家の台所でお粥を作っている。今思えば変な話で、何故か玄関で熱を出して倒れていた彼を谷原さんが運び、そして看病している。

遡ること数時間。

「嫌われる覚悟で話すよ、全部」

谷原さんはそう言ってリビングのソファーに座る。私は床に座ってマーフィーを抱いたまま谷原さんの目を見た。

「一ヵ月くらい前かな、内村さんにかなり嫉妬してさ、薫ちゃんの携帯にかかってきた番号に俺から電話したことがあって」

目をいつも以上にぱちぱちしてしまう。

「んん？」

「ほら、うちに泊まった時。あの時にね…勝手に携帯扱ったりして最低な男だと思ってるよ」

谷原さんはそう言って悲しそうに笑った。

つまりあの時、車に私の携帯を取りに行くと言ったのは嘘だったんだろう。確か彼からの着信もメールもなかったから。

別に谷原さんを責めるつもりはさらさらない。今更な話でもあるし、何より谷原さんが後悔しているから。

私は立ち上がって谷原さんのもとへ行き、頭をよしよしと撫でた。屈んでソファーに座る谷原さんと目線を合わせる。

「私は、たったそれだけのことで谷原さんを否定したりしません。谷原さんが仕事に対して真摯なのも、面白いことも、素敵なのも、それは変わらないことだから」

谷原さんが安心したような笑顔を見せ、そして私の両手を握った。

「俺が好きになったのが薫ちゃんで良かった」

「そんな…恐縮です」

「明日せっかくの休みでしょ?俺は明日展開だし、今日は名残惜しいけどうちまで送るよ」

そんな流れで帰宅したらコレ。

最初はかなり慌てていたけど、谷原さんの冷静な判断で何とか彼を部屋に寝かせることが出来た。私はとりあえず体が暖まるような物を作って、彼のことは谷原さんに任せた。

…谷原さんに『そんなに血相変えて助けようとするなんて、何か妬けるよね』と言われたのは伏せておこう。

色々考えながら土鍋を火にかけたその時、部屋の方から声がした。

「薫ちゃん、内村さん目覚めたよ」

「えー？」

「今日泊めてあげたほうが良いかもね…俺は嫌だけど」

「まあ病人ですし」

「マーフィーといい内村さんといい、良いとこ取られっぱなしなんだよね」

「え？」

よく意味がわからずに尋ね返すと、谷原さんがくすっと笑って髪を梳かすように頭を撫でた。

何だか恥ずかしくなってぱっと彼の方を見ると、ぽかんとしたような、でもどこか不機嫌そうな顔をしてこっちを見ていた。

ぱたぱたと歩み寄って顔を覗き込む。

「寒くないですか？」

「いや、別に…」

背中を向けようとした彼の額に手を当てて熱を測る。さっきほど熱くはないけど、それでもまだ完全には下がってないみたい。

熱のせいか彼の目が潤んでる気がする。ふっと笑って熱を測っていた手を離して、彼の髪を撫でた。

「熱、だいぶ引きましたね」

「あぁ…うん…」

「もう、びっくりしたんですよ。家に帰って来たら新一さんがドアの横で熱出して倒れてたんですもん…ね」

最初は救急車をすぐにでも呼ばないと、と言ってかなり取り乱してしまった。谷原さんが傍にいてくれて良かったと心から思う。

谷原さんは私の横に座って彼の目を真っすぐ見ていた。

「見た目以上に非力なくせに、あなたを一人で運ぼうとしたんですよ」

「だって…」

ここにいるということは、私に会いに来てくれたということ。そして、それがずっと想っていた彼だったのならなおさら…。

「でも入り口にいたのが不幸中の幸いで、すぐ部屋で暖を取れたから良かった」

すると彼は、手を自分の額に当てて一度軽く息を吐き、少しこちら側に首を傾けた。

「あのさ…電話した時ってどこにいたの？」

「ああ、谷原さんのお家に。飼い犬のマーフィーに襲われて大変だったんですよ」

今だに服に付いたマーフィーの毛が取れてない。ぱたぱたと毛を払おうとすると、谷原さんが子犬のような目を向けてきた。

「ごめんなさいねぇ、マーフィー一応メスだから許してあげて」

「メスなのにマーフィー…？」

「母がそれだけエディ・マーフィーが好きってことなんだよ」

「はぁ…」

何か理屈がよく分かんないけど、とりあえずメス犬に対して変な声を出してしまった自分が恥ずかしくて恥ずかしくて、ぎゅっと目をつぶった。

―189―

「じゃあ俺帰るから」

そう言って谷原が彼女の部屋を後にしたのは深夜2時くらいだったと思う。話を聞いていると奴は携帯販売の仕事をしているらしく、明日は県外の量販店で仕事らしい。

俺の中で始めて谷原に対して申し訳なさを感じた。熱で俺自身が弱ってるせいもあると思うが…。

彼女は台所で食器を洗っている。俺のために作ってくれたお粥は、俺の腹も気持ちもいっぱいにさせてくれた。

…俺はこんなに涙もろかったっけ?そんなことを思いながら寝返りを打つ。

するとぱたぱたと足音が聞こえ、肩まで毛布が被せられる。

「ほら、ちゃんと被ってないと風邪引きますよ?」

もう引いてるか、と言いながら彼女がやわらかい笑顔を浮かべた。俺の胸をそっと叩いてくれるリズムが心地良い。

彼女は俺と目が合った後、にっこりと笑ってここから立ち去ろうとした。

彼女がこの場からいなくなる。

ただそれだけのことなのに、俺の手が届かないようなどこかに行ってしまいそうで。

同じ空間にいるはずなのに、彼女がとても遠く感じて。

モウニドトオレノモトニカエッテコナイ…。

「まっ…」

とっさに彼女の手首を掴む。彼女はびっくりしたように振り返った。

視界がぼやけてどんな顔をしているのかはわからない。

「頼む…もう俺の傍から離れないでくれ…」

手首から手をずらし、そっと彼女の手を握る。

「どこにも行かないでくれ…」

それからの記憶はない。気付いたら朝だった。
昨日の熱っぽさはどこへやら、すっかり元気になった。大きく息を吸い込む。

ゆっくり上体を起こそうとすると、何かに引き止められるのを感じた。右手にある温かな感触。

ふと枕元に目をやると、彼女が俺の手を握ったまま床に座って寝ている。うつぶせになっているので、口元が腕で隠れててどんな表情をしているかはあまり確認できないが、少なくとも俺は涙が出て来そうなほど嬉しかった。

右側の肘で体を支えて彼女の方を向く。暖房をつけているとはいえ、一晩中俺の手を握って、ついには眠りに落ちてしまったのなら、風邪を引く可能性は高い。彼女にはベッドがちゃんとあるのに、俺がいるばっかりにこんな状態にさせてしまって申し訳ないと思う。

器用に自分が借りていた毛布を左手だけで彼女の肩にかける。かなり難しい作業だが、意地でもつないだ手を離したくない。

彼女の髪をそっと撫でる。相変わらずさらさらした綺麗な髪。顔を覗き込めば長いまつげをつけた瞼が閉じられている。そして俺の右手にある彼女の手。

彼女のすべてを、もう一度俺だけのものにしたい。まだ教習生だった頃からずっと想い続けていた彼女を、俺のものにしたい。

5年前は許されないと思っていた恋。だからどんなに彼女を想っても連絡を取ってはいけなかった。それは、彼女の将来を想うが故…。

だがそれは間違っていた。

再会したとき、彼女は俺が忘れられなかったと言った。俺もまた、そうだった。そして再び出会い、惹かれた。

これは偶然ではない、必然。

それを噛み締めるかのようにそっと彼女の髪の毛に唇を落とした。

―190―

彼はあれからほとんど…いや、何も喋らず、起きてるのか寝てるのかわからない状態が続いていた。

谷原さんは明日県外で仕事があるというのに、夜中まで彼の看病をしてくれた。まあそうしてくれたのも私がお風呂を貸してあげたおかげだと言っても過言ではないけど…。

というか、谷原さんは朝にかなり弱いのに、そこまでしてくれるからには帰ったらすぐ寝て起きて出来る状態にしてあげるのが礼儀な気がする。

でもそれよりも、話を聞く限りだと彼に嫉妬心丸出しなのに、こんなに面倒を見てくれるのが気になる。敵に塩を送るってやつなのかな？

あれこれ考えてる私の肩を谷原さんが軽く叩き、やわらかい笑顔を向けてきた。

「じゃあ俺帰るから」

「あ、遅くまですみません…明日県外なのに…しかもろくなおもてなし出来なくて」

「明日寝坊しないようにモーニングコールくれたら嬉しいな」

正直私もそんなに朝に強くない。でもここまでしてくれた谷原さんのお願いを聞かないわけにはいかない。

「ぐ…わかりました…」

谷原さんは私の頭をそっと撫で、何も言わずに玄関へ向かった。私もそのあとをついていくように見送りに行く。

靴を履き終わったあと真剣な顔つきでくるっと振り向かれた。めったに見ない真顔についどきっとしてしまう。

そして次の瞬間、私の唇に柔らかいものが触れた。最初は触れるだけのキスが、次第に深くなっていく。

谷原さんの左腕は私の腰に回され、右手が私の手に絡められている。

この前のようにふ、と変な声が漏れないように気を付けつつ、万が一のことも考えて離れたあとは俯いたままにした。そんな私の耳元で谷原さんが囁く。

「…そろそろ…あなたの返事がほしい…」

色気を帯びた声でそんなことを言われても、余計頭がパニックになるだけ。谷原さんは明らかに動揺している私の頬にそっと手を添えた。

「じゃあおやすみ」

そう言って谷原さんは笑顔で去って行った。

彼に見られていたんじゃないかと不安に思って部屋の方を見ると、壁側を向いて横になっていた。部屋は玄関から少し離れてて、玄関は台所に近いのでごまかしが効くといえばそうだ。

…私、今何を考えた…？ごまかし？何のための？

あわててその考えを振り払って彼の元に行った。目をつぶっているので寝ているみたい。

「ほら、ちゃんと被ってないと風邪引きますよ？…もう引いてるか」

一人漫才みたいにツッコんで恥ずかしかったので、彼の肩まで毛布をそっと被せた。

すると、彼がうっすらと目を開けてこちら側に首を傾けた。起こしちゃったかな、と思い、その場を立ち去ろうとした。

その瞬間、手首を引っ張られた。驚いて振り返ると彼の目から涙が流れていた。

振りほどこうと思えば出来る力の弱さ、かすかに震えている手、そして何より今まで見たことのなかった涙に胸が詰まる。

「頼む…もう俺の傍から離れないでくれ…」

こんな思いをさせているのは誰…？

「どこにも行かないでくれ…」

彼の声ととめどなく静かに流れる涙に胸が詰まる。

思えば私は、彼と連絡を取らなくなってから自然消滅の原因を心のどこかで彼に擦り付けていた。

でもそれは違う。

彼にあんな思いをさせたのは他の誰でもない私。なのに…なのに彼は今でも私のことを想ってくれている。

…私はそれでも、まだあなたのことを想うことは出来ますか？

自然とこぼれてくる涙を拭うことなくそっと彼の手を握る。彼の手の温かさが今の私には切なかった。

―191―

懐かしい、この感じ。5年前はいっつもこんなことしてたっけ。

そんなことを思いながら彼女の髪をそっと撫でた。

最初は意地でも手を離さなかった俺だが、やっぱり彼女が体の芯から冷えてしまうのは耐えれなくて、彼女を抱えあげてベッドへ寝かせた。そして、もう一度彼女の手を握った。

下心があるといわれてしまえばそれで終わりだが、とりあえず彼女の横に寝そべって身体を抱き寄せた。今だからこそ彼女のぬくもりを感じるが、布団に入れたばっかりの時はあまりの冷たさにびっくりし、彼女が寝ているのにもかかわらず強く抱き締めてしまった。

今自分の腕の中にいる女性。目の前に広がる温かな匂い。

これこそ俺がずっと手にしたいと思っていたものだ。

彼女の額に軽く口付けをした。

それから二時間ほど過ぎただろうか、朝9時を過ぎた頃腕の中の小動物がもそもそと動き出した。

「ぅ…ん…」

寒さのせいなのか、疲労感のせいなのか、眉間に少ししわを寄せただけで彼女はなかなか起きない。あの頃と変わらない様子に目を細め、彼女をそっと抱き締めた。

そして、彼女がうっすらと目を開けてから閉じようとしたその時、これでもかと言わんばかりに目を大きく見開いた。

「おはよ」

彼女は左手を軽く握って口元にあて、目をぱちぱちさせたまま何も喋らない。そんな彼女の額にこつんと俺の頭をくっつける。

「おはよ」

「…おはよう…ございます…」

少し強ばっている彼女の身体。それに気付いた俺は少し距離を離し

た。

「別にそんなに身構えなくても良いじゃん。手出すわけじゃないんだし」

「そうかもしれないですけど…」

「何、いつ以来なの？男と寝るの」

つくづく自分は嫌な奴だと思う。『もしかして』と考えただけでも嫌な気分になり、それが谷原ならなおさら嫌悪感が強くなる。

だからといって彼女にこんなこと言って良いわけがないのに。

だが彼女はそんなこと気にする様子もなく、顔を真っ赤にしていつものごとく猛反論してきた。

「っ！関係ないでしょそんなの！」

「関係あるし。もしかして薫…」

今一番知りたくて、今一番知りたくない事。一夜の過ちだとしても、谷原に抱かれたことがあるのか？

でも彼女から返ってきた言葉はまったく予想外のものだった。

「どっ、どうせ新一さん以外と寝たことなんてないですよ！」

自分の右腕を枕にしたまま、彼女の仕草と同じように目をぱちぱちさせる。というかまず瞬きも出来ているだろうか？目が点とはまさにこのことな気がする。

「ごめんなさいね、淋しい女で！」

別にそんなこと聞いたんじゃないのに…彼女は指を絡めていた手を振りほどき、拗ねたように寝返りを打った。

彼女の仕草についふっと笑ってしまう。

あれだけ男に背中を見せるなよって教えてやったのに…。

「ひゃあっ！」

彼女が普段より高い声をあげた。彼女の手は腰に回した俺の両腕に添えられている。

「…誘ってんの？」

「ち、が…！」

「違うの？そりゃ残念だ」

そう言って彼女の髪をくしゃくしゃ、とした。彼女は相変わらずむあー、と言って手櫛で髪を整える。

今、この機会を逃してしまえばもう彼女とは結ばれない。そんな気さえして少し焦りを覚えた朝…。

―192―

元々冷え性の私にとって、彼の手はすごく温かかった。

私の全てを包んでくれるような温かさ。私はそれが大好きだった。

でも私はいまだにどっち付かずの態度を取り、彼も谷原さんも困らせている。それに、彼に全ての責任を擦り付けていたのも私。

私には彼を思う資格は、ない。

それをわかっていながら彼の手を離すことが出来なかった。

自己中とかわがままとか、そんな自分に嫌気がさしながらも、彼の手をずっと握っていたいと思う。

「ぅ…ん…」

冷たい空気が肌に触れた。いつの間に寝てたんだろう。

ぼんやりとした頭でふと顔を上げると、目の前には彼の顔がある。

これはいつも見る朝の光景…なはずがない。これでもかと言わんばかりに目を見開いてしまう。

「おはよ」

彼はただでさえ至近距離にいるのに、その顔をさらに近付けてきた。

「おはよ」

「…おはよう…ございます…」

ただただびっくりして他の言葉が出ない。何で彼が私の横で寝てるの？ていうかいつの間に私はベッドで寝てたの？

…もしかして私は、彼に何かされた…？いや、これから…？

変なことばっかり考えてしまって、上手く情報処理が出来ない。

彼は顔を離して私の目をじっと見た。

「別にそんなに身構えなくても良いじゃん。手出すわけじゃないんだし」

「そうかもしれないですけど…」

「何、いつ以来なの？男と寝るの」

「っ！関係ないでしょそんなの！」

今聞くべきはそれか！心の中で全力ツッコミをしてしまう。ただでさえ頭がうまく働かないのに、余計に真っ白になってしまう。

「関係あるし。もしかして薫…」

自意識過剰か。そうなのか。

彼と違って私は別にルックスが良いわけじゃないから、谷原さんみたいな物好きがかなり少ない。

だけど、男性経験が少ないのは恥ずべきことじゃないはずだ。自分を大切にしている証！

そう思っているはずなのにやたらとムキになってしまう。

「どっ、どうせ新一さん以外と寝たことなんてないですよ！ごめんなさいね、淋しい女で！」

一人でわめいてる恥ずかしさ、内容のくだらなさに自分でもわけがわからなくなって、とりあえず変になってるだろう私の顔を隠すために寝返りを打った。

彼に何て思われてるんだろう。

そんなことを考えるより早く、彼の手が私の腰を捕らえた。彼の方へ腰からぐっと引き寄せられる。

「ひゃあっ！」

「誘ってんの？」

一気に顔が熱くなるのがわかる。耳元で囁くなんて卑怯だ。

「ち、が…！」

「違うの？そりゃ残念だ」

彼はそう言って私の髪をくしゃくしゃにした。一生懸命髪を直していると後ろからさり気なく笑い声が聞こえた。

嬉しくて、苦しくて、愛しくて、切ない。これは谷原さんには抱いたことのない感情…。

―193―

彼女と少し距離を取ったとはいえ、この手から放すことなんて出来るはずもない。

彼女は一生懸命身を捩って抜け出そうとしているが、ただでさえ非力なのに男の力に勝てるはずがない。

「は、な…して…！」

「何で？そんなに俺が嫌い？」

「そうじゃないですけど…！」

ちゃんと否定してくれるのが嬉しい。

実際彼女は本気で嫌がってるわけではないと思う。ドM加減が相変わらず変わってなさそうだからというのもあるが、基本彼女がリアルに嫌だと思ってるなら手段は選ばないはずだ。例えば鍋で頭殴るとか、警察に通報するとか。

それすらもしないってことは、やりすぎなければ問題ないってことだ。昔俺が彼女に迫ったときも、ほとんどが「やだ」とかから始まった。

そんなことを思い出して俺は変態か、と心の中で突っ込む。

それはいいや、とにかく彼女の身体を再び引き寄せ、彼女を仰向けにして両手首を掴んだ。

…いかにも無理矢理襲ってます的な感じがあって自分でもちょっと嫌にはなるが…。

しかし彼女は嫌な顔をしたり目をそらしたりするどころか、切なげな目で真っすぐと俺を見ている。少し頬が上気しているみたいだ。

「…どうした？」

「ううん…」

彼女が首を振って目線だけをそらした。

「新一さんだなって思って…」

彼女を抱きたいという衝動。それに強く駆られて彼女の唇を強引に奪った。

いい歳したおっさんなのに、彼女をめちゃくちゃにしてしまいたい

という強い欲望のままに彼女の首筋に唇を移す。

「やっ…」

「谷原さんちの犬に舐められた時と同じ反応するんだ」

「ば…っか…！あれは…！」

そう言いながら彼女から甘い息が漏れる。解放した彼女の手が俺の髪をぐしゃぐしゃに掻き撫でた。

「薫…」

気持ちが高揚し、自分の息もが上がってくるのがわかる。

好きだ。好きだ。好きだ。
それ以外に何と伝えたら良い？

「…愛してるよ…」

ありきたりな言葉しか言えない。でもこれが彼女への俺の等身大の想い。

「俺には薫しかいない…今までも、これからも…」

彼女の胸元に顔を埋めているので彼女の表情は確認出来ないが、彼女の口から甘い声が絶え間なく聞こえ出した。

「しん…い…」

切なげに彼女が俺の名前を呼んだ。ただそれだけなのに、気持ちは高ぶっていく一方だ。

「薫…愛してるよ…」

たとえ彼女が俺を想っていなかったとしても。

―194―

一旦彼と距離が開いたみたいで一安心するのも束の間、彼が後ろから抱き締めてきた。何とか解放されようと頑張ってみても、彼の力には到底適わない。

「は、な…して…！」

「何で？そんなに俺が嫌い？」

「そうじゃないですけど…！」

顔がどんどん熱くなってくる。

彼はふっと笑ったあと、強引に私の身体を上向きにさせ、顔の横くらいで両手首を押さえた。

ふと顔を上げると、自分の目の先には端正な顔立ちをした彼が私をじっと見つめ、その姿に目を奪われてしまう。

今自分の上に覆い被さっている人は、昔恋い焦がれていた人。私に愛することを教えてくれた人。そして、今までずっと忘れられなかった人…。

「…どうした？」

彼が囁くように尋ねた。その声に心地良さと安心感を覚える。

「ううん…新一さんだなって思って…」

その瞬間、彼に口付けされた。どこか乱暴で、でも優しさも感じるキス。

…このぬくもりはいつ以来だろう?気持ちが高揚してくるのがわかる。

彼の唇が離れたと思いきや、今度は私の首筋へとその場所を移した。思わず声が出てしまう。

「やっ…」

「谷原さんちの犬に舐められた時と同じ反応するんだ」

「ば…っか…!あれは…!」

いじわるだ。いじわるだ。

でもそんな彼がずっと好きだった…。

ようやく手が解放されたかと思うと、今度は彼の手が身体のラインをなぞりはじめた。つい息が漏れてしまう。

「薫…愛してるよ…」

彼が耳元で愛の言葉を囁いてくれている。5年前は当たり前のこの光景が、今では夢でしか見ない。
でも、今は目の前にある。

彼の手がある一点を捕らえ、彼の手からゆっくりと刺激が与えられる。

「俺には薫しかいない…今までも、これからも…」

「しん…い…」

息が詰まりそう。目も潤んできた気がする。
彼の名前をこうやって呼べる日が戻ってくるなんて、思ってもみなかった。

彼は甘い声で囁く。谷原さんとはまた違う、大人の色香を帯びた声で。

「薫…愛してるよ…」

私は……。

―195―

時間が経つのは早いもので、気付けば12時を回っていた。冬らしい温かでやわらかい陽射しが窓から降り注ぐ。

今自分の横には彼女が寄り添っている。彼女の髪をそっと撫で、額に口付けした。サラサラの髪の毛からは相変わらず良い匂いがする。

お互いに言葉はいらなかった。無言のまま数十分を過ごしているが、特に居心地の悪さを感じたりすることはない。あくまでも俺は、だが。

思えば数年前は指導員と教習生という関係だったのに、いつのまにやら恋人となり、別れてしまい、でも今こうやって抱き合っている。他の教員もこうやって紆余曲折して結ばれたのだろうか。

…教員？

「やっべ！」

あわててベッドから飛び起きた。今日は普通に考えて仕事がある。

なのに昼までこんな悠長に過ごしてしまった。
彼女もシーツを胸元にあてて身を起こす。
「どうしたんですか？」
「仕事のこと忘れてた！やべー…校長に怒られるわ…」
彼女がくすっと笑って俺の腕に手を添えた。
「昨日のうちに池田さんに連絡しました。熱が高かったから今日はもう仕事は無理だろうって…元気になっちゃってますけどね」
「焦ったー…」
再びぽすん、とベッドに横たわった。危うく無断欠勤になるとこだった…。
左手を目元にあてて軽く息を吐くと、隣から彼女の笑い声が聞こえてきた。
そっと彼女の手を取り、腕を引いて俺の上に横たえさせた。
「二人の時間を取るために電話してくれたの？」
「違いますよ」
あっさりそう告げて彼女が身を起こした。
「なんだ、残念」

「ていうか、もともとそうするように言ったのは谷原さんですよ？」

「は？」

意味がわからない。

俺を運んだり、看病したり、欠勤の電話を指示したり、奴は何を考えているのだろう。

俺が思ってる以上に谷原は良い奴かもしれない。いや、何か企んでるのかも…。

「そりゃ谷原さんに感謝しなきゃだな」

「ですよ。メールでもしときましょうか」

ひらひらと腕を振って携帯を取ろうとしていた彼女がぴたっと動きを止めた。

「どうしたの？」

「どうしよう…谷原さんにモーニングコールし忘れた…」

ぶっちゃけどうでもいい、俺にとっちゃそんな事。

ゆっくりと起き上がって、やたら挙動不振になっている彼女を抱き

締めた。

「もう昼だし大丈夫じゃない？」

「そうですけど…謝らないと」

「良いよそんなの」

そう言って再び彼女を仰向けに寝かせ、両手を絡めて握った。

「今は俺だけを見て…」

どちらともなく顔が近づき、そして唇が触れた。

―196―

彼に寄り添って頭を撫でられている。別にヨリを戻したわけでもないのに、何故か満たされている自分がいる。

絡められている手からの温もりが胸をいっぱいにした。顔を合わせているわけでも言葉を交わしているわけでもないのに、私は今確実に幸せを感じている。

彼氏でもない男に抱かれてこんな気持ちになるなんて、自分はどれだけ軽いんだろうと心の奥底では感じていても、それさえも覆ってしまう何かがある。

…もしこれが谷原さんだったら、私は同じように思うのかな…？

彼の腕の中にいるというのに、頭の中はどんどん谷原さんのことが広がっていった。

それと同時に広がる罪悪感。私は谷原さんを裏切ったんじゃないだろうか？

考えるのが苦しくなって目を閉じたその時、彼がいきなりがばっと

起き上がった。

「やっべ！」

「どうしたんですか？」

私も彼に遅れて身を起こした。彼は頭をがしがしと掻いている。

「仕事のこと忘れてた！やべー…校長に怒られるわ…」

ちょって前流れで谷原さん家に泊まったときの私の反応と一緒。それについ笑ってしまう。

「昨日のうちに池田さんに連絡しました。熱が高かったから今日はもう仕事は無理だろうって…元気になっちゃってますけどね」

彼は脱力してベッドに横になり、手で目元を隠した。

「焦ったー…」

横で笑っていると、彼が私の手を引いて私を彼の上に寝かせた。私の肩を彼の大きな手が包む。

「二人の時間を取るために電話してくれたの？」

「違いますよ」

「なんだ、残念」

「ていうか、もともとそうするように言ったのは谷原さんですよ？」

谷原さんの家に泊まったときに同じ事があったから、とは口が裂けても言えない。

そんなこと知らない彼はへー、と呟いた。

「そりゃ谷原さんに感謝しなきゃだな」

「ですよ。メールでもしときましょうか」

手を伸ばして携帯を取ろうとしたときに、不意に谷原さんの声が思い出される。

『モーニングコールお願いね』

しまった…！

気付いたら寝てしまっていたので、谷原さんが起きないといけない時間なんてとうの昔に過ぎている。

しかも12時を過ぎていても谷原さんはたぶんまだ休憩には入らない。リーダーとして働いている時は大体2時から3時くらいに休憩を取っている。今日は単独稼働じゃなくてイベント展開で、しかもリーダーだった気が…。

「どうしたの？」

「どうしよう…谷原さんにモーニングコールし忘れた…」

「もう昼だし大丈夫じゃない？」

「そうですけど…謝らないと」

「良いよそんなの」

良くない、と突っ込もうとしたのも束の間、彼が私を横にさせ、両手を握って覆いかぶさった。

「今は俺だけを見て…」

自然と唇が近づき、そして触れる。今はもう彼しか見えない…。

―197―

そして今度は昼の3時を回っていた。休暇以外の休みは実際初めてで、しかも普通の休暇の時もこんなに満たされるものはめったにない。

どうせならもう彼女をベッドから出さないつもりでいる。柔らかい髪をそっと撫でて微笑んでみせた。

「薫とこんな時間が過ごせて良かった」

「ん…？」

「いや、だってさ、ずっと会って話したいって思ってたから」

「ほとんど話してないですけどね」

弱々しい声で彼女が言った。何だかもう疲れて眠いのか、目蓋が若干閉じかかっている。

「疲れた？」

「う…ん…」

よしよしと彼女の頭を撫でる。彼女が目を閉じて体を俺の胸元にすり寄せた。彼女といるのはいつになっても飽きない…むしろ余計に

気持ちが高まるばっかり。

「…ねぇ」

彼女は俺の声に反応し、少し目を開けて俺を見上げた。あまりの可愛らしさに額に口付けをする。

「薫は？」

「むぁ…？」

「俺のこと…どう思う？」

彼女の目が徐々に大きく開いていく。俺は彼女の肩にそっと手を置いた。

「俺は薫が好きだ。今までも忘れたことなんてない」

彼女が少し俯いた。口元に手をあてている。

「別にやりたかっただけとかじゃない。年だから誰でも良かったとかとかでもない。
…本気で、好きなんだ」

忘れた事なんてあるはずがない、いつも俺の中に新鮮さをくれた彼女。初めて結婚まで考えた女性。
彼女には俺以外の奴から触れられて欲しくなんか、ない。

彼女はもう一回俺の胸元に額をくっつけた。彼女にそっと抱き締められる。

「私は…好きでもない男にやすやすと抱かれるほど軽いと思います？」

「…え？」

「だから…」

彼女がくすっと笑う。

「私は軽い女だと思います？」

「いや…そうじゃないけどさ、薫意外と非力だから男の腕力には到底適わないじゃん」

「何ですか、意外とって」

彼女の腕が俺から外され、代わりに繊細な指が胸元に添えられた。

「好きでもない人に襲われたら警察に通報しますよ」

「…それが谷原さんでも？」

二人の間に沈黙が流れる。
彼女からの反応がなくて、ついむっとしてしまう。何だ、この流れだと、同じことを谷原が先にしてたらアイツが彼女と結ばれることになってたってことか？
横になったまま彼女を更に引き寄せた。彼女がぴくんっと反応する。
「単刀直入に聞くけど、俺と谷原さんはどっちが選んでもらえるの？」
「あっ…！な、に…を…っ！」
彼女がまた身を捩った。今回もそう簡単に離すつもりはない。
「ねえ、俺のことどう思ってんの？教えて？」
「や…んっ！」
「ねえってば」
「わ…た、し…は…」
甘くなっていく彼女の声と目。俺はこの甘い蜜の中で過ごす権利はあるのだろうか？
彼女が震えるような息を吐いた。

「新一さん以外の人なんて見えません…今までも、これからも」

彼女の潤んだ瞳に吸い込まれていく。強引に彼女の唇を奪い、今までになく貪っていった。

「あ…っ！」

「薫…」

俺も薫以外見えない。今までも、これからも。

―198―

きゅう、と恥ずかしながらお腹が鳴る音が聞こえて来た。それもそのはず、朝ご飯も昼ご飯も食べないままこんな時間になってしまったんだから…。

彼が相変わらず壊れ物を扱うかのように、優しく私の頭を撫でた。

「薫とこんな時間が過ごせて良かった」

「ん…？」

「いや、だってさ、ずっと会って話したいって思ってたから」

彼の声がぼんやりと聞こえる。正直な所、今はただただ眠い。確かにお腹は空いてるけど、それよりも眠気が勝っていた。

それに、久しぶりにあれだけ声にならない声を発し続けてしまったから声もひどい。

「ほとんど話してないですけどね」

「疲れた？」

「う…ん…」

彼の温かな匂いと優しい手に包まれて、この上ない居心地の良さを感じた私は無意識のうちに彼の胸へ頬をすり寄せた。

私の頭を撫でていた彼の手がその時ぴたっと止まり、代わりにそっと私の頬に手を添えた。

「…ねぇ、薫は？」

「むぁ…？」

「俺のこと…どう思う？」

沈みかけていた意識が一気に上がってくる。時間が止まったかのように静寂が流れた。

「俺は薫が好きだ。今までも忘れたことなんてない。
別にやりたかっただけとかじゃない。年だから誰でも良かったとかとかでもない。
…本気で、好きなんだ」

わかる。わかってる、そんなこと。前もこの言葉をくれたときも、彼の想いが痛いほど伝わってきた。

なのに、私はそれを拒んだ。

恐かった。彼を想う気持ちが変わってないからこそ、もう一度彼と離れてしまうことがとても恐かった。だから、彼と距離を置くしかないと思っていた。

彼にすがりつくようにそっと抱きついた。

「私は…好きでもない男にやすやすと抱かれるほど軽いと思います？」

「…え？」

「だから…私は軽い女だと思います？」

正直恥ずかしさは隠せない。告白なんて経験ない私にとって、これが自分の気持ちを伝えるのに精一杯だ。

「いや…そうじゃないけどさ、薫意外と非力だから男の腕力には到底適わないじゃん」

「何ですか、意外とって…好きでもない人に襲われたら警察に通報しますよ」

「それが谷原さんでも？」

予想外の言葉にふと考えさせられる。これが谷原さんだったら…どうなってたんだろう。そして私は、谷原さんのことをどう思っているんだろう。

すると彼は少し不機嫌な顔をして私を胸元に引き寄せた。彼の手が脇を通って私の身体を掴む。

「単刀直入に聞くけど、俺と谷原さんはどっちが選んでもらえるの？」

「あっ…！な、に…を…っ！」

「ねえ、俺のことどう思ってんの？教えて？」

「や…んっ！」

「ねえってば」

頭が熱で真っ白になっていく。

「わ…た、し…は…」

答えなんて、もう何年も前から決まっていたはずなのに。不器用な

私は結局傷つけ、傷つけられることしか知らなかった。

「新一さん以外の人なんて見えません…今までも、これからも」

彼の動きが一瞬止まったが、次の瞬間には深い口付けをされていた。

彼の唇が首筋に、肩に、胸元に落ちてくる。

「あ…っ！」

「薫…」

長い長い一日は、まだ終わりを告げてはくれない。

―199―

思えば、彼女とこんな時間を過ごせるきっかけを作ってくれたのは池田ちゃんだ。感謝してもしきれないだろう。

あの時は池田ちゃんを恨めしく思ったが、きっとあのメールがなければ俺は彼女と距離を縮めることは出来なかったはずだ。

「内村さんもう体調大丈夫なんですか？」

朝礼が終わったあとに池田ちゃんが話し掛けてきた。

「おかげさまで。もうすっかり元気になったよ」

「良かったです」

そんな話をしながら指導員室に戻る。１時限を控えている俺たちは、教習の準備に取り掛かった。

「でも…びっくりしたんですよ」

「ん？」

「夜中に内村さんから電話が掛かってきたと思ったら、電話に出た

の香西さんだったんですもん」

ゆるみかけたネクタイを整えながら黙って耳を傾ける。

「すごく切羽詰まってたから…何があったのか心配でしたけど、熱が出ただけで良かったです」

「そんなに？」

「あまりに慌ててて、結局噂の谷原さんが説明してくれたんですよ。紳士的だったなー…うちの旦那とは大違い」

池田ちゃんが少し笑ったあと、くいっと制服の袖をひっぱってきた。

「どうしてまさかの3人勢揃いだったんですか？」

「あー…」

ちらっと時計を見ると、もうす教習時間が迫っている。館内には『まもなく教習が始まります。教習を受ける方は準備をしてください。』とアナウンスも流れていた。

「長くなるからまた後で」

「絶対ですよ？」

そう言って結局飲みに連れて行かれた。帰りはタクシーかな、なんて思いつつビールを口にする。

「へー…ドロドロじゃないですか」

「そう？」

「なんか…ドラマみたいな三角関係ですよ」

「気のせいじゃない？俺一般人だし」

池田ちゃんはグラスを机に置いて身を乗り出してきた。

「で？香西さんとはヨリ戻せそうなんですか？」

「まあ…ね」

池田ちゃんが物凄く嬉しそうな顔をした。そんな反応してもらえるなんて、こっちも嬉しい以外表現しようがない。

「お礼、楽しみにしてます」

「は？」

「誰のおかげと思ってるんですか？香西さんと飲みに行って、メールまで送ったの私ですよね？」

腕を組んで「いやー、我ながらいい仕事をした」と言って満足している。俺は思わず苦笑いした。

「いや、そりゃあもう大感謝です」

「ね！お礼、期待してますね」

今度こそいい報告を。それがきっと池田ちゃんへの最高の恩返しになるはずだ。

残る障害はあと二つ、谷原と俺の両親だ。

―200―

籠の中の鳥とは私のことを言うのかもしれない。

彼は今朝、結局私の家からそのまま出勤し、仕事のない私はひたすらベッドで横になっていた。

昨日目が覚めてからずっとベッドにいる。今日ようやく動いたものの、あまりに腰が痛くて結局ベッドへUターンしたのだ。

「せっかくの休暇が無駄になるじゃん…」

手をぱたぱたと動かし、枕元に置いておいた携帯を手に取る。そこにあったのは昨日の夜と今朝あった谷原さんからの着信。全部で5通ある。

メール画面を開くと、そこにある奇跡に思わず眉をひそめる。

彼からと谷原さんから。どちらも9時ちょうどに受信していた。

それぞれのメールを読むと、似てるようで似てない文章に目が点になる。

『大丈夫？起きれる？

今日の夜家行くから、ゆっくりしとけ！』

『おはよう。内村さんの体調戻った？
今日こそ家で二人の時間を過ごしたいんだけど…お邪魔していい？』

文脈的に優先しなきゃいけないのは間違いなく彼。人に断りなく家に来ること決定してるし…。

谷原さんは今日の展開終了時間が１９時だから…たぶん家に帰り着くのは２３時を回ってしまうだろう。それなら次の日も仕事がある谷原さんのために、会うのは火曜日の夜が良い。

メールをぽちぽちと打っていると、ちょうど谷原さんから着信があった。

「もしもし？」

『あ、谷原ですー』

ちらっと時計を見ると、もう2時過ぎだ。ぼちぼち休憩に入る頃なんだろう。

『大丈夫？電話も出ないしメールも返ってこないから心配で』

「す、みません！今目が覚めて…」

『昨日何してたの？』

言葉に詰まった。

何をしてた？彼と一緒にいた。それだけ。

…それだけ？なら谷原さんに説明出来るはずなのに。

「…熱、出しちゃって…寝込んでたんです」

『大丈夫？そう言われてみたら声ちょっと違うね。今日やっぱり家行くよ』

「だっ、大丈夫です！熱下がりましたし！」

『でも…』

「県外から戻って来るの時間かかるでしょうし、明日だって仕事あるでしょう？」

『迷惑なら行かない。でも俺は逢いたい…俺のわがままだから、俺の睡眠時間なんてどうでも良いよ』

会って話さなきゃ…もう谷原さんの傍にいれないことを。これ以上

谷原さんの想いを踏み躙ることなんて出来ない。

「…火曜の夜に…お会い出来ませんか？」

『火曜？今のところ大丈夫だけど…』

「じゃあ仕事が終わったら…」

『俺が迎えに行くから』

谷原さんの優しい声に胸が締め付けられる。

こんな素敵な人は他にいない。才色兼備、若くて、仕事に真摯で、ユーモア溢れてて、料理も上手くて、絵も上手で、どんな人に対しても優しい。これぞ世間の女性の好きなタイプにドストライクの人で、正直彼の方がいろんな点で劣っているだろう。

それでも、私は彼が好き。

もう隠せない。もう逃げれない。私には最初から彼しかいなかったんだ。

「その時に…谷原さんに、お伝えしたいことがあります」

もう私は、自分の気持ちに目を背けたりしない。

―201―

実はこっそり彼女の家の鍵を持って出た。仕事帰りに実費でスペアを作り、何事もなかったかのようにして彼女の家へ向かった。

『俺と付き合って欲しい…今度はちゃんと、結婚を前提として』

これをちゃんと言えるかが今後に関わってくる。結局まだそれらしいことを言えてないから、ここが正念場だ。

軽く深呼吸をし、鍵を開けた。そう、あくまでも自然に…。

…なんか空き巣みたいだな…。つい苦笑してしまう。

「ただいま」

そう言って彼女の家に上がり、部屋へと向かった。ドアを開けると横になったままの彼女がびっくりしたような顔をしていた。

「な、んで…?鍵かけたはず…」

「あ、ごめん。これ」

そう言ってスペアを見せた。彼女はさらにびっくりした顔をしている。

「ちょ、何勝手に人の鍵持ち出してんですか！」

「これ薫のじゃないよ、俺の」

あからさまに意味がわからないという顔をした彼女のもとへ行き、ベッドに腰掛けた。

「スペア作ったの」

「…は？何で…」

「何でって…」

彼女の頬にそっと触れる。ずっと布団の中にいて暖まっているらしい、俺の寒さで冷えきった手をすぐに温かくしてくれるようなぬくもりだった。

「俺たち恋人同士だからだよ」

やっぱりというか、簡単に『そうですね』とはいかなかった。はぁ？と言うような顔をした彼女は、可愛いというより…なんか面白い。そんなこと言ったら怒られるだろうから言わないけど。

「いつ私たちが付き合うことになったんですか？」

「え、あそこまでしといて今さら引き返そうとするの？」

「ぐ…脅しですか」

「別にそうじゃないけどさ」

とかそうじゃなくて。言いたいことはそんなんじゃない。

くしゃっと彼女の髪を撫でた。彼女は昔から頭を撫でられるのに弱い。少し恥ずかしそうにしながら大人しくなる。

「あのさ…俺と付き合って欲しいんだ」

彼女は何も言わず、大きくて澄んだ瞳を俺に向けた。

心拍数が上がる。今からプロポーズをするも同然なんだ。奮い立たせるように自分の膝に置いている片方の手をぐっと握った。

「今度はちゃんと、結婚を前提に付き合って欲しい。俺にはもう…お前しかいないんだ」

彼女は少し辛そうにしながら上体を起こした。そっと彼女の肩を抱く。

すると、彼女が不意にぎゅっと抱きついてきた。もしかしたら今までの中で一番しっかりと抱き締められているかもしれない。

「私は…今まで自分の気持ちに嘘をついてきました」

ふと考えてしまった。このくだりだと…もう嘘はつけません、谷原さんの所に…いやいや、さすがにないだろ。

今まで自分の気持ちに嘘をついてきました、だろ?その次に来るのは…新一さんと良い雰囲気出してましたけど、もうそれには耐えられ…ちょっと待て!

「ちょっと」

彼女に腕をぱしっと叩かれた。

「聞いてます?」

「ごめんごめん」

「もぉー…いいです」

思わず笑ってしまう。あの頃と一緒だ…だからきっと、俺たちはうまくいくはずだ。

「そんなに怒んなくても良いじゃん」

「もう二度と言いません」

「何でよ」

「…恥ずかしいから」

顔を綻ばせて彼女の頭をそっと撫でた。俺の小動物は少し顔を赤らめてもう一度黙った。

「それは…自惚れていいの？」

可愛げに彼女が小さく頷いた。

―202―

実際谷原さんに会った時、テンパって結局何も言えませんでした、なオチになりそうで正直不安だったりする。

谷原さんはすごく素敵な人だ。私なんかにはもったいないくらい。だから早く私の気持ちを伝え、少しでも早く幸せになって欲しいと思う。

…何様だろう、私。

色々考えていると、玄関の方から物音が聞こえた。そして、すでに部屋のドアのガラスには人影が写っている。

不法侵入者だ。いまいち身体が自由に動かない以上、襲われてしまえばもう終わりだ。布団をぎゅっと握る。

ガチャン、というドアが開く音とともに目の前に現れたのは彼だった。一瞬身体から力が抜ける。

それでも、だ。私の記憶が正しければ、彼が家を出る時は鍵を掛けたはずだった。もしかして鍵あけたまま一日過ごしてた…？

「な、んで…？鍵かけたはず…」

「あ、ごめん。これ」

ちゃりん、と彼が家の鍵を見せた。つまり、私の鍵を我が物顔で持って行ったということ。

「ちょ、何勝手に人の鍵持ち出してんですか！」

「これ薫のじゃないよ、俺の。スペア作ったの」

そう言って彼はベッドに腰掛けた。二人分の重みでぎし、と音がする。

「…は？何で…」

「何でって、俺たち恋人同士だからだよ」

状況が状況なだけに、すんなりと『そうですね』という単語は出てこなかった。好きだー、とか、愛してるよー、とか、そんな言葉は貰ってはいたけど、それはあくまでベッドの上でだったし、実際に付き合ってくださいと言ったことも言われたこともない。

「…いつ私たちが付き合うことになったんですか？」

「え、あそこまでしといて今さら引き返そうとするの？」

「ぐ…」

何なんだ。何を意図してるのかわからない。仕方なく付き合うのか、それとも好意を持ってくれてるのか…。

「脅しですか」

「別にそうじゃないけどさ」

そう言って私の頭を撫でた。

O型女子が頭を撫でられるのに弱いというのはごもっともで、嬉しいというか、恥ずかしいというか、甘えたくなるというか…とにかく撫でられるのにはホントに弱い。

「あのさ…俺と付き合って欲しいんだ」

彼は少し息を吐いた後、こう言った。頭に触れている手が少し震えている気がする。

「今度はちゃんと、結婚を前提に付き合って欲しい。俺にはもう…お前しかいないんだ」

そうだ。きっと私は、何年も前からこの言葉が欲しかったんだ。嬉しくて嬉しくて、彼の胸に飛び込むようにして彼をぎゅっと抱き締

めた。

「私は…今まで自分の気持ちに嘘をついてきました。ホントはずっと一緒に居たかったのに、傍にいちゃいけないって逃げてました」

今まで何も言えなかった事が嘘のようにぽろぽろと出て来る。

「怖かったから…こんなに好きでいてくれる人から『もう好きじゃない』って言われるのが怖かったから、ずっと逃げてたんです。でも…私はずっと新一さんが好きでした。もう他の人となんて一緒になれません」

ふと顔を上げると、彼が何か考えてるような顔をしていた。昔からだいたいこんな顔してるときは話を聞いてない。

「ちょっと」

彼の腕を軽く叩くと、彼がはっとしてこっちを向いた。

「聞いてます？」

「ごめんごめん」

「もぉー…いいです」

あんなに勇気を出して自分の想いを伝えたのに、全然聞いてないな

んて最悪だ。一人で乙女みたいになってた自分が恥ずかしい。

彼は悪びれる様子もなく、笑いながら私の頭をぽんぽんと叩いた。

「そんなに怒んなくても良いじゃん」

「もう二度と言いません」

「何でよ」

「…恥ずかしいから」

もう一度、彼の手が私の頭を撫でた。何だか素直に言うことを聞いてしまいそうになる。

「それは…自惚れていいの？」

彼の言葉に正直に頷いた。彼には言葉が届いてなくても、気持ちはしっかり届いているみたいだ。

―203―

やわらかな日差しが俺を照らした。眩しさに眉間にしわを寄せながら起き上がる。

夢だったんだ…そうだよな、こんな簡単に彼女とヨリ戻せる訳がない。

はぁっと溜め息を吐き、ベッドから出る。そこに広がる光景に思わず固まってしまった。

どう見ても彼女の部屋。雑然とした俺の部屋とは似ても似つかない。

そして、テーブルには綺麗な字で書かれたメモが置かれている。

『おはようございます☆
今から仕事に行ってきます。朝ご飯は冷蔵庫にあるので温めて食べて下さい。あと家にいるなり帰るなり好きにして下さい。』

突っ込みどころ満載だ。
まず良い年して星マーク使うってどうなんだ。しかも『好きにして下さい』の文とかぶっちゃけ可愛げなさすぎ。

と、ここで我に返った。そうか、あれは夢じゃなかったんだ。この年になっても恋い焦がれ続けた彼女とようやく一緒になれたんだ…今だに実感が湧かない。

結果いつも同じ結論になるが、こうなるんだったら最初から彼女を手放さなければ良かった。そうすればきっと、美幸たちが言ってたような家族像がすでに出来上がってたはずだ。

まあ今あれこれ言ったって仕方がない。台所へと向かい、冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中まで綺麗に整頓されている。性格出てるなあ…と思いつつラップのかけられた皿を取り出した。が、中身を見て眉間にしわを寄せてしまう。

朝からカレー…確かに俺は今日仕事はないが、だからってこれは胃がもたれそうだ。

苦笑いして携帯を手に取る。まだ１０時になってないから仕事は始まってないはず。

しばらくコールした後、彼女がようやく電話に出た。

『もしもしー？』

「おはよ」

『おはようございます』

「カレーって意味わかんないんだけど」

『ん？朝ご飯ですか？』

それ以外に何があるんだ。思わず突っ込んでしまう。

「朝だからってボケないで貰える？」

『ボケてません！』

「そんなにムキにならなくて良いじゃん」

『むぅ…しかも意味わかんないのが意味わかりません。朝カレー知らないんですか？』

「知ってるけど…何かがっつりじゃない？」

むーん、と電話の向こうから声がした。思わず笑ってしまう。

『もう！そんなに言うなら食べなくていいです』

「怒るなって。有り難くいただきます」

『そりゃどうも』

可愛いなぁ…俺の期待どおりの反応をしてくれる彼女が可愛くてたまらない。またあの楽しい毎日が帰って来たんだ。

「お礼はまた家でね」

相変わらずよくわかってない彼女がはあ、と言った。

―204―

珍しく彼の方がまだ寝ている。まあ…昨日仕事だったし、夜遅かったし。私は今日休みの彼と違って仕事があるから意地でも起きなきゃいけない。

実家から送られてきた圧力鍋を使って朝からカレーを作った。こうしておけばわざわざ帰ってきてから作る必要もないし、何より時間が経つから味に深みが出る。彼の分を少し取り分けて、今度は朝でも食べやすいようにと人手間かけて朝カレーを作った。喜んでくれるかな…そう思うだけでも笑顔が出来る。

メモを残して家を出た。

今は完全に週末が休みだけど、もう少ししたら営業部の方で販売所のセールス担当になりそうだ。そうしたら…私は確か火・水が休みになる。

彼は大体休校日の月曜以外は火曜に休暇を取っているので、火曜の休みがかぶるかもしれない。そうすればきっと、二人の時間がもっともっと取れるだろう。

車から降りたとき、ちょうど彼から着信があった。噂をすればなんとやら…思わず笑ってしまう。

「もしもしー？」

『おはよ』

彼のやさしい声が心地よい。自然と笑顔になる。

「おはようございます」

『カレーって意味わかんないんだけど』

「…ん？朝ご飯ですか？」

『朝だからってボケないで貰える？』

前言撤回。意地悪に少し低めの声で言われてしまう。昔思ったとおり…何年経っても私と彼の関係性が変わったりすることはない。きっとこれからも、ひたすらいじられ続けるんだろうな、とぼんやり思う。

「ボケてません！」

『そんなにムキにならなくて良いじゃん』

誰のせいだ誰の。そうは思っても口には出さない。話したら最後、彼の思うツボだ。

「むぅ…しかも意味わかんないのが意味わかりません。朝カレー知らないんですか？」

『知ってるけど…何かがっつりじゃない？』

「むーん…」

出だしでコケたのかな？それにしても初っぱなから気に入ってもらえないなんて…早起きして頑張っただけに正直ショックだ。

それを知らない彼は電話の向こうで笑いだした。ついムキになってしまう。

「もう！そんなに言うなら食べなくていいです」

『怒るなって。有り難くいただきます』

「そりゃどうも」

『お礼はまた家でね』

「はあ…」

よくわからないけど、とりあえず今日は直帰なんだな、と思う。電話を切ってオフィスに入ろうとすると、また電話が掛かってきた。ディスプレイに表示された名前にドキッとしてしまう。

「もしもし…」

『おはようございますー、谷原です』

「おはようございます」

『ごめん、火曜が都合悪くなってさ…急だけど今日とか無理?』

「今日…ですか…?」

この先待ち構えてることなんて何も知らずに…。

―205―

昼過ぎには曇り空が広がり、雪がちらつきはじめた。毎年雪を見るたびに彼女の姿を思い出していた。

『はー…めっちゃ寒い…』

『冬ですもんね』

『香西さんのせいで雪降ってるしね』

『関係ないです！』

『他の生徒の教習の時は雪降ってなかったのになー』

『嘘ばっかり！朝から降ってたじゃないですか！』

5年前のあのやりとり。雪を見るたびに思い出していた白いロングマフラー姿の女性。

あの頃のあどけなさは、もうない。

その代わりに俺の傍にいるのはすっかり大人の女性になった愛しい人。あの頃の彼女を未練がましく思い出す必要もない。

…今頃彼女は外に出てるのかもな。そう思いながら外の景色を眺めた。

ちょうどその時だった。彼女から電話が掛かってきた。時間的に昼休みなんだろう。

「もしもし、どうした？」

『あ、今日帰るの遅くなるかもしれません』

「え？何で？」

『えっと…』

もごもごと濁した後、意を決したようにはっきりとした口調で言った。

『今日谷原さんと会うことになりました』

「…は？」

俺の予想だと、たぶん二人っきりで。束縛するタイプならこの地点でアウトではあるが。

『で、今日会ってちゃんとお断りして、これからもご友人としてお付き合いいただければって伝えてきます』

…つまり、俺が知らない間に告白はされていたらしい。彼女の年齢とか状況とか、考えただけでも谷原と二人で会うのは危険な気がする。

「…大丈夫なわけ？」

『だぁーいじょうぶですよ』

「俺ついて行こうか？」

嘘。ついて行きたい。別に他の男と二人で会う分は何も問題ないが、相手が谷原となると話は別だ。不安で不安でたまらなくなる。

『大丈夫ですって、変なこと言ったりしません』

「あのさ、俺が言いたいのは…」

『え？』

相変わらず無防備な彼女。最悪襲われるという事態はどうも想定できないらしい。彼女を狙っている男なんて谷原以外にもいるだろうのに、それを信じようとしない…だからこそ危なっかしい。

「…っ、何でもない…」

『何ですかそれ…とにかく！今日ちゃんと話してきます』

「気を付けて来いよ」

『気を付けるも何も…危険地帯に行くわけでもないのに』

だから…！昔から何回説明したらわかるんだというくらい納得してくれない。もう諦めるしかないんだろう。

「話変わるけどさ、今外にいる？」

『そんなことあるわけないじゃないですか。今日どれだけ寒いと思ってるんですか？』

「何だ、雪降ってるからまたどっかふらついてんのかと思った」

『関係ないです！』

そう返ってくるかと思いきや、彼女が喋らなくなった。余計なことを言ってしまったのか少し不安になる。

「薫？」

『あ、いや、覚えててくれてたんだなって…』

えへへ、と彼女が小さく笑った。今この場にいれば可愛がってやったのに…残念だ。ふっと笑ってしまう。

「俺が今まで薫のこと忘れたことないって言ったの覚えてる？」

『…はあ』

「だから教習中の会話も含めて、ちゃんと全部覚えてる」

『ありがとうございます…』

「お前が外出ると雪ひどくなるんだから、風邪引かないように暖かくしろよ」

『はい』

この時、俺の選択が間違っていたことを、俺も彼女も気付いていなかった。

―206―

昼休みに入って一息つく。窓の外を見れば雪が舞っていた。

『香西さんは雪景色が似合うよね』

『そうですか？』

『何ていうか…雪女みたい』

『何ですかそれ！』

雪を見るたびに思い出す光景。それに眉をひそめたこともあった。あの時は届くことがないと思い込んでいた想い…それが報われた今となっては雪も大切な思い出の一つだ。

携帯を開いて着信履歴を見て、ぎゅっと目を瞑ったままぱたんと閉じた。今日私には重要任務がある。谷原さんに会うという重要な任務が…。

内心どうしようと悩みつつ、たぶん家で私の帰りを待ってるだろう

彼に電話を掛けた。数回コールが鳴った後、彼が電話に出た。

『もしもし、どうした？』

何故だか手汗がひどい。心拍数もあがってきた気がする。

「あ…今日帰るの遅くなるかもしれません」

『え？何で？』

「え、っと…その…」

別にやましい理由はどこにもない。だからこそここは彼の理解を求めるのが正解だ。

「今日谷原さんと会うことになりました」

『は？』

「で、今日会ってちゃんとお断りして、これからもご友人としてお付き合いいただければって伝えてきます」

彼からの返答には少し時間がかかった。

『大丈夫なわけ？』

「だぁーいじょうぶですよ」

『俺ついて行こうか？』

何でよ、と思わず突っ込みそうになる。この年になってまだ同伴が必要と思われるくらい頼りないのかな…。

「大丈夫ですって、変なこと言ったりしません」

『あのさ、俺が言いたいのは…』

「え？」

彼が数秒黙って盛大な溜め息を吐いた。何か変なことでも言っちゃったんだろうか。

『…何でもない…』

「何ですかそれ…とにかく！今日ちゃんと話してきます」

『気を付けて来いよ』

「気を付けるも何も…危険地帯に行くわけでもないのに」

…私どんな類の心配されてるんだろう…。私だって立派な大人なんだから、変なことは言わないし失礼なことだってしない。

そう言おうとして、今までの自分を振り返ってみて口をつぐむ。

彼は軽く息を吐いて話し掛けてきた。

『話変わるけどさ、今外にいる？』

「そんなことあるわけないじゃないですか。今日どれだけ寒いと思ってるんですか？」

外に出たら刺さるように寒い。子供と違って大人は風の子じゃないんだから…そう考えると、いよいよ年だなあと思ってしまう。

彼は電話の向こうで少し笑っていた。

『何だ、雪降ってるからまたどっかふらついてんのかと思った』

『私が外に出た時に限って雪が降るんです』

この話をしたのは何年前だろう？

彼と付き合っていたのも春から夏にかけてで、恋人として過ごす冬は実際初めてだ。教習生の頃の会話を今でも覚えててくれたことが、言葉では表せないほど嬉しかった。

『薫？』

「あ、いや…覚えててくれてたんだなって…」

嬉しさと恥ずかしさをごまかすようにえへへ、と笑った。彼の方からふっと笑った声が聞こえる。

『俺が今まで薫のこと忘れたことないって言ったの覚えてる？』

「…はあ」

『だから教習中の会話も含めて、ちゃんと全部覚えてる』

彼は無限大の愛を私にくれる。ずっとこんなに愛されてたんだと思うと、胸がいっぱいになる。そして、これからも…。

「ありがとうございます…」

『お前が外出ると雪ひどくなるんだから、風邪引かないように暖かくしろよ』

「…はい」

何だかいまさらながら照れくさい。理解してくれるのがこんなに嬉しいなんて、初めて思ったかもしれない。

そしてこの先高い壁が待ち構えている事を、私たちはまだ知らない。

―207―

彼女の仕事が終わるのは6時。だから7時を回った今、きっと谷原と会って話しているんだろう。

あまりに不安で、電話を切る前に終わったら俺に電話するよう伝えた。彼女は苦笑いをしてはい、と答えた。

それからというもの、彼女からは一切連絡がない。それもそうだよな、と溜め息を吐きつつこたつに潜り込む。

彼女には悪い気がするが、俺も明日仕事だし、こうやってだらだら家の中で何もせず過ごしてきたから、時間の使い方がもったいなかったなと思い、とりあえず今日は帰ることにした。

終わったら俺に電話するように言ったし、電話かかってきたら迎えに行こう。あ、彼女は車出勤か。

いろんな事を考えながら帰る支度をした。そうだ、せめて置き手紙でも…いや、迎えに行くなら置き手紙とか恥ずかしいな。待て、彼女車で出かけたから迎えに行かないのか。それなら…。

押しつぶされそうな不安と、うかれるような淡い気持ちで頭が訳の

わからないことになっている。どうした俺、もう35になるのに…！

結局手紙に書くことも思いつかなかったので、何もしないまま帰ることにした。まあ気持ちは繋がってるからよし、と無理矢理正当化してみた。

車を走らせて俺の家に向かう。いつもより回りの景色に注意しながら…。

彼女は今どこにいるんだろう。谷原とどんな話をしているんだろう。今どんな雰囲気なんだろう。

「…重い男だな…」

自嘲気味に笑った。こんな姿彼女の前ではさらせない。いつもスマートで頼りがいのある男でいなければ。

つまり、偽りの自分で彼女と接するのか？いや、そんな大げさな話では…。

眉間にしわを寄せたまま信号停車した。ふと左手側に目をやってみると、スーツを着た見覚えのある男が通話をしながら歩き、そして立ち止まった。同性から見てもかっこいいと思う顔が険しく歪んだ。

名前は覚えていない。が、記憶が正しければ谷原の同僚か友達か…なんかその辺だ。彼女と再会したあの合コンの時に谷原と一緒にいたはずだ。イケメンが彼女に嬉しそうに話し掛けてたのを見てむっとした記憶があるから…確か。

さり気なく助手席側の窓を開ける。すると、少し大きめの男の声が聞こえた。

「何やってんだ！落ち着けよ！」

男の声が慌てたような怒っているような、そんな色を帯びていた。何があったのかよくわからないが、信号が変わったのでアクセルを踏んだその時だった。

「谷原ちゃん！」

俺の耳には、確実にそう届いた。
谷原？今彼女と一緒にいるはずだろ？

一気に血の気が引いた気がした。最悪彼女の身に何か起こっている。

慌てて近くに停車させ、彼女に電話を掛けた。電話は「電源が切ら

れているか、電波の届かないところにいます」と告げた。

どこだ。どこにいるんだ。

どうせなら行き先を言わせておけば良かった。いや、そもそも彼女を谷原と二人っきりにさせるのがまずかったんだ。

携帯を助手席に放り込んで車を発進させた。ハンドルを切る手に力が入る。どうか無事でいてくれと願うように…。

―208―

「何でそういう結論になったのか教えてくれる？」

爽やかな顔立ちの谷原さんが、怒ってるような苦しんでいるような、そんな風に顔を曇らせた。

つい一時間ほど前、谷原さんが会社に迎えに来た。同僚の目から逃れつつ、向かった先は谷原さんの家だった。

部屋に先に行かされたので谷原さんをぽけーっと待っていると、谷原さんがやさしい笑みを浮かべて部屋にやって来た。手にはホットコーヒーとホットミルクティーが握られていた。

すごく、胸が痛む。

こんなにずっと私のことを想ってくれて、こんなに紳士的な振る舞いをしてくれる人はそういない。

私は今から、谷原さんの気持ちを断らなきゃいけないんだ…。

気持ちはお受けできません、と言ったものの、何でそういう結論になったのか、と聞かれてしまうと口が重くて開かない。彼と付き合うことになったから、と言えば終わる話かもしれないが、きっと谷原さんが聞きたいのは『何で彼と付き合うことになったのか』だと思う。

気持ちが通じ合ったから。でもそのきっかけは何？あれは彼が家に来たとき。そう、谷原さんが彼を私の部屋に運んだ、あの翌日…。

「…あの日、内村さんと何かあったの？」

谷原さんの言葉にびくっとしてしまう。まったくその通りだ。何があったかなんて言えるはずもない。

明らかに目が泳ぎだした私に向かって、谷原さんが核心を突く言葉を放った。

「…もしかして、あの後内村さんに抱かれたの？」

言葉も出ない。眉をひそめたままぎゅっと目を瞑った。そう、すべての始まりはそこだった。

私は肯定も否定もしないで俯いた。

その瞬間、すごい力で手首を掴まれた。腕を引かれ、ベッドへと放り投げられる。

「…っ！」

体を起こそうとすると仰向けにされ、手を押さえられた。今までにない力強さと真剣な眼差しに息をのんでしまう。

「内村さんと体の関係を持ったから…付き合うことになったの？」

「違っ…！」

「俺が無理矢理にでも薫ちゃんを奪ってれば、薫ちゃんは俺のものになってたの！？」

「そうじゃな…！」

「そうだ…もっと早くにあなたを戴いておくべきだったんだ…！」

谷原さんの目が険しく細められた。性急に唇が首筋に落とされる。

「やぁ…だ…っ！」

どれだけ腕に力を入れても適わない。何をしても無駄で、きっと私は谷原さんの思うがままに…。

そう思った時、私の手を掴んでいた谷原さんの手の力が弱まった。

顔がどんどん離れていく。

「…こんなことしたって…俺に振り向かせることが出来ないことくらい…わかってる」

苦しくて苦しくてたまらない。私はどれだけ谷原さんを苦しめれば気が済むんだろう？

苦しくて悲しくて、涙が止まらなかった。解放されているのに動けなくて、下唇を噛んだまま静かに涙を流した。

谷原さんはいつものやさしい笑顔で、私の頬に手を添えた。温かくて大きな手が私の涙を拭う。

「悠長にしてないで…あなたから早く返事を貰えば良かった…」

再び辛そうに顔を歪ませた後、谷原さんは部屋を出ていった。谷原さんの部屋に残された私はなす術もなく、ただただ涙を流した。

その数十分後、知らない番号から携帯に着信があった。

―209―

彼女の携帯に繋がらないなら居場所だってわかるはずがない。何も出来ない自分に苛立ちながら、とりあえず彼女の家に戻った。

時計はもう8時を回っている。谷原の友達っぽい奴から何かが起こったらしい言葉を聞いたときから、早一時間が経とうとしていた。彼女以外の状況がわかる人に連絡できれば…。

そう思った瞬間、はっとして携帯を扱った。電話帳の中にいるはずの当事者…慌てながらその名前を捜し出す。

『谷原』

今思えば何故かわからないが、前電話があった時律儀に登録していた。下の名前は知らない…むしろ知りたくもなかったから名字だけで登録してるが。

決意をしてぐっと発信ボタンを押した。彼女に電話するより緊張する。なんせラスボスに挑むようなもんだし。

万が一谷原が彼女を襲ってたんだとしたら、電話に出るはずはない。
最悪留守録になるだろう。

そんな俺の予想に反して、谷原はあっさり電話に出た。

『…はい、谷原ですー…』

テンションが高いのか低いのか、判断出来ないような声色で谷原が言った。正直反応に困る。

「あの、内村ですが…」

『あー、どーもどーも』

「…お前、大丈夫か？」

何をやってるのかも検討がつかない。

「何やってんのお前…」

『んー…』

女が聞いたらうっとりしてしまうだろう色艶のある溜め息を吐いた。

『飲んでますけど何か？』

「は？どこで？」

『居酒屋以外どこがあるんですかー』

あの谷原のルックスだけ見ると想像も出来ない荒れ方。何が原因でそうなったのかはいまいちわからない。

「…薫は？」

『俺の家』

「は？なんで？」

『置いてきました』

「なんで？」

埒があかない。どれだけ飲んでるんだコイツ。

とりあえず彼女には特に問題はなさそうだ…たぶん。雰囲気的にやけ酒な気がしてきたし。

はぁっと溜め息を吐いて飲んだくれに話し掛けた。

「どこにいるんだよお前」

『んー…大将』

それは、俺と彼女が再会した所。しかもそんなに近くない、というのをちょっと前に彼女からちらっと聞いたことがある。

思い出といえば思い出の場所になった居酒屋のイメージが何となく崩れていく。まあ仕方ないよな、と思いながらもう一度溜め息を吐いた。

「今からそっちに行ってやるから待ってろ」

『良いですよー、来なくても』

「何でだよ。一人つぶれようとしてるくせに」

『内村さんに会いたくないし』

やっと出たな、コイツの本性。そう言わんばかりのセリフだった。酔っ払い相手にいちいちムカついても意味がないが。

「この際ガチバトルしよう。お互い言いたいことは全部言う。それで良いよな?」

俺らは別に友達でも何でもないから、この流れもこの言葉遣いも間違っているだろう。でもこんな状況下ではそんな事どうでも良い。とにかく彼女と谷原を何とかしなくては…。

「すぐ着くから待ってろ」

そう言って電話を切った。

―210―

一生懸命涙を拭いて携帯をじっと見る。見覚えのない番号から電話なんてめずらしいことだ。

眉をひそめたまま電話を取った。

「…もしもし？」

『っ、香西ちゃんだよね！？』

その声、その口調。確かに聞き覚えのあるものだった。こんな声色を聞くのは初めてだけど。

「…岩本さん…？」

『ごめん、友ちゃんに番号聞いて…いや、それは今どうでもいいか』

友さんは私と何回も一緒に仕事をしたことのある3つ上の女の人。すごく可愛くて、天然で、仕事熱心な人だ。

あれだけ個人情報保護について何度も指導する立場にある岩本さん

が、同じ立場にある友さんから番号を聞いたってことは、緊急を要することに違いない。

「どうしたんですか？」

『谷原ちゃんがやばいんだ！』

「え…？」

やばいって…どうやばいの？谷原さんに何が起こってるの？頭が真っ白になっていく。

『説明はあとでするから！今どこ！？』

「た…にはらさんの、家です…」

『わかった、すぐ迎えに行くから』

ぷち、とすぐに電話が切られた。

私のせいで谷原さんの身に何かあったの？谷原さんがやばい状況になったのは、私のせいなの？私があんなこと言わなければ、谷原さんはこんな目に遭わなかったの？私が…。

「いやあぁぁぁぁっ！！」

頭を抱えてその場に座り込んだ。涙が止まることなく溢れて来る。
私のせいだ…私のせいで谷原さんが…。

こんな年になって泣き疲れてしまうなんてありえないとは思うが、
気付いたらなぜか車の中にいた。

…まさか…夢オチ？

そんな考えはタバコの匂いで消え去った。

「おはよ」

横に顔を向けると、タバコをくわえた岩本さんがハンドルに手をかけてこっちに向けて手を軽く挙げた。

「！岩本さん…！」

岩本さんはびっくりしている私の頭をくしゃくしゃっと撫でた。

「谷原ちゃんの家行ったら香西ちゃんが倒れてたから焦ったんだよ」

「す、すみません…」

頭を撫でられるのにホント弱くて、顔を少し赤くしながら俯いた。

とか今はそんな状況じゃなくて。

「谷原さんは!?」

岩本さんはタバコを車の灰皿に捨てて一息ついた。

「救出済み」

「な、にが…あったんですか…?」

おそるおそる尋ねる私とは裏腹に、岩本さんは苦笑しながらくいっと親指を後部座席に向けた。

振り返るとそこには横になった谷原さんがいた。吐き気がするほどのアルコールの匂いを漂わせたまま…。

「…つぶれたんですか?」

「まあそんなとこかな。コイツ酒強くないくせに浴びるように飲んでたらしいよ…急性アル中になるかと思ったし」

思わず見とれてしまいそうなその顔に、安堵の色が浮かんできた。

「まあたしなむ程度にしか飲まない谷原ちゃんがこんな風になったのはわからんでもないけどね」

そう言って困ったように笑いながら岩本さんが私の方を見た。やっぱり原因は私…だよね…。

「そんでもって一緒にいたこの人もついでに座席に積んどいた」

そう。さっきからずっと気になっていたこと。谷原さんが誰かに膝枕をしてもらっている形になっている。

ゆっくりと顔を上げる。目の前の光景に絶句してしまうとは知らずに。

「…え？」

谷原さんに膝枕してたのは他の誰でもない、彼だった。

―211―

居酒屋に着いたとき、一人の男がカウンターでうなだれていた。それが谷原だとすぐにわかったのは、まわりに比べて一際整った顔立ちをしていて、女性客がちらちらと見ていたからだ。

こんなイケメンが寂しそうな目をして一人酒を飲んでいたら、まわりの女性は放っておきたくないんだろう。

溜め息を吐いてカウンターへと向かった。谷原の肩をぽん、と叩くと、赤い顔をした谷原がゆっくりとこっちを向いた。

「あ、ども」

「『あ、ども』じゃねぇよ…どれだけ心配したと思ってんだ」

「心配？内村さんが？何故？」

「何でって…」

何故か言葉に詰まる。普通に考えればこんな状態の人を見て心配しない人はいない。

それに…。

がしがしと頭を掻いて谷原の横に座った。

「俺ら仲悪いけどさ、多分…でも赤の他人じゃないだろ。心配して何が悪い」

それを聞いた谷原が自嘲気味にはっと笑った。

「同情なんていりませんよ。特に好きな女性を寝取った男なんかに」

「言い方悪いな…」

飲んだくれにいちいちイラッとしても仕方ないので、俺もとりあえず酒を頼んだ。

「別に寝取った訳じゃないし」

谷原が酒をあおったあと、きっと俺を睨み付けた。

「じゃあ何なんです？あんなことさえされなければ、俺は彼女とうまくいくはずだったのに」

「それはおかしいんじゃないか？」

目の前に置かれたビールをすぐさま半分くらい飲んだ。勢いに任せてどんっとジョッキを置く。

「まあ寝取ったって言われても仕方ないかもだけど…あくまであれはきっかけだっただけで、薫は俺をずっと想っててくれたんだ」

「寝取った男はみんな『きっかけ』で逃げるらしいですね」

「知らないけどな」

嫌味たっぷりに答えてビールを飲み干した。こんなハイペースで飲むことなんてないから、正直若干ふらふらする。

…この光景を彼女が見たらなんて思うんだろう…。

「とにかくだよ、俺はずっと彼女を想ってたんだ。5年間も」

「それは俺もですよ」

その言葉に眉をひそめる。谷原はくいっと焼酎を飲み干し、グラスを力強く置いた。

「俺は5年前の夏、薫ちゃんに会ってるんです。その時には自覚がなくても、彼女を気に掛けていたのは確かですから」

5年前の夏…それはちょうど、俺が彼女と別れた時期だ。そんな時

に出会ってたんだと思うと、何故だか言葉が出てこなかった。

「きっと俺が内村さんに初めて会ったあの日…あの日にあなたが彼女と会ってなければ、俺は彼女と結婚を前提とした付き合いが出来たはずなのに」

「いい加減にしろ！」

気付いたらかなり飲んでいて、目の前には空のグラスが並んでいる。記憶が飛んでしまうかと少し心配はしたが、酒の力でそんなものはお構いなしだった。

「何でもかんでも人のせいにしやがって…」

谷原に負けんばかりの目力で思いっきり睨み付けた。

「俺に電話してきた時の挑戦状は何だったんだよ？何が『彼女は俺が貰います』だ…そんなんじゃどうせ、俺が薫と会ってなくても付き合えてないだろ。人にあれこれ責任擦り付けんな！」

「あなたにが何わかるんだ！」

谷原が強い口調で言った。それでも俺は屈したりはしなかった。黙って谷原を見た。

「いっつもいっつも俺は選ばれることなんてない…仕事も、恋愛も、

全て岩本っちゃんに取られて…」

あれだけ今まで強気でいた谷原の目から雫が落ちてきた。

「やっと、俺のことを見てくれる女性が見つかって…彼女のことを本気で想って、やっと振り向き始めてくれたのに…」

谷原の作った握りこぶしが震えている。俺にはこいつに掛ける言葉も、その資格もない。

「あなたと彼女を…やっぱり二人きりにしておくべきじゃなかった…」

谷原はそれから何も喋らなくなった。どうやらつぶれてしまったらしい。

俺は意識が朦朧としながら、目の前にある焼酎をあおった。

―212―

言葉が出て来ない。
何と言って良いかもわからないし、岩本さんの言葉にびっくりするしかなかった。

「何かねぇ…谷原ちゃんが俺にコンプレックスみたいなの持ってるのはちらっと聞いたことあるし、何となく気付いてたんだけどね」
ナルシストじゃないけどさ、と最後に付け足して岩本さんが言った。

岩本さんもあくまで店員さんから聞いた話だからあまりよくわかってないらしい。それでも、とりあえず谷原さんが荒れまくっていて、しかも彼と口喧嘩してたということを伝えられた。

「でも何で…」

彼がここにいるんだろう?たまたま出くわしたの?でも今日は私の家にいたよね?

…ていうか…つぶれてるよね…?

岩本さんは体を動かして後部座席の方を振り返った。

「何かねぇ、この男の人見覚えがあってさ…仕事柄人の顔覚えるの得意なんだけど」

んー、と岩本さんが唸った。谷原さんだけじゃない、いつの間に岩本さんも彼と知り合っているんだろう。

「あ！思い出した！俺が久しぶりに香西ちゃんに会った時いた人だ！」

言われてみれば、例の合コンのあと三人で飲む前に彼と話してて、谷原さんに声をかけられた気がする。それにしても、別に彼と岩本さんが直接話したわけじゃないのに、よく覚えてるなあとつい感心してしまう。

「確か友達だったよね？」

岩本さんの言葉に、あの日谷原さんが『ご友人ですか？』と彼に尋ねていたのを思い出した。

「あー…この人実は元カレで…ついこの前ヨリを戻したんですよ…」

何だか説明しにくい。岩本さんの顔を見ることが出来なくて、思わず顔を反らしてしまった。

すると岩本さんは声をあげて笑いだした。思わず顔をしかめて岩本さんを凝視してしまう。

「はー…そんなこともあるんだね…てことは、この彼氏さんが谷原ちゃんと直接対決に行ったってこと？」

「…たぶん…」

ふーん、と岩本さんが言った。いったいどういう経緯でこうなったんだろう。想像もつかない。

「とりあえずさ、谷原ちゃんにそれは言ったの？」

「え？」

「だからさ、この人と付き合うことになったって」

「…はい」

「だよねー、だから谷原ちゃんこんなに酒飲んだんだよねー」

俯いていく私とは逆に、岩本さんはあっけらかんとした声を出した。

すると不意に綺麗な顔が曇り、ため息が出たあと声のトーンが落ちた。

「谷原ちゃんが気に入った女の人ってさ、大体俺に近づくために谷原ちゃんと仲良くなったらしいんだよね…噂だからホントかどうか知らないけど。しかも俺別にその子たちに興味なかったから結局付

き合ってなくてさ、失礼な話だけどね」

そう言って岩本さんが運転席に身を預けた。

「それが何回か続いてさ…谷原ちゃん一時かなり荒れた時期あって。女をとっかえひっかえ…女遊びがひどいっていうか、聞いててこっちが辛いくらい」

岩本さんはゆっくりこっちを向いた。その目は真剣で、辛そうで、切なかった。

「前にも話したことあると思うんだけど、俺香西ちゃん結構気に入っててさ。それを谷原ちゃんに言ってしまったばっかりに、コイツ一時しばらく悩んでて…違うって言ったときの谷原ちゃんの顔見たとき、申し訳ないなって思って」

そして、その目のまま前の方を向いた。視線がどこに定まっているのかは私にはわからなかった。

「谷原ちゃんの話聞いてたら、やっと香西ちゃんとかなり仲良くなれたみたいだから、今度こそ谷原ちゃんが幸せになれると思ったんだけどね…」

その言葉を聞いてすごく胸が痛んだ。私はそんな人の気持ちを今まで踏みにじってきたんだと思うと、谷原さんの顔も岩本さんの顔も見ることが出来なかった。

岩本さんはそんな私の髪をくしゃくしゃっと撫でた。何故だか涙が出て来そうで切なかった。

「罪悪感を持てなんて言ってない。谷原ちゃんの運命の人は別にいるってことだよ」

そしてゆっくりとその手を私の頭から離した。

「香西ちゃんは谷原ちゃんのこと気にしないで、彼氏さんと幸せになりな」

「う…ん…」

ちょうどその時、彼がけだるそうな声を出した。

―213―

何だか気分が悪い。寝心地も悪いし、すごくけだるい。吐き気もするし…。

「う…ん…」

開けたくない目を懸命に開けた。周りは真っ暗で、前からだけ光が射している。

「んん…」

ゆっくり体を前に倒すと思わず吐きそうになって、とっさに右手で口をおさえた。

「新一さん!」

その時、聞こえるはずのない彼女の声が聞こえた。吐くのを我慢するために必死で顔を上げられず、彼女が本当にこの場にいるのか、それとも幻聴なのか、それは確認出来ない。

何で俺がこんな目に遭わなきゃいかんのだ。そう思った次の瞬間、右側から車のドアが開くような音がし、ふわりと温かいものが俺の体を包んだ。

心地いい心臓の音。苺のような甘い香り。

「新一さん」

そして、全てを包み込んでくれるようなやわらかい声。他の誰でもない、彼女だ。

「薫…」

惨めな姿を晒しながら彼女に体を預けた。彼女は俺にハンカチを差し出し、背中をゆっくりとさすってくれた。

「情けないな、俺…」

「そんなことないですよ」

小さくて柔らかい手が俺の手をそっと握る。

「たくさん飲んだんですね…疲れたでしょう?」

そして背中をさすっていた彼女の手が、俺の髪をそっと撫でた。

「帰ってゆっくりしましょう…ね?」

「薫…」

何故だか涙が滲み出てきた。彼女の胸に身を寄せ、そっと目を閉じた。

と、ここまでは良かった。

彼女に涙は見せまいと俯き、そっと目を開くと、何故か俺の膝に谷原の頭があった。思わずばっと左の方を見ると、どう考えても谷原に膝枕をしてやっていた。

「…何で…？」

ていうか、ここどこ？これは彼女の車じゃない、誰かの車…それも俺が乗ったことのない。

「あぁ、さすがに二人を横には出来なかったんで、まだ軽症のあなたに座ってもらいました」

運転席からひょこっと男が顔を出した。確か…電話で谷原の名前を呼んでた人だ。

「えーと…」

「岩本雄大です。谷原がお世話になってます」

岩本さんはそう言って軽く会釈した。言われてみれば合コンの時この人いた気がする…。

「えっと」

気分が悪いのを必死で我慢して喋ろうとすると、彼女がそっと背中に手を添えた。

「彼、内村新一って言います」

「あぁ、噂の内村さんですね」

誰が噂してんだ、誰が。そう言おうと思っても、気分が悪すぎてまともに喋れない。

「谷原から話は伺ってます」

「はぁ…」

「谷原とは香西さんのお話をしたんですか?」

不意を突くような質問に思わず身を前に出した。気分の悪さに口元をおさえると、彼女がすぐに手を背中に添えてくれた。

「…っ、だとしたら、何なんです?」

「いえ」

岩本さん…いや、なんか頭にきたから岩本でいいや。とにかく岩本がくすっと笑って前を向いて座った。

「その節は谷原がご迷惑お掛けしました」

コイツはどこまで知ってるんだろう。そう思いながら黙って耳を傾けた。

「香西さんはホントに素敵な女性です。真面目で、謙虚で、知的で、凛としていて、でも儚く脆い…そう谷原から伺ってます」

谷原は彼女のことを想っていただけあって、よく理解していた。谷原の言ってたとおり、彼女は誰よりも強く、誰よりも弱い。だからこそ、俺が傍にいて守ってあげなきゃいけないんだ。

「香西さんを幸せにしてあげてください。それが谷原と私からのお願いです」

「もちろんです…彼女は一生かけて幸せにします」

「香西さんをよろしくお願いします」

岩本がまたこっちに身を乗り出し、ドラマやＣＭでありそうな爽やかな笑顔を向けた。

そしてちょうどその時、膝の上の谷原が少し動きだした。

―214―

彼の声に後ろを振り返り、そっと彼を見守った。のそのそと動いている様子からは大丈夫な気配がない。

そして彼が体を前に倒した時、短い呻き声のようなものが聞こえた。たぶん吐きそうになったんだろう。

「新一さん！」

慌てて助手席から降りて、右側の後部座席に駆け寄った。

ドアを開けてうずくまりつつある彼をそっと抱き締めた。ひどいアルコールの匂いにこっちも少し吐きそうになったけど、大学時代にこういうのはかなり慣れたほうだ。

「新一さん」

彼の頭をぽんぽんと叩いた。彼の体重がこっち側にかかって来るのがわかる。背中をそっとさすり、彼の口元にハンカチを添えた。

「薫…情けないな、俺…」

「そんなことないですよ。たくさん飲んだんですね…疲れたでしょう？」

さらさらとした彼の髪を撫でた。いつも使っているワックスの匂いがする。

「帰ってゆっくりしましょう…ね？」

「薫…」

彼はそのまま俯き、何も喋らなかった。

と思いきや次の瞬間、彼がいきなりがばっと私と反対の方を振り向いた。びっくりして彼の体に回していた腕を離す。

「…何で…？」

何に対する疑問なのかがわからなかった私は、彼の疑問に答えれなかった。

すると、岩本さんが運転席から身を乗り出して彼に話し掛けた。

「あぁ、さすがに二人を横には出来なかったんで、まだ軽症のあなたに座ってもらいました」

「えーと…」

「岩本雄大です。谷原がお世話になってます」

「えっと」

すぐに手を口に当てたので、また吐き気がしたんだろう。背中に手を添え、ゆっくりさすった。

でもその前に自分の胸に手を当ててたから、たぶん自己紹介したかったんだと思う。

「彼、内村新一って言います」

「あぁ、噂の内村さんですね」

噂のって…谷原さんが彼のことを話してたんだろうか。何を話してたんだろうとか以前に、彼と谷原さんはホントにどんな関係なんだろう。

「谷原から話は伺ってます」

「はぁ…」

「谷原とは香西さんのお話をしたんですか？」

「…だとしたら、何なんです？」

「いえ」

何で彼とソレイユの人たちはいつもこうピリピリした空気を作るんだろうか。こっちが気疲れしてしまいそう…。

すると、岩本さんがさっきの少し挑発するような口調とは全然違う、やさしい喋り方で彼に話し掛けた。

「その節は谷原がご迷惑お掛けしました」

岩本さんの言葉に少しびっくりして、私は思わず岩本さんの方を向いた。

「香西さんはホントに素敵な女性です。真面目で、謙虚で、知的で、凛としていて、でも儚く脆い…そう谷原から伺ってます」

谷原さん…なんて恥ずかしいことを…。顔が熱くなってきたのがわかって、誰にも見られないようにと顔を伏せた。

「香西さんを幸せにしてあげてください。それが谷原と私からのお願いです」

「もちろんです…彼女は一生かけて幸せにします」

彼らは私を差し置いてなんて恥ずかしいことを言ってるんだ。綺麗所ばっかりだから似合うといえば似合うセリフではあるけど。

「香西さんをよろしくお願いします」

岩本さんが彼に笑顔を向けたあと、私にウインクしてみせた。さっき聞いた岩本さんに想いを寄せてた人に知られたら嫉妬で殺されそうなくらい、独り身じゃなくてもノックアウトしそうなものだった。

すると、彼の膝を枕にしていた谷原さんが眉間にしわを寄せて体を動かし始めた。

―215―

膝元から聞こえた声は、いつもの高めの声ではない、低くなった谷原の声だった。

「う…」

片手で口元をおさえてゆっくり谷原が起き上がった。それに手を貸そうとしたが、俺自身にそんな力は残っていない。

そんな俺の代わりにか、彼女が車の反対側に回り、ドアを開けて谷原の体を支えた。彼女と顔を見合わせた岩本は車から降り、どこかへ走って行った。

「大丈夫ですか?」

「薫ちゃん…」

「無理したでしょう?きつかったですね…」

そう言って彼女は俺にしたように、谷原の背中をそっとさすってやっていた。谷原はそのまま彼女の方を向き、彼女の肩に額を乗せた。

彼女は背中にやっていた手を頭に回した。正直妬けるが、状況が状況だけに俺はどうしようも出来ないし、仕方がないと思う。

「みっともない…こんな…」

「そんなことないですよ」

そう言って彼女は谷原をそっと抱き締めた。頭をぽんぽんと叩いてやっている。

「ごめんなさい、私が谷原さんの気持ちを台無しにしたばっかりにこんな…」

「薫ちゃんは悪くない」

膝の上に置かれていた谷原の手が彼女の肩に置かれた。暗闇ではあるが、少し震えているように見える。

「俺が悪いんだ…結局自分の力で振り向かせれなかったし…」

たどたどしく谷原が喋った。あれだけ飲んでつぶれて、よくまともに喋れるなと思う。

「辛い思いばっかりさせてごめんなさい…」

彼女はそう言って谷原の肩に手を掛けた。二人の間にやっと距離が出来て、不謹慎ながら安堵を覚える。

「でも…私は彼を選んだことを後悔していません。むしろ中途半端に終わった関係が、こうやってまた続けられることになって感謝してます」

その時、彼女と目が合った。彼女は慈悲深い笑顔を浮かべ、再び谷原の方を向いた。

「幸せになります。谷原さんが悔しいと思うくらい…その代わり、私がすっごく羨ましいと思うくらい幸せになってくださいね」

そして、彼女の手が谷原から離れた。谷原はゆっくりと彼女を見上げ、それから俺の方を振り返った。

「俺はまだ諦めるつもりはないですから…だから彼女が悲しむようなことがあれば、すぐにでも横から奪い取ってやります」

最初は呆気にとられたが、すぐにふっと笑って谷原の肩に手を置いた。

「任せろ。そんなこと起こらないから…これから先、一生」

これが、俺と谷原の友情が始まった日だった。

―216―

いつもは爽やかな立ち振る舞いでやわらかい物腰の谷原さんから、あまり想像がつかないようなヘビーな声が聞こえてきた。

「う…」

彼の膝元から谷原さんがきつそうに起き上がった。あまりのひどさに彼から離れ、走って車の反対側に回る。

ドアを開けてから岩本さんと目が合った瞬間、悟ってくれたのか岩本さんが財布を持って車から降りてコンビニに走ってくれた。ウコンか何か…もうこの際何でもいいから二日酔いに効くものを、出来れば彼の分も欲しい。とりあえずいつでも吐けるようにビニール袋さえあればそれでいいような気もするけど…。

谷原さんの目線に合わせて屈み、顔色を見る。いつもの谷原さんからは想像も出来ないような有様に、少し戸惑いを覚えた気さえした。

「大丈夫ですか?」

「薫ちゃん…」

いつも向けられる子犬のような目が、いつにも増して切なげだった。すごく胸が締め付けられる。

「…無理したでしょう?きつかったですね…」

そっと背中に手を添えて、谷原さんの顔を覗き込むように屈んだ。谷原さんは苦しげに目を細めて、そのまま額を私の鎖骨辺りに乗せた。

谷原さんが声を殺して泣いている。それに気付いた私は、背中に添えていた手を谷原さんの頭に移した。子供をあやすようにそっと頭を撫でる。

私の腕を掴んでいる紳士的な男性の手は、少し力強く、でも震えていた。

少し落ち着いたのか、震えていた手が私の腕から離され、谷原さんの膝の上に力なく落ちた。

「みっともない…こんな…」

「そんなことないですよ」

そう言って谷原さんを庇うようにそっと抱き締めた。

初めて彼以外の男性を抱き締めた気がする…それは置いといて、華

奢だと思っていた谷原さんは思っていたより背中が広く、こんなにずっと近くにいながらこんなことも知らなかったなんて、何だか罪悪感のようなものを感じてきた。

私は何度、この人の好意をはぐらかして来たんだろう？

「…ごめんなさい、私が谷原さんの気持ちを台無しにしたばっかりにこんな…」

「薫ちゃんは悪くない」

谷原さんからはすぐに返事が返ってきた。突然の言葉とその真剣な目に言葉が詰まる。

谷原さんがそっと私の両肩に手を置いた。その手は壊れ物を扱うようで、弱々しかった。

「俺が悪いんだ…結局自分の力で振り向かせれなかったし…」

この人はいつも、私だけじゃない…周りの人を否定したりしない。何か起こったら否は自分にあると言う。状況が状況だけにそれがとても辛く聞こえる。

「辛い思いばっかりさせてごめんなさい…」

私はそう囁くように言った。谷原さんの頭が私から離れる。一般的な男性より少し大きめな谷原さんの目は涙で潤んでいた。

「でも…私は彼を選んだことを後悔していません。むしろ中途半端に終わった関係が、こうやってまた続けられることになって感謝してます」

その時、彼と目が合った。逆光であまり顔は見えなかったけど、彼に対して微笑みかけ、そしてもう一度谷原さんを見つめた。

「幸せになります。谷原さんが悔しいと思うくらい…その代わり、私がすっごく羨ましいと思うくらい幸せになってくださいね」

私は谷原さんではなく、彼を選んだ。

それならばきっと、私には彼と幸せになる、ある意味義務のようなものがあると思う。岩本さんが言ってたみたいに、もしそれが谷原さんと岩本さんの願いになるならなおさら。

そして、彼からの言葉を有り難く受けとめさせてもらうためにも…。

谷原さんは私から手を離し、彼の方を向いた。

「俺はまだ諦めるつもりはないですから…だから彼女が悲しむようなことがあれば、すぐにでも横から奪い取ってやります」

思わず目をぱちぱちさせてしまう。内容が内容だけど、その口調には全くと言って良いほど嫌味はなかった。

彼の方からふっと笑い声が聞こえたあと、谷原さんの肩に彼の手が置かれた。

「任せろ。そんなこと起こらないから…これから先、一生」

さっきから彼はプロポーズのような言葉を言いすぎだと思う。忘れそうになるけど、結婚を前提には一応なってるから間違ってないといえば間違ってないけど…何だか恥ずかしくて顔が火照ってしまう。

そしてようやく、長かった火曜日が終わろうとしていた。

―217―

駐車場に止めてあった俺の車に彼女が乗り込んだ。結果的には車で来てて良かったなと思う。

エンジンをかけながら彼女が話し掛けてきた。

「車、新しく買ったんですね」

「車好きだしね…あれから5年も経てば変えたくもなるよ」

「最近買ったんですか?」

「んー…今年に入ってからだったかな?そんなに経ってないと思う」

そう言って俺は自分の体を助手席のシートに預けた。

職業柄毎日運転する彼女は、あの時とはかけ離れてるほど運転が安定していた。あのあと岩本からもらったウコンを飲んだおかげで気分が少し楽になったのもあって、心地よい眠気が襲ってくる。

が、大の男が爆睡したのを彼女が運び切るはずがないとわかっていたので、頑張って起きてようとしてみた。

「そういえばさ、薫プジョーの車じゃないよね」

「まあ…三菱の車です」

「社割とかないの？」

「…いくらすると思ってるんですか？」

彼女の反応に笑ってしまう。この居心地の良さはあの頃と全く変わってない。

「薫面白いよねー」

「どの辺がですか」

「そうやってすぐムキになるところ」

「なってません」

ちらっとこっちを向いたあと、彼女は再び前を向いた。赤信号になり、車が停まる。

「薫いっつもさ、俺が求めてる反応をしてくれるんだよね」

「大学生の頃先輩に言われてました」

「あれ？学生の時って先輩にいじられてなかったよね？」

「それがですよ、あれから方向オンチとか天然とか、挙げ句の果てにはバカとまで言われ続けて…反論してたら毎回そう言われてたんです」

俺しか知らないと思っていた彼女の一面が他の人にも知られていたことが、何となく悔しかった。それでも他の人が絶対知らない一面を知ってる自信はある。

「ね、薫いじられキャラだってあの時言ったでしょ」

「新一さんからだけと思ってました」

「求めてるような反応されるとね、なんか面白いんだよ」

「面白いことなんて言ってませんけどね」

またそうやってムキになるのが面白くて、彼女の頭をくしゃくしゃっと撫でた。

「むあー、運転中ですよ！」

かっこいい女性の部類に入るだろう彼女の外見からは想像出来ない反応に、思わず笑ってしまう。

「はー…ウケるー…」

「どの辺がですか」

「いや、だからね」

そう言って信号停車した時、彼女の唇を素早く奪った。

「そうやって求めてる反応してくれるとこ」

暗闇で顔はあまりわからなかったが、信号が変わったのもあってすぐそっぽを向かれた。

「先輩にさ、S心をくすぐるって言われなかった？」

「言わ…れ…ましたね」

「ね？薫Mだから」

彼女はむーん、と言って口を尖らせた。彼女の反応についつい笑ってしまう。

「違ったね、ドMだったね」

「違います！」

こんな反応ばっかりされると面白くて面白くて仕方ない。先輩たちも俺と同じ風に思ってたなら、谷原も同じことを思っていたんだろ

うか？

それを考えたとき、話してる限りだと見た目とは裏腹にドSな奴だった気がしたから、谷原にとってはいい相手だったのかもしれないが、結果論取られなくてホントに良かったと思う。

そして、ホントに求める彼女の反応は、一生俺しか知らない。

「何いきなり黙ってるんですか」

運転席の彼女か小突いてきた。俺はぽん、と彼女の肩に手を置いた。

「よし、敬語禁止」

「は？」

「嫁さんが旦那に敬語でどうすんの」

「嫁さんって…」

「いずれ結婚するんでしょ、俺たち」

こんなあっさり言っていいのかわからないが、一つ言えるのはムードのかけらもないだろうということ。別に彼女はロマンチストじゃ

ないから特に問題はないが。

「…奥さんが旦那さんに敬語で話してる家庭もあるみたいですけど？」

「少なくとも俺はやだね」

「はぁ…」

「よし」

そう言って彼女の肩を軽く叩いた。彼女は少しだけこっち側を向いた。

「1敬語1お仕置きね」

「は？」

「しばらく夜は寝かせれそうにないねぇ」

彼女はにょ、にょ、と不思議な言葉を発しながら俺を払うかのような仕草をした。

「そんなことないです。ちゃんと寝ますもん」

「はい2お仕置き」

「あ」

彼女は自分の手の甲を唇にあてた。それでもすぐに雰囲気的に『まあ別にいいや』みたいになった彼女にトドメの一撃を与える。

「言っとくけど、一回のお仕置きってそんなすぐに終わらせるつもりないからね」

彼女はぼっと振り返って俺に向かって大声を出した。

「ばか！変態！」

そして結局、俺も彼女も寝不足のまま翌日仕事に向ったのは言うまでもない。

―218―

彼の車が駐車場に停めてあったので、それに乗って帰ることにした。
谷原さんは岩本さんが連れて帰ってくれるらしい。

車が大好きな彼は、たとえヘビースモーカーであっても車の中でタバコを吸ったりしない。そのおかげでタバコがダメな私には助かる、空気も状態もきれいな車に乗ることが出来る。

それはさておき、さっきまでの状況が状況だけに何となく会話しにくい。エンジンをかけてとりあえず彼に話し掛けてみた。

「車、新しく買ったんですね」

「車好きだしね…あれから5年も経てば変えたくもなるよ」

「最近買ったんですか?」

「んー…今年に入ってからだったかな?そんなに経ってないと思う」

あの一緒にドライブに行ったり旅行に行ったりした車はどうしたの?
そう聞こうとして、何となく聞きにくくなったからやめた。

じゃあ、この5年間、どんな車に乗って、どんな所に行ったんだろう。

…誰と？

余計なことを考えてしまったばっかりに気分が悪くなった。いつから私は嫉妬深くなったんだろう。恥ずかしくてみっともなくて、こんな話彼には出来ない。

ずっと黙って運転していたからか、彼が前を向いたまま話し掛けてきた。

「そういえばさ、薫プジョーの車じゃないよね」

こういう会話をしてるとホントに車が好きだな、と微笑ましく感じてくる。そう考えるとこの業種で良かったなと思う。…別にそれだけじゃないけど。

「まあ…三菱の車です」

「社割とかないの？」

「…いくらすると思ってるんですか？」

私の言葉を聞いた途端、彼がいきなり笑いだした。

「薫面白いよねー」

「どの辺がですか」

昔から別に面白いことは言ってないのに、大学時代もある日を境にこんな扱いをされるようになった。

「そうやってすぐムキになるところ」

「なってません」

「薫いっつもさ、俺が求めてる反応をしてくれるんだよね」

そして毎回こう言われる。みんなどんな反応を求めてるんだろう…その辺がよくわからない。

「大学生の頃先輩に言われてました」

「あれ?学生の時って先輩にいじられてなかったよね?」

「それがですよ、あれから方向オンチとか天然とか、挙げ句の果てにはバカとまで言われ続けて…反論してたら毎回そう言われてたんです」

「ね、薫いじられキャラだってあの時言ったでしょ」

「新一さんからだけと思ってました」

あの頃はホントにそう思っていた。先輩たちにいじられ始めてから『車校の先生にも同じネタでいじられてました』と言うと、毎回の

ように『そりゃそうだろ』と言われた。

「求めてるような反応されるとね、なんか面白いんだよ」

たぶん先輩たちはこう言うことを言いたかったんだろう。でも毎回私が答えるのは一つ。

「面白いことなんて言ってませんけどね」

すると、彼がいきなり頭をくしゃくしゃっとしてきた。そのせいで髪の毛がぐしゃぐしゃになる。

「むあー、運転中ですよ！」

「はー…ウケるー…」

「どの辺がですか」

「いや、だからね」

彼がそう言ったあとちょうど信号が赤になったので隣を振り向くと、いきなりキスをされた。結構アルコールの味がする。

「そうやって求めてる反応してくれるとこ」

いきなりこんなことされて、こんなこと言われて、顔がかあっと熱くなるのがわかった。見られたくなくてすぐそっぽを向く。

「先輩にさ、S心をくすぐるって言われなかった？」

「言わ…れ…ましたね」

「ね？薫Mだから」

「むーん…」

「違ったね、ドMだったね」

「違います！」

彼が大きな声を上げて笑った。彼の思うツボになってる気がして、何だか面白くない。

かと思えば彼がいきなり喋らなくなった。何か考え事でもしてるっぽい。

「何いきなり黙ってるんですか」

「よし、敬語禁止」

彼は私の肩をぽん、と叩いてこう言った。発言内容の意図がわからない。

「は？」

「嫁さんが旦那に敬語でどうすんの」

「嫁さんって…」

「いずれ結婚するんでしょ、俺たち」

何てムードのかけらもない…。普通なら気持ちが高揚するところが、こんな言われ方をすると疑いしか出て来ない。

「…奥さんが旦那さんに敬語で話してる家庭もあるみたいですけど？」

「少なくとも俺はやだね」

「はぁ…」

「よし、1敬語1お仕置きね」

「は？」

「しばらく夜は寝かせれそうにないねぇ」

心なしか嬉しそうに彼が言った。お仕置きの意味を悟って、あまりの恥ずかしさに肩に置かれた彼の手を振り払う。

「そんなことないです。ちゃんと寝ますもん」

「はい２お仕置き」

「あ」

しまった、うっかり…。

まあでも大したことなさそうだし別にいいか、と思って軽く息を吐くと、彼からトドメの一撃を与えられた。

「言っとくけど、一回のお仕置きってそんなすぐに終わらせるつもりないからね」

思わず彼の方をばっと振り返った。

「ばか！変態！」

この時、スピードが今だにあまり出せないはずの私の車は７０ｋｍ／ｈを指していた。

―219―

長かった一週間が終わり、ようやく週末に入った。俺にしては珍しく、この週の休暇は日月だった。

それとは逆に、彼女が珍しく週末に仕事があった。何でもどうしても参加しないといけない仕事なんだとか。

代わりに彼女は月火が休暇になったらしく、月曜に休みが被ったので二人でゆっくり出来るが、実は今週末ドームでモーターショーがあっていて、それに一緒に行こうと考えていたのだ。だからこの日は前々から休暇を取ってたのに…こんな結果になって非常に残念だ。

とはいえ、彼女がいないからといって行かないわけにはいかない。そんなことでと言ったら怒られそうだが、それを理由に見に行かないのは車好きの名が廃る。

彼女には悪いとは思うが、意気揚々と支度をする。たくさんのメーカーの車があるし、どうせなら車見るついでに綺麗な販売員に接客してもらいたいと思う。

…とか思ってるなんて言ったら、あいつふてくされるんだろうな。

その光景が簡単に想像でき、思わずふっと笑ってしまった。

「…ばーか、お前以外の女なんて興味ないし」

後々思い返せば結構恥ずかしい独り言を言って部屋を後にした。

ドームで入場券を買って中に入っていく。モーターショーは何度来ても飽きない。新しいモデルの車を並べてるからかもしれないが、俺にとってそれは特に関係ない。車は新しいモデルでも古いモデルでもすごく魅力的だ。

彼女か車かどっちが好きかと言われたら…うーん…。そう考えてからつい苦笑いする。寝ても覚めても考える事は彼女ばっかり…人生もうすぐ35年、捨てたもんじゃないなと思う。

ゆっくりと場内を歩いていると、会場内にいる人たちみんなが振り返るような綺麗な声でMCが喋っていた。

『こちらがその当社最新のモデルとなっております。いかがでしょうか?』

毎回コンパニオンがたくさんいて、どのメーカーも華やかに演出してある。だが、この会社はちょっと違う、コンパニオンは笑顔を振りまいているだけで特に何も喋っていなかった。

誰もが目を引くようなコンパニオンの横に立っているのは、その女性に引けを取らないような輝きを放つ、マイクを握った彼女だった。

びっくりしたというか、呆気に取られたというか、見惚れてしまったというか、とにかく言葉が出なかった。噂をすればなんとやらってやつか？てか仕事ってこれだったのか…。何かいかにもありがちなベタな展開でこっちが恥ずかしくなってくる。

とか言っときながら彼女にここで会えて正直嬉しい。にやけそうになる顔を必死で我慢してステージの方へ向かった。

彼女の話し方は、その辺のアイドル気取りの勘違いアナウンサーより断然上手かった。話を聞いていた限りだと、学生時代に谷原たちと携帯販売の仕事でＭＣと販売をしていただけあって、アナウンスもセールストークもすごいと思う。我が彼女ながら鼻が高い。

彼女が車の説明を終えると、拍手をする客もいた。俺の隣の人たちなんて『アナウンサーみたい』とか『あれタレント？』とか話していた。俺が彼氏ですなんて言ったらどんな目で見られるんだろう？

考えていることがいかにも子供っぽくて、ついつい笑ってしまった。

そして、何食わぬ顔で彼女の方へと向かった。今彼女は俺に背中を見せている。

「すみません」

「はい」

彼女が綺麗な笑顔で振り返った。毎日見る顔のはずなのに、思わずどきっとしてしまう。

「え!?何で!?」

彼女は右手を口元に当てて、小さい声で驚いた。予想どおりのリアクションについ笑ってしまう。

「モーターショーに俺が来ないとでも?」

「いや、ちゃっかり行ってそうですね」

「ちゃっかりってか…ちゃんと?」

「ホントに車好きですね」

彼女はさっきとは違う、格別な笑顔を向けてくれた。きっとこの笑顔は俺以外の奴は見たことがないはずだ。

愛しくて愛しくて仕方がない。

「まあね…じゃあ俺行くよ。仕事の邪魔しちゃ悪いし」

「あ、そうですか？」

「遠目で見守ってるから頑張って」

「はい」

彼女がはにかみながら言った。こんな可愛い彼女をからかいたいと思う俺はSだろうか？

「あ、そうそう…今日は4お仕置きね」

彼女の顔を確認せずにその場を立ち去った。さて、今日の夜は彼女の家にでも行きますか。

―220―

今年一番の大仕事と言っても過言ではない、モーターショーが今週末開催されている。今日は日曜ということもあって集客見込みが多い。

ちょっと前に会社の飲み会があった時、何故か私がイベントコンパニオンをやっていた過去がばれていた。そしてイベントでＭＣをしたことがあるのも。

確かに一時期アナウンサーを夢見た時期はあったけど、そんなのには程遠く下手だった。谷原さんとイベント展開があった時も噛んでしまって笑われたくらい…。

で、とりあえずそんな経緯で今週末のイベントでＭＣを務めなくてはいけなくなった。原稿も大まかにしか準備されず、『昔鍛えられたセールストークをふんだんに使って』と丸投げされてしまう始末だった。

『御来場中の皆様、本日は古野モーターショーにお越しいただきまして、誠にありがとうございます』

今日が二日目とあってまだまともだけど、今だにマイクパフォーマンスは慣れない。しかもこんな大きな舞台に立って、こんなにたくさんスポットライトを浴びたことなんてないから、緊張感が拭い去れない。

横のコンパニオンみたいにスタイルが良くて、顔が小さくて、美人に生まれたかったとすごく思う。こんな人が横にいれば、ただでさえルックスがひどいのに、それが余計に強調されてしまう。なんて惨め…。

なんとかうちの会社のＰＲが終了し、接客へと戻った。これで私の任務は終わったようなもの。ほっと胸を撫で下ろす。

とその時、後ろから男性に声を掛けられた。

「すみません」

「はい」

お客さんだと思って営業スマイルで振り向くと、そこに立っていたのはいたずらっ子っぽい笑みを浮かべた彼だった。

「え！？何で！？」

「モーターショーに俺が来ないとでも？」

ですよねー、と思う。というかベタな展開すぎて、少女漫画みたいで何だか恥ずかしい。私今年で２５になるのに…。

「いや、ちゃっかり行ってそうですね」

「ちゃっかりってか…ちゃんと？」

「ホントに車好きですね」

「まあね…じゃあ俺行くよ。仕事の邪魔しちゃ悪いし」

雰囲気的にしばらくいるのかと思いきや、彼はふっと笑った後あっさりこう告げた。寂しいといえば寂しいし、でも仕事に集中できるといえばできる。仕事中なのに何だか複雑な心境になってきた。

「あ、そうですか？」

「遠目で見守ってるから頑張って」

何だかその言葉が嬉しくて、青春時代の淡い恋心みたいな感じがする。あんまり謳歌してなかったからわからないけど。

「はい」

「あ、そうそう」

そう言って彼は一度立ち止まった。そして私の方を振り返り、爽やかだけど腹黒っぽい笑顔を向けた。

「今日は４お仕置きね」

それだけを告げて彼は人込みに消えていった。思わず彼を引き止めようとしたけど、私は仕事中だし、彼にも都合があるしでやめた。

熱くなってしまった頬を冷やそうと手でぱたぱたと仰ぐ。今日…どこに逃げよう…。

―221―

「え？」

「だーかーらー、ロマンチストじゃないとかそんな問題じゃなくて、それ女側からすればすごい嫌な感じですよ」

昼休みがたまたま被った池田ちゃんに何故か説教くらうはめになった。

「そうなの？」

「プロポーズって特別なものですよ！それを何でさも当たり前のように…」

「でもアイツはさ」

「だから！」

こんなやりとりを何度も繰り返した。

思えば確かにプロポーズするにしては軽すぎるし、でも結婚っていう重みのあるものを有無を言わさず決定してるし、日頃のデートも興味のある何かがあれば彼女を置いてでもふらっと行ってしまうし、彼女にはかなり申し訳ないことをしている。

それなのに、彼女は嫌な顔一つせずにいつも笑顔で接してくれる。
池田ちゃんに言わせると最悪なプロポーズをした時でさえ…。

「内村さんって意外と子供っぽいですよね」

「あ、そう？」

「香西さんが全部受け入れてくれますもんねー」

「ですねー」

「ちょっとは香西さんに感謝しないとダメですよ？」

「わーかってるよ」

「わかってない！」

ばしばしと背中を叩かれた。俺先輩だよね？なんてことを考えながらおとなしく説教される。

すると教員入り口から女性の声が聞こえてきた。

「内村さん、今よろしいですか？」

振り向くとそこには、氷室ちゃんが手招きして立っていた。

氷室ちゃんは今年入社の御年２９歳。転職してウチに入ってきてもうすぐ一年経とうとしている。
年齢とは裏腹にその可愛らしい見た目が野郎どもに人気があって…
えっと、ロリ系？か何かそんならしい。俺はよくわかんないけど。

「うん？どうした？」

「ちょっとお客さまがお見えになってて」

「客？」

「はい、一緒に来ていただけますか？」

「待って」

そう口を挟んだのは池田ちゃんだった。やたら不機嫌そうな顔をしている。

「申し訳ないんだけど、内村さんもう次の教習の準備しなきゃだから」

「でも、」

「あのねぇ」

池田ちゃんがつかつかと氷室ちゃんの方へ向かった。一触即発とはたぶんこの事…なんでこんな仲悪いんだ?池田ちゃんとかめんどくさい姑になりそう…。

「今まで客って言って本当に客だった試しがないじゃない」

「そんなことありません」

「じゃあなんで内村さんは毎回何事もなく帰ってくるの」

まあ確かに、なんて思いながら完全に傍観者の視点で二人を眺める。

「でも今日は本当にお客さまなんてす」

「じゃあ名前を言ってみなさいよ」

すると氷室ちゃんが予想外の名前を口にした。

「えーと…香西…薫さまです」

思わず池田ちゃんと目を見合わせて絶句してしまった。なんで?仕事?でもうち使ってる外車はＢＭＷだし…。

「ありがと、氷室ちゃん」

軽くぽん、と肩を叩いて指導員室を後にした。

アイツ俺に連絡も寄越さずになにふらっと来てんだ。そう思いつつにやけて…いや、頬がゆるんでしまう俺は俗にいうツンデレってやつなのか？あれこれ考えながら受け付けへと向かった。

「お待たせしました」

綺麗な髪をかきあげながらゆっくりと彼女がこちらを向いた。

「え？」

「何？俺に用があったんじゃないの？」

彼女は少しびっくりした様子で話す。

「や、ただ『内村先生は教習中ですか？』って聞いただけなのに、受け付けの方が『お待ちください』って心なしか嬉しそうにどっか行ったから…」

「なーんだ、俺に会いに来たんじゃないんだ」

「私忙しいんです」

可愛くない奴、と思ってふっと笑い、髪をくしゃっとするといつものごとくむあー、と言って彼女が髪を整えた。

「じゃあ何しに来たわけ？」

「演奏会の広告回収に」

「何の？」

「交響の。今度現役ＯＢ合同演奏会があって、そのパンフレットに乗せる広告のＯＢ負担分集めてるんです」

「マジ？それいつ？」

「えーっと、再来月の…２日ですかね」

「そうなんだ。その日休暇だから行くよ」

その言葉を聞いたとたん、彼女がぱっと明るい顔をした。

「ホントですか？じゃあチケット何枚かあるんで、同僚の方連れて見に来てください！」

「…がっつり宣伝してるよね」

「使えるものは使わなきゃ」

嬉しそうに笑う彼女を微笑ましく思いながら、例のやつを指折り数える。

「どうしたんですか？」

「んっとね、今の入れて7かな」

彼女が少し眉間にしわを寄せたあと、その意味を思い出してみるみる顔を赤くした。

「明日も仕事です！」

「俺もです」

「もーっ、とにかく！私は職場に戻るんで、同僚の方に宣伝しといてくださいよ」

「ただし9に増えましたけどね」

「知りません！」

…10に増えた…。

はー、ウケるー…、と心の中で思いながら走り去る彼女に向かって手を振った。それが表に出てきて、ついつい笑ってしまう。

…何でアイツはこんなにも俺を満足させてくれるんだろうな。愛しさがあふれてくる。

彼女の姿が見えなくなったので指導員室に帰ろうと振り返ると、そ

ここには少し悲しそうな顔をした氷室ちゃんが立っていた。

―222―

手元にある資料を見てはぁっとため息を吐く。

『三國大学交響楽部　第５０回記念演奏会』

確かに私は現役の頃、外政マネージャーという対外的な仕事はしていた。だからといって今回のこの演奏会の広告回収の中心になれなんて、無茶ぶりにもほどがある。

しかも何故か、ＯＢ回収費目に古野ドライビングがあった。現役取りに行けよ、と突っ込みたくなるけどそこは仕方ない。

そんな流れで昼休憩がいつもより長めにある今日、私が担当者にアポを取って広告契約をしに行くことになった。

彼伝手に広告をもらってしまうと、今後現役が広告を回収しにくい。それもあって彼には一切の連絡をしなかった。

久しぶりにあの制服姿を見たい気もするけど…彼仕事中だし。

ほぼ毎日彼とは会ってるけど、制服なんて新鮮すぎて、失礼な話い

つもより会いたいっていう気持ちが強い。別に制服フェチとかそんなんじゃないけど。

でも今日は仕事。私もある意味仕事。公私混同するわけにはいかない。

「では、こちらの契約書にご記入していただいてよろしいでしょうか？」

「はい」

そう言って担当者である年配の男性が広告契約書にサインをしてくれている。その少し後ろには、私が通っていた時には見たことのない、可愛い女の人が立っていた。私の視線に気付いたのか、にっこりと微笑んでみせている。

「ここの卒業生でいらっしゃいますか？」

「あ、はい。ずいぶん前に」

「そうなんだ」

男性が書くのを一旦やめ、優しい笑みを浮かべてこう言った。

「はい…方向オンチなので、先生に苦労おかけしてしまって…」

「ちなみに担当は？」

「あ、内村…新一さんです」

「そうなんですね！」

心なしか女の人の顔がぱあっと明るくなった気がする。なんでだろう…気のせいかな？

そこでなぜか沈黙が流れてしまったので、とりあえず会話をつなげてみる。

「あーっと、内村先生は教習中ですか？」

その言葉を聞いたとたん、嬉しそうな声色で女の人が言った。

「お待ちください」

小走りでその場を去って行く。別に呼んだつもりじゃないんだけど…。しかも女の人の反応があまりよくわからない。もしかして彼の事…なーんて事あるはずないよね。

あれこれ考えているうちに、担当の方が書類を書き終え、印鑑を押してくれた。

「こちらでよろしいですかね？」

「はい、ありがとうございます。広告費につきましては後日、演奏

会のパンフレットをお渡しするときにいただく形になります」

「わかりました」

「こちらが今回の招待券になります。よろしければみなさまでいらしてください」

「ありがとうございます。頑張って」

「はい、ありがとうございます。では、失礼します」

笑顔で会釈して、受け付けから立ち上がった。そして駐車場に向かっていたその時、後ろから声を掛けられた。

「お待たせしました」

「え？」

振り返るとそこに彼が立っていた。彼が少し大きめに息を吐いた辺り、ちょっと急いでこっちに来たっぽい。まさか本当に呼んでくるとは…。

ちょっとびっくりしているのが伝わったのか、彼が苦笑いした。

「何？俺に用があったんじゃないの？」

「や、ただ『内村先生は教習中ですか？』って聞いただけなのに、受け付けの方が『お待ちください』って心なしか嬉しそうにどっか行ったから…」

「なーんだ、俺に会いに来たんじゃないんだ」

どんだけ暇人扱いする気だ。私だって忙しいのに。

「私忙しいんです」

すると彼がふっと笑った後、髪をくしゃくしゃっとした。ぼさぼさになる髪を一生懸命なおす。

「じゃあ何しに来たわけ？」

「演奏会の広告回収に」

「何の？」

「交響の。今度現役ＯＢ合同演奏会があって、そのパンフレットに乗せる広告のＯＢ負担分集めてるんです」

「マジ？それいつ？」

「えーっと、再来月の…２日ですかね」

「そうなんだ。その日休暇だから行くよ」

「ホントですか？」

思えば私が演奏している姿を見てもらうのは初めてだ。嬉しくて嬉しくて仕方ない。

「じゃあチケット何枚かあるんで、同僚の方連れて見に来てください！」

「がっつり宣伝してるよね」

「使えるものは使わなきゃ」

すると彼はにっこりと笑みを浮かべて、何かを指折り数え始めた。

「どうしたんですか？」

「んっとね、今の入れて7かな」

…は？何が…

そう言おうとして、その意味を悟った。顔が熱くなってくるのがわかる。

「明日も仕事です！」

「俺もです」

「もーっ、とにかく！私は職場に戻るんで、同僚の方に宣伝しといてくださいよ」

「ただし9に増えましたけどね」

「知りません！」

そう言って古野ドライビングから走り去った。思春期か、私たちは。

そして、今夜私を待ち構えているものがどんなものか、今の私にはまだわからなかった。

―223―

何も喋ることなく、悲しげな顔のまま氷室ちゃんがこっちに歩み寄ってきた。

「な、何？」

「いえ」

そして、至近距離で立ち止まられた。数はかなり少ないが生徒からの視線も向けられ始めて、多少…いやかなり困る。

「とりあえずさ、指導員室行こう。ね？」

俺は颯爽とその場を立ち去った。その後を小柄な氷室ちゃんがてけてけついてくる。

…擬音、彼女のくせがかなり移ってきた気がする…。

とか今はそんなんじゃなくて、指導員室に戻っても他の教員の目が痛くなりそうで、とりあえず通路で立ち止まった。

「言ってくれなきゃわかんないよ。どうしたの？」

「…あの女性は、昔の生徒さんなんですよね？」

「あー…ああ、アイツね。うん」

「ずいぶん仲が良かったんですね」

声色からして怒ってるような拗ねてるような。ぶっちゃけ、すごい困る。

「まあ指名してくれてたしね」

それから氷室ちゃんは何も喋らない。次の時間は教習がないからまだ良いものの、一応仕事中だからこの状況はあまりよろしくない。

「あの子気に入らないの？」

「はい」

やけにあっさり答えた。俺は思わず吹き出してしまった。

「正直だね」

「だって…」

少しうつむき加減の氷室ちゃんがぱっと顔を上げた。

「内村さんと仲良くしてる女性は好きになれないんですもん」

たぶん一般的に、男はこんなことをこんな子に言われたらイチコロだろう。でも言っちゃ悪いが俺は別にどうも思わない…彼女と付き合ってもそうじゃなかったとしても。

「気持ちは有り難いけどさ、アイツ実は俺の婚約者なんだよね」

ぽん、と肩に手を置いて営業スマイルを向けた。

「じゃ、俺仕事に戻るよ」

切なそうな声で呼び止められたが、俺は決して振り返らなかった。

「なんて事があってさ」

ここは俺の家。今彼女の手料理を食べている最中だ。

「ふーん…」

俺としては妬いてくれるかな、とか淡い期待を持っていたが、彼女の反応は意外と薄かった。

「まあ内村さんって名前出したらなんとなく嬉しそうにしてましたもん」

「あ、そうなの？」

「良かったじゃないですか、可愛い人に告白されちゃって」

彼女が何故か嬉しそうに喋った。でも、言ってる内容はちょっと皮肉っぽい。

「…なんかにこにこしてるね」

「んー、だって別の女の人から告白されるって事は…」

その次に来る言葉が何だか怖くて、彼女を引き寄せて抱き締めた。彼女の香りが目の前に広がる。

「俺は、お前以外興味ないから」

すると彼女は突然笑いだした。俺の腕の中からゆっくり出ていく。

「わかってます」

そしてその大きな瞳を俺に向けた。

「そうじゃなくて、別の女の人から告白されるって事は、それだけ魅力があるって事でしょ？」

「妬かないの？」

「まあ妬かないって言ったら嘘ですけど、彼女が同僚の人に妬いてもしょうがないでしょう」

よしよし、と彼女が俺の頭を撫でた。愛しくて愛しくて、もう一度彼女を抱き寄せる。

「可愛いこと言ってくれるじゃん」

「でしょ？」

「今のダメ。減点」

「なんですかそれ！」

そう言って俺から離れようとした彼女の唇を奪った。最初は触れるだけにするはずだったのに、徐々に深いものになっていく。

「…ばっ、か…今食事中…！」

「じゃあメシ終わり。皿は俺が明日洗うから」

「汚いでしょ！ちゃんと今日洗わなきゃ！」

「ちゃーんと綺麗に洗うから」

「そんな問題じゃ…ひゃ！」

つべこべ言っている彼女を抱えあげ、ベッドに放り込んだ。

「えーい」

ベッドからは小さい悲鳴が聞こえる。楽しいなぁ、と思いながらベッドへ上がり込むと、彼女はがばっと身を起こした。

「ちょっと！もっとデリケートに扱ってくださいよ！」

「だって時間かかりそうだし」

「何が…！」

「だって16回に増えたじゃん」

彼女が一瞬は？という顔をした後、いつものように顔を赤くしていった。

「忘れなさんなって」

「ばか！明日仕事って言ったでしょ！」

「さすがに俺もそんなに持たないって」

「だったら…！」

わー照れてるー、可愛いー、なんて心の中で惚気ながら、彼女を押し倒した。彼女は無駄な抵抗をすることなく、頬を上気させて俺を真っすぐ見つめた。

俺たちには、この場に及んでまで愛の言葉を囁く必要はない。口に出さなくてもわかり合ってることだから…。

そしてやっぱり、翌朝二人とも遅刻ギリギリで職場に駆け込むのだった。

―224―

今日は珍しく、彼が疲れたような顔をして家に帰って来た。帰宅時間ちょうどくらいにおかずが出来てご飯も炊き上がったけど、この様子じゃあんまり食べないかな…。

と思いきや、すごい勢いでご飯を食べ始めた。早食い競争か、と聞きたくなるような勢いにただ目が点になる。

「お腹すいてたんですか？」

「んー…」

「なんか…疲れてますね」

「実はさ…」

そう言って彼が話し始めたのは、私が今日昼に会った受け付けの女の人…氷室さんって言うらしい。しかも話を聞く限りだと告白までしたっぽくて。

…それで彼の名前を聞いた瞬間喜んだのね。会話の口実が出来たから。

嫉妬深い自分が顔を出してきて、あまりの醜さに嫌気がさす。

「…なんて事があってさ」

「ふーん…まあ内村さんって名前出したらなんとなく嬉しそうにしてましたもん」

「あ、そうなの？」

人に散々鈍いとか言っときながら、彼だって鈍い気がする。仕事柄気付かないふりを通してるだけかもしれないけど。

「良かったじゃないですか、可愛い人に告白されちゃって」

こんな嫌味を口にして後悔した。確かに昔『よその女から声を掛けられる男はそれだけ魅力があるんだから、まわりに自慢するくらいの勢いで付き合いな』と地元の友達に言われたことがあるけど、私にはそれが全く理解できない。

でも今はそんなこと言ってられない。

「なんかにこにこしてるね」

「んー…だって別の女の人から告白されるって事は…」

目が泳がないように気を付けながら伏せ目がちに箸を置いたその時、ぐいっと腕を引っ張られた。気付けば目の前には彼の胸がある。

「俺は、お前以外興味ないから」

何だかその言葉がくすぐったいほど嬉しくて、思わず笑みがこぼれた。

「わかってます。そうじゃなくて、別の女の人から告白されるって事は、それだけ魅力があるって事でしょ？」

見事なこの矛盾。何だか都合の良い自分の脳みそが良いような悪いような、不思議な感覚に陥る。

「妬かないの？」

「まあ妬かないって言ったら嘘ですけど、彼女が同僚の人に妬いてもしょうがないでしょう」

嘘。私に余裕なんてない…表に出してないだけで本当は妬いてばっかり。

それをごまかすように彼の頭をよしよし、と撫でた。彼は何も言わず、目を愛しそうに細めて私を抱き締めてくれた。

「可愛いこと言ってくれるじゃん」

「でしょ？」

「今のダメ。減点」

「なんですかそれ！」

大学時代の先輩も彼も同じことを言う。何に対しての点数ですか、と言おうとしたとたん、不意にキスされた。

長くて、深くて、とろけてしまいそうなキスに、顔が火照っていくのがわかる。

唇が離れても、超至近距離なのには変わりない。

「…ばっ、か…今食事中…！」

「じゃあメシ終わり。皿は俺が明日洗うから」

「汚いでしょ！ちゃんと今日洗わなきゃ！」

「ちゃーんと綺麗に洗うから」

「そんな問題じゃ…ひゃ！」

彼の服の袖口をつかんでいた手を振り払われたかと思うと、次の瞬間にはお姫さま抱っこをされていた。驚きと恥ずかしさに言葉が出

ない。

「えーい」

この言葉を聞いた瞬間、私の体が空中移動し、そして落下した。横向きにベッドへと沈む。

「ちょっと！もっとデリケートに扱ってくださいよ！」

「だって時間かかりそうだし」

「何が…！」

「だって１６回に増えたじゃん」

は？１６回って…

今までのことが走馬灯のように駆け巡る。思い当たる節はただ一つ、『１敬語１お仕置き』だ。

彼がふっと笑って私の髪をくしゃくしゃっとした。

「忘れなさんなって」

「ばか！明日仕事って言ったでしょ！」

「さすがに俺もそんなに持たないって」

「だったら…！」

その後に続けようとした言葉は、彼に押し倒されたことで消えていった。大きくて温かい手、真っすぐな眼差しに胸が高鳴っていくのがわかる。

そして、言葉を交わすことなく唇が触れた。これこそ長い夜の始まりの合図…。

―225―

時間が経つのは早いもので、もうすぐ付き合い始めて半年になろうとしている。やっと彼女の敬語ぐせが直ったが、俺としては嬉しいような面白くないような…微妙な心境だ。

そろそろ同棲を始めたいのもあって、2人で都合を合わせて双方の実家に挨拶に行くことになった。

ついに来てしまったか、というような心境で車を走らせる。結婚するなら避けて通れない道。頑張らなければ、と思う。

「緊張してる？」

彼女が覗き込むようにして俺の方を見た。ちらっと彼女の方を向く。

「いや、んー…少し」

「どっちよ」

彼女が前を向いて笑った。彼女につられて俺も笑う。

「お前どうなの？」

「私？そりゃあ緊張してるよ」

「へぇ」

「だって…すごく反対されてたんでしょ？昔…」

少し前に、昔彼女との結婚を親に話して猛反対されたことを彼女にぼやいた。が、当初彼女が反応したのは、あの当時俺が結婚を考えていたことの方で、思わず『そっちかよ』と突っ込んでしまったのは言うまでもない。

「まあでも昔と今じゃ反応違う可能性高いし」

「そうなの？」

「だって俺もう年じゃん？」

「そんな…」

彼女が少し悲しそうな顔をしてこちらを向いた。

いつも彼女はこの話をすると悲しそうな顔をして黙ってしまう。いつも気にしすぎだろ、と思うとちょっと笑いが出てしまう。

「気にすんなって」

彼女の髪をくしゃっと撫でた。

「だって…」

「俺別にそんな気にしてないし」

「ホント？」

そしてもう一度、彼女の髪をそっと撫でた。

「お前こんなんじゃ先が思いやられるぞ？」

俺の言葉に彼女はむぅ、と言ってうつむいた。

「大丈夫、親父とおふくろは俺がどうにかするから」

彼女が小さい声で頷いた。

俺の実家は俺の家から近いといえば近いし、遠いといえば遠い。とにかく昼の１０時過ぎにはもう到着した。彼女の家にも行かなきゃいけないから、それを考えるとちょうどいいのかもしれない。

「ただいま」

「おじゃまします」

俺の後に続いて彼女が挨拶をしたが、もう家にあがる俺とは対照的にずっと玄関に立ったままだ。

「あがれよ」

「え？でもご両親が…」

「いーよいーよ、行こ」

ためらう彼女の手を引いて居間へと向かった。

「あら新一、おかえりなさい。待ってたのよ」

居間のドアを開けると、おふくろが温かいお茶を入れていた。親父は新聞を広げたままだ。

「この前話した彼女。紹介するよ」

「あ、香西薫と申します」

彼女が丁寧に頭を下げた。親父はようやく新聞を折り畳み、おふくろと一緒にまじまじと彼女を見ていた。

「まー、新一にはもったいないくらいの可愛い方ね」

「どういう意味だよ」

おふくろの言葉に苦笑してしまった。親父も娘を見るような目で彼女を眺めている。

「いい嫁さんになりそうな人じゃないか」

「そんな…恐縮です」

彼女がはにかみながら答えた。なかなかの好感触に、このままＯＫをもらえると信じ切っていた俺に試練の時がやって来た。

「失礼ですが…香西さんはおいくつですか？」

「先日２５歳になりました」

そして、沈黙が流れる。おふくろはびっくりしてこっちを向いた。

「結婚を考えてる女性って…香西さん？」

「そうだよ。５年くらい前に同じ話したの覚えてる？」

親父もおふくろもためらいがちに頷いた。彼女を庇うように一歩進み出て彼女の前に立つ。

「昔一回別れちゃったんだけど、結構前にたまたま会って、やっぱり俺はコイツじゃないと無理なんだって思ったんだ」

そして彼女の手をそっと握った。少し強ばっている気がする。

その時、親父が何か喋ろうと口を開いた。

―226―

あれからどれくらい経ったんだろう。あの慌ただしかった毎日が終わり、ほぼ毎日彼とゆっくりできる時間が増えた。

懐かしの谷原さんとは今だに連絡を取り合う仲で、いつの間にか彼と仲良くなっていた。男の友情って不思議だなぁと思う。

ところ変わって今日、彼の実家と私の実家に挨拶に行くことになった。結局昔の分を含めても付き合ってまだ一年分も経っていない。それなのに結婚を前提…しかもこんな子供と、と捉えられてしまうんじゃないかと思うと、何だか不安になる。

彼のお姉さんにはなりゆきで会ったことがあって、『こんな可愛い妹欲しかったの！』と可愛がってくれた。こんな感じでご両親ともうまくいってくれるといいんだけど…。

「緊張してる？」

自分にも問い掛けるように彼に話し掛けた。彼は少しだけこっちを向く。

「いや、んー…少し」

「どっちよ」

彼の返答に思わず笑ってしまった。彼も軽く笑っている。

「お前どうなの？」

「私？そりゃあ緊張してるよ」

「へぇ」

「だって…すごく反対されてたんでしょ？昔…」

そう言って振り替えること数ヵ月前。昔付き合っていた頃に学生結婚させようとしていた驚愕の事実を告げられた。私としては当時結婚なんて夢のまた夢だと…若干期待してたときもあったけど、とにかく嘘みたいな話だった。

が、彼に『そっちかよ』と頭を叩かれてしまったのは言わないお約束。

彼はハンドルをきゅっと握って軽く息を吐いた。

「まあでも昔と今じゃ反応違う可能性高いし」

「そうなの？」

「だって俺もう年じゃん？」

「そんな…」

気にしすぎだ、年齢なんて。でもそれで彼がすごく悩んでたって池田さんから聞いたときは、どうして私が早くに生まれなかったのかと思った。それを悟った池田さんに『気にしすぎだって』と宥められたのもまた事実。

「気にすんなって」

そして彼も私の考えを悟ったのか、ふっと笑って髪をくしゃくしゃっと撫でた。

「だって…」

「俺別にそんな気にしてないし」

「ホント？」

「お前こんなんじゃ先が思いやられるぞ？」

「むぅ…」

彼はどう思ってるんだろう？ホントに気にしてないの？辛い思いをしたりしてないの？

結婚を約束した仲なのに、この手探りの状況がもどかしい。

「大丈夫、親父とおふくろは俺がどうにかするから」

「…はい…」

絶対大丈夫だって自分に言い聞かせるように。

車を走らせること２０分足らずで彼の実家に着いた。心の準備をする間もなく、彼がすたすたと家に向かった。

「ただいま」

私の方を振り返ることなくどんどん進んで行く彼。私の挙動不振ぶりは強くなる一方だ。

「おじゃまします」

私の言葉を聞いたとたん、彼がくるっとこっちを向いた。目の前には彼の左手が差し出されている。

「あがれよ」

「え？でもご両親が…」

「いーよいーよ、行こ」

差し出された手がそのまま私の右手を捉え、半ば強引に家の中へ連れて行かれた。

彼がただいまー、と言いながら居間のドアを開けると、温厚な雰囲気のお母さまと新聞を黙々と読んでいるお父さまがいた。

「あら新一、おかえりなさい。待ってたのよ」

「この前話した彼女。紹介するよ」

「あ、香西薫と申します」

ぺこりと頭を下げた。

頭を上げるとご両親の視線が痛いほどに私に向けられ、余計に緊張してしまう。

するとお母さまがにっこりと私に笑いかけてくださった。

「まー、新一にはもったいないくらいの可愛い方ね」

彼はその言葉に苦笑いしていた。

「どういう意味だよ」

お父さまは一口お茶を飲むと、私にも笑顔を向けてくださった。

「いい嫁さんになりそうな人じゃないか」

「そんな…恐縮です」

ついいつものくせでえへへ、と笑ってしまう。

このままうまくいくかと思いきや、お父さまの質問に対する私の答えで空気が一変した。

「失礼ですが…香西さんはおいくつですか？」

「先日２５歳になりました」

そして、沈黙が流れる。お母さまは口に軽く手をあてて彼の方を向いた。

「結婚を考えてる女性って…香西さん？」

「そうだよ。５年くらい前に同じ話したの覚えてる？」

ご両親がゆっくりと頷いた。

つまり、昔結婚を反対した女性、とお二人が思い出したという事。

絶望的な結果しか想像できなくなって、私は俯いてぎゅっと目を閉じた。

「昔一回別れちゃったんだけど、結構前にたまたま会って、やっぱり俺はコイツじゃないと無理なんだって思ったんだ」

この声が聞こえたとき、温かい手が私を包んだ。顔を上げると彼が私を庇うように前に立っている。
体の力が抜けていくのがわかった。

その時、お父さまが眼鏡を外し、机の上で手を組んだ。

―227―

親父はじーっと彼女を見たまま俺に話し掛けた。

「お前は香西さんとの結婚を考えてるんだよな？」

「うん」

「昔も香西さんとお付き合いして結婚を考えたんだよな？」

「まあ」

親父の目が痛いほどに彼女に向けられている。何を言われるんだろうかと思ったその時、親父がいきなり笑いだした。

「二回も惚れたなら仕方ないよなぁ？」

「は？」

「お父さん！」

親父は笑ってるし、おふくろは困ってるし、何かよくわからない。

「お前にしちゃ女を見る目あるじゃないか」

親父の言葉に苦笑いしてしまう。

「何だよその今までありませんでした的な言い方」

「そういう意味じゃないけどな。まーでも二回も惚れたなら認める以外ないんじゃないか？母さん」

「え？」

いきなり話を振られておふくろはさらに困っていた。

「まあ…香西さんがこんなどら息子で良いなら…」

「誰がどら息子だ」

すると俺の背中越しにそっと様子を眺めていた彼女が少し声をあげて笑った。

「とんでもないです。新一さんは仕事にも真摯で、プライベートでも頼れる存在で…私にはもったいないほどの男性です」

彼女の言葉に俺ら一家は少しの感動を覚えながら黙って耳を傾けた。

「ご両親が認めて下さるのなら、私は一生新一さんに添い遂げるつもりです」

親父とおふくろが黙って目を合わせ、お互いがにっこりと笑った。

「香西さんは下のお名前なんでしたっけ？」

「あ、はい、薫と申します」

「薫さん、新一を頼むよ」

「新一、薫さん泣かせるようなことがあればひっぱたくからね」

今度は俺らが目を見合わせてぱちぱちとまばたきをした。つまり…。

ふっと笑ったあと、彼女の肩にそっと手を置き、俺の方に抱き寄せた。

「大丈夫だって、薫は絶対俺が幸せにするから」

「不束者ですが、どうぞよろしくお願いします」

彼女が頭を下げてにっこりと笑った。

第一関門、突破。

―228―

「お前は香西さんとの結婚を考えてるんだよな？」

お父さまの突然の言葉にどきっとした。何を言われるのか正直怖い。

彼は私の手を持ったまま、真っすぐと前を向いて頷いた。

「うん」

「昔も香西さんとお付き合いして結婚を考えたんだよな？」

「まあ」

体に穴が開きそう。それほどに視線を向けられて、私は思わず顔を反らした。

とその時、お父さまが朗らかな感じで声を上げて笑った。

「二回も惚れたなら仕方ないよなぁ？」

「は？」

思わず彼と同じように声を出しそうになった。呆気に取られて言葉が出ない。

「お父さん！」

慌てながら近づくお母さまをよそに、お父さまは彼に微笑みかけた。

「お前にしちゃ女を見る目あるじゃないか」

「何だよその今までありませんでした的な言い方」

「そういう意味じゃないけどな。まーでも二回も惚れたなら認める以外ないんじゃないか？母さん」

「え？」

今度はお母さまと同じように声が出そうになる。何だか意図が読めない展開に頭がぐるぐる言っている。

「まあ…香西さんがこんなどら息子で良いなら…」

お母さまの言葉に彼は苦笑していた。

「誰がどら息子だ」

内村親子のやりとりに緊張感が抜け、思わず笑ってしまった。

「とんでもないです」

内村一家の視線を一気に浴びたのももろともせず、彼に微笑みかけた。

「新一さんは仕事にも真摯で、プライベートでも頼れる存在で…私にはもったいないほどの男性です。ご両親が認めて下さるのなら、私は一生新一さんに添い遂げるつもりです」

何だか彼にプロポーズするみたいで、恥ずかしさをごまかすようにえへへと笑ってみせた。

すると、ご両親がにっこりと微笑み合い、お父さまが私に話し掛けた。

「香西さんは下のお名前なんでしたっけ?」

「あ、はい、薫と申します」

「薫さん、新一を頼むよ」

「新一、薫さん泣かせるようなことがあればひっぱたくからね」

思わず彼の方を振り向くと、彼もきょとんとして私の方を見ていた。
彼はそのあとふっと笑って私の肩を抱いた。

「大丈夫だって、薫は絶対俺が幸せにするから」

「不束者ですが、どうぞよろしくお願いします」

新しいお父さんとお母さん。嬉しくて嬉しくて、気持ちが高揚してくるのが分かる。

次は我が家。

―229―

「はー…緊張したぁ」

彼女が助手席に座るやいなや、安堵のため息を吐いてこう言った。

あのあと結局彼女とおふくろで昼飯を作って、みんなで一緒に食べた。親父もおふくろも『薫さんは料理上手だねぇ』と感心しきりだった。

…なんか反応的に、昔彼女を家に連れて来てれば意外とOK貰えてたんじゃないか…？

二度手間だなぁ、と思わず苦笑してしまう。

すると彼女が勘違いしたんだろう、むぅ、と言って軽く俺の腕を殴った。

「バカにしてるでしょ」

「してないよ」

「うそくさい…」

「ホントだって！」

彼女の言葉に思わず笑ってしまう。

「そうじゃなくて、昔こうやって話だけじゃなくて家に連れて行ってれば、もっと早くに結婚出来てたのかなって」

彼女がもう一度むぅ、と唸った。

「過去を掘り起こすのはやめましょう。何言っても変わらないし」

「まあね」

「それにね、」

俺が車のエンジンをかけたその時、不意に柔らかいものが俺の左頬に触れた。ちょっとびっくりして横に振り向くと、彼女がやわらかい笑みを浮かべていた。

「今すごく幸せだから…時間なんて関係ないよ」

えへへ、と彼女が笑ってみせた。あまりの可愛さにそのまま彼女に口付けをする。

唇を離して彼女の頭をそっと撫でた。

「ありがと…おまえの実家でも頑張るよ」

「私も」

彼女がもう一度えへへ、と笑った。俺は笑みを浮かべたまま車を発車させた。

「まあ何が残念かって家にいないことだよね」

「何で？」

ハンドルを握ったままちらっと彼女を見た。彼女は首を傾げてこちらを向いていた。

「何でででしょ」

彼女は何も言わずに反対側へ首を傾げた。手を顎にあててる辺りガチで考えてるっぽい。

「うー…ん…あ、北海道物産展で買ったカレーパンを昼ご飯に食べたかったから？」

バカだコイツ。今本気で思った。

確かに昨日彼女が北海道物産展に行って『明日の昼ご飯に』とカレ

ーパンを買ってはいたが、今このくだりでカレーパンには、どう考えても結び付かない。

思わずハンドルを叩いて笑った。

「それ…本気で言ってんの？」

「だって他に思いつかないから！」

「違います。はい、やり直し」

「むー…」

二人ともに言えることだが、この歳でこのリアクションとこの関係。昔のまだ若かった頃と何ら変わりない。

そこにあるのは愛しさと心地よさ。ただそれだけ。

ふっと笑って彼女の右腕を軽く叩いた。

「じゃあ家でじっくり教えてあげる」

「はぁ…」

相変わらずわかってなさそうな彼女につい苦笑してしまう。

もうすぐ、最終関門に到着予定。

―230―

笑顔で会釈をして車に乗り込んだ。背もたれに体を預けると、今まで緊張していた体から疲れが一気に抜けた。

「はー…緊張したぁ」

彼はそんな私の様子をシートベルトを着けながら眺め、苦笑いをこぼした。

緊張してたの私だけかい。何だか笑われたのが悔しくて、せめてもの抵抗で彼の腕をぺしっと叩いた。

「バカにしてるでしょ」

「してないよ」

「うそくさい…」

彼は声を上げて笑い、私をじっと見つめた。

「ホントだって！
そうじゃなくて、昔こうやって話だけじゃなくて家に連れて行ってれば、もっと早くに結婚出来てたのかなって」

こうも毎回昔のことを『過ちがなければ早く結婚できてたのに』的なことを言われると、私だって辛い。時間なんて関係ない…私は今が幸せなのに。

「過去を掘り起こすのはやめましょう。何言っても変わらないし」

「まあね」

「それにね、」

彼がキーに手をかけたとき、隙を見つけて彼の頬にキスをした。切れ長の目を大きく見開いて私を見る彼を、慈しむように見つめ返した。

…正直、心臓が張り裂けそうなほどドキドキしてるけど。

「今すごく幸せだから…時間なんて関係ないよ」

変に緊張してしまったのがばれないようにえへへ、と笑った。すると次の瞬間、不意に彼に唇を奪われた。

ゆっくりと流れる愛しい時間。このまま時が止まってしまえば良いのに…。

長いキスのあと、彼がそっと私の頭を撫でた。手懐けられた動物のように大人しくなってしまう。

「ありがと…おまえの実家でも頑張るよ」

彼は囁くように私にそう言った。もう一度、彼を真っすぐ見つめる。

「私も」

彼に向かってもう一度えへへ、と笑ってみせた。彼はにっこりと私に笑ってみせて、笑顔のままアクセルを踏んだ。

「まあ何が残念かって家にいないことだよね」

「…何で？」

「何でででしょ」

悪戯っぽい笑みを浮かべて彼が問い掛けた。心当たりがないために答えるまでに時間がかかってしまう。

「うー…ん…あ、北海道物産展で買ったカレーパンを昼ご飯に食べたかったから？」

その答えに彼が大きな声を上げて笑った。口元に手をあてて笑いを堪えようと頑張っているみたいだ。

「それ…本気で言ってんの？」

「だって他に思いつかないから！」

「違います。はい、やり直し」

「むー…」

何？家にいないのが残念…ＤＶＤ？そんな話なかったし…ご馳走作る約束とかしてたっけ？考えれば考えるほどわけがわからなくなる。彼が軽く笑って私の腕をぱしっと叩いた。

「じゃあ家でじっくり教えてあげる」

「はぁ…」

毎回家でね、と言われる意味がよくわからなかったりする。何でここじゃないんだろう。

そして、ようやく実家近くの公園が見えはじめた。

―231―

ここは客間。畳の匂いが目の前に広がっている。

そこで正座をする俺。俺を見ながらお茶をすするお義父さん。彼女とお義母さんの姿はそこにない。

「で、」

お義父さんが湯呑みを置いて俺を真っすぐ見た。変な汗をかいてきてるのがわかる。

「はい」

「薫の…どこが気に入ったんだ?」

「え?それは…」

なんて答えれば良いんだ?親の前でぼけっとしてるとかバカとかは言えないし、全部って言いまとめるのもどうかと思う。

あれこれ悩んでる俺を見て、お義父さんが豪快に笑った。

「いや、この世には物好きがいるもんだと思いまして。彼氏の話なんてしたことないから結婚出来るか心配してましてね」

ふふ、ともう一度笑ってお義父さんはお茶を飲んだ。見た目の割りにはお茶目な人だ。

「内村くんはいくつだったっけ？」

「あ、先日３５になりました」

「薫の１０コ上か」

ふむ、とお義父さんが腕を組んだ。また壁が立ちはだかるかと思ったら、事は思わぬ方向に進んでいった。

「俺が今年５２だから…俺とは１７違いか。母さんとは１３違いだな」

「はぁ」

「何か義理の息子っていうよりは年の離れた弟みたいですな」

「…そうですか…？」

「うん、なんかね、昭和の匂いがする」

老けて見えるってことか。思わず心の中で突っ込んでしまう。

だが会話の流れ的にお義父さんは結婚を認めてくれているよう。普通嫁のところがハードル高いのに、何故か俺の家のほうがてこずっ

た…簡単に許してもらえた方だとは思うが。

「ところで内村くん」

「はい？」

「子どもは…どうなんだね？」

「もちろん考えてます。３人くらい…欲しいかなぁって」

「そーかそーか」

もう一度お義父さんがふふ、と笑った。

「光がね、この前初孫を産んで…可愛くて可愛くて仕方なくてですな。もうすぐ薫も、と思って」

光とは彼女の一つ上のお姉さんだ…教習生時代の彼女をこき使っていたと噂の。一応光さんも学生時代ウチに来ていて、しかも俺がスクールバスで送ったこともあるらしい。まったく身に覚えはないが…。

「籍を入れたら子作りを考えてます」

「そうか…その辺の若者と違って良識があっていいな」

その言葉に思いっきり作り笑いをしてしまった…出来ちゃった未遂

があったからだ。まあ結局食当たりだったとか、生理不順だったとかでぶっちゃけ全く関係なかったが。

あの時はかなり焦ったが、今となっちゃあの無駄な慌てようは滑稽で仕方ない。

「僕も歳が歳ですので…出来れば早めに籍を入れて子供が欲しいなぁと」

「なるほどな」

お義父さんが再び腕を組んだ。ちょっと首を傾げたあと、ちらりと俺の方を見る。

「じゃあいつ頃に結婚したいんですか？」

「えっと…」

ぶっちゃけ、全然考えてなかった。早くにとはホントに思っていたが、いつ頃と聞かれると言葉に詰まる。

若干目が泳ぎだした俺を見て、お義父さんが机に肘をついて身を乗り出すようにして話し掛けてきた。

「何なら今日籍を入れてもいいんですぞ」

「…え？」

これ以外になんてリアクションをしたら良いのか、知ってる人がいたら教えてもらいたい。どっからこの『早く籍を＝今日籍を』という発想が出てくるのかわからない。

確実にぐるぐるという音が聞こえてきそうな脳みそと必死に戦っていると、お義父さんが声を上げて笑った。

「冗談ですよ。困りなさんな」

お義父さんは腕を組んでふふ、と笑う。

…このオヤジ…。発想がどことなく彼女に似ている。

そりゃそうだよな、親子だもん。

あれこれ考えながら苦笑した。

―232―

コト、と目の前にマグカップが置かれた。手に取ったそれは人肌くらいの温かさのミルクティー。私が淹れる紅茶はお母さんのミルクティーには適わない。

「はぁー…美味しい」

お母さんはにっこりと笑って、ミルクティーを口にしながら私の前に座った。

「なんか落ち着くよね」

「でしょ？」

そう言ってお母さんは一口サイズのクッキーを口に運んだ。

今和室では彼とお父さんが話している。扉は閉められているため、二階の私たちには会話が全く聞こえない。

「大丈夫かなぁ」

「何が？」

「新一さん」

そう言って私もクッキーを口にした。もぐもぐもぐ、と食べてからミルクティーに口をつけた。

「なーんか不安でさ」

「大丈夫じゃない？」

「んー…」

１０歳上なだけあって、彼は私より人生経験が長いし、私よりずっと落ち着いてるし、発言もしっかりしてるからたぶん大丈夫とは思うけど…お父さん相手だからなぁ。

あれこれ考えている私をよそに、お母さんが肘をついて軽く息を吐いた。

「で？薫と内村さんの馴れ初めを教えてもらおうかな？」

「むぅ…」

もともとこれを約束に彼を実家に招いたようなものだ。今更喋らないわけにはいかない。

知られてまずいことなんて何一つないけど、親に馴れ初めを話すなんて何だか気恥ずかしい。

「…初めて会ったのは自動車学校で、私の担当の先生だったんだ」

お母さんは何も喋らずじっと私を見つめた。

「フランスで仕事終わって帰って来て、しばらくして数あわせの合コンに連れて行かれて、そこで久しぶりに会ってさ」

「へー…てことは、付き合ってもうすぐ一年？」

「いや、まだ半年ちょいかな…」

「それで結婚なんて大丈夫なの？」

私は静かにマグカップを机に置いて、手の中にあるままのそれを見つめた。

「一緒にいた時間ってそんなに重要なのかな…」

ぱっと顔を上げてお母さんを見た。お母さんは表情を変えないままじっと私を見た。

「それにね、私が大学生の時交通事故に遭ったじゃん…あの時実は彼と付き合ってて、一回別れちゃったけど幸せだったし、今も幸せだし、これから先もそうだと思うんだ」

すると私の言葉に耳を傾けていたお母さんが、いきなり声を上げて

笑いだした。

「そーんなムキにならなくても…」

お母さんはまたクッキーを手に取って口に運んだ。私の方をちらっとみて微笑む。

「騙されたのかな、とか色々考えただけよ。１０コも上なんだもん。しかも今の話だと自動車学校に通ってた時から付き合ってたみたいだし？」

「ぐ…」

いらんことを喋ってしまった。何も言えなくなった私を見て、お母さんはさらに笑った。

「あんたに恋愛させるために高い金払って自動車学校行かせたんじゃないのよー？」

「ご、めん…」

「うーそ」

ふふ、とお母さんが笑った。どれだけ精神的に追い詰めたら気が済むんだ、この母は。

「薫が幸せならそれでいーの」

「…ありがと…」

「大丈夫よ、きっと内村さんがもっともっと幸せにしてくれる」

「…ん」

くすぐったい気持ちになりながら、彼が和室から出てくるのを待った。

―233―

来ていたジャケットを脱ぎ、シャツのボタンをあけてネクタイを緩めた。

もう初夏の時期。彼女の家の前に停めた車は汗ばむほどに暑い。

車の窓を開けて発車させた。心地よい風が車の中に入ってくる。

「それにしてもさ、思ってた以上に好感触でよかった」

彼女は風になびく髪をかきわけてこちらを向いた。

「そうなの？」

「うん…お義父さんに『今日籍を入れても良いぞ』って言われた」

彼女はその言葉を聞いて怪訝な顔をした。今にも『はぁ？』という声が聞こえてきそうだ。

「お父さんそんな事言ったの？」

「うん。俺めっちゃ仲良くなったし」

「あ、そう…」

笑ってるような、呆れてるような。そんな彼女を横目でちらっと見た。

「まあ結果オーライじゃない？これで俺ら無事結婚出来そうだし」

「そうだけど…時期も決まってないでしょ？」

「…まぁ」

彼女は窓から外を眺め、ふっと軽く息を吐いた。

「私はいつでも良いよ、新一さんの都合に合わせるから。仕事忙しくなりそうでしょ？」

「まぁ…でも遅くとも半年内には」

「じゃあ早くお金貯めなきゃね」

彼女が悪戯っぽく笑った。俺はちらっとそれを見てくしゃっと頭を撫でた。

「さーて、今からどうしますかね」

「どうしましょうかね」

彼女が髪の毛をかきあげながら言った。ちらっと彼女の方に顔を向け、ハンドルをぽん、と叩いた。

「ドライブしませんか、お嬢さん」

「どこまで？」

「さあ…気が向くところまでかな」

俺の言葉に彼女が笑い出した。愛しい笑顔が俺に向けられる。

「適当ね」

「じゃあどこ行きたい？」

「お任せします」

「了解」

そして俺はハンドルを右に切った。俺達の旅路はまだ始まったばかりだ…この表現が合ってるかわからないが。

楽しいことも苦しいことも二人三脚で頑張っていこう。これからもずっと。

―234―

彼が車に乗り込むとすぐ、スーツを脱いでネクタイを緩めた。その姿に思わずどきっとしてしまう。
…別にスーツフェチとか鎖骨好きとかそんなんじゃないけど。

窓を開けて冷たい風を感じる。もう夏らしい陽気になってきて、七分袖でも暑いくらいだ。

彼が右腕を全開の窓の上に置いた。

「それにしてもさ、思ってた以上に好感触でよかった」

「そうなの？」

「うん…お義父さんに『今日籍を入れても良いぞ』って言われた」

思わずはぁ？、と言いそうになる。昔から『ガチ悪オヤジ』とかいう面白いあだ名がついていた人の発言とは思えない。

「お父さんそんな事言ったの？」

「うん。俺めっちゃ仲良くなったし」

「あ、そう…」

まあ実際お茶目なお父さんだから、そんな突拍子もないことを言いかねない気さえもしてきた。思わず苦笑いがこぼれる。

そんな私を見て、彼は腕を伸ばしてハンドルを握り、ふっと笑った。

「まあ結果オーライじゃない？これで俺ら無事結婚出来そうだし」

「そうだけど…時期も決まってないでしょ？」

「まぁ」

適当だなぁ、と思いつつ、彼のようにふっと笑って外に目をやった。

「私はいつでも良いよ、新一さんの都合に合わせるから。仕事忙しくなりそうでしょ？」

彼も仕事のキャリアが長くなって、立場上結構偉い方にのぼりつつある。それにそろそろ魔の夏休みシーズンも近づいてきそうだし…。

「まぁ…でも遅くとも半年内には」

「じゃあ早くお金貯めなきゃね」

半年もあれば式だとか何だとかのために十分なお金を貯められる。

軽くガッツポーズしてみせると、彼が優しい笑顔を浮かべて私の頭を撫でた。

彼は手を私の頭から離してハンドルを握ると、右肘をついて頬を乗せ、私の方を向いた。

「さーて、今からどうしますかね」

「どうしましょうかね」

信号停車したとき、彼はハンドルをぽんと叩いて少年のような目を私に向けた。

「ドライブしませんか、お嬢さん」

「どこまで？」

「さあ…気が向くところまでかな」

彼の言葉に思わず笑ってしまう。

「適当ね」

「じゃあどこ行きたい？」

「お任せします」

私は前を向いたままそう答えた。信号が変わり、彼は笑顔のままアクセルを踏んだ。

「了解」

これからの私たちを長い旅路が待っている。晴れの日も雨の日も、
いつも手を取り合って頑張っていこう。

―235―

「はい、じゃあ準備が出来たら発車してください」

「はい」

まだ車にあまり慣れていないであろう女性が、少し緊張した面持ちで返事をした。

教員である男は教習原簿を手にして、しばらく眺めたあとへぇ、と言った。

「辻部さんって三國大なんだ」

「あ、はい」

「何か部活でもやってんの？」

「交響楽部に入ってます」

「へぇ」

男は教習原簿をバインダーにはさんで女性に微笑みかけた。

「俺の嫁もね、三國大の交響出身なんだよ」

あれから一年は経ったんだろうか。今日も変わらず教習所で仕事に励んでいる。

今日の担当の生徒は、どことなく彼女…いや、嫁に似ている。

「えっ？奥さん交響出身なんですか？」

「そうそう。今は楽器弾いてないけど、社会人になっても演奏会に出てたよ」

「へぇー…今は何されてるんですか？」

「車の会社で働いてんだけど、今は産休」

嫁はつい先日女の子を産んだ。無事に出産にも立ち合うことが出来て、今までにない感動をしたのを昨日の事のように覚えている。

「この前産まれたばっかりなんだけど、今日やっと退院するんだ」

それを考えただけでもつい頬が緩んでしまう。

待ちに待った子供…しかも可愛い可愛い女の子だ。絶対に結婚なんかさせたくないと今すでに思ってしまい、嫁に笑われたのは言うまでもない。

本当はお互いの名前の「新一」と「薫」に関連した名前を付けようとしたが、考えても考えても出て来ることはなく…結局意味から考えて「さくら」と名付けた。

俺の身の上話、というより嫁の話ばっかりだが、それもあって辻部さんが大分リラックスしてきたみたいだ。笑顔が増えてきた気がする。

「奥さんとはどうやって知り合ったんですか？」

「え？ここで」

「…え？」

信号停車したとき、辻部さんが少し怪訝な顔を向けた。それもそうだよなぁと思わず苦笑してしまう。

「俺が嫁と知り合ったのはまさにここ。俺を指名してた生徒だったんだよね…他の人には内緒な？」

営業スマイルもといウインクをお見舞いしてやった。辻部さんははぁ、と言いながら青信号になってからアクセルを踏んだ。

「ちなみに辻部さんって彼氏いるの？」

「…い、ません」

「へー…可愛いのにねぇ」

「そんなことないですよ」

顔を赤くしながら辻部さんが慌てて否定した。そんな仕草も嫁に何だか似ている。

「好きな人とかは」

「…」

「へー、いるんだ。大学の友達？」

冗談で言ったつもりが、事態は思わぬ方向へ行った。

「…っ、絶対他の人には言わないでくださいね？」

「うん」

「…杉本さんです…気になってるだけですけど…！」

辻部さんが耳まで赤くして小さくそう言った。

教習の終わりを告げるチャイムが鳴り、教習原簿と教習ノートを辻部さんに手渡した。

「はい、お疲れさまでした。忘れ物ないようにね」

「はい、ありがとうございました」

笑顔でスクールバスに向かう辻部さんを見送り、指導員室に戻ろうとしたとき、添乗員控え室から一人の若い男が出てきた。

杉本浩紀、２３歳。今年の春に入社した少年のような元気いっぱいの奴で、その童顔と人懐っこい性格が人気みたいだ。今は指導員になるために勉強をしながら、スクールバスの運転手もしている。

「あ、内村さん！お疲れさまです！」

「お疲れ」

「どうしたんですか？何か良いことでもあったんですか？」

コイツの顔を見て思わず笑ってしまったんだろうか、それをごまかすようにスギの肩にぽん、と手を置いて笑顔を向けた。

「…お前も罪な男だな」

そうとだけ言って俺は指導員室へと戻った。この時きっと、スギは眉間にしわを寄せて一生懸命考えていたに違いない。

―236―

「内村さん、ついに今日退院ですね」

30代後半には見えない看護婦がにこやかに話し掛けて来た。内村さんと呼ばれた女は笑顔で会釈した。

「おかげさまで…お世話になりました」

「ご主人によろしくお願いしますね」

「はい」

そして、女の腕の中で寝息を立てている赤ん坊に笑顔を向けた。

「さぁさくちゃん、おうちに帰りましょうねー」

鼻の穴にスイカ、みたいな例えは強ち嘘ではなかった。

つい先日、我が家に女の子がやってきた。由来を語りだしたらキリがないから省略するけど、「さくら」と名付けた。

出産の時はホントに死んじゃうかと思ったくらい辛くて。あの時彼…もとい主人が傍にいてくれて本当によかったと思う。あの場面にいるのが一人なのか二人なのかで感動の度合いが違う。

私たちが授かった天使は、親バカと言われても仕方ないけど、とにかくこの上なく可愛い。ぷくぷくした頬も、もみじのような手も、全部。さっそく主人は「どこにも嫁にやらないからな！」と語り掛けていた。

…なんかもう一言、ウケる。

今日は主人が仕事のため、別の迎えが来る。去年の暮れに古野ドライビングを退職した池田さんだ。

予定よりも早く池田さんが病室に到着した。ドアを開けるやいなや、きゃー、と声を上げてベッドへ駆け寄ってきた。

「かぁわいー！」

「ありがとうございます」

池田さんの言葉にふふ、と笑った。

「目元は私に似てるって言われました」

「内村さんに？」

「はい」

池田さんがそっとさくらを抱き上げた。

「ほーんと、さくちゃんおめめぱっちりしてますねー」

さくらに話し掛けるように池田さんがそう言った。

「はい、さくちゃん返しますね」

「あ、はーい」

腕の中に帰ってきたわが子を見てもう一度ふふ、と笑った。

「さぁ、帰りましょうかね」

池田さんはまとめていた私の荷物を全部手に取って笑顔で言った。

「はい、お願いします」

帰り着いた家は、主人の一人暮らし時代からはあまり想像できないほど綺麗だった。きっと頑張ったんだろうな、と思うとつい笑みがこぼれてしまう。

さくらもずっと眠っているため、ブランケットでその小さな体を包んで横に寝かせた。ずっと眺めていても全然飽きない。

頭をそっと撫でて夕飯の支度をする。私の体調を管理しなきゃいけないのもあって、いつも以上に気合いを入れて料理をした。

そして、約束の時間がやってくる。

味噌汁の味見をしていた時、後ろからふわっと抱き締められた。首もとに顔が埋められる。

「おかえり…ずっと待ってた」

囁くように耳元で主人がそう言った。主人の温かい匂いが伝わってくる。

おたまを置いて、主人の腕の中でゆっくりと振り返る。そして当たり前の行為であるかのように、何も言わず唇が触れた。

「…ただいま」

主人はふっと笑って私の頭を撫でた。

「そんなに長期にわたって会わなかったわけじゃないのにね」

「ホント、昨日も病院に来たのに」

「でもこうやって触れられなかった」

そう言って主人の唇が私の首筋に落ちてきた。

「も…ぅ、ばか…」

「それ禁止。我慢できなくなるから」

「もーっ、キメ顔でそんなこと言わないで！」

笑いながら主人の胸を軽く叩いた。

そしてもう一度見つめ合う。

私は主人の両腕にそっと手を添えた。長身の主人は私の腰に手を回したまま屈むようにして口付けをした。

昔と同じ…触れるだけのだと思っていたものが、長く、深いものに

変わっていく。

主人の右手が私の顎に添えられ、強く抱き締められた。学生時代から何一つ変わらない胸の高鳴りを感じる。

「…も、うだめよ…」

「それは残念」

主人は苦笑いをして私を腕から解放した。そしてわたしのあたまをくしゃくしゃっと撫でたあと、意気揚々とさくらの元へと行った。

「さくー、おかえりー」

「寝てるんだから起こさないようにね」

「わかってるよ」

主人は笑顔で食卓の方へ戻ってきた。味噌汁を手渡して私も食卓につく。

「さくらはさ、弟が欲しいかな、妹がいいかな」

「は？」

「あと少なくとも一人は欲しいよな」

「…ちなみに、目標人数は？」

主人は味噌汁をすすって、私に満面の笑顔を向けた。

「5人」

こうやって賑やかな内村家の生活が、また始まっていった。

―237―

「こんにちはー、どうぞー」

スクールバスのドアを開け、乗り込んでくる生徒を見た。

そして、その姿にどきっとして見とれてしまう。

暗目の茶髪、セミロングの髪の毛がゆるいカーブを描き、フェミニンな感じが伝わってくる。

彼女はにっこりと俺に微笑んだ。

「お願いします」

この時間にこのバスに乗る生徒は少ない。つまりは俺と彼女の二人っきり。

それなのにやさしい目で窓から外を眺める彼女には話し掛けることが出来なくて。

これが教習車だったら、と思う。

それが理由で早く指導員になりたいと思ってるわけじゃないが、なかなか指導員になれないこの状況が多少なりともどかしい。

結局挨拶程度しか話せなかった俺は、意気消沈して添乗員室へと向かった。

喫煙者ではないのでストレスのはけ口をＭＩＮＴＩＡにして、ひたすらぼりぼり噛んだ。

何てことを考えてるんだ。仮にも彼女は生徒だ。世間体的にも彼女に好意を持っているなんて口が裂けても言えない。

はぁっとため息を吐いたあと、次のスクールバスの準備のために添乗員室から出た。さわやかな日差しを浴びている彼女を見て、何となく体温が上がってくるのがわかる。

そして、彼女担当の指導員を見た。

とてもじゃないがアラフォーなんて見えない…俺の憧れであり、男の俺でも見惚れてしまう人、内村さんだ。

内村さんは若くして指導員になり、長年ここで仕事をしているそうだ。そして最近結婚、出産を経験…と言っていいのかわからんが、とにかくお子さんが産まれたらしく、まさに公私共に順風満帆。

今日はそんな内村さんの家に招かれることになっている。

内村さんに軽蔑されるのを覚悟で相談してみるつもりだ…彼女のこ

とを。

そしてあれから彼女と接する機会に恵まれないまま、内村家へとやって来た。玄関で出迎えてくれたのは若くて綺麗な奥さんだった。

「おかえりなさい」

「ただいま…彼、俺の後輩の杉本浩紀くん」

「あ、こんばんは！お邪魔します！」

かばっと頭を下げてがばっと頭を上げると、奥さんが俺に微笑みかけてくれた。

「お待ちしてました」

「こいつは俺の嫁の薫」

「主人がいつもお世話になってます」

「いっ、いえー！こちらこそお世話になってばかりで！」

慌てて頭を下げる。すると内村さんも奥さんも目を見合わせて笑っていた。

「さあ、早く上がって」

中はゆったりとした空間が広がっている。なんか…こんなとこに新婚で住んでるなんて良いなぁとしみじみ思う。

そしていかにも奥ゆかしいという感じの奥さんが作ってくれたのは、だしの味がしっかりと効いている和食だった。

目が合うたびににっこりと微笑んでくれる奥さんについ見惚…いや、人妻だ人妻。なんとも内村さんとお似合いだ。

「奥さんお若いですね」

「どんな口説き文句だよ」

内村さんが味噌汁を片手に苦笑いした。奥さんは横でふふ、と笑っている。

「ありがとうございます」

「失礼ですがおいくつですか？」

「２６です。今度２７になります」

思考回路が一瞬ストップした。

俺の４つ上…？てことは俺と内村さんは１４離れてるから…

「えぇ！？」

一瞬の沈黙のあと、思わず大声を出してしまった。

「うっわ、びっくりした…どうしたんだよ」

「いや、ずいぶんお年が…」

「離れてるだろ？」

内村さんがもう一回苦笑した。何となく心拍数が上がってくる。

「えっ、どっ、どこでお知り合いに？」

「ん？」

内村さんはお茶碗と箸をテーブルに置いた。

「古野ドライビングだよ」

…

「え？」

内村さんがふっと笑ってみせた。

「古野ドライビング」

「え？え？」

俺は訳がわかってない脳みそをなんとかするのに精一杯になった。
そんな俺を見て内村さんが爆笑する。

「落ち着けスギ」

「え？どういう関係で…」

「俺指導員、こいつ指名生徒」

思わず大きな声を出してしまって娘さんを泣かせてしまったのは言わないお約束だ。

食後のビールをバルコニーで楽しみながら内村さんと会話をした。
奥さんは娘さんを寝かしつけている。

「まぁこんな経緯かな…結婚するまで。そんなびっくりか？」

「はぁ、はい…なんかドラマみたいですね」

「そうか？」

心地よい夜風を浴びながら内村さんがそう言った。何というか…大

人のフェロモンだだ漏れ。俺が女なら絶対惚れてしまう。

「で、お前は？」

「え？」

内村さんから急にそう言われてビックリする。内村さんは壁にもたれるようにしてこっちを見た。

「いや、スギ見てたら昔の俺見てるみたいでさ」

「そ、うですかね…？」

「うん」

自分の指名生徒と結婚した内村さん。そしてそんな内村さんと似てると似てると言われた俺。それならば…。

「あ、あのですね、ホントはダメってわかってるんですけど、実は俺…」

「辻部ちゃんだろ？」

内村さんは少し笑いながら、みるみる顔を赤くする俺に向かってあっさりそう言った。その言葉にさらにかあっと顔が熱くなった。

「な、ん、で…！」

「だって今日辻部ちゃんの担当になったとき、お前の方からの刺さるような視線感じたし」

「でもそれだけで…」

「まあそれだけじゃないけどね…とりあえずそうなんだ。へー」

反論することも出来ず、ただ顔を真っ赤にして俯いた。

俺は彼女に…辻部結華子さんに確かに惹かれているから…。

「頑張れスギ、誰が何と言おうと俺と嫁はお前の味方だから」

内村さんは俺の方をぽん、と叩いて笑った。こんなに心強い味方はいない。

「ありがとうございます」

そして、俺と彼女の物語が始まる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9172f/

ドライブしませんか？

2011年2月17日01時23分発行